日本応用心理学会
第86回大会 発表論文集



日本大学商学部

令和元年8月24日(土)
8月25日(日)



東京海上グループの医療健康関連事業会社である東京海上日動メディカルサービス株式会社は、1987年の創立以来
優秀な医師等の医療専門職を擁し、医療健康分野で事業展開をしてまいりました。
当社はトータルヘルスケアコンサルティング企業として 社会の環境変化やお客様のニーズに応じた新たな事業領域や
高品質な商品サービス開発にチャレンジしています。

ストレスチェック・組織分析・教育研修・カウンセリング・休復職支援
職場環境改善支援・ポストベンション（惨事ストレスケア）等・各種EAPサービス

2019
健康経営優良法人
Health and productivity
ホワイト500

東京海上日動メディカルサービス株式会社　〒107-0052　東京都港区赤坂2-14-27　国際新赤坂ビル東館4F
サービスについてのお問合せは　TEL：03-6704-4029(部署直通)　http://www.tokio-mednet.co.jp/

日本応用心理学会

第 86 回大会　発表論文集

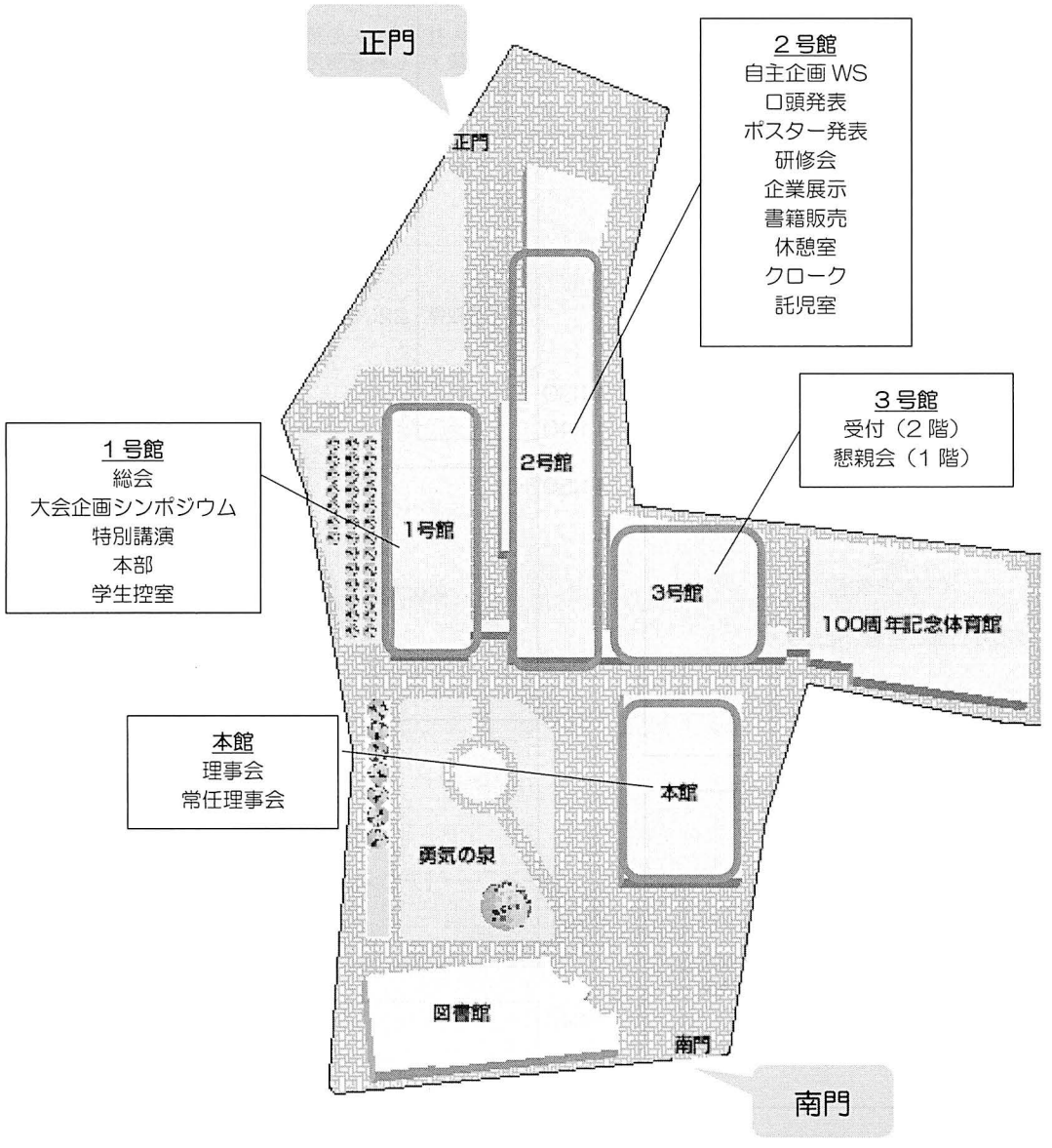
2019 年 8 月 24 日（土）～25 日（日）

日本大学商学部

表紙　撮　影・デザイン

花　井　雄　也　（アトリエ・フロール株式会社）

キャンパスマップ



- 大会会場は、本キャンパス１号館および２号館です。
  １号館と２号館、３号館は、各階に連絡通路がございます。
- 受付は、３号館２階にございます。
- 懇親会は、３号館１階の食堂アゼリアが会場となります。
- 最寄り駅の「祖師ヶ谷大蔵駅」からお越しの場合には、上記マップ上側の「正門」をご利用ください。
  「成城学園前駅」からバスをご利用の方は、上記マップ下側の「南門」手前に停車いたします。

タイムテーブル

8月24日（土）　第1日目

9:00 受付開始

10:00	口頭発表①	自主企画WS①	自主企画WS②	自主企画WS③
	【教育・人格・福祉・その他】	【応用心理学における「労働」研究のこれまでとこれから】	【ストレスチェック法制化以降の産業精神保健～心理職の立場から考える職場・勤労者支援～】	【カウンセリング、心理療法へのアジアからの発信（3）：禅，森林散策カウンセリング，心身互動療法の視点から】
	2202教室	2203教室	2301教室	2302教室
11:20				
11:30				

11:50	総会 〔1303教室〕 ※お弁当をご用意いたします。
13:15	

13:30	大会シンポジウム 〔1303教室〕 【グローバル人材の育成ー大学での留学制度の活用からグローバル・コンピテンシーへの発展ー】
15:30	

15:45	ポスター① 〔食堂マロニエ（2号館1階）〕	研修会A 〔2203教室〕 【インターネット上の言説の分析 偏見・差別研究を題材に】
16:45		
17:45		

18:00	懇親会 〔食堂アゼリア（3号館1階）〕 ※日本大学管弦楽団によるミニコンサートがあります。
20:15	

8月25日（日）　第2日目

9:00 受付開始

10:00	口頭発表②	自主企画WS④	自主企画WS⑤	自主企画WS⑥
	【犯罪・社会・産業・災害】	【喪失の悲しみを越えてーマイクロカウンセリングからのアプローチ】	【地域性（県民性）を明らかにするー2か所以上の地域で暮らした場合の地域差についてー】	【心理学における実践ー現場研究の発信とその課題ー】
	2202教室	2203教室	2301教室	2302教室
11:30				
11:40				

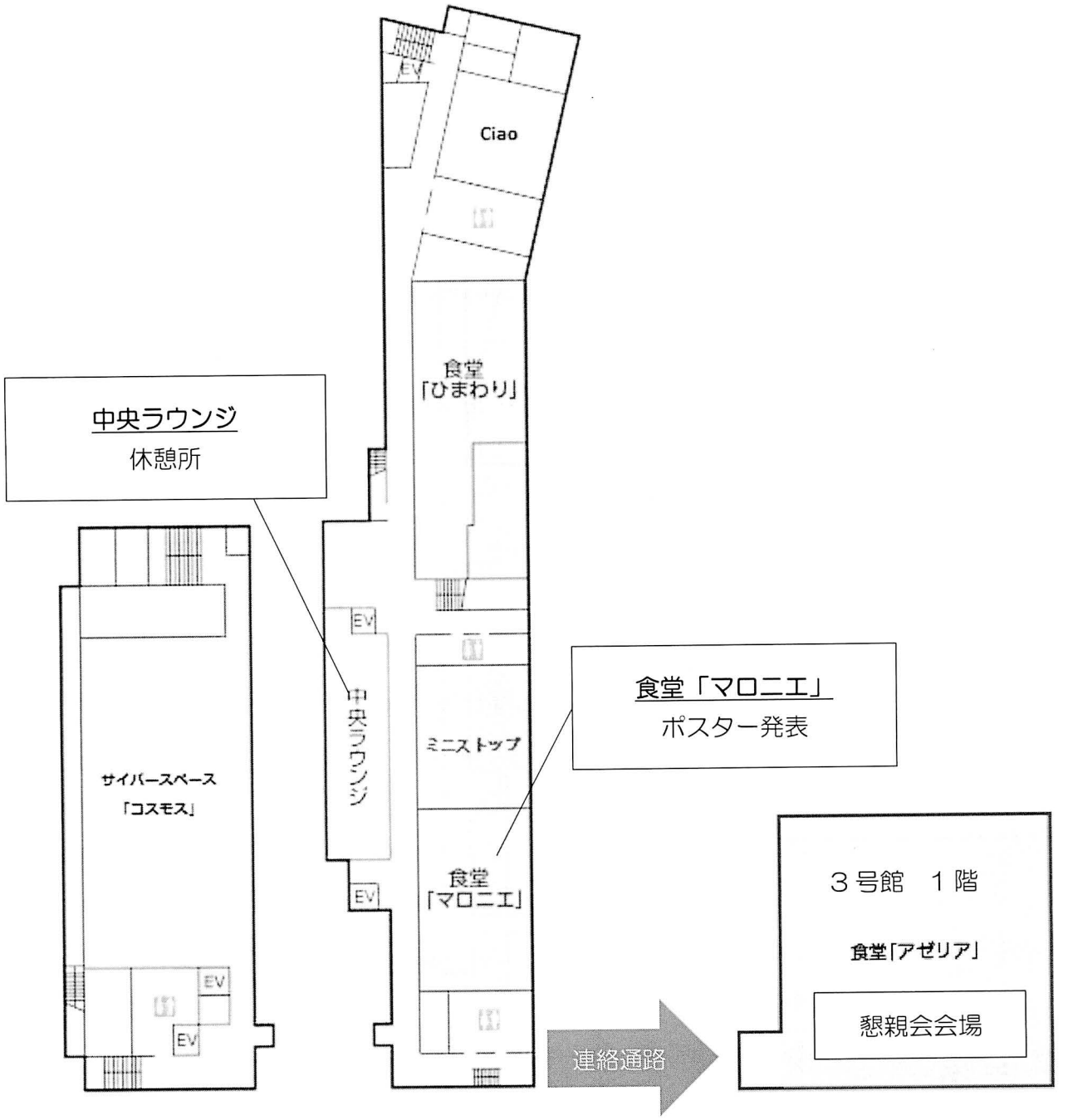
11:50	昼休み	常任理事会 〔本館会議室〕
13:00	特別講演 〔1303教室〕 【アニメに見る「感情の谷」】	
14:30		

14:45	ポスター② 〔食堂マロニエ（2号館1階）〕	研修会B 〔2203教室〕 【ＰＡＣ分析の理論と実施技法】
15:45		
16:45		

館内案内図

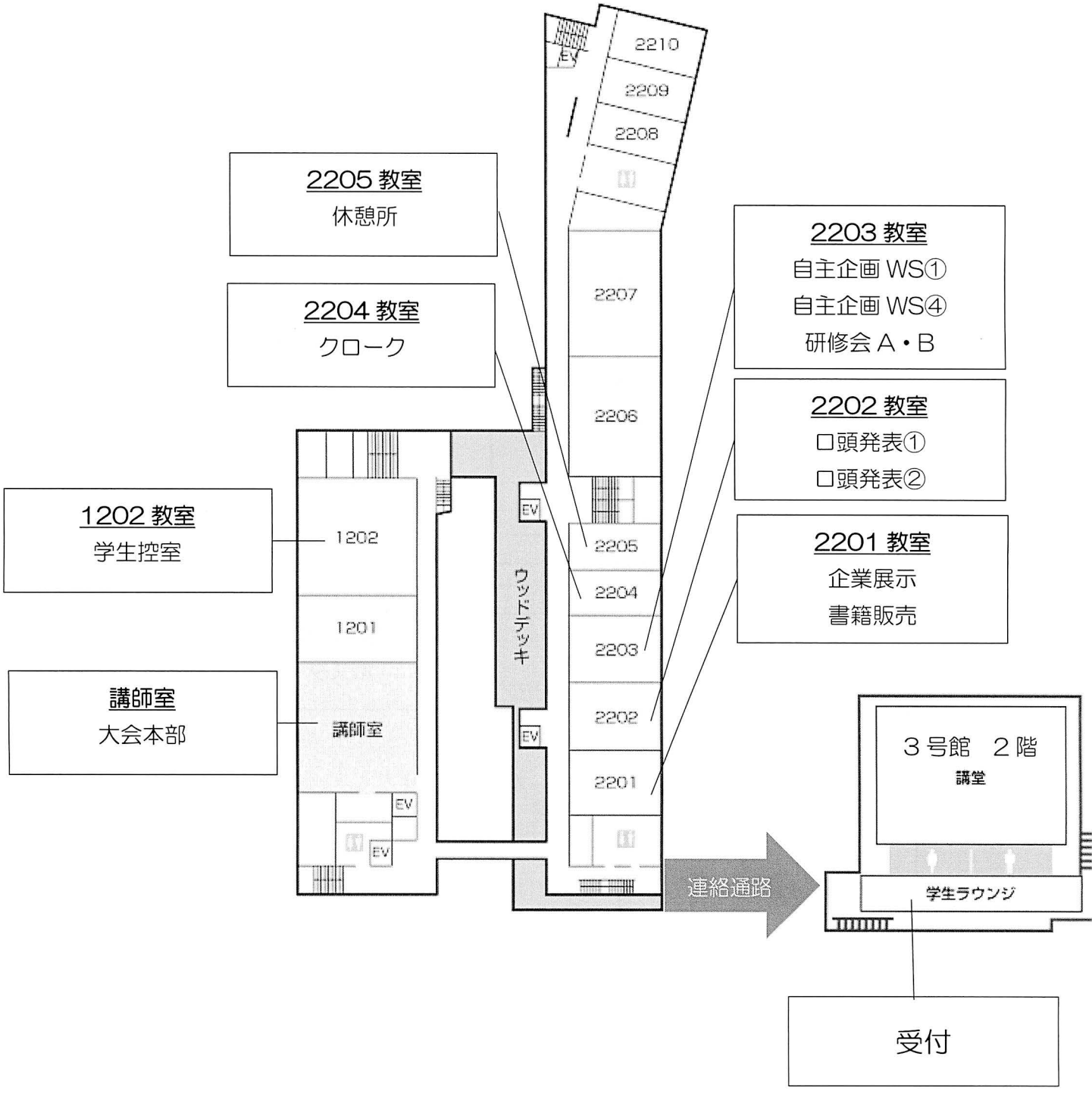
1F

【1号館　・　2号館】



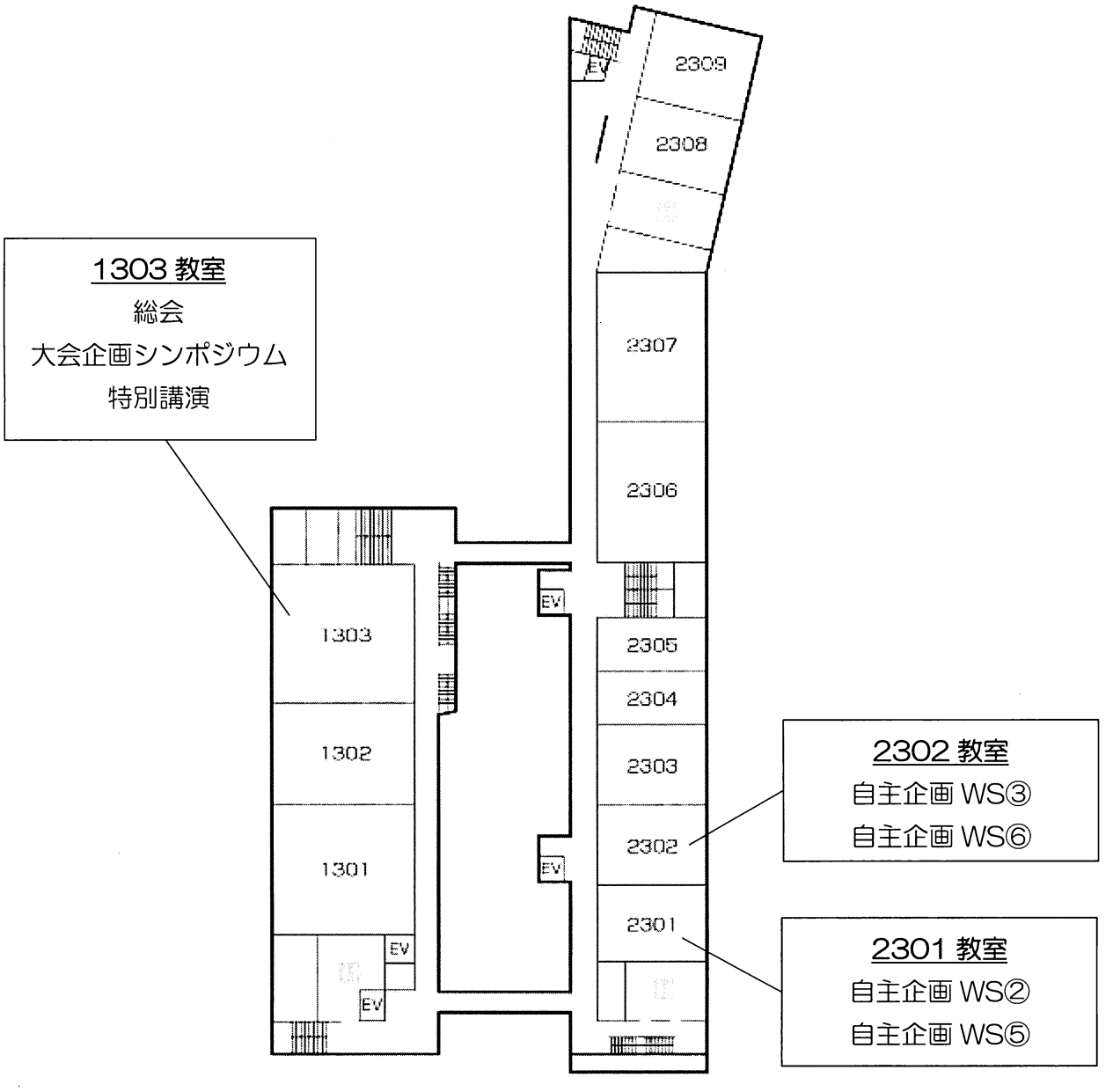
2F

【1 号館　・　2 号館】


2205 教室
休憩所
2204 教室
クローク
1202 教室
学生控室
講師室
大会本部
2203 教室
自主企画 WS①
自主企画 WS④
研修会 A・B
2202 教室
口頭発表①
口頭発表②
2201 教室
企業展示
書籍販売
2210
2209
2208
2207
2206
2205
2204
2203
2202
2201
1202
1201
講師室
EV
ウッドデッキ
連絡通路
3 号館　2 階
講堂
学生ラウンジ
受付

3F

【1号館　・　2号館】


2309
2308
2307
2306
2305
2304
2303
2302
2301
1303
1302
1301
EV
EV
EV
EV
1303 教室
総会
大会企画シンポジウム
特別講演
2302 教室
自主企画 WS③
自主企画 WS⑥
2301 教室
自主企画 WS②
自主企画 WS⑤

各種ご案内

［1］大会受付

日時：2019 年 8 月 24 日（土）9：00 ～ 17：30　　25 日（日）9：00 ～ 16：00

場所：日本大学商学部　3 号館 2 階階段横

【名誉会員の方】

名誉会員の方は、受付の「総合案内」にお立ち寄りください。名誉会員の方は、大会参加費、発表費、研修会費、懇親会費はすべて無料です。また、大会参加時に発表論文集を 1 冊贈呈致しますのでお受け取りください。

【事前予約参加の方】

事前予約をされている方は、「事前予約参加者受付」にお立ち寄りください。参加証・領収証と名札入れをお渡しします。大会期間中は参加証を名札入れに入れ、常に身につけてください。発表者（連名発表者を含む）、ワークショップの発表者・企画者、論文集購入者には、論文集をお渡し致します。非会員の連名発表者の参加証・領収証と発表論文集は、責任発表者の方にまとめてお渡しします。

【当日参加の方】

当日参加の方は、「当日参加受付」にお立ち寄りください。当日参加の方は、参加申込票に必要事項をご記入のうえ、大会参加費（下表）を添えて「当日参加受付」にお申し込みください。名札入れ、参加証・領収書をお渡し致します。大会期間中は参加証を名札入れに入れ、常に身につけてください。

大会関係の諸費用（当日納入）について

	会員		非会員	
大会参加費	一般会員・終身会員	6,000 円	一般	7,000 円
	院生会員	3,500 円	大学院生	3,500 円
	学生会員	2,500 円	学部学生	2,500 円
学会研修会費		1,000 円		1,500 円
論文集購入費	個人	6,000 円	個人	6,000 円
	機関	8,000 円	機関	8,000 円
懇親会参加費	一般会員・終身会員・同伴者	6,000 円	一般・同伴者	6,000 円
	院生会員・学生会員	4,000 円	大学院生・学部学生	4,000 円

【クローク】

クロークは、2 号館 2 階 2204 教室です。お荷物をお預かりする際に引換券をお渡し致します。引換券をなくされた場合、確認のため身分証の提示をお願いすることがあります。なお、PC 等の高価な電子機器類を含む貴重品はお預かりすることはできません。

クローク受付時間：8 月 24 日（土）9：00 ～ 18：00、8 月 25 日（日）9：00 ～ 17：15

［2］会員総会

日時：8 月 24 日（土）　11：50～13：15

場所：1 号館 3 階 1303 教室

重要な議題が予定されておりますので、会員の方はご出席ください。なお、総会では、昼食をご用意しております。

［３］懇親会

日時：8 月 24 日（土）　18：00～

場所：食堂アゼリア（3 号館 1 階）　日本大学管弦楽団のミニコンサートもございます。

［４］優秀大会発表賞

今大会でも優秀大会発表賞を選考します。選考対象は口頭発表とポスター発表のみで自主企画ワークショップは含まれません。発表論文集原稿、当日の発表、質疑応答などを総合的に判断して、優秀な研究発表をご推薦ください。投票は 8 月 24 日（土）と 8 月 25 日（日）におこなうことができます。投票用紙は会場に設置してある投票箱に投函してください。発表者（連名発表者を含む）は、ご自身の発表へ投票できませんので、ご注意ください。

［５］その他、大会参加者へのご案内

(a) 2 号館 2 階 2201 教室にて、企業展示および書籍販売を行っております。どうぞお立ち寄りください。
(b) 休憩所は 2 号館 1 階中央ラウンジ（コンビニエンスストア（ミニストップ）の向かい側）と 2 号館 2 階 2205 教室になります。お茶とお菓子をご用意しております。
(c) 館内はすべて禁煙です。ご協力をお願い致します。
(d) 会場内では、携帯電話はマナーモードにして下さい。
(e) ファックス、宅配便は近隣のコンビニエンスストアをご利用ください。
(f) 大会期間中は、学内の食堂およびコンビニエンスストアは閉まっています。昼食は、持ち込みいただくか近隣の飲食店をご利用ください。なお、1 日目は、総会にご出席いただければご昼食をご用意しております。
(g) 大会本部は、1 号館 2 階の講師室です。大会中の緊急連絡は、こちらにお願い致します。
(h) 学内無線 LAN はご利用になれません。
(i) 館内呼出はいたしません。

［６］口頭発表者へのご案内

【発表者の方へ】

1. 口頭発表は、2 号館 2 階 2202 教室にて行います。
2. 口頭発表は、論文集への論文掲載、当日の発表・質疑応答への参加によって、公式発表とみなされます。
3. 連名発表の場合、基本的に発表及び質疑応答は責任発表者が行うものとします。発表時間は 1 件につき 18 分です。そのうち、講演が 12 分、質疑応答が 5 分です（交替時間 1 分）。発表中は以下の通り合図致します。

   1 鈴：10 分経過　　2 鈴：12 分経過（発表終了）　3 鈴：17 分経過（質疑応答終了）
4. 大会委員会でプロジェクタとノート PC（Windows 10、 PowerPoint 2016）をご用意します。この PC をご利用の方は、セッション開始 15 分前までに会場にお越し頂き、発表用ファイルのインストール作業と動作確認をお願い致します。必ず上記の環境で動作するファイルをご用意ください。PC によるスライド発表のみとなります。その他の映像提示装置、学内ネットワークおよびインターネットは使用できません。

5. ご自身の PC を利用される場合も、セッション開始前までに動作確認をお願い致します。会場には RGB ケーブルを用意します。電源アダプタや変換コネクタ等はご用意下さい。
6. 音声接続をご利用の方は、事前に大会委員会へご相談下さい。
7. 発表者自身の責による映写の不具合については、大会委員会は一切責任を負いません。またそれに伴う、発表時間の延長も原則行いません。
8. 資料を配布される方は、各自ご準備の上、セッション開始前に会場スタッフにお渡しください。会場入り口に資料を配置します。なお、会場での印刷はできません。配付資料は必ず事前にご用意ください。

【座長の方へ】

1. ご担当されるセッション開始 10 分前までに会場へお越し下さい。
2. フロアからの質問や意見を述べられる方には、お名前と所属を明らかにするようにお伝え下さい。
3. 会場係が時間経過をお知らせしますので、発表時間を厳守していただけますようお願い致します。
4. 当日に発表取り消しがあった場合には、発表時間の繰り上げはなさらないようお願い致します。

［7］ポスター発表者へのご案内

1. ポスター発表会場は、食堂マロニエ（2 号館 1 階）にて行います。
2. ポスター発表会場内にポスター発表用受付を設けます。セッション開始の 10 分前までに受付へお越しください。ボードに掲示するための画鋲と責任発表者用のリボンは、その際にお渡しします。
3. ポスター発表は、論文集への論文掲載、当日のポスター掲示、および在席責任時間の質疑応答への参加によって、公式発表とみなされます。
4. ポスターの掲示範囲は、1 発表につきポスターは横 90 cm×縦 210 cm までです。この大きさに収まるように作成してください。なお、ポスター上部には発表題目、氏名および所属を明示して下さい。
5. ポスターを掲示するボードには、それぞれに発表番号が付いています。発表者は発表当日の時間までに、持参したポスターをご自分の発表番号の付されたボードに掲示してください。両日ともに 13：00 から掲示できます。
6. ポスターセッション全体の時間は 2 時間です。演題番号が奇数の発表者はセッション前半の 1 時間、偶数発表者はセッション後半の 1 時間が在席責任時間です。この時間中に係員が出欠の確認に伺います。
7. 在席責任時間が終わっても、セッション終了時刻まではポスターの掲示をしておいてください。ポスターの撤去は、発表者がセッション終了 10 分後までに行ってください。
8. 本大会の企画として「教育発表」を設けています。本学のゼミナール学生が発表を行います。

［8］ワークショップ発表者・企画者へのご案内

【発表者の方】

1. ワークショップは、2 号館 2 階 2203 教室、2 号館 3 階 2301 教室・2302 教室で行います。
2. 大会委員会でプロジェクタとノート PC（Windows 10、 PowerPoint 2016）をご用意します。この PC をご利用の方は、セッション開始 15 分前までに会場にお越しいただき、発表用ファイルのインストール作業と動作確認をお願い致します。必ず上記の環境で動作するファイルをご用意ください。PC によるスライド発表のみとなります。その他の映像提示装置、学内ネットワークおよびインターネットは使用できません。

3. ご自身の PC を利用される場合も、セッション開始前までに動作確認をお願い致します。会場には RGB ケーブルを用意します。電源アダプタや変換コネクタ等はご用意下さい。
4. 音声接続をご利用の方は、事前に大会委員会へご相談下さい。
5. 資料を配布される方は、各自ご準備の上、セッション開始前に会場のスタッフにお渡しください。会場入口に資料を配置します。なお、会場での印刷はできません。配布資料は必ず事前にご用意ください。
6. ワークショップ 1 件の時間は 90 分です。

【企画者の方へ】

1. ワークショップ開始 10 分前までに会場へお越しください。
2. フロアから質問や意見を述べられる方には、お名前とご所属を明らかにするようお伝えください。
3. 終了時間厳守でお願いします。

［9］大会についてのお問い合わせと連絡先

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 518 司ビル 3 F IBI 内
日本応用心理学会大会受付事務局
TEL: 03-5273-0473 FAX: 03-3203-5964 E-Mail: j-aap@ibi-japan.co.jp
URL: http://congress.j-aap.jp/2019/index.html
直接準備委員会にお問い合わせの際は、bus.jaap2019@nihon-u.ac.jp へお願い致します。
また大会期間中、緊急のご連絡がございましたら 総合案内（3号館2階）までお越しくださ
い。

［１０］理事・幹事の皆さまへ

以下の通り、理事会を開催致しました。

理事会
日時：8 月 23 日（金）15：00～
場所：本館 31 会議室

常任理事会は以下の通り開催致します。常任理事の皆さまはご参集のほどよろしくお願い申し上げます。

常任理事会
日時：8 月 25 日（日）11：50～
場所：本館 34-35 会議室

目　　次

大会企画シンポジウム……1

8月24日（土）13:30～15:30　1303教室
グローバル人材の育成－大学での留学制度の活用からグローバル・コンピテンシーへの発展－
話題提供者　眞谷国光（早稲田大学総長室/国際部）
橋上愛子（東京海上日動メディカルサービス株式会社）
Bryan Sherman（Gramercy Engagement Group, Inc.）
指定討論者　井上孝代（明治学院大学）
白木三秀（早稲田大学政治経済学術院）
司会者　外島　裕（日本大学商学部）

特別講演……6

8月25日（日）13:00～14:30　1303教室
アニメに見る「感情の谷」
講演者　横田正夫（日本大学文理学部）
司会　外島裕（日本大学商学部）

自主企画ワークショップ①……7

8月24日（土）10:00～11:30　2203教室
応用心理学における「労働」研究のこれまでとこれから
企画者　大橋信夫（日本応用心理学会名誉会員）
藤田主一（日本体育大学）
司会者　藤田主一（日本体育大学）
話題提供者　越河六郎（公益財団法人 大原記念労働科学研究所）
話題提供者　尾入正哲（中京大学）
指定討論者　角山　剛（東京未来大学）

自主企画ワークショップ②……8

8月24日（土）10:00～11:30　2301教室
ストレスチェック法制化以降の産業精神保健～心理職の立場から考える職場・勤労者支援～
企画者　村上裕子（東京海上日動メディカルサービス株式会社）
井上孝代（井上孝代マクロカウンセリングセンター）
司会者　井上孝代（井上孝代マクロカウンセリングセンター）
話題提供者　大林裕司（一般社団法人心理支援ネットワーク心PLUS）
高見澤由紀（産業能率大学）
村上裕子（東京海上日動メディカルサービス株式会社）

自主企画ワークショップ③ 9

8月24日（土）10:00～11:30　2302教室

カウンセリング，心理療法へのアジアからの発信（3）：

禅，森林散策カウンセリング，心身互動療法の視点から

司会　林　潔（白梅学園短期大学）

高橋浩子（山手教育研究所）

話題提供者　加藤博己（駒澤大学）

小室央允（駒澤大学）

竹内啓恵（東京大学）

李 同帰（北京大学）

指定討論者　長澤里絵（立正大学）

高橋良博（駒澤大学）

自主企画ワークショップ④ 10

8月25日（日）10:00～11:30　2203教室

喪失の悲しみを越えて－ マイクロカウンセリングからのアプローチ －

企画者　福原眞知子（常磐大学）

荻野七重（白梅学園大学）

司会者　藤田主一（日本体育大学）

話題提供者　福原眞知子（常磐大学）

山本孝子（大阪人間科学大学）

玉瀬耕治（奈良教育大学）

指定討論者　横田正夫（日本大学）

自主企画ワークショップ⑤ 11

8月25日（日）10:00～11:30　2301教室

地域性（県民性）を明らかにする－2か所以上の地域で暮らした場合の地域差について－

企画・司会　浮谷秀一（東京富士大学）

話題提供者　桐生正幸（東洋大学）

話題提供者　川本利恵子（湘南医療大学）

指定討論者　齊藤勇（立正大学）

指定討論者　玉井寛（朝日国際医療福祉専門学校）

自主企画ワークショップ⑥ 12

8月25日（日）10:00〜11:30　2302教室

心理学における実践　現場研究の発信とその課題

企画・司会　田中堅一郎（日本大学大学院総合社会情報研究科）

話題提供者　西山浩次（日本大学大学院総合社会情報研究科）

村田教枝（(株)タップクリエート）

小林敦子（ユナイテッド・ヘルスコミュニケーション株式会社）

二瓶　哲（(株)タップクリエート）

学会研修会Ａ 13

8月24日（土）15:45〜16:45　2203教室

インターネット上の言説の分析　偏見・差別研究を題材に

講師　高　史明（神奈川大学人間科学部）

司会　谷口淳一（帝塚山大学）

学会研修会Ｂ 14

8月25日（日）14:45〜15:45　2203教室

ＰＡＣ分析の理論と実施技法

講師　内藤　哲雄（明治学院大学　国際平和研究所）

司会　いとうたけひこ（和光大学）

口頭発表①（教育・人格・福祉・その他）.....17〜20

8月24日（土）10：00〜11：20　2202教室

座長　河野 千佳・片岡 大輔

01-01	学生はプロジェクト型科目におけるプロセスマネージを意識するか(2)	○ 伊東 昌子	常磐大学人間科学部	17
01-02	管理職を対象にした主要５因子性格特性尺度の構成	○ 片岡 大輔	株式会社日本能率協会マネジメントセンター	18
01-03	創造性とユーモア	○ 森田 亜矢子	関西大学人間健康学部	19
01-04	日印の大学生にみる現実的楽観主義とwell-being	○ アニーシャ ニシャート 鈎 治雄	創価大学大学院文学研究科 創価大学教育学部	20

口頭発表②（犯罪・社会・産業・災害）.....23〜27

8月25日（日）10：00〜11：40　2202教室

座長　軽部 幸浩・伊坂 裕子

02-01	自己効力感と2種類の貢献感が援助要請意図に及ぼす影響	○ 静間 健人 土田 昭司	関西大学大学院社会安全研究科 関西大学社会安全学部	23
02-02	職場雰囲気がワーク・ファミリー・バランスを媒介して仕事継続意欲に及ぼす影響―生涯発達的観点から―	○ 原 健之	白百合女子大学大学院	24
02-03	セルフコンパッションの高い人ほど就職活動の不採用に挫けないのか―2017年度及び2018年度就職活動生を対象とした前向き研究―	○ 宮川 裕基 谷口 淳一	追手門学院大学心理学部 帝塚山大学心理学部	25
02-04	犯罪に関するイメージ調査― SCITの質問項目の検討 ―	○ 軽部 幸浩 石岡 彩香 桐生 正幸	日本体育大学 駒澤大学 東洋大学	26
02-05	刑務所と地域の連携：カナダ連邦・州刑務所の地域連携事例の報告	○ 上瀬 由美子	立正大学心理学部	27

ポスター発表①.....31～69

8月24日（土）15:45～17:45　食堂マロニエ（2号館1階）

在籍責任時間　奇数番号　15：45～16：45　偶数番号　16：45～17：45

認知

A-01	においを手がかりとする自伝的記憶の想起に要する時間に関する検討―プルースト現象は特別か？	○ 小林　剛史 白井　真菜美	文京学院大学人間学部 文京学院大学大学院人間学研究科	31

教育

A-02	被受容感が自尊感情に与える影響―ソシオメーター理論とその影響の時期について―	○ 木下　雅博 大西　彩子	甲南大学人間科学研究所 甲南大学文学部	32
A-03	教員及び学生から見た学校支援ボランティアの現状と課題	○ 髙田　莉恵 中地　展生	帝塚山大学大学院心理科学研究科 帝塚山大学心理学部	33
A-04	新入社員の人材育成―企業が求める自律型人材の育成― 【教育発表】	○ 柴田　隼 田崎　ほのか 伊東　由菜 臼谷　海都 後藤　祐里奈 外島　裕	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	34
A-05	特別支援教育における対象の拡大に関する研究（1）－「特別支援教育」をどう考えているのか－	○ 石橋　裕子 林　幸範	帝京科学大学 滋賀短期大学	35
A-06	部活動認証制度の創設のための事例研究 「生徒の意識」に着目した部活動指導プログラムの実践	○ 大門　耕平 伊藤　将史 来田　宣幸	近江兄弟社中学校・高等学校 近江兄弟社中学校・高等学校 京都工芸繊維大学	36
A-07	小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（3）－中学生における自己価値確認の効果の再検証－	○ 埴田　健司 小林　寛子 磯　友輝子 日向野　智子 高橋　一公 角山　剛	東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学こども心理学部 東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学モチベーション行動科学部	37
A-08	小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（4）－小学生における利用価値確認の効果の再検証－	○ 小林　寛子 埴田　健司 磯　友輝子 日向野　智子 高橋　一公 角山　剛	東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学こども心理学部 東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学モチベーション行動科学部	38

人格

A-09	セルフ・コントロール，情報処理スタイルおよび過剰適応の関係	○ 小橋　眞理子 井田　政則	立正大学大学院心理学研究科 立正大学心理学部	39
A-10	一人ひとりに合わせた新人教育 【教育発表】	○ 板倉　悠斗 市川　春奈 大塚　涼平 櫻井　怜奈 杉山　怜香 高橋　香貴恵 外島　裕	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	40
A-11	ストレスフルな出来事への意味づけや対処可能感とSOC（首尾一貫感覚）の関係について	○ 銅直　優子	流通科学大学人間社会学部人間社会学科	41

臨床

A-12	女性における醜形恐怖心性とBig Fiveとの関連	○ 大村　美菜子	目白大学人間学部心理カウンセリング学科	42
A-13	主観的ウェルビーイング研究の動向	○ 角野　善司	高崎健康福祉大学人間発達学部	43
A-14	擬人化エージェントを用いたカウンセリングの可能性に関する検討	○ 岩﨑　和子 来田　宣幸	京都工芸繊維大学大学院 京都工芸繊維大学	44

福祉

A-15	福祉職員に対する研修とコンピテンシー変化－心理テスト（行動特性診断）による研修効果の測定	○ 星　洋 丹羽　勝	一般社団法人　行動特性研究所 株式会社エイデル研究所	45
A-16	あいまいな喪失を体験した子どもへの保育士による支援の実態と課題：質問紙調査の量的分析結果から	○ 加藤　恵美 いとう　たけひこ 井上　孝代	静岡県立大学短期大学部 和光大学 明治学院大学	46

看護

A-17	患者の主観的体験への看護―文献検討による枠組み構築の取り組み	○ 山本　勝則	天使大学看護栄養学部看護学科	47
A-18	自己援助(self help)としての病院広報誌の役割	○ 林　潔	白梅学園短期大学	48

健康

A-19	ロコモ予防の健康教室参加者の継続性に関連する因子の検討	○ 内田　誠也 山岡　淳	一般財団法人MOA健康科学センター 一般財団法人MOA健康科学センター	49

社会

A-20	スマートフォンによるネット依存傾向と対人ネットワークの関連	○ 黒川　雅幸 三島 浩路 小西 達也 永田 雅俊 本庄 勝 米山 暁夫	愛知教育大学教育学部 中部大学現代教育学部 株式会社KDDI総合研究所 株式会社KDDI総合研究所 株式会社KDDI総合研究所 株式会社KDDI総合研究所	50
A-21	母親の就業形態と大学生の就業観および性役割態度の関連	○ 佐藤　舞	早稲田大学大学院文学研究科	51
A-22	ブラック企業について 【教育発表】	○ 中上　博絵 水野　愛美 渡辺　茉耶 時田　学	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	52
A-23	ネガティブな体験の日常的な語り頻度と顕在的・潜在的態度の関連	○ 佐藤　研一郎	中央大学大学院文学研究科	53
A-24	行動の道徳性判断と関係流動性、文化的自己観の関連	○ 伊坂　裕子	日本大学国際関係学部	54

産業

A-25	期間限定と地域限定が購買意欲に及ぼす影響	○ 濱　保久	北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科	55
A-26	商店街の国民的キャラクター起用の有無と関心度から見るまちづくり 【教育発表】	○ 山岡　駿介 高橋　七海 渡部　名美 岡野谷　和花 時田　学	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	56
A-27	課題遂行順序が課題終了後のストレス反応に及ぼす検討	○ 伊藤　晃碧 古屋　健	立正大学大学院心理学研究科 立正大学心理学部	57
A-28	経営組織におけるメンタリング メンタリングとストレスの関連性 【教育発表】	○ 遠藤　慧 小林　史佳 中園　翔太 生沼　萌 三田村　南美 外島　裕	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	58

A-29	建築現場のハザード分類の検討	○ 高橋　明子	独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所	59
A-30	保育者の就業継続に必要とされる支援；日英比較研究を通じて	○ 山本　睦	常葉大学保育学部	60
A-31	モデルの体型が購買意欲に及ぼす影響―制御焦点に注目して― 【教育発表】	○ 古橋　朋果 馬渕　里都 三好　駿之介 井上　裕珠	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	61
A-32	異質のリスク－ベネフィット状況におけるリスクテイキング	○ 橋本　采栄 森泉　慎吾 中井　宏 臼井　伸之介	大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院人間科学研究科	62
A-33	上司からの被信頼が部下にもたらす心理的効用（２）：組織自尊感情に着目して	○ 藤原　勇	聖心女子大学現代教養学部	63

原理

A-34	カイ2乗検定および事前検定を伴う分散分析の棄却率	○ 服部　環 山際　勇一郎	法政大学現代福祉学部 首都大学東京人文社会学部	64

発達

A-35	子どもをもたない有配偶女性の幸福感－就労形態からの検討－	○ 沼山　博 福島　朋子	山形県立米沢栄養大学健康栄養学部 岩手県立大学社会福祉学部	65

犯罪

A-36	画像情報に基づいた筆跡の分類	○ 関　陽子	科学警察研究所	66

交通

A-37	道路横断時の利き手の挙手またはその手ぶりの心理的意味	○ 長塚　康弘	新潟大学	67

スポーツ

A-38	社会的望ましさを排除した体罰容認度を測定する潜在的指標の開発：ST-IATを用いた検討	○	大工　泰裕	大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会	68
			内田　遼介	流通科学大学人間社会学部	
			寺口　司	大阪大学大学院人間科学研究科	
			綿村　英一郎	大阪大学大学院人間科学研究科	
			釘原　直樹	東筑紫短期大学食物栄養学科	
A-39	高校弓道選手に実施した心理的サポートの事例研究	○	小松　健一	アキラ株式会社	69

ポスター発表②.....73〜117

8月25日（日）14:45〜16:45　食堂マロニエ（2号館1階）

在籍責任時間　奇数番号　14：45〜15：45　偶数番号　15：45〜16：45

認知

B-01	光沢の有無による視覚的な触感の違いに関する研究	○ 稲葉　隆	日本カラーデザイン研究所	73

教育

B-02	中学生当時のいじめ被害が高校生の将来展望に及ぼす影響(1)－入学前・入学後調査結果による検討－	○ 三島　浩路	中部大学現代教育学部	74
B-03	知能観を変化させることは可能か	○ 市村　祐樹 井田　政則	株式会社SHP 立正大学心理学部	75
B-04	学習動機が先延ばし行動に及ぼす影響	○ 小野　洋平 谷口　泰富	駒澤大学 駒澤大学	76
B-05	人材育成とキャリア開発 経験学習による個人視点のキャリア開発 【教育発表】	○ 菊池　夏帆 伊東　拓海 可児　佑吾 原　みのり 堀内　勇吾 村松　真至 外島　裕	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	77
B-06	教職課程履修学生の能動的学習を活性化させる授業の在り方に関する検討　-養護教諭養成課程の実践を例として-	○ 亀岡　聖朗	桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部	78
B-07	大学生のボランティア経験が大学生活ストレッサーに与える影響	○ 亀田　凌雅 中地　展生	帝塚山大学大学院心理科学研究科 帝塚山大学心理学部	79
B-08	アニメ教材と協同学習によるコンフリクト解決教育：DVD「インデ島へようこそ」で植民地問題を考える	○ 井上　孝代 杉田　明宏 いとう　たけひこ 高部　優子	明治学院大学 大東文化大学 和光大学 ビープロダクション	80
B-09	ロール・プレイングを教育現場の中で生かすために	○ 時田　学	日本大学商学部	81
B-10	叱っている子どもが反抗する時への反応 ―教職経験者へのKH coderによる分析―	○ 佐藤　大輔	福島学院大学大学院心理学研究科	82

人格

B-11 日本人の逆フリン効果及び neurotoxicologicalな要因の可能性 ○ 廣島 克佳 83

B-12 大村政男と血液型心理学 －日本応用心理学会における活動を振り返って（4）－ ○ 藤田 主一 日本体育大学 84
浮谷 秀一 東京富士大学

臨床

B-13 助産師・保健師がとらえる妊婦・褥婦の心理的特徴 ○ 河野 千佳 日本大学文理学部 85
和田 佳子 聖徳大学看護学部
櫻井 薫 防衛医科大学校医学教育部
横田 正夫 日本大学文理学部

B-14 大学生におけるギャンブル依存傾向：プロセス依存ならびにADHD傾向の関連性について ○ 大久保 純一郎 帝塚山大学心理学部 86

B-15 専門病院入職初期の職員に対する不安緩和と関係性構築を目的としたグループワークの効果 ○ 上野 まどか 明治学院大学心理学部付属研究所 87
いとう たけひこ 和光大学現代人間学部心理教育学科

B-16 否定的・肯定的育児感情と養育行動の関連 ○ 岡本 大輔 甲南大学大学院人文科学研究科 88
大澤 香織 甲南大学文学部
礒部 美也子 奈良大学社会学部

B-17 患者さんの主体性を引き出すための理学療法士のイメージ～経験3年目の理学療法士を対象として～ ○ 宍戸 唯人 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院 89
佐藤 弘一朗 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
内藤 哲雄 明治学院大学

福祉

B-18 記憶力が低下した認知症者への介護におけるPAC分析―ベテラン介護福祉士を対象として― ○ 伊藤 敦史 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院 90
佐藤 弘一朗 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
内藤 哲雄 明治学院大学

B-19 看護と介護の相互理解と業務の分担―中堅看護師を対象としたPAC分析－ ○ 佐藤 大輔 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院 91
桑名 美保 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
佐藤 弘一朗 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
内藤 哲雄 明治学院大学

看護

B-20	診療補助以外の本来の業務への視点転換について―ベテラン看護師を対象として―	○	桑名　美保	一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院	92
			遠藤　さやか	一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院	
			佐藤　弘一朗	一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院	
			内藤　哲雄	明治学院大学	
B-21	回復期病棟の患者からの悩みや相談を受けやすい看護師―ベテラン看護師のPAC分析―	○	遠藤　さやか	一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院	93
			桑名　美保	一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院	
			佐藤　弘一朗	一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院	
			内藤　哲雄	明治学院大学	

健康

B-22	大学編入志願生の精神的健康状態に関する研究	○	岡村　靖人	追手門学院大学大学院心理学研究科・日本学術振興会	94

社会

B-23	AIとかっぱを用いた科学的／非科学的対象物への印象評価差異の検討	○	高橋　綾子	東洋大学大学院	95
			桐生　正幸	東洋大学	
B-24	20項目版SKY式精神性尺度の信頼性および妥当性の検討 ― ソーシャル・キャピタルとの関連に着目して ―	○	木村　友昭	MOA健康科学センター	96
			伊坂　裕子	日本大学国際関係学部	
			内田　誠也	MOA健康科学センター	
			山岡　淳	MOA健康科学センター	
B-25	ムスリムイメージの日韓における等価性の検討	○	向井　智哉	東京大学大学院法学政治学研究	97
			松木　祐馬	早稲田大学文学研究科	
			木村　真利子	立正大学大学院心理学研究科	
			金　信遇	ジェトロ・アジア経済研究所研究推進部	
			近藤　文哉	上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科	
B-26	宗教信者イメージ尺度作成の試み	○	松木　祐馬	早稲田大学大学院文学研究科	98
			向井　智哉	東京大学大学院法学政治学研究科	
			近藤　文哉	上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科	
			金　信遇	ジェトロ・アジア経済研究所研究推進部	
			木村　真利子	立正大学大学院心理学研究科	
B-27	大学生が恋愛と結婚に求めるもの	○	山岡　重行	聖徳大学心理学科	99

産業

B-28	老舗の「重み」が商品評価に及ぼす影響 【教育発表】	○ 小嶋　優花 坂本　拓海 柴田　江玲奈 松田　健太郎 井上　裕珠	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	100
B-29	職場交流活動の体系化に向けた試み ～探索的因子分析を用いて～	○ 二瓶　哲 田中　堅一郎	日本大学大学院総合社会情報研究科 日本大学大学院総合社会情報研究科	101
B-30	職務遂行行動への自己覚知研修の実践効果－研修参加者6事例のフォローミーティングから－	○ 外島　裕	日本大学商学部	102
B-31	産業組織の部署間で発生するコミュニケーション・エラーとその要因の検討：産業組織での行動をシミュレートする課題を使用した安全研修のケーススタディ	○ 工藤　大介 余村　朋樹 施　桂栄 細田　聡 井上　枝一郎	公益財団法人大原記念労働科学研究所 公益財団法人大原記念労働科学研究所 公益財団法人大原記念労働科学研究所/関東学院大学 公益財団法人大原記念労働科学研究所/関東学院大学 公益財団法人大原記念労働科学研究所	103
B-32	カロリーはどこに表示すべきか？―カロリー表示位置が食品選択に及ぼす影響― 【教育発表】	○ 庄子　遼 杉田　篤也 畠　文槻 井上　裕珠	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	104
B-33	PCキーボードのキースイッチの物理パラメータとユーザビリティの関連分析	○ 富田　新	明星大学心理学部心理学科	105
B-34	ビジネスマナーの効力感が就労者のウェルビーイングに与える影響	○ 中嶋　葉子	成城大学大学院文学研究科	106
B-35	現代における理想のリーダーシップとは 【教育発表】	○ 佐藤　祐弥 山口　真莉 阿部　花菜子 長部　楓 佐藤　優希 本多　祥悟 外島　裕	日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部 日本大学商学部	107
B-36	親会社と子会社・関連会社間における安全文化の評価方法の検討	○ 余村　朋樹 工藤　大介 施　桂栄 細田　聡 井上　枝一郎	公益財団法人大原記念労働科学研究所 公益財団法人大原記念労働科学研究所 公益財団法人大原記念労働科学研究所/関東学院大学 公益財団法人大原記念労働科学研究所/関東学院大学 公益財団法人大原記念労働科学研究所	108

災害

B-37	2000年三宅島噴火から13年後の被災者の精神健康	○ 大森　哲至 田宮　憲 岩井　美路子	帝京大学外国語学部外 帝京大学短期大学 湘南歯科衛生士専門学校	109

発達

B-38 青年の抱く自尊感情に関する研究(Ⅰ) ―児童期のつらい出来事に対する両親の対応を通して― ○ 尾形 和男 埼玉学園大学人間学部 110
増南 太志 埼玉学園大学人間学部

B-39 青年の抱く自尊感情に関する研究(Ⅱ) ―児童期に受けたしつけを通して― ○ 増南 太志 埼玉学園大学人間学部 111
尾形 和男 埼玉学園大学人間学部

医療

B-40 完治主義から多機能補完リハビリテーションへ ○ 佐藤 弘一郎 一般財団法人脳神経疾患研究所付属南東北福島病院 112
宍戸 唯人 一般財団法人脳神経疾患研究所付属南東北福島病院
内藤 哲雄 明治学院大学

犯罪

B-41 虚偽検出検査における質問文の影響 ○ 石岡 綾香 駒澤大学文学部 113

交通

B-42 運転能力を過大評価する高齢運転者の特徴 ○ 小菅 律 科学警察研究所 114
岡村 和子 科学警察研究所
中野 友香子 科学警察研究所
藤田 悟郎 科学警察研究所

B-43 保護者のシートベルト着用頻度とチャイルドシート使用との関連 ○ 中野 友香子 科学警察研究所交通科学部 115
岡村 和子 科学警察研究所交通科学部
小菅 律 科学警察研究所交通科学部
藤田 悟郎 科学警察研究所交通科学部

スポーツ

B-44 長期的課題の遂行における情熱と希望 ―楽観傾向群と悲観傾向群の比較― ○ 本多 麻子 東京成徳大学応用心理学部 116

B-45 実動画とスティックピクチャを用いたテニスフォームの印象評価について ○ 堀内 俊孝 株式会社ジャパンスポーツネット 117
来田 宣幸 京都工芸繊維大学

大会企画シンポジウム

特別講演

自主企画ワークショップ

学会研修会

『グローバル人材の育成－大学での留学制度の活用からグローバル・コンピテンシーへの発展－』

企画者　日本応用心理学会第 86 回大会委員会
司会者　外島　裕（日本大学商学部）
話題提供者　眞谷国光（早稲田大学総長室/国際部）
橋上愛子（東京海上日動メディカルサービス株式会社）
Bryan Sherman（Gramercy Engagement Group, Inc.）
指定討論者　井上孝代（明治学院大学）
白木三秀（早稲田大学政治経済学術院）

≪企画趣旨≫

国際化がきわめて速い速度で進展し、多文化共生の社会のなかでの適切な行動が課題となっています。特に将来このような、いわゆるグローバル社会において活躍が期待される大学生の育成支援については、各大学では留学制度の充実と活用が図られています。大学生自身も、留学の機会を自己の成長の機会として積極的に活かそうとしています。この留学経験を意義のある体験の機会とするためには、多くの支援の工夫が必要です。さらに、大学から社会での活躍につながっていくためには、グローバル経営における人材に必要な能力要件・行動要件を理解しておく必要があります。従来からの仕事への適性や能力開発の視点にとどまらず、たとえばグローバル・リーダーシップへの成長が必要となるでしょう。本シンポジウムでは、大学での留学制度のありかた、大学生の留学を支援する自己理解のレディネステストとフォロー、そして国際人事における人材の必要要件などを話題として、参加の諸先生とともに話し合いを深めたいと企画しています。

≪話題提供≫

『近年の大学における留学の動向および留学による学生の変容～早稲田大学の事例より～』

眞谷国光
（早稲田大学総長室／国際部）

（話題提供の要旨）

昨今、日本において国際性を備えた人材の育成が喫緊の課題となっている。文部科学省補助金事業においても、「大学の世界展開力強化事業」（2011 年度開始）「経済社会の発展をけん引するグローバル人材育成支援」（2012 年度開始）「スーパーグローバル大学創成支援」（2014 年度開始）など大型の補助金支援策が矢継ぎ早に実施される等、国策としても、「グローバル人材」の育成が急務であることが理解される。これらの追い風により、近年日本全体で海外留学者数が大きく増加する結果をもたらした。

この動向により、海外留学の量的な拡大とともに、その質的な変化がもたらされた。すなわち、これまで主流であった学位取得型留学から、１年間や半年間の交換留学、そして夏休みなどを利用した短期留学等比較的短くより参加しやすい留学が増加したという特徴を指摘できる。こうした背景により、近年の傾向としては海外に不慣れな学生も、数多く留学に行く傾向が強くなってきている。

そこで重要なのは、単に海外に数多く学生を送り出すだけではなく、きちんとその学習成果を把握して評

価し、また心身ともに健康な留学生活を送れるような学生支援策である。これらに対して、大学はどのような具体的な方策を採ることができるだろうか。
早稲田大学では、海外留学の教育的アセスメントを行うため、留学効果測定という教育学の観点から構築された調査を実施している。また、海外留学に対しての個人のメンタルヘルスケアを促すための SRSA（Scale of Readiness for Study Abroad）という臨床心理学の観点から開発された調査をあわせて実施している。これらの実施により、海外留学の質的評価・対応を行っている。

当発表は、これら両調査の具体的な実施概要を共有する。留学効果測定に関しては、実際のデータから見えてくる海外留学の効果に関する分析結果を一部ご紹介する。また、SRSA に関しては、実際にこの検査により学生および運営側の教職員に対してもたらされる効果についてご紹介する。

≪話題提供≫

『大学のグローバル化を支える留学のリスク管理と留学の成果―「留学生メンタルヘルス支援プログラム」から「グローバルキャリア開発プログラム」への展望―』

橋上愛子（臨床心理士・公認心理師）
（東京海上日動メディカルサービス株式会社健康プロモーション事業部 EAP 室）

（話題提供の趣旨）

日本におけるグローバル戦略（GGJ,SGU 等）は近年加速傾向にあり,日本の高等教育の国際化は著しい。日本学生支援機構の調査によれば,2017 年 5 月現在の留学生数は 26 万 7042 人となり,前年比で約 2 万 8000 人の増加数が報告されるなど国の期待通りの実績は挙げられてきているが,一方で派遣留学生のメンタル不調問題も顕在化しつつある。学校側としては,事例化した学生の事後対応に留まらず,留学前の危機管理や心理教育（ストレスマネジメント等）を行うなどのサポート体制作りが急務である。

弊社が早稲田大学と共同で開発した留学準備教育スケール（Scale of Readiness for Study Abroad,以下「SRSA」）は,学生が留学前に自分の性格傾向（強み・課題）や留学適応力を把握し,渡航前の心構えと現地での不適応を未然に防ぐことを目的としたセルフケアツールである。早稲田大学では,2017 年度より本格運用を始めており,留学に行く学生に対して留学の前後に受検するよう促している。

一方,学校側は,学生の留学適応力をもとに留学先の事前検討や気がかりな学生に対して事前に個人面談等の対策を打つことによって,学生に対する安全配慮義務を遵守し,学内のリスク管理に繋げられるという特長がある。最近では文科省から「日本人の海外留学の効果測定」等,留学成果の可視化を求められており,学校側は留学プログラムの PDCA サイクルを適切に回し,社会でグローバルに活躍できる学生の輩出に益々寄与していくべき局面を迎えている。

学生は,留学という挑戦を経て,語学力の向上といった教育的側面の成長が期待できると共に,様々な経験を通して人間的に大きく成長できる貴重な体験をも得る。その経験を自身の「強み」として可視化し,次に続く就職活動に活かすために,学校側や企業は,留学後の定期的なフォローアップ介入を行い,留学で身につけたグローバルスキル（コンピテンシー）を維持させるプログラムの開発が必要ではないだろうか。本発表では,学校側のサポート体制（『留学生メンタルヘルス支援プログラム』）の現状と,企業における『グローバルリーダー育成』を見据えた,学生の『グローバルキャリア開発プログラム』の展望についても考察したい。

≪話題提供≫

『グローバル経営時代の人材に必要な要件、育成について』

Bryan Sherman（ブライアン・シャーマン）
（グラマシー エンゲージメント グループ株式会社　代表取締役）

（話題提供の要旨）

グローバリゼーション、デジタル化、刻々と進む人口減少。人生100年時代の到来、長く続いた終身雇用制度の終焉。仕事を取り巻く環境は急速に変化し混沌としている。その変化に適応できる者とできない者との間には深い溝ができつつあり、働くすべての人々に希望よりも不安をもたらしている。そんな中、ただひとつ断言できることは、どんなにテクノロジーが進んだ時代であっても、人間は機械やA.I.に屈せず、仕事とは本来我々の健全な精神と肉体の源となるべきであるということを思い出さなくてはならない。そして、グローバル時代を支えるトップ人材は次の三つの特徴を体現するために育成されるべきである。

1. 生涯学習への意欲や物事に好奇心を持ち続けること。
2. 自己満足を避け、常に挑戦すること。
3. 密接で有意義な対人関係を維持すること。

上記に述べた特性と日本におけるグローバル社員育成の現状について解説、また学生時代の教育と仕事を通じ培われる経験が社員のグローバル育成にどのような手助けをするかについて提言する予定である。

Globalization. Digitalization. Radical decrease in Japan's population. 100 year life and the end of implied lifetime employment in Japan. The world of work is changing fast.

But one thing is clear: to retain our mental agility and vitality, our work should be the source of invigoration and inspiration. Therefore, business should support the needs of humanity (rather than humanity succumbing to the whims of the business machine's drive for productivity and efficiency from automation.). In a global era, top employees should be nurtured to embody the following characteristics: (1) to remain curious with a life-long learner's mind, (2) to avoid complacency and take on challenges, and (3) to retain close and meaningful interpersonal relations.

In this talk, Sherman will review the necessity for these characteristics, provide an assessment of the current state of affairs in Japan particularly and provide some suggestions for how academic education and practical work life experience should nurture the development of employees.

≪指定討論≫

『自分らしくキャリアをデザインすること－「文化の懸け橋」と「幸福な生き方」』

井上孝代
（明治学院大学）

（指定討論の要旨）

「留学」の目的自体が大きく変化してきた今日、改めてグローバル人材の育成にとって留学の意義の論議は喫緊の課題であろう。本シンポジウムにおいて、（1）留学制度の多様なあり方に対応した学生支援対策と評価（眞谷報告）、（2）留学生の特性やグローバル化に即した支援内容の予防的・教育的可能性と展望（橋上報告）、（3）留学を卒業後の職業人としてのキャリア発達にどうつなげるか(Sherman報告)の話題提供からは、若い時代の留学という最大の異文化体験が自己理解・自己肯定感を得るチャンスとして活かされ、生涯のキャリア発達の起点ともなりうること、そしてその後のグローバル社会での有用な人材として育ちうると

いう一貫した強いメッセージが伝わってくる。すなわち留学制度の活用と「グローバル人材」の育成、ひいてはグローバル・コンピテンシーの発展との強い結びつきが主張されている。

指定討論では、上記のメッセージに大いに共感しつつ、この「人材」という言葉に目を向けたい。「人材」とは「才能のある、役に立つ人」とい意味である。「役に立つ」とは何に対して役にたつのか。「経営に役に立つ」といった側面だけでなく、「本人にとっても役に立つ」という視点、つまり留学生の生涯キャリア発達の支援という観点の重要性を指摘したい。この場合の「キャリア」は「職業」だけでなく、「ライフキャリア」「ライフコース（人生）」を意味する。グローバルな時代はさまざまな価値が多様化する多元的社会である。そういう時代にこそ、「いかに自分らしくキャリアをデザインできるか」が問われよう。留学制度がそのような個人の生涯キャリア發達の視点で活用されること、そしてそのことが願わくば「文化の架け橋」ともなるような社会的役割をもち、社会貢献のできる人材の育成につながることも期待したい。それがポジティブ心理学で言われる「幸福な生き方」の要件をも満たすものと考えるからである。

≪指定討論≫

『「グローバル人材」や「グローバル・コンピテンシー」とは何か』

白木三秀

（早稲田大学政治経済学術院）

（指定討論の要旨）

「グローバル人材」や「グローバル・コンピテンシー」とは何かについては諸説あり、これまでにも様々なリサーチも報告されている。本シンポジウムの特徴はその中でも特に、大学での留学とグローバル・コンピテンシーとの関連に的を絞り、議論を行っているところにある。

グローバル・コンピテンシーは価値観や性格のような static な要素と後天的な dynamic な要素から成っていると考えられるが、留学は基本的に後者に影響を与えるが、若い人の場合には前者にも大きく影響するものと考えられる。

このため、我々の日本人海外派遣者のデータで見ても、若い頃の海外経験がシニア・マネジャーになってからのパフォーマンスに大きな影響を与えることが示唆されている。また、留学による広い視点の必要性の認識・体験は、様々な知的関心を引き出す大きな刺激になり、態度変容と伴うことにより、後ほどの人生を豊かにするばかりでなく、キャリアに大きな効果を持つものと考えられる。

若い人材の海外でのパフォーマンスを規定する要因について考察すると、留学が語学習得という dynamic コンピテンシーの獲得を超えて、態度変容を通じて、後ほどの海外での活躍に大きな力になることを確認したい。

【シンポジスト紹介】

話題提供者：眞谷　国光（まみや　くにみつ）。

早稲田大学総長室調査役兼国際部調査役。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程在籍中。早稲田大学留学センター、国際部国際課等を経験。専門領域は、比較国際教育学。眞谷国光「日本人学生のアジア留学経験によるアジア・シティズンシップ育成に関する考察」『高等教育研究』日本高等教育学会　2019 年 5 月 第 22 号　他。

話題提供者：橋上　愛子（はしがみ　あいこ）

聖心女子大学文学部卒業後,民間企業在職中に東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻修了。国立精

神・神経医療センター精神保健研究所にて研究生,都内スクールカウンセラーを経て現職。専門領域は留学生支援,産業心理学。橋上愛子,井上孝代, 外島裕,他. “大学生向け留学準備教育スケールの開発の試みII ―新柔軟性尺度の作成―”. 日本応用心理学会大会発表論文集83巻. 北海道, 2016-09-01/02. 日本応用心理学会, pp. 54-54.他。

話題提供者：Bryan Sherman （ブライアン・シャーマン）

代表取締役。グラマシー エンゲージメント グループ株式会社（Gramercy Engagement Group, Inc.）。米国ニューヨーク市にて日系企業（NY・LA）を対象に人事コンサルタントとして従事。その後米国住商情報システム人事総務部長として在米日系企業が抱える人事の現場を内と外の視点で支える。来日後株式会社ファーストリテイリングでのグローバル人事業務に参画。2010年グラマシーエングージメントグループ株式会社設立。日本企業の人事のグローバル化をサポートするコンサルタントとして活躍中。米国ニューヨーク州出身、米国Williams College卒。早稲田大学トランスナショナルHRM研究所 招聘研究員。

指定討論者：井上　孝代（いのうえ　たかよ）

明治学院大学名誉教授。九州大学大学院文学研究科博士課程心理学専攻単位満期退学。博士（教育心理学）。東京外国語大学留学生日本語教育センター教授を経て、1998年より明治学院大学心理学部教授。元明治学院大学副学長。日本応用心理学会名誉会員。

専門領域はカウンセリング心理学。マクロ・カウンセリングを提唱。『コンフリクト解決のカウンセリング－マクロ・カウンセリングの立場から－』（編著、2012、風間書房)、『エンパワーメントのカウンセリング　共生的社会支援の基礎』（編著、2007、川島書店）他。

指定討論者：白木　三秀（しらき　みつひで）

早稲田大学 政治経済学術院教授。早稲田大学政治経済学部卒業、同大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士(経済学)。国士舘大学政経学部助教授・教授等を経て、1999年より現職。専門は労働政策、国際人的資源管理。現在、早稲田大学トランスナショナルHRM研究所所長、国際ビジネス研究学会会長、日本労務学会理事(元会長)を兼任。

最近の主な著作に『国際人的資源管理の比較分析』（単著、有斐閣、2006年)、『グローバル・マネジャーの育成と評価』（編著、早稲田大学出版部、2014年)、『人的資源管理の力』（編著、文眞堂、2018年）等がある。

司会：外島　裕（としまゆたか)。

日本大学商学部経営学科・大学院商学研究科経営学専攻教授。日本大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了。日本化薬(株)、(株)日本能率協会マネジメントセンター勤務を経て、1997年より現職。日本応用心理学会常任理事。日本応用心理学会第86回大会委員長。

専門領域は産業・組織心理学。外島裕監修（2019)『産業・組織心理学エッセンシャルズ（第4版)』ナカニシヤ出版。外島裕(2019)「行動開発における自己覚知の深化の過程に関する研究」『商学集志』88(4),pp.179－220. 他。

アニメに見る「感情の谷」

○横田正夫
（日本大学文理学部心理学科）
キーワード：アニメ・「感情の谷」・悟り

１．日本のアニメ

日本のアニメは世界に広く知られ、多くのファンを獲得している。最近では、「進撃の巨人」がその一つである。そのヒットの理由には、青年期を描いていること、物語の複雑であること、特異な世界観が描かれること、キャラクターが魅力的であることなど、いろいろと考えることができる。その中の一つの大きな特徴にこころを描くということがある。悩む主人公、激しく感情を揺さぶられる主人公は、日本の観客には馴染みのものである。特に、主人公が激情の果てに無意識世界に落ち込み、そこでの出会いによって悟りを得て、ヒーローになってゆくといったパターンが好んで描かれる。このパターンを「感情の谷」として概念化した（横田、2017）。

２．「感情の谷」

「感情の谷」では主人公が危機に遭遇し、こころの奥底に閉じこもる。その危機は生半可なものではない。上記の「進撃の巨人」では、主人公は、戦いを挑んだ巨人に捕食され、胃の中で、絶叫する。ここには死を目の前にした激情がある。そしてこの激情が、主人公を巨人に変身させる。巨人は他の巨人を倒すことのみを目的として、無意識的に行動する。その無意識のさらに底では主人公は死んだはずの母親と平和に暮らしている、と実感している。「感情の谷」の無意識の底には、平安な隠れ家があった。主人公はそこからでる必要性を持たない。その安住の場から出るためには、外からの友達の呼びかけが必要で、それが主人公の望んでいたことを思い出させる。主人公の本来の願いを悟らせる。こうして巨人に変身し倒れていた主人公が復活する。こうした「感情の谷」への落ち込みとそこからの回復は、日本のアニメの歴史を振り返ると繰り返し描かれてきていた。

そのはじまりは高畑勲監督の「太陽の王子 ホルスの大冒険」である。主人公ホルスは、悪魔に娘として育てられ、手先として村に送られてきた美しいヒルダの策謀によって迷いの森に突き落とされる。もともとホルスは、ヒルダが一人ぼっちで廃村にいたところを、彼の村に連れ帰ったのであり、ホルスが孤児であることもあって好意を寄せていた。その彼女が村を混乱に陥れ、村からホルスを追放し、その果てに彼を迷いの森に突き落とした。ヒルダは、迷い森に突き落とす直前に、自らの口から、その顛末を知らせる。しかしそれでもなおホルスはヒルダの人間の心を信じていると彼女に伝える。迷いの森に落とされたホルスは、森の中でヒルダの姿を幻視する。幻視をみるほど、ホルスはヒルダによって激情状態に陥れられ、「感情の谷」に落ち込んでいた。さまざまな幻覚をホルスは見るが、その中のひとつは一人のヒルダがたくさんのヒルダに分かれてゆくというものであった。これを目にしたホルスは、悟りを得る。つまりばらばらな村人たちのこころをひとつにまとめることができるならば、その力は悪魔をも凌ぐものになるというものである。この悟りを得たとたん、誰も脱出できないとされた迷いの森からホルスは脱出できた。迷いの森は、彼が「感情の谷」に落ちこんだことの象徴であり、その谷底でヒルダに新たに出会い、その出会いによって悟りを得、そしてヒーローとして現実世界に戻ってきたとパターン化できる。

こうした「感情の谷」は、その後「幻魔大戦」や「パーフェクトブルー」、最近の「君の名は。」、「この世界の片隅に」にいたるまで応用されてきた。このアニメの「感情の谷」に対応するような体験は現実世界にも見いだせる（横田、2017）。

３．「感情の谷」の心理学

「感情の谷」に相当するものは、統合失調症の発病過程に見ることができる。その発病初期には世界没落体験として知られる世界が不気味に変容し、破滅的な出来事が起こりそうな不穏なものに変化する。その後、不穏なものが、患者本人にとって独特な意味を帯び、世界のすべてのものが何やら暗示しているようで、重大な意味を秘めている確信が生まれる。こうして妄想が芽生え、すべての出来事が自分を陥れようと仕組まれ、どこにも逃げ場がないと恐怖に陥る。こうした発病過程では、緊張困惑気分というような不安でいてもたってもいられないような感情に見舞われる。そして「感情の谷」に落ち込むアニメの世界のように妄想世界に入り込んでゆく。しかし統合失調症の発病過程とアニメの「感情の谷」の両者で相違していることは、患者では妄想世界から悟りを得て現実に戻るということが困難ということである。

別の例では臨死体験として知られるものがある。瀕死の重傷を負った人の中には、臨死体験を報告するものがある。例えば、分析心理学のユング(ヤッフェ、1973)は 1944 年の初めに心筋梗塞を患い、危篤状態に陥った。その際、さまざまなビジョンを見た。彼は地球外にあるように感じ、眼下に地球を望んだ。そして地球から遠ざかっていると感じた。しばらく地球を見てから向きを変えたところ真っ黒な石塊が見えた。ユングの家と同じかそれより少し大きめのサイズだった。その入り口に近づいたとき、すべての経験が走馬灯のようにユングから消え去り、離脱した。ユングは、「私は存在したもの、成し遂げたものの束である」と悟った。こうした時、下の方から一つのイメージが浮かび上がってきた。主治医のものであった。ユングは地球を離れる権利はなく、引き返さなければならないと彼からメッセージが送られてきた。そして主治医の幻像は消えた。このように臨死体験のなかでユングは悟りを得たのであった。

４．まとめ

日本のアニメの一つの特色は、「感情の谷」を描くことで、統合失調症患者の体験するようなこころの混乱や臨死体験を、娯楽として提供する。主人公たちは、激情の果ての「感情の谷」の底で、自身の心を高めるような悟りを得る。視聴者はアニメを通して自身の心を高める悟り体験を疑似的に得る。ここに日本のアニメが好まれるひとつの理由があると思われる。

引用文献
横田正夫(2017)大ヒットアニメで語る心理学、新曜社
ヤッフェ, A(編)(1973)ユング自伝２、みすず書房
（よこたまさお）

応用心理学における「労働」研究のこれまでとこれから

企画者　大橋信夫（日本応用心理学会名誉会員）、藤田主一（日本体育大学）
司会者　藤田主一（日本体育大学）
話題提供者　越河六郎（公益財団法人 大原記念労働科学研究所）
話題提供者　尾入正哲（中京大学）
指定討論者　角山　剛（東京未来大学）
キーワード：労働科学、研究方法、応用心理学

【企画趣旨】

応用心理学における「労働」研究は、産業領域に限った問題ではなく、交通や犯罪、臨床や教育などのあらゆる分野を網羅するものである。それは、本学会の前身である研究会が特に関西の地から誕生し、その後に東京の研究者と合流して今日に至った経緯を振り返ると理解できる。

このワークショップでは、「労働」研究の方法論や実践論などについて、「これまで」と「これから」という観点からいくつかの問題点を中心に話題提供する。それを受けて、広く産業分野からの指定討論と幅広い議論を展開する。

【話題提供】

◆応用心理学におけるこれまでの「労働」研究

越河六郎（公益財団法人 大原労働科学研究所）

応用心理学は、実際生活や現実の問題を心理学的観点から研究を目指す心理学の一分野である。（広辞苑）。たとえば、産業心理学は産業場面で生起している問題を心理学の方法や結果を単に応用して研究するだけではなく、独自の方法論の展開が求められている。

「労働」研究は広範な問題領域を含んでいる。経済学、社会学、経営学、医学（生理学）など各専門分野からそれぞれの目的に沿って研究がなされている。

わが国では、労働・生活行動を直接的に研究する組織として労働科学研究所が設立された（1920 年、倉敷紡績・大原孫三郎）。「労働科学」とは、人間の労働を規定している諸要件を研究する学問。主に生理・心理・衛生などの見地から追究する（広辞苑）、むしろ総合的な研究組織である。この心理学の分野を展開し産業心理学を体系化した桐原葆見の考え方、労働研究の一端を概観する。

労働科学は「真に合理的な労働と生活の条件を求めてやまない」という視点からなされている研究活動である。何らかの思想に偏したり、時代の主潮に流されることなく、常に学問的なレベルを目指しての研究である。そして、もうひとつ大事なことは、研究の方向性である。桐原は働く人間にとって、その労働・環境条件が如何にあるべきかを尊重し、効率よく働かせるためにはどうすればよいかという構えとは一線を画している。

労働研究の方法は労働場面の直接的な観察が基本である。労働科学研究では、労働生活の体験がないと無理だという側面がある。直接的観察法（質問法等も含む）は「現場主義」と称せられるが、「現場」とは問題事象の所在を意味する。

「労働」研究の具体例を若干上げておく。①労働時間関連の研究：三交代制の導入。労働時間の長さと勤務間隔時間との関連（労働と休養のバランス）。②親の職業階層と子どもの心身発達に関する研究：精神発達の逐年的研究。③労働能力に関する研究：各種適性検査の開発。④産業安全に関する研究：「不注意物語」（狩野広之）。⑤技術革新に伴う職務特性の変化に関する研究：作業方式と心身健康管理の問題。

◆労働科学の「これから」　尾入正哲（中京大学）

労働科学とは何だろうか？おそらく労働者・作業者目線からの職場に関する研究ということになろう。労働組合や労働者福祉という意味だけではない。しかし、言うは易くで「目線」といっても、それは具体的にいったい何なのだろうか。

質問紙の集計結果、インタビューの聴取内容、組織の制度やルールの文書上の検討…これらは目に見える研究データである。しかし、労働科学の目線はそれにとどまらず、もう一段踏み込んだものであってほしい。労働負担といえば、身体的なもので生理的な方法で測定可能であるし、心理的なものであれば、ストレスのチェックリストは数多くある。こうしたデータは統計的に処理されて結果が学会などで発表される。

しかし、もしかすると、そうしたデータに表われない暗黙の負担要素が作業者の内面にはあるかもしれない。それを探ることが「作業者目線」ということではないかと考える。例えば、多くの事業所で「ゼロ災何日連続中！」といったスローガンが掲げられている。それ自体安全活動として意味はあるが、作業者側からすると、もし自分が事故を起こして記録をストップしては…というプレッシャーとして感じられているのではないか。また、事故の後で何時間にも及ぶ反省会を行っている例を見たが、作業者側からみれば長時間に及ぶ反省会は罰としてしか受け止められていないようである。そのため、事故を起こしてケガをした本人が自ら傷を隠してそのまま帰宅しようとした事例に接したことがある。

管理者側が暗黙のプレッシャーを与えているだけでなく、作業者側が自ら暗黙のルールを作り出している状況もありうる。誰でも早く仕事を終わらせて、さっさと帰りたい。それが安全手順の無視や勝手な手順変更につながっていく。どれも管理者や作業者の内面に潜むもので、表面には出てこない。とはいうものの、こうした内面への洞察は別に作業者の深層心理を読む、といった大げさなものでないと思う。

具体的な仕事の内容・作業者の個人特性（年齢・性格…）・設備や作業環境の状況などを幅広く見渡せば、自らポイントが浮かび上がってくるように思われる、トートロジーのように思えるが、それができることが労働科学的視点あるいはセンスではないだろうか。「これから」という観点からは、そういったセンスを持つ人材、分析的でなく作業者の全体像をとらえることのできる人材を育てることが労働科学の重要な任務のように思われる。

【指定討論】　角山 剛（東京未来大学）

産業心理学が組織に働く人間の行動に注目し、組織行動を一方の軸とする産業・組織心理学として研究の裾野を広げてから半世紀が過ぎた。この間さまざまな領域にわたり多くの成果を蓄積してきたが、近年組織を取り巻く環境は大きく変化してきており、組織に働く人々の行動にさまざまな影響をもたらしている。我が国が抱える若年人口の減少、高齢化問題も、今後の組織のありようや働き方に大きな影響を及ぼすだろう。組織を取り巻く変化の中で「労働」をどのような視点で捉えていくか、労働科学を牽引してこられたお二人の先生にじっくりお話をうかがってみたい。

（おおはしのぶお、ふじたしゅいち、こすごうろくろう、おいりまさあき、かくやまたかし）

ストレスチェック法制化以降の産業精神保健

～心理職の立場から考える職場・勤労者支援～

○企画者：村上裕子[1]　井上孝代[2]　○司会者：井上孝代
○話題提供者：大林裕司[3]　高見澤由紀[4]　村上裕子
([1]東京海上日動メディカルサービス株式会社　[2]井上孝代マクロカウンセリングセンター
[3]一般社団法人心理支援ネットワーク心 PLUS　[4]産業能率大学)
キーワード：ストレスチェック、職場環境改善、マネジメント

【本自主企画ワークショップ実施の背景と目的】

2015年（H27）の労働安全衛生法一部改正に伴い、ストレスチェック制度（厚生労働省,2015）が施行され、従業員50人以上の事業所にストレスチェック実施とその後の対応が義務付けられてから4年目を迎えた。産業医や産業保健スタッフを中心に社内でストレスチェック実施体制を組み立てた企業、社外のEAP事業者やストレスチェック業者に委託する形で体制構築を行った企業など様々ではあるが、実施が義務づけられた規模の企業では、8割を超える事業場でストレスチェックが実施されている（厚生労働省,2017a）。

このように、大規模な企業においてはストレスチェックの実施そのものは概ね定着しており、現在はそれ以降の対応、すなわち従業員個々人のセルフケア促進や組織としての職場環境改善の活動に焦点が当たりつつある。特に職場環境改善活動については、現時点では企業側の努力義務ではあるものの、第13次労働災害防止計画(2018年度～2022年度；厚生労働省,2017b)において組織による職場改善活動実施率の数値目標の設定（ストレスチェック結果を集団分析し、その結果を活用した事業場の割合60%以上とする）がなされるなど、一つの大きなテーマとなっている。

そこで今回は、産業分野で実際に活動している心理士より、ストレスチェック後の産業精神保健活動の実践例を紹介しつつ、心理士としての関わりをどう職場のこころの健康づくりに活かせるかを共に考える場としたい。

【方法】

本ワークショップはシンポジウム形式で実施する。

まず、村上より前段として、法制化されたストレスチェック制度の概要、ならびに厚労省より報告されている実施状況の調査結果を概説する。その上で、実際のストレスチェック結果を活用してのさまざまな対策例（セルフケア・ラインケア等の研修、高ストレス者への心理士面談実施、選定された高ストレス部署への個人面談と人事職制へのフィードバック、高ストレス部署内でのグループセッション実施と組織状況のアセスメント等）を紹介する。職場改善活動は職場が主体となって行うものであるが、社内外のバックアップがあることで、より機能させやすくなる。活動においては職場のメンバー、マネジャー、人事や経営層、それぞれの取り組みが必要となるが、実践の中から見えてくることとして、職場のマネジャー層の適切なマネジメントや積極的な取り組みの重要性が挙げられる。鍵となるマネジャーへのエンパワメントの必要性など、実践活動の結果から見えてきた課題や留意点を報告する。

次いで、大林氏からは、「心理学にできるストレスチェックの活かし方」と題して、ストレスチェックの課題とその解決に向けて「コミュニティ心理学」「行動心理学（応用行動分析学・行動修正）」を基礎としたコンサルテーション技法の紹介とともに、職場への介入の実例を挙げる。それを題材に、問題解決の取り組みの実行に向けて、①介入の厳密性を重視した徹底的な環境調整（人と環境との相互作用）と、②その取り組みを推進するために社内に生じる変化への抵抗感などを低減する工夫といった観点から、心理学がどのようにして職場のこころの健康に貢献できるのかを考察する。

更に、高見澤氏からは「ストレスチェックをマネジメントに活かす」というテーマで、職場環境の大きな鍵となるマネジメントについての各種理論や、マネジメントに活かせるアセスメントツールを紹介する。

実際にマネジメントと聞くと、多くの職場ではコミュニケーションと業務の改善を手の打ちどころとして想像することが多い。その一手は、より組織の現状に合致し、その組織の強みが発揮される有効な一手であることが望ましい。そのためにはマネジメントの大きな原則と、現状把握に参考になる視点が必要である。今回はアセスメント項目を交えてこれらについて話題提供したい。

働き方改革や健康経営が社会の注目を浴びる中、人手不足やハラスメント等、職場の様々な問題も浮かび上がってくる現在、働く場や働く人を支援することは、心理職の大きなフィールドになりつつある。今回は、実際の産業臨床の現場からの報告にボリュームを置きつつ、日々、産業臨床の実践に関わる方々、産業精神保健の研究者、これらに興味をお持ちの方々等、フロアの皆様とのディスカッションを通して、研究と実践の架橋を試みたい。

【引用文献】

厚生労働省 2015 心理的な負担の程度を把握するための検査及び面接指導の実施並びに面接指導結果に基づき事業者が講ずべき措置に関する指針.
(https://www.mhlw.go.jp/hourei/doc/kouji/K151130K0040.pdf)
厚生労働省 2017a ストレスチェック制度の実施状況.
(https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11303000-Roudoukijunkyokuanzeneiseibu-Roudoueiseika/0000172336.pdf)
厚生労働省 2017b 第13次労働災害防止計画.
(https://www.mhlw.go.jp/content/11200000/000341158.pdf

（むらかみ　ゆうこ・いのうえ　たかよ・おおばやし　ゆうじ・たかみざわ　ゆき）

カウンセリング，心理療法へのアジアからの発信（3）

：禅，森林散策カウンセリング，心身互動療法の視点から

司会：林　潔[1] 高橋浩子[2]　話題提供者：加藤博己[3] 小室央允[3] 竹内啓恵[4] 李　同帰[5] 指定討論者：長澤里絵[6] 高橋良博[3]
([1]白梅学園短期大学　[2]山手教育研究所　[3]駒澤大学　[4]東京大学　[5]北京大学　[6]立正大学　)

キーワード：禅　森林散策カウンセリング　心身互動療法

【趣旨】　カウンセリングの起源は日常の相談である。記録に留められた例としては，史記の五帝本紀第一に，堯は四嶽に施政の相談をしたとある。また共に歴史に残る名臣を持ちながらも，助言の採否で明暗を分けたのが越の勾践と呉の夫差である（越王勾践世家第十一・上）。また日本書紀巻十一に，応仁天皇崩御の際，太子は後の仁徳天皇と後継帝位について相談する。そして，相談からカウンセリングへと転機をもたらしたものは，Guidance 運動，Howthon 研究，Rogers の活動である（沢田,1984）。治すということにかかわる心理療法は，原始神秘主義，宗教にその起源を求められよう。桂（1989）は東洋的ストレスケアとして，漢方医療（方剤），絶食療法，内観法，森田療法，禅療法，ヨーガ，気功療法などをあげている。東洋的アプローチについては，多くの報告がなされている（例：春木，他,1993）。

本ワークショップでは，昨年に引き続き禅の役割について報告する。動物，植物も気づきを促進し，その人の存在を支える対象である。わが国独自の発展として森林カウンセリングの例が報告される。また中国の心身互動療法を紹介する。

（司会：はやし　きよし・たかはし　ひろこ）

加藤博己　禅とマインドフルネス：2つの瞑想法の発生・語源からの比較

一昨年は，文化的要因の大きいマインドフルネスを用いた心理療法や，米国大手 IT 企業を中心としたマインドフルネスの社会的ブーム，そして東洋思想の影響を受けた心理療法・カウンセリングを紹介した。昨年は，「禅」と「マインドフルネス」への心理学的研究と臨床的適用，そして注意集中型瞑想と，洞察型瞑想，すなわち，止観を併修する観点から「禅」と「マインドフルネス」を比較した。今回は「禅」瞑想と「マインドフルネス」瞑想の発生・語源から両者を比較する。最初に jhāna（ジャーナ：禅）と（samādhi：定）の違いについて，次に samatha（サマタ：止）と vipassanā（ヴィパッサナー：観）の違い，並びに，vipassanā と sati（サティ：念）との別を明確にすることで，状態や技法としての「禅」瞑想と「マインドフルネス」瞑想の違いについて紐解いて行きたい。　（かとう　ひろき）

小室央允　初学者への座禅の導入

座禅は仏教における修行のひとつである。特に，禅宗である曹洞宗では座禅を重視している。そのような座禅は，僧侶だけが行う特別な修行であると考える人がいるかもしれない。しかし，僧侶や仏教徒だけが行う特別な修行ではなく，広く一般でも行える瞑想である。

過去の座禅の心理学的研究として，主に高僧を参加者とした生理測定が行われてきた。その特徴として，脳波の高振幅徐波や呼吸代謝の低下などがあげられている。では，座禅瞑想の初学者が座禅を行った場合はどうであろうか？

座禅では調身調息調心の均衡が重要となるが，初学者には結跏趺坐の姿勢や心の錯乱など，多少困難な面がある。そこで，座禅の導入法として，身体的負荷の少ない椅子座禅と，呼吸が調い易く心の錯乱が抑制される数息観を行い，初学者の座禅導入における心理学的・生理学的特徴を検討する。

（こむろ　ひさよし）

竹内啓恵　森林散策カウンセリングの概要

「森林散策カウンセリング」とは，森林環境をクライエントとカウンセラーが散策しながらカウンセリングを行う形式のカウンセリングである。カウンセリングを行う野外の自然環境には樹木，植物，土壌，そして昆虫，小動物などの生命が存在する。また天候や季節の変化により散策可能な時間は限られる。しかし，これらの自然空間は，現代社会の，特に都市部に住む人々にとっては非日常空間となり，なかでも疲れた人々にとっては癒しの空間となることが少なくない。そのため，森林散策カウンセリングの大きな特徴として，まずクライエントが日常生活から解放され，気持をリフレッシュし，リラックスできることが重要である。このプロセスがあって，始めて，森林散策カウンセリングにおけるカウンセラーとの信頼関係は構築される。　（たけうち　ひろえ）

李　同帰　身心互動療法　蒙医心身インタラクティブ療法の概要

蒙医心身インタラクティブ療法は、内モンゴル国際蒙医病院の納貢畢力格博士によって創始され、中国内モンゴル自治区で広く使われている新型の心理治療法である。この療法は伝統的な蒙医心身医学理論に現代の心理学理論と技術を結び付け、音響、光、電気、映像などの手段を用いてインタラクティブ効果を作り出す。健康教育と心理催眠技術を有機的に結合し、人の心理的エネルギーと生理的潜在エネルギーを刺激して病気の治療を試みるものである。療法は強化治療と維持治療の二種類に分けられる。強化治療は6種類の治療で構成され、維持治療は4つの自助形式の治療からなる。異なった形式の治療はそれぞれ違った効果が有るとされる。この方法は乾癬などの病気に対して優れた効果があるが、その作用メカニズムについては、さらに研究する必要がある。

（り　とんぐ）

長澤里絵　指定討論

アジアからの発信というテーマでのワークショップであるが，アジアからどこへ向けた発信なのか。欧米発祥の理論や心理療法等は，アジア少なくとも日本では幅広く取り入れられているが，逆は数多くはない。そこで，今回お話しいただくカウンセリング，心理療法の対象はアジアに限定されているのか否か，文化や宗教の違いにより異なるのかといった視点からご質問させていただく。　（ながさわ　りえ）

高橋良博　指定討論

日本発祥の心理療法として、森田療法、内観法、臨床動作法などがある。また伝統的な宗教的行の中に含まれるボディー・ワークを治病・養生法として活用してきた長い歴史も存在する。現在ストレス・マネジメントや心身症の治療など、心療内科をはじめとする臨床の現場で呼吸法や各種の瞑想法などが活用されている。そうした状況を踏まえて、ここでは各話題提供者の報告内容から、その治療的側面と臨床応用の可能性について、お話をうかがってゆきたい。今回は禅とマインドフルネス、森林散策カウンセリング、内蒙古の心身互動療法が話題として提供されるが、いずれもボディー・ワークを含む点での共通性があると思われる。

（たかはし　よしひろ）

喪失の悲しみを越えて

― マイクロカウンセリングからのアプローチ ―

企画者：福原眞知子（常磐大学）、荻野七重（白梅学園大学）
司会者：藤田主一（日本体育大学）
話題提供者：福原眞知子（常磐大学）、山本孝子（大阪人間科学大学）、玉瀬耕治（奈良教育大学）
指定討論者：横田正夫（日本大学）
キーワード：マイクロカウンセリング、喪失の悲しみ、応用心理学

【企画趣旨】

平成から令和の時代へ移行しても、世界各地で起こる紛争以外に、自然災害や事件事故、身近な人々との別離や職場からの離脱など、私たちはそれに伴って生じるさまざまな喪失の感情に取り囲まれている。数限りない喪失による悲しみの体験を受けた人々は、決して悲嘆に立ち止まるのではなく、自ら立ち向かい、乗り越えていこうとするものである。

このワークショップでは、「喪失の悲しみを越えて」というテーマについて、マイクロウンセリングの視点から、どのように関わることができるのかを、登壇者とともに考える。

【話題提供】

◆Science into Real Life Situation

福原眞知子（常磐大学）

近年、人間のWellnessにかける心理学諸領域が、隣接領域とコラボし、そのミッションを果たしながら発展を目指すという世界的傾向が顕著になってきたように思う。これはほかならぬ、‘Science into Real Life Situation’への挑戦である。

国際応用心理学会(IAAP)は Psychotechnics Applied to Vocational Guidance を掲げて、応用心理学のユニークなシステムをスタートさせ、今に続くミッションとして「科学的心理学の応用とその実践を励ましている。なんのため、どのように、が課題である。

歴史は新しい世紀を迎えたが、対象となる人間はさまざま（multicultural being）である。共通の特性としては自己の肯定感とともにウエルビーイングを求める。そのための多様な行動には情動、感情、思考など生理的レベルから行動レベルまで、さまざまな事象が内在―顕在化される。日常的に起こる「喪失」にまつわる事象もそのひとつである。これは人々が直面する事実であり、回避することはできない。当然その目的（ウエルビーイング）に支障をきたすであろう。けれど人人はその問題を解決しなければならない。

マイクロカウンセリングの創始者であるアイビィ,A.は、ポジテイブ心理学の立場からその問題解決を提案している。それは援助関係におけるマイクロカウンセリング技法の適用である。最重要課題は‘listening’でありこれはempathyに導くものであるとする。ここにはいくつかの鍵概念がある。すなわちこれは緩やかではあるが、理論的に納得するシステムにおいて運ばれなければならないということである。これらについて出来れば少々の事例を提示し説明したい。

◆マイクロカウンセリング－「喪の作業」へのよりそい

山本孝子（大阪人間科学大学）

2018年は、広島や大阪など、私にとって身近な地域での自然災害が多い年であった。このような災害は突然やってくる。そして、それまで平穏であった日常をあっという間に壊し、深い爪痕を残して去っていく。そんなとき、国や自治体が動き出す前にいち早く被災者のために自分のできることは何かを考え迷わず行動にうつす一般の人々の存在を、今回も新聞やテレビ報道で多く見聞きした。そのような方々の活動を紹介し生きる意味の観点から考察するとともに、われわれ心理の専門家がマイクロカウンセリングの傾聴技法を携えて行うことのできる活動とはいったい何なのか、真の出番はいつなのか、について検討したい。

被災された方々は、家の復旧作業や行政の手続き、故人の葬儀などに追われて時間が過ぎていく。それらが一段落し日常生活が戻ってくると、喪失感がより強く感じられる。すべての感情を忘れてしまったかのように無感情になる方、絶望感や家族を助けられなかった自責の念、やり場のない怒りの感情にさいなまれ、突然涙が止まらなくなったり、うつや引きこもりの状態に陥ってしまわれる方もいらっしゃる。しかし、このように心が揺れ動くのは、むしろ自然な反応である。

専門家としてのよりそいは、このようにある程度時間が経過し、あらためて寂しさや悲しみが募ってくる、そのような時期にこそ必要なのではないだろうか。「喪の作業」は重要である。悲しみの気持ちを押し殺したまま生活を続けると後に心の病気を発症する場合もあり、信頼のおける誰かに悲嘆を吐き出すことは心の健康にとって欠かせない。「喪の作業」によりそう際に心理の専門家としてマイクロカウンセリングの基本的傾聴技法を用いてどのように人々の心を聴き、積極技法を用いてどのようにそのまなざしに良い影響を与えwell-beingへと導いていくことができるのか、自身の経験をもとに考えを述べたい。

◆マイクロカウンセリングにおける発達論的視点から

玉瀬耕治（奈良教育大学）

地震、台風、豪雨などによって被災された方、身近な人や動物の死に直面された方、強盗、強姦などの被害に会われた方など、予期せぬ出来事による喪失のかなしみの最中にある方々に有効な援助のあり方とはどのようなものであろうか。さまざまなアプローチが考えられているが、マイクロカウンセリングの立場では、このような問題をどのように扱うべきであろうか。アレン・アイビイはマイクロ技法を活用してカウンセリング・心理療法の実践を行う際にはピアジェの認知発達理論を援用して彼が提唱した発達カウンセリング・心理療法（DCT）理論が有用であると考えている。

この理論では、クライエントの状態を認知発達論的に捉えた4つの認知発達的スタイルを特定し、そのスタイルに即してより適切なマイクロ技法を適用することが有効であると考えている。これは喪失のかなしみに特化したものではないが、このような対象者がこの理論ではどこに位置づけられるかを考えることが必要である。DCTでは、感覚運動的スタイル、具体操作的スタイル、形式操作的スタイル、弁証体系的スタイルの4つのスタイルが区別されるが、喪失のかなしみの最中にある人々は、当面は感覚運動的スタイルが優位な状態に置かれていると推測される。このような人たちへの援助で優先されるべき技法は、もっともマイクロ技法階層表の基底に位置づけられているものと考えられる。言葉での対応に入る以前の非言語的なかかわり技法の重要性が第一に指摘できよう。言葉巧みにかかわるよりも全身全霊で献身的に接する態度こそ受け入れられると言えるのであろう。

（ふくはらまちこ・おぎのななえ・ふじたしゅいち・やまもとたかこ・たませこうじ・よこたまさお）

地域性（県民性）を明らかにする

－2か所以上の地域で暮らした場合の地域差について－

企画・司会：浮谷秀一（東京富士大学）
話題提供者：桐生正幸（東洋大学）
話題提供者：川本利恵子（湘南医療大学）
指定討論者：齊藤勇（立正大学）
指定討論者：玉井寛（朝日国際医療福祉専門学校）

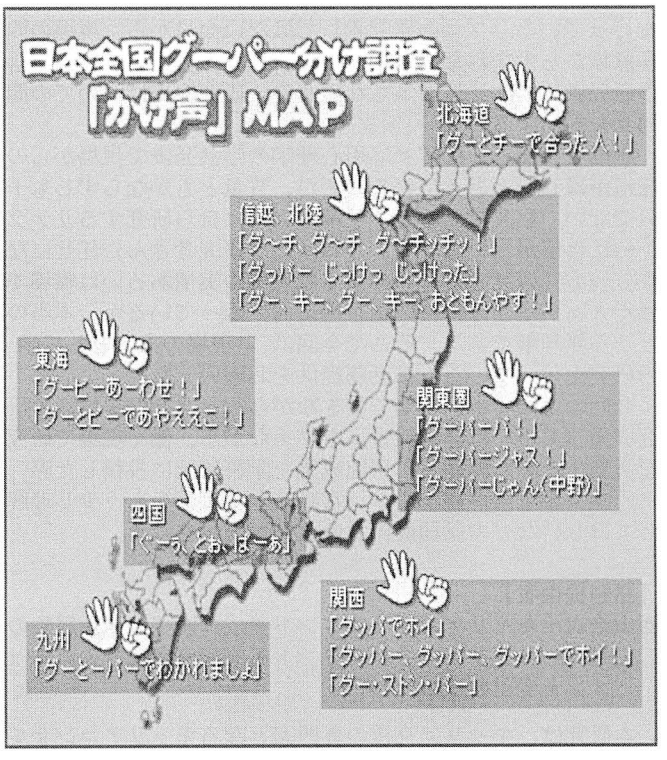
前回は、『ことばの県民性（方言）が現在も存在するのか　―生まれてから続けて特定地域で暮らして人の場合―』というテーマで、愛知県代表として二宮克美氏（愛知学院大学）、福島県代表として鈴木智子氏（福島学院大学）、茨城県代表として菊池やす子氏（教育相談員）に、テーマを「ことば」に絞って発表してもらい、議論した。

内容としては、今までどのように地元のことば（方言）に関わってきたか、現在地元特有のことば（方言）が存在するのか、そしてどのくらいの頻度で使っているか、どのような方言があるかなどを発表していただいた。そこからわかったことは、地域性はあるが、だんだん薄れてきているということであった。これは、われわれを取り巻く多彩なメディアによるものと考えられると指摘された。

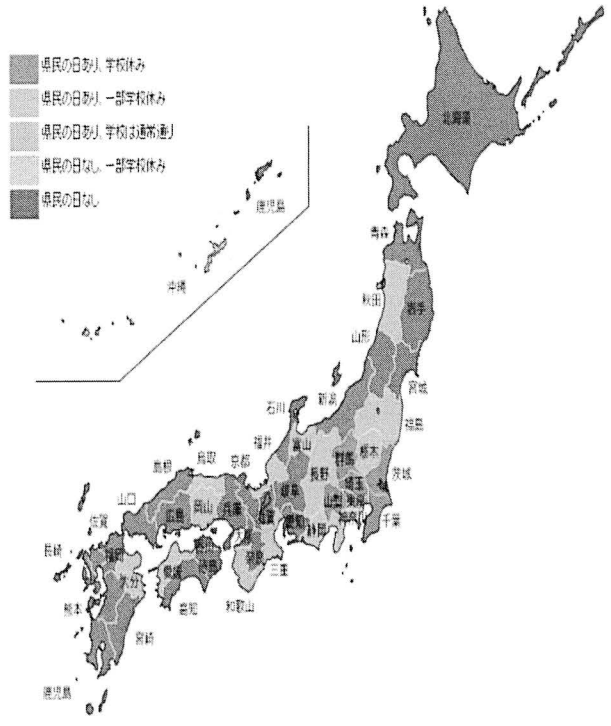
【企画の趣旨】前回のワークショップにおいて一部明らかになった同一地域に暮らし続けていても他地域の影響をどうしても受けてしまうということを踏まえ、逆に2か所以上の地域で暮らしたことがある方に、暮らしたことのある地域間の違いについて話してもらうことで地域性（県民性）を明らかにできないかと考えたのである。そのために、テーマをことば（方言）にこだわらないで話を進めていこうと考えている。

登壇者を話題提供者と指定討論者と分けて指定しているが、話題提供者の桐生正幸氏は、山形県、兵庫県、東京都での暮らしを、川本利恵子氏は、福岡県、愛知県、東京都での暮らしを、齊藤勇氏は、山梨県、東京都での暮らしを、玉井寛氏は、千葉県、福島県での暮らしをそれぞれ経験している。登壇者皆さんから地域性について話していただけると考えている。

地域性のみられる例を次に挙げておく。







（うきや しゅういち・きりう まさゆき・かわもと りえこ・さいとう いさむ・たまい ひろし）

心理学における実践

現場研究の発信とその課題

企画・司会：　田中堅一郎[1]
話題提供者：　西山浩次[1]　村田教枝[2]　小林敦子[3]　二瓶　哲[2]
([1]日本大学大学院総合社会情報研究科　[2](株)タップクリエート　[3]ユナイテッド・ヘルスコミュニケーション株式会社)
キーワード：職場環境，キャリア，研修

【企画の趣旨】

自分の業務をもちながら、職場環境への実践的な研究課題を行っている「プロの研究者」ではない会員から、現場の問題意識から生まれた実践的研究を報告する。いわゆる「プロの研究者」では見逃しがちな論点や、研究実施についての問題点を提示する。

企画者（田中）は常々応用心理学の学会発表で現場からの発信がほしいと思っているのだが、質量ともかならずしも十分でない。私見であるが、現場の人々は自ら研究するリテラシーに自信がないようで、いわゆる「研究者さん」任せになり、一方「研究者さん」の多くは現場の実情あるいは職場で働く人々が本当は何に問題を抱え何に困っているか、本当のところ無理解である。そこで今回は、「現場の人」として学術研究を行っている方に話題提供をお願いした。

今回の企画では、現場で働きながら行った話題提供者の研究成果（あるいは経過報告）を交えながら、働く現場で研究を実施する際の問題点、研究成果を学術雑誌に投稿した際に、論文審査者が現場では「常識的」な実情をもう少し理解してほしいなどの話題提供者の意見が提示される。

【話題提供者】

西山浩次：キャリアコンサルタント養成講座での学習経験の効果　―キャリアコンサルタント養成講座参加者のコミットメント変化のPAC分析―

本研究は、キャリア支援の専門家となるキャリアコンサルタントの養成プログラムの受講経験から、①学習し得られたテーマ、その中でも今後の専門職としてのコミットメントを高めると思われる考えと、②受講経験を通じて改めて自分にとって不足していた・不十分だったテーマを探索し、③受講経験の中で何が学習の促進要因になっているかを検討することを目的として実施された。調査には個人の意識・態度などのイメージを捉える手法であるPAC分析(Personal Attitude Construct Analysis)を活用しPAC分析における追加項目の有効性を検討した。具体的には調査協力者が連想項目を書き出したのちに「不足していた・不十分だった考え」「今後のコアとなる考え」という2つの追加項目を加えた分析を実施し、これらの追加項目を含まないデンドログラムと追加項目を加えたデンドログラムの比較を通じたインタビューを実施し、2名の現職及び非現職の調査協力者のプログラム受講を通じてのキャリアや専門家としての意識の変化・学習したテーマなどを明らかにした。

村田教枝：看護・福祉分野における一視点　―心理学研究の実践―

看護・福祉の現場において、患者（利用者）・家族、職場の同僚や多職種など幅広い多様な対人関係を円滑に構築していくことは業務を遂行する上で必要不可欠である。しかし、多様な対人関係の構築や職場の機能を円滑に遂行するための実践は、個人の能力に委ねられていることが多く、それらを効果的に実践していくことは個人差や困難さが多く見受けられる。

一例として、私は看護師として臨床現場においてリーダーシップの役割に困難さ痛感し、心理学の視点で調査研究を行った。心理学研究の蓄積を知り考え方や価値観が大きく変化することができ、実践に活かすことができた。それらを職場内や同業職種者に活かせるよう伝達をするが、研究の理解に困難さがあり、現場で心理学研究を活用していくためには創意工夫が重要であると学んだ。また、現場で直面している問題は他施設においても同様の困難さを抱えているが、解消されることは少なく、研究と現場の細やかな橋渡し役が重要な役割を担っていると感じる。

小林敦子：職場のジェンダー・ハラスメント低減への試み

就業女性が昇進しにくいという、いわゆる「ガラスの天井」の問題の解決には、職場に蔓延するジェンダー・ハラスメントへの対策が不可欠だ。ジェンダー・ハラスメントは「性に基づく役割を他者に期待する言動」であり、就業女性を基幹的な役割から遠ざけ、周縁的な役割に押しとどめようとする。本報告では、女性の活躍を阻むジェンダー・ハラスメント抑止を目的として、試行的に実施した（あるいは進行中の）研修とその効果測定の結果を紹介する。

現在進行中の管理職研修プログラムは、ステレオタイプやジェンダー・ハラスメントを行う頻度との関連が予想される、部下に対する認知的複雑性にフォーカスしている。研修により、管理職の部下への認知的複雑性を高めることができれば、ステレオタイプが低減され、ジェンダー・ハラスメントの抑止が期待できるだろう。また、その研修効果の測定のために、研修前後および事後で質問紙調査（認知的複雑性、ステレオタイプ（紙筆版IAT）、ジェンダー・ハラスメント）を実施する。これらの試みは、より効果的なハラスメント防止研修構築の足掛かりとなるだろう。

二瓶　哲：学術研究と実業現場をより近づけるために　～研修インストラクターの立場としての提言～

現在、数多くの研修インストラクターが企業等の事業組織における人材育成の現場で活動している。研修の構成要素は、コンテンツ（内容）とデリバリー（内容の提供）の2つが挙げられ、研修インストラクターは、これら2要素がきちんと噛み合うような運営を行っている。また、コンテンツについては、その全てまたは一部を開発することもある。

本テーマの主旨は、研究者と研修インストラクターが関わる場をより多く創出することにより、互いのメリットが享受され合うのではないか、ということである。具体的には、コンテンツの観点において、研修インストラクターが研究者によるサポートで、学術論文へのアクセスおよびその理解が促進されれば、研修のさらなる充実化が図られるのではないか、デリバリーの観点では、研修において参加者が現場の状況を発信・共有する場が多くあることから、これらの情報が研究者にも共有されれば、研究者が新たな学術研究テーマを探索する助けとなるのではないか、ひいては、両者の連携が学術、実業の発展に貢献するのではないかと考える。

（たなか けんいちろう・にしや まこうじ・むらた のりえ・こばやし あつこ・にへい さとる）

インターネット上の言説の分析

偏見・差別研究を題材に

○高　史明（非会員）
（神奈川大学人間科学部）

キーワード：インターネット、ソーシャル・メディア、計量テキスト分析

【目的】

日本においては、インターネットは既に広く普及し、日常生活においてなくてはならないものになっている。そしてネットユーザーたちは、ネットを使用している間に、観測可能な足跡を様々な形で残す。

本研修の講師は、Twitterその他のオンラインメディアのデータを活用した研究の経験を有している。その経験をもとに、①利用可能なデータ資源の紹介、②分析事例の紹介、③倫理的な問題などについてお話ししたい。題材としては、これまで行ってきた在日コリアンや被差別部落出身者への偏見・差別研究を主に取り上げるが、そうした問題に関心のある方々だけでなく、様々な関心領域に応用可能なノウハウをお話しする。

【研修内容】

1　利用可能なデータ資源

日常的なコミュニケーションと異なり、ネットを介したコミュニケーションでは多くの情報がデータとして自動的に記録される。近年では、こうして記録された膨大なデータ＝ビッグデータを用いた研究やマーケティングも盛んになされるようになっている。とはいっても、ユーザーのプライバシーや事業者の営業上の利益に関わるような情報は、守秘義務を伴う共同研究契約を結んだ場合などを除き利用することはできず、利用へのハードルは高い。

しかし中には、特別な制約なしに一般の研究者が利用可能なデータも存在している。例えば、一部のSNS上の投稿やフォロー／フォロワー情報、掲示板やブログでの投稿、ある語句がGoogleで検索された回数やその語とともに検索された語の推移などである。

こうした、一般の研究者でも利用しやすいデータ資源とその利用しかたを紹介する。

2　分析事例

上記のデータ資源を用いて行った分析事例を紹介する。

まず、Twitter上の投稿データを用いて在日コリアンに関する言説の分析を行った研究を紹介する。ここでは、投稿の持つ自然言語データに対する計量テキスト分析、ユーザーごとの投稿回数の（偏った）分布などの分析を紹介する。

また、オンライン調査会社に委託して行った自己報告式の調査のデータとTwitterのデータを組み合わせて、炎上現象に参加したユーザーの特性やネットワーク構造を分析した共同研究（立命館大学小川祐樹氏、東京大学鳥海不二夫氏らとの共同研究）についても紹介する。

新たな研究を始める際の手がかりのつかみ方の解説は、被差別部落問題についての簡単な分析事例を用いて行う。特にGoogle TrendsやGoogle検索を用いて、社会における特定の問題への関心の強さがどう推移してきたか、またその変化のきっかけは何であったのかなどを知るためのノウハウをお話しする。

さらに、こちらは一般の研究者が利用できるデータによるものではないが、株式会社サイバーエージェントが運営するインターネットテレビ、AbemaTVのコメントデータを用いて、差別的投稿をもたらす番組の要因とユーザーの要因を分離した研究事例（サイバーエージェント社高野雅典氏らとの共同研究）も紹介する。

3　倫理的問題

オンラインの情報は様々なメリットを研究者にもたらすが、それゆえに心理学者が用いる通常の研究手法（質問紙調査や実験室実験）では生じない種類の倫理的問題が生じる場合がある。倫理的配慮は、一般市民の利益を不当に害するのを避け、心理学者の専門家としての社会的地位を維持するために必要不可欠である。

そもそもどのような場合にオンラインのデータの利用が許容されるのかや、利用自体は可能であったとしても利用のしかたによって問題が生じるのはどのような場合なのかなどについて、具体的な事例（失敗事例も含む）も挙げつつ議論する。

（たか　ふみあき）

ＰＡＣ分析の理論と実施技法

内藤　哲雄
（明治学院大学　国際平和研究所）
キーワード：ＰＡＣ分析、関連する理論と技法の差異、利活用のポイント

【はじめに】

技法開発の動機は、実験社会心理学を主専攻とした後に，6年6ヵ月にわたって臨床心理学担当の専任の職に就き，再び元来の専門である社会心理学の講座を担当するようになって、「個」の独自性や豊穣を看過できないと感じたことによる。PAC分析のPACは，Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略称であり，“パック”と発音される。当該テーマに関する自由連想（アクセス），連想項目間の類似度評定，類似度距離行列によるクラスター分析，被検者によるクラスターのイメージや解釈の報告，検査者による総合的解釈を通じて，個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。当該テーマに関する検査項目を対象者自身が連想し，ただ一人の対象者が暗黙のうちにもつ潜在構造を，その人の回答した類似度距離行列を用いてクラスターを算出する。ついで，被検者に寄り添いながら，被検者のクラスターや項目のイメージ報告を検査者が間主観的に了解していくところに特異性がある。繰り返しデータがなく，平均値も分散もないのに，記述統計学を援用して，当該個人独自の態度やイメージの構造を分析する。典型者，少数の該当者，個々人の個人分析に適している。

PAC分析では，独自の体験を含めて当該現象に関連すると当人が感じるすべての変数にアクセスすることから，主体的，独自的，創造的，歴史的，社会的，超越者的な，当該個人特有の全体構造の分析となる。Allportが指摘しているように，個人のパーソナリティには，全ての人がもつ「共通特性」と個人独自の人特性」の二種の特性が存在する。パーソナリティ検査には行動予測力がないといわれる。これは，個人特性を無視して，共通するパーソナリティ変数（だけ）では個人の行動予測力が高くないことを示すものである。態度についても同様のことがいえる。個人分析の結果は，Lewinの場理論，Jungのコンプレックス構造，Berneの交流分析(TA)での脚本分析，Gendlinのフォーカシング，認知行動療法など，個に関する多様な実践，研究に利活用できる。被検者が長期記憶や暗黙裡の潜在構造にアクセスしやすくなるような，検査者の読み上げや応答のスピードや間の取り方をし，同行しながら探索を繰り返し要請する技術が，通常ではアクセス困難な内界深くの潜在構造を引き出す。事例を操作的，客観的に分析でき，当該テーマについてアクセスされた被検者の内界を，検査者が同行しながら了解していく過程は，第三者が了解していく過程ともなりえる。コンサルテーションのツールとして有効で，学位論文の主査や副査が事例を了解していく手段ともなる。ただし、「操作的・実験的・（記述）統計学的手法と，間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両方が包含されており、両技法を習熟しているものは少ない。ワークショップでは、他の理論や技法との違い、潜在的イメージの持つ意味、研究テーマの発見法、被検者の内界探索の方法、価値創造的な解釈の仕方を実習形式も含めて実践的に学ぶ場としたい。

＜関連するアプローチ、理論と技法の違い＞

多標本調査：平均値と分散による共通的普遍性の解明

PAC分析：被検者にとって関連すると感じられる変数の全て（共通特性と個人特性）

＜単一事例分析と諸技法の比較＞

SD法、P技法、Q技法、レパトリーテスト、1事例実験

＊尺度観、意味空間、世界観の違い

＜研究テーマの発見→連想刺激の作成＞

視点の転換

・独自的・独創的研究テーマを見つける
・視点転換の努力を続ける
・構成概念の創造
・製品開発、商品開発（大量の類似品が普及する前で開発者の頭の中にしか存在しない）

＜イメージの聴取・探索＞

・身体感覚を感じる
・感覚変化のスピードを感じる
・共感し、同行する
・話しかけるスピードのよるコントロール
・単語の間、文章の間をコントロール
・自分のイメージを誘導する
・相手のイメージを誘導する
・長期記憶にアクセスさせ、探索させる
・イメージが湧くまで待つ
・内界奥深くを探索させる
・「もうない」からが始まり

＜データの解釈＞

・デンドルグラムの連想項目、聴取したイメージを丹念にたどる
・全体がゲシュタルトとしてまとまるのを待つ
・結果を先行研究と関連づけて解釈する
・他の人がまだ考えていない価値創造的な解釈を、最後の1分1秒まで求める
・シミュレーションによる一般化の確認（他の事例を抱負に思い浮かべ、何が起きるかをイメージしてみる
・自我防衛的にならないようにして、自己批判をしてみる
・別の解釈可能性を忘れない
・連想項目は個人独自のニュアンスやエピソード記憶とも連結しており、それらがクラスターを構成する時、クラスターの連想価は爆発的に高まっていく。(連想刺激→連想反応項目→クラスターの束→クラスター間比較を通じて、内界の奥深くまで探索が続く）

＜開発の継続＞

・さらにさらに問題、テーマを掘り下げていく。
・自分自身の体験の蓄積から暗黙のスキーマが形成されていることが多い。帰納法と演繹法を循環させ、自信の無意識世界に光り、視点をあて何が連想されてくるかを探り続ける。

暗黙知、「クライアントは自らが知っている以上のものを捉えている」のである。

（ないとう　てつお）

研究発表（口頭発表①）

8 月 24 日（土）

10:00～11:20　2202 教室

学生はプロジェクト型科目におけるプロセスマネージを意識するか(2)

伊東昌子
（常磐大学人間科学部）

キーワード：プロジェクトメソッド，プロセス設計，経験学習

【目的】近年，プロジェクトメソッド型学習は21世紀スキルの中のコミュニケーションと協同，進取と自己方向づけ，社会／文化横断的，生産性／説明責任，リーダーシップと責任（松尾, 2015）等のスキルを養う実践的学習科目として注目されている。このことはプロジェクトプロセスにおける経験学習の質が重視されていることを示す。複数月にわたるプロジェクトを集団で協働して進行させるとき，心理学的には計画錯誤，社会的手抜き，プロセスロス等の計画通りの進捗を妨げる現象が生じがちである。このため上記スキルの獲得を目指すならば，プロジェクトプロセスの設計とマネジメントが重要である。事実，失敗事例として，学習者は積極的に参加するが，生産的な協力，適切な情報共有，分散した作業の統合を自律的にはできないとの報告がある（Hmelo, Guzdial, & Tums, 1998）。また，従来のプロジェクトメソッド型学習の成果は，学習内容に関する能力の向上に焦点があり，プロセスマネージに関わる学習はあまり注目されてこなかった．この理由の一つとして，プロジェクトメソッド型の学習経験が，学生にプロセスマネージの意識化や関連する学びを自動的に生じさせるとの暗黙の想定があると考えられる。そこで本研究では，プロジェクトメソッド型演習科目を履修した学生が，プロセスマネージを学びの対象として意識し工夫したかに関して，プロセスマネージへの指導法が異なる３クラスの学生に科目終了後に質問紙調査を行った。

【方法】

・対象科目と人数：学部１年生の基礎ゼミナール科目。英語水準テスト結果に基づいて分けられたクラス１：32名，２：30名，３：32名であった。

・演習内容とスケジュール概要：15回の中で５回目までは３クラス合同で学科の主要領域に関する講義を受け，学生は自分が興味を持った領域に関するレポートを提出した。６回目に学生は各クラスに分かれ，さらに興味領域により10名前後のグループになり，次週からの活動内容と日程概要の説明を受けた。７回から14回が自主的な文献研究活動であり，14回目は合同発表会であった。13回目にクラス代表を決める口頭発表会があるため，７回から13回の期間でグループの研究テーマと内容を議論して決め，文献調査や内容整理，口頭発表用スライド作成，発表練習等の活動を適切に進めながら協働して責任を果たし，予想外の変化にも対応して口頭発表を成功させねばならない。学生には７回８回９回が文献調査と整理，10回11回がスライド作成，12回がクラス内発表練習，13回がクラス内発表と代表選出，14回が合同発表日といった概略的日程表は渡されていた．

・教員のプロセスマネージ指導法：筆者はクラス２の担当であり，簡易なプロジェクトマネジメント手法を導入した。想定される作業タスクを縦列に期間内日程を横列に配して各作業タスクの開始と遂行日数を両方向矢印で示すガントチャートを作成して共有した。さらにグループ内で毎週の作業開始前に進捗と作業確認ならびに授業終了前に次週までの課題確認を行わせた。作業日程は前倒しで進めるように指導した。クラス１の教員は，学生の自主的な活動にまかせ，10回目にスライド作成に取りかかるよう方向づけを行うのみであった。クラス３の教員は，毎週当日に実施すべき作業タスクを教員が指示し，探索方法の指示も行った．

・学生へのプロセスマネージ意識調査：14回目の合同発表会終了後に質問紙調査を行った。質問の教示と質問項目は以下の通りである。「授業では７回から13回までの限られた期間内でチームのテーマと内容を決め，文献調査，発表資料作成，発表練習と改善を適切に進める必要がありました。限られた期間内での活動の進め方や授業90分の使い方に関し，1）学んだ事，2）工夫した事を書いて下さい。」

【結果】

学生の報告をM-GTAを用いて分析し．各分類に該当する報告数を学生人数で割った平均報告数を表１に示した。本稿では『工夫した事』に関する結果である。1.0に近いほど全ての学生が分類内容の意識的工夫を行ったことを示す。

表１　工夫した事に関する平均報告数（個数／学生数）

分類	事例	クラス		
		1	2	3
作業計画の進捗調整	# 授業時間内では完成できなかったので、授業時間外に積極的に集まり計画の遅れを取り戻した # スライドや資料作成のスケジュールよりも早めに進めるなどの時間に余裕が持てるような時間管理を工夫した	0.19	0.36	0.18
チーム構築	# 役割を決めて分担して資料を作成した # 個人の長所を生かして発表者やスライドレジュメ担当など分担した # しっかりとメンバーの意見を聞いて取り入れる # 情報を共有するために連絡をこまめにとった # SNSの機能を利用してデータ共有や連絡をし合った	0.35	0.6	0.36
主体的行動	# 自分から提案することが大切 # 家でも個人的に調べた	0.12	0.04	0.09
口頭発表関連	# スライドは図を入れて分かりやすくする # スライドに情報を入れすぎないようにする # 話す速さをゆっくりと大きな声ではっきりと	0.69	0.24	0.27

プロジェクト期間における活動の進め方や授業90分の使い方に関する工夫に関し，進捗調整やチーク内の調整や連絡を工夫したのは，クラス２で多かった。クラス１はチーム構築を意識的に行っているが，メンバーの工夫対象は主に発表についてであった．クラス３ではチーム構築が報告されたが，プロセスの進捗への工夫はあまり意識されていないことがわかる。クラス１でも同様である。

【考察】

学びの対象（昨年度発表）としても工夫の対象としても，プロジェクトプロセスは意識されず，作業分担と成果が意識化されることが確認された．プロセスでの協働に対する学びの設計をより明示的に行う必要が有ることが示唆される。

【引用文献】

松尾智明（2015). 21世紀スキルとは何か　明石書店
Hmelo, C. E., Guzdial, M., & Tums, J. (1998). Computer support for collaborative learning: Learning to support student engagement. Journal of Interactive Leraning Research, 9, 107-129.

（いとう　まさこ）

管理職を対象にした主要５因子性格特性尺度の構成

片岡大輔
（株式会社日本能率協会マネジメントセンター）
キーワード：５因子モデル，尺度構成，管理職

【目的】

企業における管理職に対しての能力開発は、組織・人事領域で重視する課題として上位に位置づけられている（日本能率協会，2016)。問題解決の手法を援用し、管理職としての役割／職務を遂行している状態をあるべき姿である目標として設定し、そして現状とのギャップを解決すべき問題とするならば、管理職それぞれが自分の現状を正しく把握することが必要となる。把握すべき現状として、能力的側面・パーソナリティ／志向的側面、実際の職務場面における行動などが挙げられる。パーソナリティ／志向的側面について、パーソナリティテスト・多面診断・講師や研修参加者との相互のかかわり／フィードバックから深い「自己覚知」にいたることで、管理職としての役割／職務を遂行するための自律的な行動変容をもたらす研修を継続的に実施している事例がある(外島，2019)。

管理職研修内に、パーソナリティ／志向的側面を把握するために心理検査を用いるときには、回答・採点・解釈が容易であること（講師・参加者がお互いにやり取りすべき研修時間を個人作業で費やさないようにすること）が、研修運営上の要求事項となる。

本研究では、企業の管理職研修の参加者が自分自身の行動特性を把握できるようにするための、主要５因子モデルに基づく性格特性尺度の構成を報告する。

【方法】

尺度素案の作成：

ネトル,D.,竹内和世（訳）(2009)，村上ら（2017)，並木ら（2012）の先行研究を元に、主要５因子の行動特性を自己報告するであろう修飾語句を、１因子に対し15項目、合計75の質問項目を作成した。質問項目に対し、1.まったくあてはまらない、2.あてはまらない、3.どちらともいえない、4.あてはまる、5.たいへんあてはまる　の５件法で回答するものとした。

調査実施：

①調査方法：インターネット調査を行った。

②調査期間：2019年２月

③対象者：回答集団として係長・課長クラス・課長クラス以上､(インターネット調査所以の回答者の業種の偏りが予想されたため）製造業・非製造業をそれぞれ約50%と指定し、20歳代～50歳代の男女とした。

363人の回答を回収し、そのうち妥当でない回答をした者を除去し、330人を分析の対象とした。

【結果と考察】

75項目に対し、因子分析（主因子法エカマックス回転）を行い、５因子を抽出したときにもっとも因子的独立性が高くなるように質問項目の選定を行い１因子について６項目を選定した。**表１**は因子分析の結果をまとめたものである。因子Ⅰは、繊細性（企業内の研修で用いるに当たって「神経質」という名称はネガティブな印象を与えるためここでは繊細性と表示することにした)、因子Ⅱは調和性、因子Ⅲは外向性、因子Ⅳは開放性、因子Ⅴは誠実性と命名した。先行研究における主要５因子と類似した因子を抽出できたと考えた。

表１. 因子分析結果抜粋（主因子法エカマックス回転）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
悩みがち	.82	-.08	-.11	-.10	-.01
深刻に考えがち	.81	-.12	-.10	-.05	.06
心配性	.79	-.10	-.11	-.15	.10
：	.75	-.23	-.16	-.10	-.10
：	.74	-.03	-.11	-.15	.14
：	.68	-.15	-.23	-.06	-.12
寛大	-.11	.78	.21	.07	.07
温和	-.10	.75	.13	-.12	.05
おだやか	-.09	.73	.02	-.14	.06
：	-.13	.72	.26	.19	.04
：	-.05	.69	.11	.18	.13
：	-.22	.52	.37	.20	.11
明るい	-.29	.20	.73	.07	.19
社交的	-.18	.16	.72	.22	.08
陽気	-.21	.19	.70	.16	.19
：	.00	.09	.68	.17	.10
：	-.10	.15	.59	.27	-.02
：	-.12	.34	.59	.16	.17
発想が豊か	-.03	.03	.30	.68	.17
いろいろ試す	-.11	.10	.01	.65	.18
興味の幅が広い	-.04	.00	.15	.63	.08
：	-.05	-.04	.25	.63	.07
：	-.11	.06	.17	.61	.28
：	-.23	.08	.14	.59	.11
根気がある	-.14	.17	.03	.21	.69
粘り強い	-.10	.13	.06	.22	.67
一生懸命	.06	.06	.22	.12	.66
：	-.08	-.01	.22	.19	.66
：	.17	.14	-.02	-.09	.58
：	.26	-.13	.05	.20	.47
因子寄与	4.03	3.42	3.41	3.00	2.74
因子寄与率（%）	13%	11%	11%	10%	9%

表２は、各尺度の基本統計量・内的整合性・尺度間相関を示したものである。最大で.47の相関があったものの、企業の管理職研修の時間内で回答し、フィードバックを行うためのツールとして有用なものが作成できたと考える。

表２. 各尺度の基本統計量・内的整合性・尺度間相関 (n=330)

				尺度間相関係数（r）				
尺度	平均値	標準偏差	α係数	繊細性	調和性	外向性	開放性	誠実性
Ⅰ 繊細性	18.33	4.87	.91	-	-.31	-.37	-.26	-.01
Ⅱ 調和性	19.42	3.69	.87	-.31	-	.47	.20	.19
Ⅲ 外向性	18.06	4.23	.88	-.37	.47	-	.45	.29
Ⅳ 開放性	18.60	3.83	.83	-.26	.20	.45	-	.37
Ⅴ 誠実性	20.15	3.57	.81	-.01	.19	.29	.37	-

【引用文献】

・村上宣寛・村上千恵子 2017 主要５因子性格検査ハンドブック　筑摩書房
・並川 努・谷 伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口裕之　2012　Big Five尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討　心理学研究，83,91-99.
・ネトル,D.,竹内和世（訳）2009 パーソナリティを科学する　白揚社
・日本能率協会　2016 日本企業の経営課題2016 日本能率協会
・外島 裕 2019 行動開発における自己覚知の深化の過程に関する研究　商学集志 88,179-220.　（かたおか だいすけ）

創造性とユーモア

森田　亜矢子
関西大学人間健康学部

キーワード：ユーモア指向性、ユーモア・レディネス、洞察、曖昧さ耐性、自己受容

【目的】ユーモアセンスと精神的健康との関わりや、ストレス対処におけるユーモアの有効性が指摘されるようになって久しい（森田、2018）。ユーモアが心理的資源を拡張し創造性を高める可能性も示唆されている（Ziv, 1984; Martin, 2007; Luria et al., 2016）が、その機序については未解明の点が多い。本研究では、ユーモア指向性と精神的健康との関わりを媒介する要因として自己受容を取り上げ、曖昧さ耐性を手がかりに、洞察課題を用いて、ユーモア指向性と創造性との関わりを検討する目的で調査を実施した。

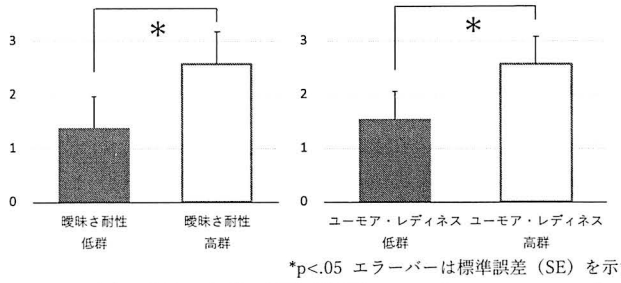
【方法】対象と手続き　近畿圏の大学に所属する学生に質問紙調査を実施し 169 名から回答を得た。このうち、提示した洞察課題に制限時間終了まで取り組んだ 137 名（平均年齢 19.36 歳、男性 40 名、女性 92 名、性別無回答 5 名）を本研究の分析対象とした。

質問紙の構成と洞察課題　質問紙は自己回答式であり、複数の心理尺度の質問項目から成る前半部と、洞察課題からなる後半部で構成される。前半部には、ユーモア指向性、自己肯定、曖昧さ耐性、ストレス、社会的支援、精神症状を測定する心理尺度の項目を使用した。後半部の洞察課題には、図形問題 4 問と、文章問題 2 問を使用した。

【結果】ユーモア指向性尺度の作成　予備調査で作成したユーモア指向性尺度（HOS; The Humor Oriented Scale）に新規項目を追加して探索的因子分析と確認的因子分析を行い、9 項目を抽出した。下位尺度は「生産性」3 項目（α=.871)、「コーピング」3 項目（α=.653)、「レディネス」2 項目（α=.850）で構成され、これに加えて「超越性」1 項目が抽出された。

HOS の妥当性・ユーモア指向性と精神的健康　HOS と各尺度との相関係数を Table1 に示す。さらに、ユーモア指向性から自己受容と曖昧さ耐性を媒介して精神的健康に至るモデルを検討した。分析の結果、作成したモデルの適合度指標は、χ^2=32.128(n.s.), CGI=.988, AGFI=.910, RMSEA=.037 であった。有意なパスのみを描いたモデルを Figure1 に示す。

ユーモアと洞察課題解決　曖昧さ耐性と HOS のユーモア・レディネスについて、各尺度得点の平均値±１標準偏差を基準として、それぞれ高得点群と低得点群に分類し、各群の洞察課題得点の比較を行った。洞察課題得点の分布の正規性を確認できなかったため（p<.01, Kolmogrov-Smirnov の正規性の検定)、ノンパラメトリック検定を行ったところ、曖昧さ耐性とレディネスの各群に有意差が認められた（p<.05, Mann-Whitney の U 検定)。曖昧さ耐性高群は低群よりも洞察課題得点が有意に高く、ユーモア・レディネスの高群は低群よりも洞察課題得点が有意に高かった。各群の洞察課題得点を比較したグラフを Figure2 に示す。



*p<.05 エラーバーは標準誤差（SE）を示す

Figure2 曖昧さ耐性の高群と低群（左図)、および、ユーモア・レディネスの高群と低群（右図）の洞察課題得点

【結論】ユーモア指向性を構成する各要素が異なるプロセスを介して精神的健康に影響を与えていること、また、ユーモア・レディネスが創造性と関連していることが示唆された。

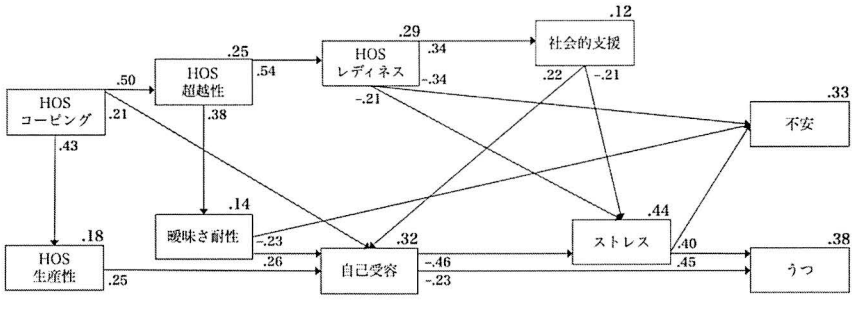


Figure1 構造方程式モデリング

	自己肯定		ストレス		精神症状		曖昧さ耐性	社会的支援	洞察問題解決	内的統制
	自己評価	自己受容	過去	最近	不安	うつ				
親和性	.326***	.353***	-.13	-.242**	-.041	-.224**	.174*	.159	.045	.094
コーピング	.277**	.336***	-.082	-.257**	-.009	-.061	.227**	.103	.095	.181*
準備性	.146	.282**	-.340***	-.406***	-.381***	-.313***	.230**	.341***	.195*	.152
超越性	.239**	.379***	-.12	-.302***	-.148	-.131	.376***	.180*	.125	.201*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table1 ユーモア志向性尺度と各尺度との相関係数

（もりた　あやこ）

日印の大学生にみる現実的楽観主義と well-being

○アニーシャ　ニシャート[1]　　鈎　治　雄[2]
([1]創価大学大学院文学研究科博士後期課程　[2]創価大学教育学部)
キーワード：現実的楽観主義，well-being

【目　的】これまで，楽観主義と well-being との関連について検討した研究には，Scheier & Carver (1985)，Diener et al. (1999)，Seligman(2002)らの研究があるが，本研究では，日印の大学生を対象にして，現実的楽観主義と well-being との関連について検討する。

【方　法】
1．実施尺度：
(1) 現実的楽観主義尺度： アニーシャ・鈎(2019)の「未来志向・希望」，「しなやかさ」及び「意志・勇気」の３因子計 12 項目から成る「現実的楽観主義尺度」を使用し，５件法で回答を求めた。
(2) well-being 尺度： Butler & Kern（2015）が作成した positive emotion，engagement，relationship，meaning，accomplishment の５因子計 15 項目から成る「well-being 尺度」を使用し，0～10 段階で回答を求めた。
2．実施期日：2018 年５月～11 月。
3．調査対象：東京の A 大学の日本人学生 390 名，及び西ベンガル州の B 大学，C 大学の印度人学生計 241 名。

【結　果】現実的楽観主義(3 因子 12 項目)と well-being(5 因子 15 項目)との関連について，日印の現実的楽観主義尺度の総得点が下位 25%を低群，中間の 50%を中群，上位 25%を高群として，現実的楽観主義の低中高群（3）×国別（2）の２要因分散分析を用いて検討を行った。
(1) 現実的楽観主義（全体）と well-being（全体）
現実的楽観主義（全体）と well-being（全体）との間に 0.1％水準で有意差が認められ（F＝81.69），高群では，中・低群に比べて，全般的に Well being 得点が高い傾向にあった。現実的楽観主義と国別との間に交互作用が認められたため（F＝5.45，p＜.01），単純主効果の検定を行った。その結果，日印共に，現実的楽観主義水準が高いほど well-being 得点は有意に高かった（日：F=113.7，p＜.001，印：F＝17.66，p＜.001)。ただ，現実的楽観主義高群では日本が，低群では印度で well-being 得点が有意に高かった（高群：F=6.42，p＜.05，低群：F＝4.35，p＜.05,)。中群では両国間に差はなかった（Table 1)。
(2) 現実的楽観主義（全体）と「positive emotion」
現実的楽観主義（全体）と「Positive emotion」との関連について，主効果は 0.1%水準で有意差が認められた(F＝75.99)。現実的楽観主義と国別の間に交互作用が認められたため（F＝5.90，p＜.01），単純主効果の検定を行ったところ，前述の（1）とほぼ同様の結果が得られた。
(3) 現実的楽観主義（全体）と「engagement」
現実的楽観主義と「engagement」との関連については，主効果が 0.1%水準で有意差が認められた(F＝10.78)。現実的楽観主義水準と国別の間に交互作用が認められたため（F＝5.64，p＜.01），単純主効果の検定を行った。日本では現実的楽観主義水準が上がるほど well-being は有意に高かったが，印度では有意差が認められなかった（日本：F= 26.31，p<.001)。国別では，現実的楽観主義高・中群で日本が有意に高く，低群では両国間に差は認められなかった（高群：F= 42.89，p<.001，中群：F= 22.09, p<.001)。
(4) 現実的楽観主義（全体）と「relationship」
現実的楽観主義と「relationship」との関連については，主効果が 0.1%水準で有意差が認められた(F＝33.28)。現実的楽観主義と国別との間に交互作用が認められなかった。
(5) 現実的楽観主義（全体）と「accomplishment」
現実的楽観主義と「accomplishment」との関連については，主効果が 0.1%水準で有意差が認められた(F＝56.55)。現実的楽観主義と国別との間に交互作用は認められなかった。また，国別では印度が有意に高かった（F=23.57，p<.001)。
(6) 現実的楽観主義（全体）と「meaning」
現実的楽観主義と「meaning」との関連について，主効果が 0.1%水準で有意差が認められた(F＝59.71)。現実的楽観主義と国別との間に交互作用が認められた(F＝5.76，p＜.01）。単純主効果の検定を行ったところ，現実的楽観主義の低群で有意差が認められた。

Table 1.　現実的楽観主義と well-being (N=631)

		高群	中群	低群	現実的楽観主義
日本	M	118.43	101.77	83.23	F＝81.69
	SD	12.33	15.34	18.27	p＜.001
	N	72	162	156	
印度	M	111.56	102.62	90.54	国別
	SD	17.68	19.55	16.14	F＝.068
	N	88	125	28	ns
全体	M	114.65	102.14	84.34	
	SD	15.83	17.27	18.12	交互作用
	N	160	287	184	F＝5.45
					p＜.01

【考　察】本研究では，人間的な強さに裏打ちされた現実的楽観主義と well-being との関連について検討を行ったが，全般的に，現実的楽観主義の水準が上がるほど well-being 水準も高くなる傾向にあることが示唆された。印度では日本に比べて，経済面等に代表される生活水準が不安定であるものの，日本と同様，現実的楽観主義水準が well-being の意識の強さに影響を及ぼしていることが示唆された。
現実的楽観主義と「accomplishment」との関係について検討した結果、全般的に「accomplishment」得点は、印度で高く，他の因子とは異なる傾向を示した。こうした背景には，印度では進学面等に象徴される競争意識が日本より高く，学業を成就することが，将来にわたる安定した生活や幸福を保証するという考えが潜んでいるかもしれない。
本研究により，日印の現実的楽観主義と well-being との関係の一端が明らかにされたが，今後は，対象者を一般成人に広げるなど，さらに詳細な検討が望まれる。

【主要文献】
Butler, J. and Kern, M. (2015). The PERMA Profiler. *University of Pennsylvania.*
(あにーしゃ・にしゃーと　まがり・はるお)

研究発表（口頭発表②）

8 月 25 日（日）

10:00～11:40　2202 教室

自己効力感と2種類の貢献感が援助要請意図に及ぼす影響

○静間健人[1]　土田昭司[2]
([1]関西大学大学院社会安全研究科　[2]関西大学社会安全学部)
キーワード：災害自己効力感，防災貢献感，援助要請意図

【背景・目的】東日本大震災後，改めて自助や共助の重要性が認識されている．このような背景から，地区の居住者等が行う防災活動に関する「地区防災計画制度」が整備されることとなった．したがって，これまで以上に自助・共助を含む地域防災の重要性が増していることが示唆される．

一方，地域防災の担い手は，高齢化や人材不足，要配慮者対応の課題から，負担が増加している（静間・土田・辛島・菅，投稿中）．このことから，地域防災の担い手は，他の被災者と同様に災害に関する問題や不安を抱えたまま支援活動に従事することが予測される．

以上から，本研究の目的は，地域防災の担い手の負担を軽減する要因として，災害に関する援助要請意図に注目する．

橋本（2015）は，自分が人の役に立っていると認識している人は，援助要請意図が高くなることを指摘している．そこで本研究では，防災における貢献感の影響を検討する．ところで，防災は共助の概念が示すように，一人で達成することに限界があり，住民と力を合わせて取り組む領域である．つまり，防災においては集団としての貢献感を想定できる．そこで，“自主防災組織として地域防災に貢献できている”という集団としての貢献感を検討する．また，個人の災害対応力と援助要請意図の関連も検討する．

【方法】

調査時期と対象者　2018年8月末から10月末までの期間で，大阪市中央区の自主防災組織に関与している住民を対象に，質問紙調査を実施した．分析項目に不備がなかった45名の回答（男性36名・女性9名）を分析した．平均年齢は69.82（*SD*=10.36）歳であった．

調査項目　調査票の表紙に，同意に基づく参加の依頼，無記名で実施しプライバシーを保護することを明記した．それ以外の項目については，以下のとおりである．

（1）災害自己効力感尺度　災害対応力として，元吉（2019）の災害自己効力感尺度を用いた．具体的には，「災害のような緊急事態においても，落ち着いて行動できると思う」などの災害対応能力6項目，「災害時には，近所の人を頼りにすることができると思う」などの対人資源活用力5項目について，“1.あてはまらない”から“5.あてはまる”の5段階評価で尋ねた．

（2）個人的貢献感と集団的貢献感　橋本（2015）の表現を参考に，個人的貢献感と集団的貢献感をそれぞれ作成し，「私がいることで（私たちの防災組織があることで），地域での防災知識の普及が進んでいる部分があると思う」など10項目について回答を求めた．

（3）援助要請意図　教示文を提示し（もしもあなたが，以下に示す災害に関する悩みを抱え，一人で解決できていなかったとしたら，「家族や親せき」「友人」「近所の人」「地域内の防災組織のメンバー」に相談すると思いますか．），援助要請意図として，「「避難所で生活することができるのか心配」など8項目について，“1.相談しないと思う”から“5.相談すると思う”の5段階評価で尋ねた．

（4）その他の項目　性別，年齢について尋ねた．さらに，地域の防災組織の役割として重要な領域（貢献感で用いた10領域）を3つ尋ねた．

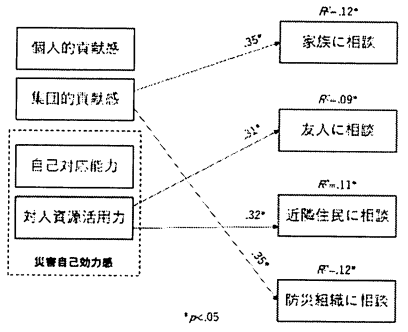


図1貢献感と自己効力感が援助要請意図に与える影響モデル

【結果】地域防災活動は，個人では達成できない活動であるため，それぞれの回答者が地域の防災組織の役割として重要な領域と感じている領域を，個人や集団における地域防災活動の貢献感として扱う（それぞれ3項目抽出）．

「家族や親せき（以下，家族に相談）」「友人（以下，友人に相談）」「近隣の人（以下，近隣住民に相談）」「防災組織のメンバー（以下，防災組織に相談）」それぞれに対する援助要請意図を従属変数，「個人的貢献感」「集団的貢献感」「自己対応能力」「対人資源活用力」を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った（図1）．「家族に相談」を従属変数とする分析では，「集団的貢献感」（β=.35, p<.05）からの影響がみられた．「友人に相談」を従属変数とする分析では，「対人資源活用力」（β=.31, p<.05）からの影響がみられた．「近隣住民に相談」を従属変数とする分析では，「対人資源活用力」（β=.32, p<.05）からの影響がみられた．「防災組織に相談」を従属変数とする分析では，「集団的貢献感」（β=.35, p<.05）からの影響がみられた．

【考察】集団的貢献感が高くなると，家族や防災組織に相談する意図が高くなることが示唆された．また，対人資源活用力が高くなると，友人や近隣住民に相談する意図が高くなることが示唆された．

地域防災のような個人で達成することに限界があり，集団によって達成可能な領域においては，援助要請意図に対する貢献感の影響過程が異なると考えられる．

【引用文献】

橋本剛（2015）貢献感と援助要請の関連に及ぼす互恵性規範の増幅効果　社会心理学研究, vol.31, pp.35-45.
元吉忠寛（2019）災害自己効力感尺度の開発　社会安全学研究, vol.9, pp.103-117.
静間健人・土田昭司・辛島恵美子・菅磨志保（投稿中）要配慮者概念の変遷と要配慮者に対するケイパビリティアプローチの提案　社会安全学研究

【謝辞】
JR西日本あんしん社会財団(18R057)の助成を受け実施した

（しずま たけと・つちだ しょうじ）

職場雰囲気がワーク・ファミリー・バランスを媒介して仕事継続意欲に及ぼす影響

―生涯発達的観点から―

○原　健之[1]
([1]白百合女子大学大学院)

キーワード：ワーク・ファミリー・バランス，職場雰囲気，仕事継続意欲，生涯発達

【目的】本研究は生涯発達的観点から職場雰囲気がワーク・ファミリー・バランス（以下，WFBとする）を媒介して仕事継続意欲に及ぼす影響のモデル検証を目的とした。この検証を通して，仕事と家庭生活の中で関わりのある人と予定の調整と必要な情報共有によって実現できるWFBの役割を捉えるとともに職場雰囲気と仕事継続意欲の果たす役割に関する示唆を得ることを目的とした。

【方法】調査対象者：株式会社クロス・マーケティングのモニターを対象にクローズド型ウェブ調査を行った。787名が抽出され，分析の対象者となったのは20代167名，30代171名，40代162名，50代164名，60代123名であった。調査内容：職場雰囲気は福丸（2000）を参考に5項目を作成した。5件法で評定を求めた（以下，同様の評定）。WFBの測定はCarlson et al.（2009）の日本語版WFB尺度（以下，WFBS-Jとする）の6項目を使用した（本尺度は現在，投稿中であり十分な信頼性と妥当性が確認されているため使用した）。仕事継続意欲は，会社勤務の就業者を想定した質問項目は極めて限られていたため独自に3項目作成した。分析にはSPSS（Version 25）とAmos（Version 25）を使用した。

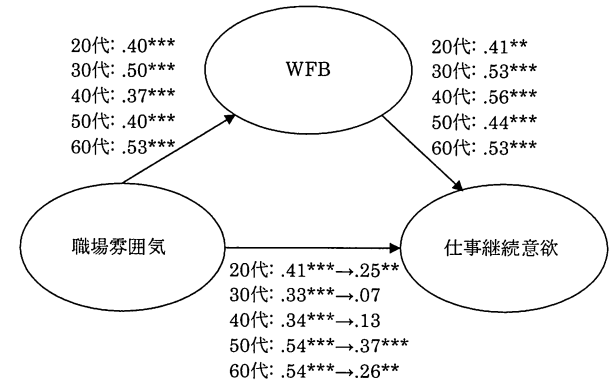
【結果】尺度の基礎検討：最尤法による因子分析を行った結果，職場雰囲気とWFB，仕事継続意欲のすべての測定項目は.40以上の負荷量を示し，いずれも1因子構造が確認された。Cronbachのα係数はそれぞれ.85，.92，.89であり十分な内的整合性が確認された。媒介分析と多母集団同時分析：母数推定は最尤法を用いて20代から60代のそれぞれの年代を対象に，最初に職場雰囲気から仕事継続意欲への影響を検討した結果，全年代で有意な正のパス係数が示された（β=.33―.54, ps<.001; Figure 1）。次に，職場雰囲気がWFBSに及ぼす影響を検討した結果，全年代で有意な正のパス係数が示された（β=.37―.53, ps<.001）。さらに，WFBが仕事継続意欲に及ぼす影響を検討した結果，全年代で有意な正のパス係数が示された（β=.41―.56, p<.001―.01）。媒介分析の手続き通りに行いモデルの指標を確認した結果，満たされる数値が得られた（Table 1の配置不変）。次に，多母集団同時分析を行い飯塚（2018）に基づき自由にパラメータ推定を行う配置不変，因子負荷量に等値制約を課す弱測定不変，因子負荷量と分散に等値制約を課す測定不変（モデルでは共分散を仮定していないため分散のみ等値制約を課した），因子負荷量と誤差変数に等値制約を課す強測定不変，因子負荷量と分散，誤差変数に等値制約を課す全母数等価のモデルを作成した。AICが最小値の測定不変モデルを採択した。検証の結果，職場雰囲気と仕事継続意欲との間に有意な正のパス係数が見られたが，WFBを媒介変数として投入することでパス係数が低下した。WFBの間接効果の有意性の検討結果からいずれの年代においても有意が認められており（Z=.24―.50, ps<.001），WFBの媒介効果が確認された。以上から，職場雰囲気がWFBを媒介して仕事継続意欲を高めるプロセスを説明できるようになった。

【考察】職場雰囲気が良いと感じているとWFBを取れている状態と認知し，それが仕事継続意欲を高めるとの示唆が得られた。本研究を通して職場の雰囲気は意欲的に職務遂行をするにあたり一つの重要な資源となるとともに，企業が社員の育成にかけてきたコスト面や求められる職務の遂行ができる社員がいなくなることで他の社員の負担となることで生じる離職があまり見られなくなり，また社員が職務に工夫して取り組みその企業で職務経験を積むことを通して企業全体の利益につながると推察される結果が提示できたと考えられる。本研究で明らかになったように，この影響をより明瞭にするためにはWFBを媒介する変数として捉えていく必要があるといえる。本研究から生涯発達的観点のもと，WFBを媒介する変数として扱い測定不変のモデルが採択したことですべてのモデルの構造は一貫しており，さらに全年代においてWFBを媒介とした明確なプロセスが説明できるようになった。これにより学術的意義をおよび働き方改革が行われている社会動向を考慮すると社会的意義のある結果を示すことができたと考えられる。

なお，本研究において開示すべき利益相反関連事項はない。

Table 1　モデル適合度

	χ^2	df	χ^2/df	CFI	RMSEA	SRMR	AIC
配置不変	942.70	370	2.55	.92	.04	.06	1252.70
弱測定不変	991.94	414	2.40	.92	.04	.06	1213.94
測定不変	998.95	418	3.49	.92	.04	.06	1212.95
強測定不変	1199.29	478	2.51	.90	.04	.07	1293.29
全母数等価	1206.30	482	2.50	.90	.04	.07	1292.30



注）WFBはワーク・ファミリー・バランスを意味する。WFBを投入前→投入後のパス係数の違い。
**p < .01, ***p < .001

Figure 1　媒介分析の結果

【引用文献】
福丸由佳（2000）乳幼児を持つ親の多重役割と抑うつとの関連―父親を中心としたインタビューによる調査結果から―　人間文化論叢, 3, 133-143.
飯塚久哲（2018）2母集団解釈の手順について　豊田秀樹（編）共分散構造分析［疑問編］―構造方程式モデリング―　朝倉書店 pp.185-187.
Carlson, D. S., Grzywacz, J. G., & Zivnuska, S. (2009) Is work-family balance more than conflict and enrichment? Human Relations, 62, 1459-1486.

（はら　たけゆき）

セルフコンパッションの高い人ほど就職活動の不採用に挫けないのか

2017年度及び2018年度就職活動生を対象とした前向き研究

○宮川裕基[1]　谷口淳一[2]
([1]追手門学院大学心理学部　[2]帝塚山大学心理学部)

キーワード：セルフコンパッション，自尊心，就職活動

【目的】社会人として自立するための移行課題である就職活動は大学生にとって心理的負担となる場合がある。例えば，不採用が自己否定的経験となり，精神的不調が生じることがある (軽部他，2014, 2015)。宮川・谷口 (2018) は不採用に対処する心理的資源として，自己に思いやりを注ぐことを意味するセルフコンパッション (SC) に着目した。宮川・谷口 (2018) ではSCの高い人ほど，不採用が自己に及ぼす脅威を過剰に高く見積もらないこと (i.e., 脅威性評価の低さ) が示された。また，就職活動への内発的な動機づけが高い場合は，SCの高い人ほど不採用後に再び就職活動に力を注ぎやすいこと (i.e., 就職活動への自己資源の再投資) が示された。一方，就職活動への内発的な動機づけが低い場合は，SCと就職活動への自己資源の再投資の関連性は認められなかった。以上の結果はSCと関連する自尊心を統制しても維持された。

宮川・谷口 (2018) の知見はSCが就職活動を支える心理的資源であることを示唆している。しかしながら，この知見は横断的検討に基づくため，SCが不採用への適応的な対処を促すという影響の方向性については明らかではない。また，困難時の自己との向き合い方であるSCはネガティブな出来事への対処と別の時点で測定することが必要であるという指摘がある (Stutts et al., 2018)。このため，本研究では2時点の縦断調査により，Time 1時点のSCがTime 2時点の不採用への適応的な対処に影響するのかを検討する。

【方法】本研究ではTime 1 (2017年あるいは2018年4月) 及びTime 2 (2017年あるいは2018年11月) の2時点における質問紙調査を実施した。調査参加に同意が得られ，Time 1及びTime 2 のデータを整合することのできた大学4年生134名が参加者であった。このうち，Time 2時点までに就職活動に取り組んだ参加者は100名であり，そのうち，不採用を経験したと報告した88名を主な分析対象者 (男性37名、女性51名。M_{age} = 21.3, SD = 0.7) とした。

Time 1時点において，参加者はSC (宮川・谷口, 2016)，自尊心 (山本他, 1982)，就職活動への内発向上志向 (浦上・山中, 2012) に関する尺度に回答した。Time 2時点において，参加者は就職活動の有無，就職活動期間，内定数，不採用数について回答した。その後，不採用経験者は不採用経験を想起した後に，不採用からの経過月数，不採用に対する脅威性評価 (加藤, 2002)，就職活動への自己資源の再投資 (宮川・谷口, 2018) に関する項目に回答した。

【結果】2017年度と2018年度の就職活動生に主要変数の有意差は認められなかった (t (84~86) < 0.86, p > .349)。このため，以下の分析では年度を統合したデータを用いた。

次に，不採用経験の有無によりSCが有意に異なるのかを検討したところ，不採用を経験した参加者 (M = 8.11, SD = 3.63) に比べて，不採用を経験しなかった参加者 (M = 11.27, SD = 3.90) の方が，SCが有意に高いことが示された (t (96) = 2.70, p = .008)。同様に、不採用経験者 (M = 3.10, SD = 0.87) よりも不採用未経験者 (M = 3.57, SD = 0.89) の方が，自尊心が高いことが示された (t (96) = 1.75, p = .083)。

宮川・谷口 (2018) 同様に，SCが不採用への適応的な対処と関連するのかを検討するために，不採用経験者を対象に相関分析を行った (Table 1)。その結果，SCは脅威性評価と有意傾向の負の関連を示し，就職活動への自己資源の再投資と有意な正の関連を示した。以上の結果は，宮川・谷口 (2018) と一致するものであった。しかしながら，宮川・谷口 (2018) と異なり，自尊心を統制したところ、SCは脅威性評価及び就職活動への自己資源の再投資と有意な関連を示さなくなった。また，SCを統制したところ，自尊心も脅威性評価及び就職活動への自己資源の再投資との間に有意な関連を示さなかった。

最後に，就職活動への自己資源の再投資に対するSCと就職活動への内発向上志向の交互作用効果が認められるのかを検討するために，宮川・谷口 (2018) 同様の階層的重回帰分析を実施した。説明変数をセンタリングした後に，ステップ1に自尊心．不採用数，不採用経過月数，脅威性評価を投入し，ステップ2にSC及び就職活動への内発向上志向を投入した。ステップ3ではSCと内発向上志向の交互作用項を投入した。分析の結果，SCと就職活動への内発向上志向の交互作用効果は認められなかった (B = 0.02, SE = 0.03, p = .431)。この結果は宮川・谷口 (2018) と異なるものであった。

【考察】本研究では，縦断調査によりSCが就職活動の不採用への適応的な対処に影響するのかを検討した。ゼロ次相関では宮川・谷口 (2018) 同様に，SCは脅威性評価の低さと就職活動への自己資源の再投資の高さと関連した。しかしながら，自尊心を統制したところ，これらの関連は非有意となった。また，SCを統制すると自尊心も不採用への対処と関連していなかった。以上の結果から，自己に対する肯定的な姿勢というSCと自尊心に共通する要素 (Neff, 2011) が不採用に対処するために必要であることが示唆された。また，不採用未経験者の方がSC及び自尊心が高かったことから，これらの特性の高い就職活動生ほどキャリア探索や就職試験の対策に力を注ぎ，不採用を未然に防いでいるのかもしれない。

本研究の限界としてサンプル数の小ささが挙げられる。このため，十分な検定力がなかった可能性もある。また，就職活動は社会情勢など偶発的な出来事にも大きく影響されることから (Mitchell et al., 1999)，本研究の知見の一般化には慎重になる必要がある。今後，より大きなサンプルで本研究及び宮川・谷口 (2018) の知見の更なる検討が求められる。

Table 1. Pairwise Correlations among Variables

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 Self-compassion	—							
2 Self-esteem	.59**	—						
3 Intrinsic motive for job hunting	.16 (.01)	.26* (.20†)	—					
4 Total months of job hunting	-.11 (-.16)	.03 (.12)	.17	—				
5 Numbers of job rejection	-.09 (.08)	-.26* (-.26*)	.14	.24*	—			
6 Numbers of job offer	.09 (-.11)	.30** (.31**)	.08	.08	.07	—		
7 Months after job rejection	.18† (.15)	.10 (-.01)	.16	.08	-.13	.25*	—	
8 Perceived threat evaluation	-.21† (-.11)	-.20† (-.10)	.01	.26*	.27*	-.06	.05	—
9 Reinvestment of job hunting after rejection	.31** (.16)	.31** (.17)	.38**	.18†	.05	.11	.16	-.13

Note. The correlations inside the parentheses in the self-compassion column are partial correlations controlling for self-esteem. The correlations inside the parentheses in the self-esteem column are partial correlations controlling for self-compassion. ** p < .01, * p < .05, † p < .10

【謝辞】本研究は日本応用心理学会2016年度若手会員研究奨励賞による助成を受けました。

（みやがわ　ゆうき・たにぐち　じゅんいち）

犯罪に関するイメージ調査

── SCIT の質問項目の検討 ──

○軽部幸浩[1]　石岡綾香[2]　桐生正幸[3]

([1]日本体育大学　[2]駒澤大学　[3]東洋大学)

キーワード：犯罪，イメージ，探索質問法

【目的】ポリグラフ検査とは，生理心理学に基づき構築された主として犯罪捜査で活用されている心理検査の一つである。この検査の主要な質問方法は，有罪知識検査（Guilty Knowledge Test；GKT）もしくは，隠匿情報検査（Concealed Information Test；CIT）と呼ばれる質問方法である。犯人でなければ知り得ない犯罪事実に関する質問１項目（裁決質問）と，それに類似した質問4～6項目（非裁決質問）によって構成された質問表を用いて検査がおこなわれる。実際の捜査現場における検査結果は，国内外の実験研究で検討され，検出の成績も高く，日本の公判廷では証拠として科学的な評価を得ている。現在使用されている生理指標は，皮膚電気活動，呼吸運動，心臓血管系といった自律神経系であり，各質問に対する生理的反応の挙動を比較し判定がおこなわれる。また，近年では，背景脳波や事象関連電位といった中枢神経系による検出方法の確立をその検出率の高さが実験研究でも確認されている。しかしながら，生理指標についての研究は散見しているものの，質問項目の作成については未だにきちんとした方法について研究がなされていない面がある。そこで，今回は，CIT の一種である「探索質問法（searching concealed information test；SCIT）」という裁決質問が分からない場合に用いる方法での質問項目を作成するときに，質問項目を見誤らないために，ある犯罪について，どのようなイメージを持っているのかを調査することで，敢えてその内容については，質問項目から除外することができるであろうとする可能性について調査をおこなった。

【方法】調査機関：2019年4月。**調査対象者**：大学生145名（男子：45名，女子：100名，平均年齢：18.3，*SD*=0.71）。**質問票**：犯罪（強盗事件，路上での強盗事件）についてイメージできる内容（「強盗事件」については，「発生時間」，「場所」，「犯行手段」，「被害品」，「犯人像」など，路上での強盗事件にては，「発生時間」，「被害者」，「被害者の状況」，「犯行手段」，「被害品」，「犯人像」など）について，思いつくまま記述させた。

【結果と考察】

「強盗事件」と「路上での強盗事件」について，調査対象者より得られた回答についてそれぞれ頻度を求めた。「強盗事件」と「路上の強盗事件」それぞれにで，回答に共通する内容についてまとめた（表1）。

表１　回答の内容

	強盗事件	路上の強盗事件
発生時間	夜，深夜	夜
犯行手段	銃，ナイフ，刃物，包丁	ひったくり，バイク
被害品	現金	バッグ，鞄，財布
犯人像	マスク，サングラス，覆面，黒い色	男性，黒い色

「強盗事件」の「場所」については，「銀行」，「コンビニ」，「家」，「宝石店」の回答が多かった。「路上の強盗事件」の「被害者」については，「女性」，「年寄り」，「老人」の回答が多かった。「路上の強盗事件」の「被害者の状況」については，「帰宅途中」，「一人で歩いている」，「銀行帰り」の回答が多かった。

IBM SPSS Text Analytics for Surveysによる，テキストマイニングをおこないグリッドレイアウトを求めた。

強盗事件においては，場合，「銀行」，「昼」，「夜」，「金」，「コンビニ」，「家」，「マスク」などの間に共通する回答があった。回答者が「強盗事件」という言葉で想起されるイメージは，「銀行強盗」や「コンビニ強盗」が多く，被害品については「金，現金」とことが分かった。なお，犯行手段に関しては，「銃」という回答も多く，テレビドラマなどの影響が多くあるのではないかと考えられる。

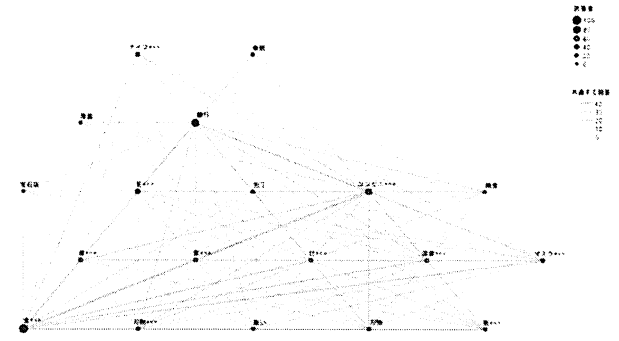


図１　強盗事件

路上の強盗事件の場合は，「夜」，「ひったくり」，「女性」，「年寄り」，「バッグ」，「男性」などの間に共通する回答があった。路上での強盗事件で想起されるイメージは，「ひったくり」が多く，その犯行手段は「バイク」，被害者は，「女性」や「年寄り」で，発生時間は「夜」が多かった。

強盗事件，路上での強盗事件の両方にいえるものとしては，被害品が「金」，「財布」，「宝石」などの金品であった。これらの物品等を考慮しながら，探索的質問を作成することで，検査の質問内容をさらに吟味していくことができる可能性が示唆されたと考えられる。

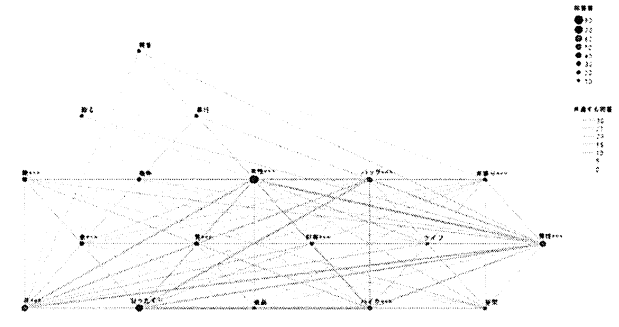


図２　路上の強盗事件

(かるべ ゆきひろ・いしおか あやか・きりう まさゆき)

刑務所と地域の連携

カナダ連邦・州刑務所の地域連携事例の報告

○上瀬由美子[1]
([1]立正大学心理学部)

キーワード：社会的包摂　再犯防止推進　偏見　拡張接触　社会的・制度的支持

【目的】

2016年に成立・施行された「再犯防止推進法」では、国・地方・民間が再犯防止の働きかけを担うことが明記されるとともに、国民の理解と地域社会の協力という基盤が再犯防止促進には不可欠と位置付けられている。

上瀬ら(2016)は、山口県のPFI刑務所近隣住民を対象にした調査を行い、刑務所や出所者に対するステレオタイプ・偏見が施設開設によってどのように変化したかを分析した。その結果、住民と施設の間に新たに生じた接触(直接的接触・間接的接触・対人的接触)が、施設に対する態度を肯定的に変化させ、それが受刑者や出所者に対する受容的態度に結びつくことを明らかにしている。その一方で、社会的包摂を促進させるための社会システムを構築させていく際には、行政の取り組みを可視化して社会的・制度的支持を明確化することに加え、そのシステムに一般市民がかかわる仕組みを含めていくことが必要と論考している。

本研究では、再犯防止の取り組みに向けて地域との連携が進むカナダの刑務所の事例に焦点を当て、現地施設の見学と関係者への聞き取り調査を行った。カナダの刑務所では施設で活動するボランティアを一般市民から広く募集している。そこで本研究ではカナダにおける刑務所と地域の連携のあり方について、システムに一般市民が関わる仕組みがどのように構築されているのか調査によって明らかにすることを目的とした。特に施設におけるボランティアの位置付けについて聞き取りを行う。その上で、接触のあり方を日本と比較し、偏見低減の効果について考察することを試みた。

【方法】

対象施設: 本研究では以下6つの施設を対象にして、見学および関係者への聞き取り調査を行った。カナダ矯正局(Correctional Service Canada 以下CSC)が管轄する連邦刑務所から3施設:コリンズ・ベイ刑務所、ミッション刑務所、フレイザー・バリー女子刑務所。州刑務所から1施設:オンタリオ州が管轄するトロント・サウス・ディテクション・センター。CSCが管轄する地域矯正センター(コレクショナル・コミュニティ・センター)の中から2施設:ヘンリー・トレイル・コミュニティ・コレクショナル・センター、チリワック・コミュニティ・コレクショナル・センター。

調査時期: 2018年6月

調査手続き: 見学および聞き取り調査実施にあたっては事前に、研究の目的および当日説明してほしい事柄について各施設に質問票を送り、見学の中でその回答を得るよう依頼した。施設の中で見学する場所、話を聞く相手、見学の流れなどについては、調査者側の依頼をふまえて施設側が決定した。このため、施設ごとに立ち入りが許可された場所や、聞き取り対象者は異なっていた。聞き取りの形式は、半構造化面接形式である。

【結果・考察】

施設と地域の連携の状況について、見学と聞き取りの中で把握できた事柄を抜き出したものを表1に示す。どの施設においてもボランティアが社会復帰促進の担い手となり、施設と地域住民の連携が不可欠なものとして位置付けられていることが明らかとなった。連携の効果として期待されていたものは、第一にはプログラムの充実や人手の確保であったが、地域代表者としての市民諮問委員および近隣に住む一般ボランティアは、施設を監視するだけでなく、施設に関する正しい情報を地域住民に伝える役割を期待されていた。地域住民が施設と接触する場面を考えると、一般的には抵抗や不安が伴うものと推測される。カナダ刑務所のこの連携の形は、施設に馴染みがなく接触に不安を抱く一般の地域住民に対して、接触に積極的な一部の住民を介して態度変容を促す拡張接触(Wright, *et al.*, 1997)を現実に応用したものと位置付けられる。日本の刑務所ではカナダと比べ、一般の市民が受刑者の社会復帰の手助けや施設の活動に関わる機会は少ない。地域との矯正をうたうPFI刑務所であっても、接触の形は見学やメディアを介したものに限定されていた。また、遠方に住む住民においては施設への直接接触が増えず、施設開設による地域の肯定的変化を意識しにくいことが問題として指摘されていた。日本においても、地域との連携による情報の可視化や拡張(他者への伝達)過程を一般市民が矯正システムに関わる仕組みのひとつとして位置付け、それを活用することができれば、出所者の社会的包摂がより進むものと考える。

◆引用文献

上瀬ら(2016). 官民協働刑務所開設による社会的包摂促進の検討 心理学研究, 87, 579-589. / Wright, *et al.*, (1997). The extended contact effect. *J.P.S.P.*, 73, 73-90.

(かみせ　ゆみこ)

表1 地域連携の現状

施設名(セキュリティレベル)、収容定員	活動しているボランティア数	ボランティアの活動例	地域との連携の事例	地域との連携や施設の可視化に対する考え
コリンズ・ベイ刑務所 (マキシマム、ミディアム、ミニマム) 760人	113人	農作業支援やブック・クラブのファシリテーターとしての参加など。ブック・クラブについては、外部団体がファシリテーターの教育やスクリーニングを行っている。 市民諮問委員会(CAC)が施設運営を監査し、地域の意見として施設に提言する。		市民諮問委員(CAC)は、施設の中の様子を地域の外の人に伝える重要な役割を担っている。
ミッション刑務所 (ミディアム、ミニマム) 540人	168人	農作業の指導など。	プロダクションガーデンを運営し、地域のスクール・バンクに生鮮食料を寄付する。家具や寝具を作成し、ホームレスや学校に寄付する。	
フレイザー・バリー女子刑務所 (マキシマム、ミディアム、ミニマム) 112人	約200人	受刑者の地域への送り迎え、ブック・クラブの参加、アクティビティの提供、話し相手など。	ブランケットを作りホームレス用に寄付をする。犬舎で、地域の顧客にサービスを提供する(犬用ホテル、犬用美容室、訓練)。	
トロント・サウス・ディテクション・センター マキシマム、ミディアム 収容定員1650人	約240人	受刑者にとって共感できる、実践的なプログラムにボランティアが参加している。ボランティアが受刑者のロールモデルになることが多々ある。 市民諮問委員会(CAB)が矯正施設の運営のすべての側面について、行政に対して助言と勧告を行い、報告書を提出する。	施設が外部NPOと提携して、高校卒業認定資格取得の支援や、オンラインでの大学授業参加ができるようにしている。 公共図書館と連携して図書室を充実。	市民諮問委員会(CAB)を通じて矯正施設とその地域社会とのつながりを強化することにより、矯正支援に対する透明性を高め地域への説明責任を果たすことができる。
ヘンリー・トレイルCCC 40人	99人	近隣の大学の学生がボランティアとして多く参加している。学生たちのキャリア形成にもつながる。 年配の人のボランティアは、人生の先輩として、受刑者のロールモデルになっている。	畑でとれた作物をフードバンクに寄付。	
チリワックCCC 31人	約50人	入所者が外部の病院に行く時にボランティアが車で送迎。民族文化や宗教的なことがらに関わる手伝いもしている。	入所者の何人かは、昼間、ワークリリースで施設のすぐ近くの製材所で働いている。近隣の刑務所の受刑者が、ワークリリースで当施設に働きにきている。	市長と頻繁な連絡、オープンハウスを2～3年に1回実施、ツイッターを利用した情報発信、ボランティアは施設の中で様々な経験をして、それをコミュニティの人に伝えてくれる。

注) 空欄になっている部分は、聞き取りの中で回答が得られなかった側面や話題に出なかった部分であり、対応する活動が施設にないことを示すものではない。

研究発表（ポスター発表①）

8 月 24 日（土）

15:45～17:45　食堂マロニエ

においを手がかりとする自伝的記憶の想起に要する時間に関する検討

―プルースト現象は特別か？

○小林剛史[1]・白井真菜美[2]
([1]文京学院大学人間学部・[2]文京学院大学大学院人間学研究科)

キーワード：プルースト現象・想起時間・自伝的記憶

【目的】

我々は、においによって自伝的記憶が想起される「プルースト現象」について、従来の研究方法を踏襲しつつ、「食」に関わるにおい刺激を用いた検討を行ってきた。その結果、「食」に関わるにおい刺激を用いると、におい刺激による記憶想起に特有の現象(記憶想起に要する時間が古い記憶ほど短い)がみられなかった。また、「食」に関わるにおい刺激を用いた時の、主観的幸福感得点の変化は見られなかった。我々はこうした結果について、想起された記憶内容が3年以上前の昔に関するものであっても、「食」に関わるにおい刺激を用いることで、必然的に最近嗅いだことがある成分が含まれてしまうことが背景にあると考えた。すなわち、「食」に関するにおい刺激でも、より厳密に昔嗅いだものを使用することで、古い記憶ほど想起時間が短い、という傾向が再現される可能性がある。本研究では、上記の可能性を1つの実験的枠組みの中で検討することを目的とした。具体的には、「食」に関わるにおいを含む「小学校」に関わるにおい刺激を用いて、主観的幸福感の各項目に及ぼす影響について検討を行った。さらに、認知課題遂行成績および刺激提示に伴う自伝的記憶の想起に要する時間(想起時間)と記憶の時期(古い：3年以上前／最近：1年以内)との関係性も検討した。

【方法】

実験参加者：関東圏の学部学生16名(平均年齢20.94; *SD*=0.90)。

実験刺激：秋山(2013)で使用した10種類の小学校に関するにおい刺激を使用した。刺激提示方法については、スクイーズボトル法を用いた。

認知課題：語句自由連想課題を用いた。同課題は、1分間の制限時間を設け、この間自由に語句を連想し、これらを用紙に記述する課題であった。

指標：主観的幸福感尺度(7項目)をVisual Analogue Scaleを用いて評定を求めた。

手続き：実験参加者の同意後、主観的幸福感尺度への回答を求めた後、認知課題を課した。その後、におい刺激提示を自伝的記憶想起が生じるまで行い、想起が生じたら提示セッションを終了した。この後、再度主観的幸福感およびにおいに関する質問への回答を求め、認知課題を課し、実験セッションを終了とした。

【結果】

図1に、におい刺激提示前後の平均得点を、主観的幸福感の項目ごとに示す。におい刺激提示後のほうが提示前よりも全項目において、平均主観的幸福感得点はわずかに上昇していることが見てとれる。におい刺激提示による各項目における主観的幸福感得点での有意な差があるかを検討するためにWelchのt検定(対応あり)を行った結果、「非常に強い幸福感を感じる瞬間がありますか」という項目について、刺激提示後のほうが有意に主観的幸福感得点が高かった[$t(15)=2.90$, $p<.05$]。その他の項目では刺激提示前後の得点間に有意な差は認められなかった。

次に、におい刺激提示に伴って想起された自伝的記憶の時期(古い：3年以上前／最近：1年以内)の検討を行った。

図2に、におい刺激提示における群別の平均連想語数を示す。想起された記憶が3年以上前の群よりも想起された記憶が1年以内の群のほうが、平均連想語数が増えているように見てとれる。

図3に、におい刺激提示における群別の平均想起時間を示す。3年以上前の記憶を想起している群よりも1年以内の記憶を想起している群のほうが、平均想起時間が短いことが見てとれる。ただし、同データについては、データ比が14:2であったため、統計的分析を行っておらず、その差の有意性については検討していない。

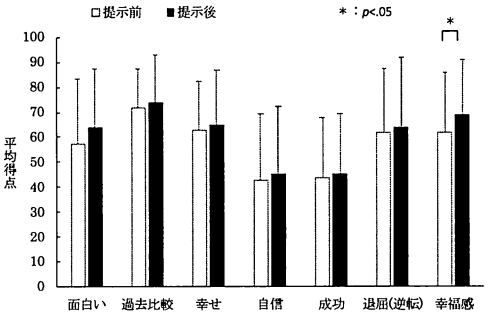


図1. 主観的幸福感の各項目のにおい刺激提示前後の平均得点(±*SE*)

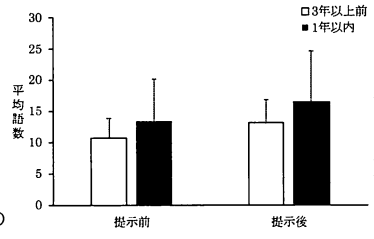


図2. におい刺激提示前後における群別の平均語数(+SE)

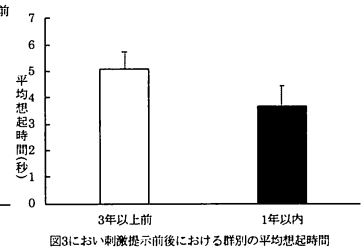


図3におい刺激提示前後における群別の平均想起時間

【考察】

本研究では、「小学校」に関するにおいを手がかり刺激として設定し、同刺激による自伝的記憶想起が主観的幸福感および認知課題遂行成績に及ぼす影響について検討した。また、におい刺激によって想起された自伝的記憶の時期(3年以上前/1年以内)が想起時間に及ぼす影響についても検討した。

その結果、小学校に関するにおい刺激提示により、想起時間については、従来の「食」に関する検討と類似して、3年以上前の記憶の想起時間が1年以内の記憶の想起時間よりもやや長い傾向が見られた。同時に、我々のこれまでの、「食」に関するにおい刺激提示に伴う自伝的記憶想起に要する時間と比較すると、3年以上前の記憶想起に要した時間は本研究におけるそれの方が短かった。すなわち、古い記憶であるほど、想起時間が短くなる傾向については、従来の我々の結果と一致する可能性が残された。

一方、「小学校」に関するにおい刺激を嗅いで過去を想起したとき、主観的幸福感のうち、瞬間的幸福感の項目得点が高くなった($p<.05$)。すなわち、においを嗅いでプルースト現象が生じると、主観的幸福感が高まることが改めて確認された。

(こばやし たけふみ, しらい まなみ)

被受容感が自尊感情に与える影響

――ソシオメーター理論とその影響の時期について――

○木下雅博[1]　大西彩子[2]
([1]甲南大学人間科学研究所　[2]甲南大学文学部)

キーワード：被受容感　自尊感情　ソシオメーター理論

【目的】

ソシオメーター理論とは，自尊感情は，他者から受容されている程度を示すメーターであるとする理論である（Leary, 1999)。他者から受容されている感覚である被受容感が自尊感情に影響を与え，被受容感が高まると自尊感情が高まり，逆に被受容感が低くなると，自尊感情も低くなる(岡田, 2011)。

では，この被受容感が自尊感情に与える影響は，どの程度持続するのか。本研究では，集団の中で生活する時間が長く，いじめなどの問題が生じやすい中学校のクラスにおいて，縦断的に調査を行うことで，この時期の被受容感と自尊感情との時間的関係についての知見を得ることを目的とする。

【方法】

調査協力者・調査時期　近畿地方に存在する公立中学校2校に在籍する中学2年生を対象とし2017年6月（288名；男子143名，女子144名，不明1名），2017年12月（294名；男子147名，女子147名），このうち2回とも回答し記入ミスのなかった259名（男子130名，女子129名）を分析の対象とした。

調査項目　フェイスシート（性別・年齢），被受容感尺度(鈴木・小川，2008)6項目，自尊感情尺度（鈴木・小川（2008）の自尊心尺度を基に，現職の中学教諭と相談して文言を修正した）6項目を使用し，全て3件法（0~2）で評定を求めた。

【結果】

6月および12月時の被受容感尺度，自尊感情尺度に対し因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性に基づき，6月，12月時の被受容感尺度，自尊感情尺度に対してともに1因子解を採用した。被受容感尺度の因子は「被受容感」（6項目，6月：α = .86，12月：α = .90），自尊感情尺度の因子は「自尊感情」（6項目，6月：α = .84，12月：α = .85）と命名した。

ソシオメーター理論に則り，6月・12月時点での被受容感が各時点での自尊感情に与える影響と，6月時点の被受容感が，12月時点の自尊感情に与える影響を検討するため共分散構造分析を行った（Figure1)。その結果，適合度が低く，このモデルは棄却された（$\chi^2 = 7.231, df = 1, p = .007, CFI = .987, FMIN = 0.028, RMSEA = .155$)。

そこで，探索的に，6月・12月時点での被受容感が各時点での自尊感情に与える影響と，6月時点の自尊感情が，12月時点の被受容感に与える影響を検討した（Figure2)。その結果，十分に高い適合度指標を得られた（$\chi^2 = 0.895, df = 1, p = .344, CFI = 1.000, FMIN = 0.003, RMSEA = .000$)。この結果から，被受容感は同時期の自尊感情には影響を与えるが，半年後の自尊感情には影響を与えないことが示された。また，自尊感情は，半年後の被受容感に影響を与えていたが，その影響は弱いことが明らかになった（$\beta = .17, p = .007$)。

【考察】

本研究では，ソシオメーター理論に則り，被受容感が自尊感情に与える影響を縦断的に検討した。被受容感は，同時期の自尊感情に影響を与えており，ソシオメーター理論が確認されたが，被受容感は半年後の自尊感情には影響を与えておらず，逆に自尊感情が，半年後の被受容感に弱い影響を与えていた。このことは，ある時点での被受容感は，その時点での自尊心には影響を与えるが，介入により被受容感を高めれば，自尊感情は回復できる可能性を示している。

例えば，中学校において生徒の自尊感情を直接的に高める取り組みを行うことは難しいが，生徒同士の交流を増やすなど，生徒の対人環境を改善する取り組みは比較的行いやすい。自尊心が低くなっている生徒に対しては，本人への支援だけではなく，その生徒の対人環境に介入することで，被受容感を高め，自尊心を回復させることが重要であると考えられる。

（きのした　まさひろ・おおにし　あやこ）

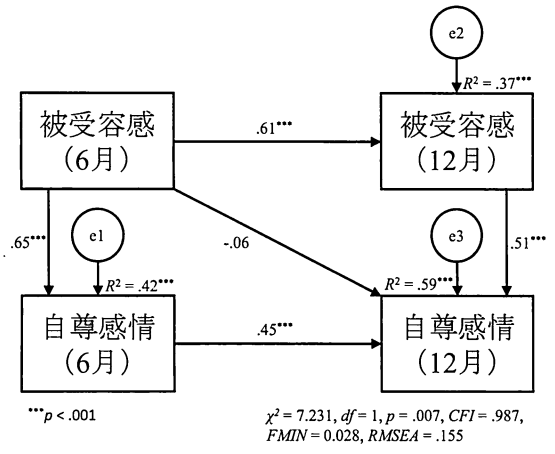


Figure1. 中学2年生6月時の被受容感が12月時の自尊感情に与える影響モデル

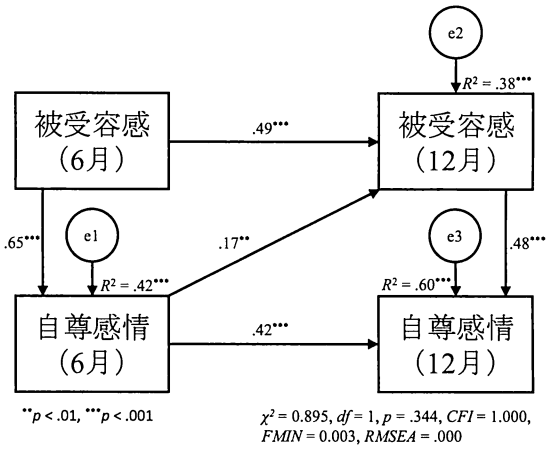


Figure2. 中学2年生6月時の自尊感情が12月時の被受容感に与える影響モデル

教員及び学生から見た学校支援ボランティアの現状と課題

○髙田莉恵[1]　中地展生[2]
([1]帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2]帝塚山大学心理学部)

キーワード：学校支援ボランティア，教員，大学生

【目的】現在，教育現場においては個々の児童生徒の成長や発達過程に応じたサポートの方法を整備することが課題となっている。学校支援ボランティアは児童生徒のサポートのために導入された取り組みであり，サポートを必要とする児童生徒に個別に支援をすることが可能である。中でも大学生ボランティアは児童生徒との間で利害関係がなく，子どもが等身大で関わることのできる“斜めの関係”を築くことが可能である。本研究では大学生が行う，サポートを必要とする児童やクラスへの支援を学校支援ボランティアと定義する。

学校支援ボランティアは受け入れる側の学校に利益が期待されるだけでなく，活動を行う学生にも教育現場で実際に児童生徒と接する機会が増える等の利益が期待されている。廣瀬(2003)は「ボランティア自身の成長や発達といった視点」を重要視しており，互恵性のある活動でなければならないと述べており，ボランティア活動が継続して行われる条件として相互に利点があることが重要となる。

そこで本研究では，学校支援ボランティアの受け入れを行っている学校の教員と活動を行っている学生を対象にインタビュー調査を行い，両視点から見た学校支援ボランティアの現状についてモデル化する。その上で，両者のモデルを比較検討することで，今後のボランティア活動に関する課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】調査対象者：学校支援ボランティアの受け入れを行っている学校の教員５名，および学校支援ボランティアの活動を行っている大学生７名。

インタビュー項目(教員用)：1. 学生が行っているボランティアの活動内容について。2. ボランティアを受け入れる前後の学校(児童)の変化について。3.　ボランティア学生の受け入れ時と現在の変化について。4. 活動(学生)に期待すること。

インタビュー項目(学生用)：1.現在自分が行っているボランティアの活動内容について。2.ボランティア活動開始直後と現在の学校(児童)の変化について。3.ボランティア活動開始以前と現在の自分の変化について。4.活動に期待すること。

分析の手続き：インタビューで得られたデータの分析は KJ 法を参考に行った。インタビューデータの切片化を行った後，切片化された全データについて，川喜田（1986）および，古田（2016）を参考にして合議と分析を行いグルーピングし，図解化した。

【結果と考察】教員から見た学校支援ボランティア　教員から見た学校支援ボランティアの現状として，『学校の現状』『ボランティアの活用』『子どもとボランティアの関係』『教員とボランティアの関係』『ボランティアへの思い』『ボランティアの変化』という大カテゴリーが確認された(Figure 1)。

Figure 1 について，『学校の現状』が『ボランティアの活用』と関係しており，「学校は教員だけでは成り立たない時代になってきた」というようなエピソードからも，学校支援ボランティアが学校や児童，生徒を支援する中で重要な存在になっていることが考えられる。インタビュー中には教員からボランティアへの感謝も語られ，学校内で学校支援ボランティアが十分に機能していることが推測される。また，教員からボランティアの変化が語られ，互恵性のある活動になっていることが考えられる。

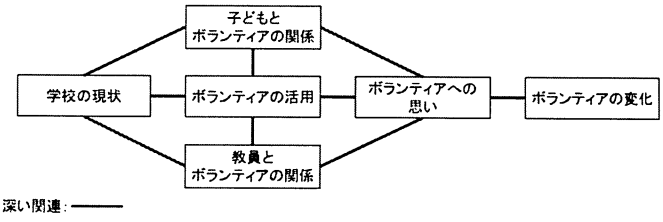


Figure 1　教員から見た学校支援ボランティアの現状

学生から見た学校支援ボランティア　学生から見た学校支援ボランティアの現状として，『ボランティアの姿勢』『活動内容』『子どもとボランティアの関係』『教員とボランティアの関係』『ボランティアの変化』という大カテゴリーが確認された(Figure2)。

学生の視点からも，『子どもとボランティアの関係』『教員とボランティアの関係』『ボランティアの変化』という教員と共通した大カテゴリーが構成された。インタビューのエピソードからも，ボランティアの良い変化が子どもとボランティアの関係や教員とボランティアの関係に良い影響をもたらしていることが考えられた。

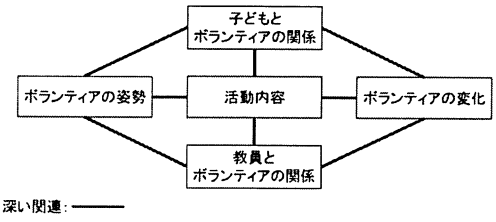


Figure 2　学生から見た学校支援ボランティアの現状

両視点から見た今後の課題　本研究では，教員と学生の両視点からボランティアの現状を検討した。その結果，現在の学校支援ボランティアは，受け入れを行う教員と活動を行う学生のコミュニケーションの不足が重要な課題であることが示唆された。コミュニケーションの不足から様々な問題に発展し，課題を抱えながら活動が行われているという現状がある。時間的限界がある中でどのようにコミュニケーションをとる時間を設定していくのかが今後の課題になるだろう。

【引用文献】

古田 雅明(2016).　KJ 法の臨床応用―実践的な指針の探索　福島 哲夫(編)　臨床現場で役立つ質的研究法(pp.21-34)

廣瀬 隆人(2003).　学校支援ボランティアの概念の検討　宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告，*10/11*(合併号), 25-34.

川喜田 二郎(1986).　KJ 法―渾沌をして語らしめる　中央公論社

（たかた りえ・なかじ のぶお）

新入社員の人材育成

―企業が求める自律型人材の育成―

柴田隼　田崎ほのか　伊東由菜　臼谷海都　後藤祐里奈　外島裕
（日本大学商学部）

キーワード：自律型人材・目標管理制度・OJT

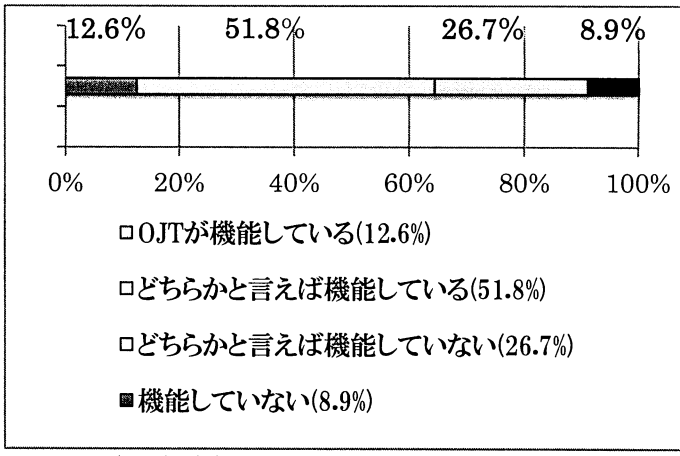
【目的】近年では新入社員が３年以内に離職する割合が増加している。そこで新入社員が早期に離職してしまうのは人材育成に問題があるためだと考えた。そして人材育成をテーマに研究していく中で、日本の企業の多くが自ら考え行動するといういわゆる「自律型人材」を社員に求めているということが分かった。しかし、現実には積極性のある新入社員が少ないことや、新入社員に対しての教育訓練が適切におこなわれていないため自律型人材を育てる環境が十分ではないといった問題がある。また本来マネジメントサイクルである目標管理制度の目的が人材育成よりも評価するためのものになってしまっている問題もある。そこで自律型人材を育てるためにこれらの問題を解決する方法を検討する。

【方法】本研究では、自律型人材を育てるためにはまず、新入社員自身が仕事に対しての目標を立てることが重要であると考える。最初に、新入社員が自主的に目標の設定をし、その目標に対して上司が適切にアプローチをおこない、マネジメントサイクルを効果的に展開させていくという目標管理制度（Management by Objectives and Self-Control）の考え方について紹介する（P.F.Drucker　1954）。Plan（計画）、Do（実行）、See（評価）といったマネジメントサイクルを効果的に展開させることを目的とした基本的な考え方といえる。このサイクルを効果的に展開していくうえで大切となるのが最初のPlanの時点で目標の設定をいかに適切におこなうかどうかである。次に、目標管理制度を機能させるためにおこなう、教育訓練のひとつであるOJT（On-the-Job-Training）について明らかにする。日常の職務の遂行を通じて、問題解決能力、知識、技能、態度などについて、上司や先輩が部下もしくは後輩に対して計画に基づいて１対１でおこなう教育訓練である。また、一人ひとりの様子に対応して、より良い仕事のやり方を日常的に指導していくので機会も多く、個々の業務形態によって具体的な指導がおこなわれることから、早期習得、コスト・時間面においても効率の良い研修である。しかし（表1）に示すように「OJTが機能している」と回答している企業は約１割であり、OJTが十分に機能していないことがわかる。そしてOJTをよりよく機能させるための手段として、コミュニケーションを円滑にするコーチングを上司がおこなうことが重要である。コーチングでは相手の自発的な行動を促進させることにより、目標を明確化し、現状とのギャップ分析することで自身の行動計画を自ら立案し、実行することを可能にすることを目的としたものである。そして部下の内側にある可能性、自発、責任感を引き出すことで、部下は目標達成することができる。

【結果】目標管理制度では、目標設定の際に上司と新入社員が互いにある程度納得するまで話し合うことが大切である。企業目標の方向に沿った目標を設定出来るよう上司は組織目標や経営課題を新入社員に伝え、新入社員はそれを理解して何が求められているのかを主体的に知る必要がある。その過程でコミュニケーションが取れていないと企業目標からずれ、企業の業績や、自律型人材の育成に繋がらない可能性がある。OJTでは上司が新入社員とどう接していくのか、具体的なコミュニケーション方法が漠然とした形であり、きちんと整理されていないことが機能していない理由の一つであると考えた。つまりコミュニケーションの取り方が分からないということである。そこでコミュニケーションを取るためにコーチングを取り入れる。コーチングを使うことによって上司と新入社員のコミュニケーションが円滑になされOJTが機能する。

【考察】上記で述べた人材育成方法は目標管理制度がマネジメントサイクルとして機能している場合である。今後の課題として、上司が各理論に対しての理解を深める必要があるだろう。目標管理制度の本来の意味を十分に理解することや、OJTやコーチングの具体的な方法を把握することが重要である。そのため上司などといった部下を指導する立場にいる人に向けた教育の場を設けることで、部下は自律型人材に近づき、近年問題となっている新入社員の離職率も減少させることに繋がるだろう。

人材開発に関する実態調査



（表1）学校法人産業能率大学　総合研究所(2010)
経済危機下の人材開発に関する実態調査

【引用文献】

・Peter Ferdinand Drucker(1954)『The Practice of Management』HarperCollins.
・Gary Latham(2007)『WORK MOTIVATAON』Sage Publications,Inc. 金井壽宏監訳(2009)『ワークモティベーション』NTT出版
・郷田悦弘(1992)『新時代の実践OJTマニュアル』中央職業能力開発協会
・今野能志(2005)『目標による管理(MBO)』生産性出版
・佐藤博樹・玄田有史(2003)『成長と人材―伸びる企業の人材戦略』勁草書房
・小林裕(2016)「人事評価制度」田中堅一郎(編)『産業・組織心理学エッセンシャルズ[改訂三版]』ナカニシヤ出版 pp.31-59
・Stephen Palmer and Alison Whybrow(2008)『Handbook of Coaching Psychology a Guide for Practitioners』Psychology Press a member of the Taylor &Francis Group 堀正監訳(2011)『コーチング心理学ハンドブック』金子書房
・労政時報(2004-4-23)3628号『人事労務管理諸制度の実況』
・厚生労働省　平成28年度「能力開発基本調査」(http://www.whlm.go.jp/toukei/list/dl/104-28b.pdf)(2019年6月19日閲覧)
（しばたはやと・たざきほのか・いとうゆいな・うすたにかいと・ごとうゆりな・としまゆたか）

特別支援教育における対象の拡大に関する研究（１）

－「特別支援教育」をどう考えているのか－

○石橋　裕子[1)]　　林　幸範[2)]

1)帝京科学大学　　2)滋賀短期大学

キーワード：特別支援教育、特別支援教育の対象、幼稚園教諭・保育士養成課程学校学生

【研究の目的】

石橋・林らは、特別支援教育に関する調査及び実践的研究を実施してきた。特に、特別支援教育において重要な役割を担っている養護教諭の特別支援教育に対する意識や実態、養護教諭との連携などを明確にするために全国調査を実施し、養護教諭と一般教諭との連携が特別支援教育の成果をあげる重要なキーワードであることなどを明らかにした。そこで、平成24年度科研費の交付を受けた「特別支援教育における養護教諭とそれ以外の連携の阻害要因に関する研究」から、①情報の共有化への積極性、②教職員等の連携に対しての積極性、③連携以外の特別支援教育に対して積極性、④養護教諭の学習指導への参加などが重要な阻害要因であることなどが明確となった。同時に実施したヒアリング調査からもこの結果は示唆され、またモデル研究では、この全国の教員調査で明確となったことを考慮し、養護教諭を中心に特別支援教育への連携・関与を実施し成果をえた。これらの研究で実施したヒヤリング調査や、それ以外での現場との連携や研修などから、①特別支援教育に対して大学の教員養成課程でほとんど学んできていないということや②虐待の疑いのある児童生徒が少数ではあるが現場におりどのように教育して良いか分からないということなどの意見が多々あった。さらに、今回の教職課程の再認定では、「特別支援教育」が単位化され、また対象が発達障害ばかりではなく「障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒」に拡大された。それに伴って、教育現場でも問題視されはじめた被虐待児を特別支援教育の対象とする研究を実施する予定であったが、科研費が不採用となり、研究の規模の縮小せざるをえなくなった。そこで、ここ数年「特別支援教育」について、先に挙げた現場の声を受け入れて、①特別支援教育について、②子どもの虐待についてなどをテーマに独自の授業を実施しており、その結果について、特に「特別支援教育」をどのように考えているのかについて報告する。

【方法】

(1)調査時期…2018年10月～2019年1月(2018年度後期)。(2)対象…滋賀県の幼稚園教諭・保育士養成課程の短大２年生(136名)の出席者128名(94.1%)(欠席８名:5.9%)。(3)方法…授業内で授業の一環として実施。(4)質問項目(授業テーマ)…①特別支援教育の既知、②発達障害の子の担任として対応(自由記述)、③授業後の②への再考(自由記述)。(5)授業の方法…②をテーマ(4)を参照)とした班による協同学習。(6)凡例…囲込み数字 50.0% 以上。

【結果】(表参照)

(1)特別支援教育の既知…「特別支援教育」について「その他」を加えて６段階で尋ねた。その結果、「知っている」が74.2%と、知らない・わからないよりも多かった。知っている内訳として、内容については「知らない・わからない」が95.8%とほとんどであった。(2)発達障害の子の担任として対応(自由記述)…自由記述の担任としての対応の内訳のカテゴライズ化は、以下のとおりであった。**①子どもへの対応**：子どもの特徴の把握やその特徴に考慮した配慮が57.0%、その子が必要な時やできる活動に配慮するなどが30.5%、基本的には他の子と同じ関わり方をするなどが29.7%、シール、絵や写真等を利用するなどの視覚的な支援をするが23.4%、加配や副担任配置の要請をするのが20.3%、当事者の子どもだけではなくクラス全体に配慮をするのが14.8%などの順であった。**②保護者への対応**：保護者と面談や相談などにより家庭での様子や対応などについての情報を収集するのが40.0%、保護者との連携まで考えているのが10.9%、保護者の不安や心配感を低減するよう配慮するが4.7%などの順であった。**③園での対応**：園長や同僚の教師・保育士などに相談するのが21.1%、クラスや園全体の環境構成などその子にあった環境整備を配慮するのが14.8%、その子がクールダウンや何かあったときに落ち着ける場所を設定するが7.8%などの順であった。**④その他**：当事者の子どもへの特性や対応などを理解するために発達障害などの障害についての学習を実施するが10.9%、医療機関や特別支援学校など外部の専門家との連携を実施するのが5.5%などの順であった。なお、自由記述に「無回答」はいなかったが、「わからない」と回答した者が「知っているが内容は知らない」「知らない」に各１名いた。

【考察】

以上のことから、「特別支援教育」について知っているのが４名中３名いるが、内容まで知っている学生は少数であった。このことは、学生が小学生の頃から特別支援教育が実施されているからといえるが、「特別支援教育」を系統的に学習していない結果であると考えられる。しかしながら、様々な対応があげられており、実習での成果だと考えられる。これらのことから、学生は、実践を通して、特別支援教育についての知識や対応などをについて習得しており、特別支援教育についての系統的な学習の重要性が示唆されている。

(いしばしゆうこ・はやしゆきのり)

表　特別支援教育の既知度と担任としての対応

①特別支援教育の既知			②発達障害のある子の担任としての対応														
特別支援教育の既知	内容の既知	回答数	子どもへの対応						保護者への対応			園での対応			その他		
			特徴の把握と配慮	必要時の援助・できる活動	同じ関わり方	視覚的支援	加配・副担任の設置	クラスへの配慮	情報収集・面談等	連携	不安感の低減等の支援	園長・同僚等への相談	環境構成・整備	落ち着ける場所の設置	発達障害への理解・学習	外部専門家との連携
知っている	知らない	20(15.6)[21.1]	14(10.9)	3(2.3)	6(4.7)	5(3.9)	3(2.3)	5(3.9)	6(4.7)	1(0.8)	3(2.3)	6(4.7)	6(4.7)	1(0.8)	0(0.0)	1(0.8)
	わからない	71(55.5)[74.7]	38(29.7)	22(17.2)	25(19.5)	14(10.9)	16(12.5)	10(7.8)	32(25.0)	8(6.3)	3(2.3)	15(11.7)	9(7.0)	5(3.9)	7(5.5)	3(2.3)
	知っている	4(3.1)[4.2]	3(2.3)	3(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(1.6)	1(0.8)	0(0.0)	1(0.8)	0(0.0)	1(0.8)	1(0.8)	0(0.0)	1(0.8)	1(0.8)
	小　計	95(74.2)[100.0]	55(43.0)	28(21.9)	31(24.2)	19(14.8)	21(16.4)	16(12.5)	38(29.7)	10(7.8)	6(4.7)	22(17.2)	16(12.5)	6(4.7)	8(6.3)	5(3.9)
知らない		15(11.7)	8(6.3)	4(3.1)	4(3.1)	4(3.1)	1(0.8)	1(0.8)	5(3.9)	2(1.6)	0(0.0)	2(1.6)	0(0.0)	1(0.8)	3(2.3)	1(0.8)
わからない		14(10.9)	8(6.3)	6(4.7)	2(1.6)	6(4.7)	2(1.6)	2(1.6)	6(4.7)	1(0.8)	0(0.0)	2(1.6)	2(1.6)	3(2.3)	2(1.6)	1(0.8)
無回答		4(3.1)	2(1.6)	1(0.8)	1(0.8)	1(0.8)	2(1.6)	0(0.0)	3(2.3)	1(0.8)	0(0.0)	1(0.8)	1(0.8)	0(0.0)	1(0.8)	0(0.0)
総　計		128(100.0)	73(57.0)	39(30.5)	38(29.7)	30(23.4)	26(20.3)	19(14.8)	52(40.6)	14(10.9)	6(4.7)	27(21.1)	19(14.8)	10(7.8)	14(10.9)	7(5.5)

注：(　)は総計128名を母数とした%。[　]は小計95名を母数とした%。

部活動認証制度の創設のための事例研究
「生徒の意識」に着目した部活動指導プログラムの実践

○大門耕平[1]　伊藤将史[1]（非会員）来田宣幸[2]
([1]近江兄弟社中学校・高等学校　[2]京都都工芸繊維大学)

キーワード：部活動指導、部活動認証制度、意識調査、部活動いごこち尺度

【目的】近年、部活動指導における問題が指摘されている。来田・吉田・原田(2014)は、「現在の部活動には、顧問の体罰を含む人権を無視した指導、勝利至上主義や非科学的根性主義などに基づく長時間練習による傷害の多発、少数精鋭の選手中心主義による落ちこぼしなど、数多くの問題が存在し、また、教員によるボランティアに近い形で支えられている点など、特に近年顕在化してきた。」と指摘している。このような課題を解決するために、スポーツ庁は平成30年3月に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定した。これにより、部活動について活動日や活動時間などに是正が実施されている。しかし、一律に導入するガイドラインは、単にクラブ活動を制限するために作用するともいえる。

著者らは、このような状況において、ISO認証のような、部活を評価する認証制度の創設、基準の策定が必要であると考える。これは、部活動の運営、生徒状況を客観的視点、外部の視点を用いて点検し、部活動の状態を評価、分類するというものである。これが実現すれば、状況に応じた個別の対応が可能となる。

この認証制度の基準における生徒理解においては、身体面、および、精神面からの状況把握が挙げられる。このうち、精神的な視点での理解においては、部活動指導プログラムとして質問紙調査がすでに開発されている。そこで、この研究では、生徒の意識に着目した部活動指導プログラムの有用性を検証するため、プログラム導入事例を研究することを目的とした。そして、高等学校バレー部1チームに対して、部活動意識調査を2年間、4回実施し、生徒の意識についてのデータを部活動指導の資料として活用した。

この研究により、部活動指導において、生徒の意識に着目することが、生徒理解、チーム状況の把握、部活動指導にどのような影響を与えるかについて研究を行った。

【方法】1.チームについて：私立高校の女子バレー部を対象とした。チームの構成は、顧問（教諭）が1名、コーチ（教諭）が1名であり、生徒はおおよそ20名であった。

2.顧問について：顧問の競技歴は、中学、高校、大学の10年間であり、指導歴（主顧問）は調査開始時で1年、調査終了時で3年であった。ただし、クラブチームでの競技歴やコーチ（副顧問）としての部活動での指導歴は含んでいない。

3. 生徒の意識に着目した部活動指導プログラムの導入

3.1　意識調査：意識調査は、2017年秋（1回目）、2018年春（2回目）、2018年夏（3回目）、2018年秋（4回目）、計4回実施した。これらの時期は、県大会の直後であり、このチームは、すべての時期において県大会で優勝という結果であった。参加人数は、1回目は15人、2回目は22人、3回目は19人、4回目は18人であった。

3.2　資料の提供：収集した結果から、「部活動いごこち尺度」（来田他 2014)に従い、友人、専門性・競技力、ルール・マナー、貢献、支援、公正さ・配慮の6つの下位尺度得点を算出した。そして、結果については、チームの得点、個人の得点を帳票として作成し、顧問に提供し、説明をおこなった。

3.3　指導方針の策定：顧問は、調査結果より生徒状況を把握し、指導方針、改善案、強化点の策定をおこない、部活動指導で実施した。

【結果】1.ヒアリング結果：顧問は、4回の結果を把握し、部活動指導の資料として活用した。顧問の意見として次の2点が挙げられた。1.チームや生徒の意識（性格、気持ち、状態など）を可視化できることは、チームや部員の理解を深める上で非常に有益であり、指導方針の作成、課題の抽出、目標の設定のための資料として活用できた。具体的には、1回目、2回目の調査で低い値であった「貢献度」について、生徒が自己評価を高められるようミーティングや個別面談で評価の伝達をおこなった。また、相対的に自己評価が低い生徒を把握することは、その生徒に顧問の評価を個別に伝える必要性を示した。2. 生徒の意識に着目した部活動指導プログラムはいろいろな形での活用が可能である。今回は部活動指導のために顧問が用いるというものであったが、チーム全体で共有してチームの目標や改善点を策定する、生徒の個人の自己評価資料とするなどいろいろな活用法が考えられる。

2.平均値±標準偏差：6項目についてのAV±SDをtable1.に示した。友人、専門性・競技力、貢献、公正さ・配慮においては、2017年秋および2018年春が低く、2018年夏および2018年秋が高い値であった。特に、貢献においては、2018年夏に大きく値が向上する傾向がみられた。ルール・マナー、支援においては、2018年春で向上する傾向が見られた。

	1:2017年秋	2:2018年春	3:2018年夏	4:2018年秋
友人	4.32±0.54	4.30±0.98	4.50±0.51	4.48±0.56
専門性・競技力	3.39±0.62	3.36±0.81	3.64±0.51	3.67±0.46
ルール・マナー	3.65±0.71	4.33±0.56	4.11±0.49	4.18±0.44
貢献	2.82±0.95	2.75±0.83	3.66±0.89	3.41±0.65
支援	3.81±0.66	4.00±0.80	3.94±0.61	4.01±0.40
公正さ・配慮	3.64±0.68	4.01±0.85	4.18±0.44	4.24±0.43

table 1.平均値および標準偏差

3.部活動の結果と調査結果

この研究の間、対象チームの結果は、すべて県大会優勝であったが、識調査の値においては、違いが示された。6項目すべてにおいて、2017年秋から2018年秋の1年間で値が向上した。生徒の意識を把握し、その改善を目標とした部活動指導において、値の向上という結果が示された。

【考察】1. 意識調査を部活動指導に導入する意義と成果

この事例研究において、生徒の意識を可視化した資料が部活動を運営する顧問に対し、多くの示唆を与える資料となることが示された。調査結果は、顧問の生徒・チーム理解と一致するものもあったが、自己評価が低い生徒やチーム全体としての課題が可視化されるなど顧問の生徒・チーム理解を補完するものでもあった。また、資料は、部活動指導、目標の策定に有意義であり、さらに再調査により取り組みを評価し、新たな方針を策定するというPDCAサイクルをもたらすことにつながる可能性が示された。

2.部活動に参加する生徒への支援

生徒の個々の意識を可視化し、一覧できる資料を提供することは、顧問だけでなく、第三者にもチーム状況を把握することを可能とする。すなわち、部活動を客観的に状況分析することを実現し、また、生徒への支援もデータに基づいて早期対応することを可能とする。

3.生徒の意識に着目した部活動指導プログラムの有益性

生徒の意識を部活動指導の資料とする事例を検討した結果、この取り組みにより、いくつもの積極的な活動が生み出された。特に生徒支援においては良い取り組みが導き出された。このことから、生徒の意識を可視化するプログラムの有益性が示されたといえる。今後はこの取り組みを継続するとともに、部活動認証制度の創設のための研究を継続していきたい。

【引用文献】

来田宣幸 吉田浩之 原田隆史, 2014, 教育活動としての部活動」を実現するための指導プログラムの開発―学習指導と生徒指導の観点から―, 笹川スポーツ研究助成

（おおかど　こうへい・いとう　まさし・きだ　のりゆき）

小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（3）

－中学生における自己価値確認の効果の再検証－

○埴田健司[1]　小林寛子[1]　磯友輝子[1]　日向野智子[2]　高橋一公[1]（非会員）　角山剛[1]
（[1]東京未来大学モチベーション行動科学部　[2]東京未来大学こども心理学部）

キーワード：自己価値確認　自己評価　学習取組

【目的】

自己評価は学習に対する内発的動機づけや学習行動と関連していることが示されている。例えば，磯他（2017）は小学生を対象とした調査から，自己評価は自己効力感，内発的動機づけを高め，結果として学習行動や成績を高める効果があることを示している。こうした知見から，自己評価の維持・向上は学習に対して促進的な効果を有すると考えられる。

こうした自己評価の効果は，自己評価の維持・向上を目的とした介入方法の検討を試みた研究からも見出せる。例えば，Cohen et al.（2006）は，自己にとって重要なことを考える（自己価値確認）介入が成績に及ぼす影響を検討している。彼らの研究の参加者は白人あるいは黒人の中学生であったが，このうち自己にとって重要なことを考える介入を受けた黒人生徒は，自己にとって重要でないことを考えた黒人生徒に比べ，その後の成績が向上することが示された。また，埴田他（2018）は，自己にとって重要なことを考える介入を行う実験群と，他者にとって重要なことを考える介入を行う統制群を設け，介入前後での自己評価の変化を，小中学生を対象として検討している。その結果，介入前に自己評価が低かった小中学生において，実験群の自己評価が介入後に高まっていたことを報告している。これらの研究知見から，自己価値確認は自己評価の維持・向上をもたらし，結果として学習行動や成績に影響すると考えられる。

以上の知見を踏まえ，本研究では，自己価値確認が自己評価を高めるという埴田他（2018）で見いだされた効果を，中学生を対象として再検証することを目的とした。また，介入前後での自己評価の変化が学習への取り組みに影響するかについても検討することとした。

【方法】

参加者　公立中学1年生111名，2年生130名，計241名。

介入方法　自己価値確認の介入は，普段の生活を振り返るワークとして質問紙に回答する形式で行った。具体的には，5つの事柄（例．優しい人であること，自分の意見や考えをしっかり持つこと）を示し，自分にとって「最も大切」なものを選ばせ，大切な理由と大切に感じる時について記述させた。また，選択した事柄の重要性について5項目（例．自分にとって大事なことだ）で回答させた（4件法）。こうした介入を約1ヵ月の間隔をあけて，2回行った。

効果の測定　1回目の介入前に事前調査を，2回目の介入後に事後調査を実施した。各調査では，自己評価，自己効力感，内発的動機づけ，テスト不安，学習取組を測定した。自己評価（例．自分のことが好きだ），自己効力感（例．学校のテストでよい点をとる自信がある），内発的動機づけ（例．考えたり頭を使ったりすることは楽しい）の測定項目は，磯他（2017）より4項目ずつを選択して用いた。テスト不安の測定には，坂野（1988）を参考に4項目（例．テストのときはいやな気持ちになる）を用いた。学習取組の測定には，梅本・田中（2012）の4項目を，中学生向けに内容を修正して用いた（例．学校でがんばって勉強している）。各項目について，4件法（まったくあてはまらない～とてもあてはまる）で回答を求めた。

手続き　介入および各調査の質問紙は，クラス担任を通じて教室内で一斉に配布して回答を求め，回収した。なお，本研究を含む介入に関する一連の研究は東京未来大学倫理審査委員会で承認を受けている。

【結果】

事前・事後調査に回答しており，2回の介入のうち少なくとも1回は参加した生徒222名（1年生105名，2年生117名）を分析対象とした。事前・事後調査それぞれで，心理指標ごとに該当する項目の合算平均を算出した。

介入前後の変化　事前調査と事後調査の平均値に差が見られるかを検討するため，心理指標ごとに対応のある t 検定を行った。結果を表1に示す。

自己評価の平均値は事前調査よりも事後調査のほうが有意に高くなっていた。その他，テスト不安の平均値は事前調査よりも事後調査のほうが有意に高くなっていた。また，自己効力感では事前・事後の平均値間に有意に近い差が見られ，事後調査のほうが低くなる傾向にあった。

表1．各心理指標の平均値と検定結果

	事前調査	事後調査	t 値
自己評価	2.52 (0.78)	2.59 (0.69)	2.08*
自己効力感	2.10 (0.67)	2.04 (0.70)	-1.72†
内発的動機づけ	2.13 (0.86)	2.14 (0.83)	0.07
テスト不安	2.70 (0.69)	2.82 (0.72)	2.37*
学習取組	3.02 (0.56)	2.97 (0.62)	-1.59

注）（　）内の数値は標準偏差。$^{\dagger}p < .10$, $^{*}p < .05$

学習取組への影響　学習取組に対する各心理指標の影響を検討するため，学習取組を従属変数，各心理指標を独立変数とする重回帰分析を事前・事後調査別に行った。また，各指標の変化量（事後－事前）についても同様の分析を行った。その結果，自己評価はいずれの分析においても学習取組に対する有意な予測因となり，自己評価が高いほど、あるいは高く変化するほど学習取組を促進することが示された。

表2．学習取組に対する各心理指標の標準偏回帰係数

	事前調査	事後調査	変化量
自己評価	.212**	.322**	.142*
自己効力感	.146†	.045	-.007
内発的動機づけ	.196*	.242**	.155*
テスト不安	.256**	.284**	.185**
adj. R^2	.225**	.228**	.078**

注）$^{\dagger}p < .10$, $^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

【考察】

自己価値を確認する介入によって，自己評価が高くなることが示された。学習取組において介入前後の差は見られなかったものの，介入前後での自己評価の変化は学習取組の変化に影響していた。この結果は，自己評価を高めることで学習への取り組みが促されることを示唆するものである。媒介過程や調整要因について検討する余地はあるものの，自己価値確認が自己評価や学習行動に対して促進的に作用することが示されたといえよう。

◎ 本研究は，平成30年度墨田区教育委員会すみだ教育研究所と東京未来大学モチベーション研究所の共同研究で実施された研究の一部である。

（はにた けんじ・こばやし ひろこ・いそ ゆきこ・ひゅうがの ともこ・たかはし いっこう・かくやま たかし）

小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（4）

－小学生における利用価値確認の効果の再検証－

○小林寛子[1]　埴田健司[1]　磯友輝子[1]　日向野智子[2]　高橋一公[1]（非会員）　角山剛[1]
([1]東京未来大学モチベーション行動科学部　[2]東京未来大学こども心理学部)

キーワード：利用価値確認　課題価値　小学生

【目的】

私たちが学習に取り組む一つの理由として，当該学習に価値を感じることが挙げられる。Eccles and Wigfield（1985）によれば，そうした学習の価値は，複数の下位要素から構成されるという。学習することの楽しさやおもしろさである「興味価値」，キャリアや日常生活上の有用性である「利用価値」，当該学習に取り組んで成功することが望ましい自己像の獲得につながると考える「獲得価値」である。また，学習への取り組みを抑制する負の価値として，学習の負担感である「コスト」も概念化されている。

さらに，課題価値の認知に介入し，学習を促そうとする試みも多い。例えば，Hulleman and Harackiewicz (2009) は，「科学の授業で学んだ事柄がどのように生活に役立つか」について記述するよう求めることによって，科学学習の利用価値の認知向上を試みた。介入の対象となったのは高校生であり，まとめを作成するよう求められた生徒との比較で，指導の効果が検討された。その結果，もともと科学学習に対する自信が低かった生徒は，科学学習の利用価値を記述した場合に，科学学習のまとめを作成した場合よりも，指導後の科学に対する興味や成績が高かったことが示されている。小林・埴田・磯・角山（2018）では，この学習の利用価値を記述させるという介入を，小中学生向けのワークを作成して実施し，小学４年生にも有効であることを明らかにした。

以上の知見を踏まえ，本研究では，小林他（2018）で見られた，学習の利用価値を記述するワークの効果を再検討することを目的とする。

【方法】

参加者　公立小学４年生57名，５年生48名であった。

介入方法　参加者には，理科学習の利用価値を記述するワークに取り組んでもらった。具体的には，理科学習で学んだトピックのうち１つ以上を選んで，まとめを作るよう指示した。次いで，その内容が生活のどのようなところで使われ，役に立っているかを考えて記述するよう求めた。介入は約１ヶ月の間隔をあけて，２回行った。

効果の測定　１回目の介入前に事前調査を，２回目の介入後に事後調査を実施した。調査では，理科の課題価値の認知について，利用価値の認知（例：理科で勉強する内容は，身の回りで役に立っていると思う）３項目，興味価値の認知（例：理科で勉強する内容はおもしろい）４項目，および，負の価値である努力コストの認知（例：理科で勉強する内容を理解するためには，努力が必要だ）３項目で測定した。また，学習行動の測定に，興味追求（例：理科で学んだことを，家や図書館でも調べようと思う）を問う２項目を用いた。その他，理科学習に対する自己効力感４項目も尋ねた。利用価値および興味価値の認知と興味追求は解良・中谷（2014），努力コストの認知は解良・中谷（2016），自己効力感は磯・小林・角山・大坊（2017）で作成された項目を，小学生の理科学習向けに修正して用いた。各項目について，４件法（まったくあてはまらない～とてもあてはまる）で回答を求めた。

手続き　事前事後調査は，クラス担任を通じて教室内で一斉に配布して回答を求め，回収した。介入は，理科の授業中にクラス担任の説明のもとで実施した。なお，本研究を含む介入に関する一連の研究は東京未来大学倫理審査委員会で承認を受けている。

【結果】

事前事後調査と２回の介入全てに参加した４年生51名，５年生43名を分析対象とした。各心理指標について，該当する項目の合算平均を調査別に算出した。そして，事前調査と事後調査の平均値に差が見られるかを検討するため，対応のある t 検定を行った。学年によって理科の学習内容が異なり，利用価値確認ワークの内容も異なってくるため，分析は学年ごとに行った。基本統計量と検定結果を Table 1，2 に示す。

小学４年生においては，利用価値の認知，興味価値の認知および努力コストの認知で，事前調査から事後調査にかけて平均値の有意な低下が見られた。小学５年生においては，興味価値の認知の平均値が，事前調査よりも事後調査で有意に高くなっていた。

Table 1　各心理指標の平均値と検定結果（小学４年生）

	事前調査	事後調査	t 値
利用価値	3.73 (0.51)	3.48 (0.71)	$t(48) = -3.58^{**}$
興味価値	3.81 (0.35)	3.73 (0.52)	$t(50) = -0.20^{*}$
努力コスト	3.10 (0.62)	2.95 (0.71)	$t(50) = -2.02^{*}$
興味追求	3.18 (0.59)	3.15 (0.70)	$t(49) = -0.40$
自己効力感	3.09 (0.57)	3.08 (0.63)	$t(49) = -0.19$

注）（ ）内の数値は標準偏差。$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$

Table 2　各心理指標の平均値と検定結果（小学５年生）

	事前調査	事後調査	t 値
利用価値	2.83 (0.80)	3.01 (0.84)	$t(41) = 1.60$
興味価値	2.87 (0.80)	3.08 (0.70)	$t(42) = 3.39^{**}$
努力コスト	2.69 (0.67)	2.65 (0.84)	$t(41) = -0.36^{*}$
興味追求	2.38 (0.76)	2.52 (0.78)	$t(41) = 1.41$
自己効力感	2.47 (0.82)	2.51 (0.76)	$t(42) = 0.67$

注）（ ）内の数値は標準偏差。$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$

【考察】

理科の利用価値を記述するワークに取り組むことによって，課題価値の認知が高まる効果が見られた。小学４年生では努力コストという負の価値の認知が低下し，小学５年生では興味価値の認知が向上した。学習内容をまとめて日常生活と結びつけるという学習方法を経験することで，理科を学ぶのは大変そうだという漠然とした負担感が下がるのであろう。また，学習と日常の結びつきを確認することは，理科学習の楽しさやおもしろさを感じることにもつながると考えられる。

一方で，小学４年生では，利用価値および興味価値の認知の平均値が，事前調査から事後調査にかけて低下したことが示された。しかし，この２つの指標の事前調査における平均値は非常に高く，事後調査にかけての点数の低下は回帰効果ではないかと考えられる。また，本研究ではワークの効果が課題価値の認知に留まり，興味追求といった学習行動の向上に至る結果は見られなかった。今後は，課題価値の認知と学習行動との関連について検討していくことが課題である。

◎ 本研究は，平成30年度墨田区教育委員会すみだ教育研究所と東京未来大学モチベーション研究所との共同研究の一部である。
（こばやし　ひろこ・はにた　けんじ・いそ　ゆきこ・ひゅうがのともこ・たかはし　いっこう・かくやま　たかし）

セルフ・コントロール，情報処理スタイル および過剰適応の関係

○小橋眞理子[1)]・井田政則[2)]
([1)] 立正大学大学院心理学研究科・[2)] 立正大学心理学部)
キーワード：セルフ・コントロール，情報処理スタイル，過剰適応.

【研究の目的】セルフ・コントロール（以下，SC）とは，直接的な外的強制力がない場面で，自発的に自己の行動を統制することを言う。杉若（1995）はこの SC の測定のために Redressive-Reformative Self-Control Scale（以下，RRS）を開発し，以下の 3 因子構造であることを確認した；改良型 SC（将来の結果を予測して満足遅延することでより価値ある結果に近づこうとするために実行されるもの），調整型 SC（ストレッサーによって妨害された機能の回復を求めて現時点でのダメージ除去のために実行されるもの），外的要因による行動のコントロール（以下，外的要因）（他者依存および自発的な行動に対する消極性）。しかし杉若はこの外的要因を SC とは異なるレベルでの対処方略として位置つけている。

一方，二重過程モデルをパーソナリティ理論に発展させた認知的経験的自己理論によると，人は 2 つの情報処理様式を持ち（合理的処理・直観的処理），この処理を経て自己観や現実観を構築する（Epstein，1994）。合理的レベルの活性化である合理的処理では，分析的・統制的・抽象的でロジック的処理を行い，経験的レベルの活性化である直観的処理では，全体的・自動的・具体的でヒューリスティックスな処理を行う。この認知的経験的自己理論に立脚すると，前述の RRS における満足遅延と関係する改良型 SC は合理的処理と，機能回復・ダメージ除去と関係する調整型 SC は，直観的処理と関係するのではないかと考えられる。また他者依存と関係する外的要因では，合理的処理および直観的処理のいずれも関係しないことが考えられる。なお，この外的要因では，自らの情報処理様式を用いることなく他者依存的であることから外的な要因すなわち環境に対する過剰な適応，すなわち過剰適応と関係することが考えられる。そこで本研究では，SC と情報処理様式との関係を検討するとともに，過剰適応との関係をも併せて検討することを目的とした。

【方法】調査対象者：大学生 237 名（分析にあたり欠損データは各項目の平均値で補完した），男性 87 名・女性 149 名・無回答 1 名，平均年齢＝18.95 歳　SD＝0.89。**調査期間**：2019 年 5 月。**使用尺度**：1.RRS（杉若，1995）：改良型 SC・調整型 SC，外的要因の 3 因子。2.情報処理スタイル（合理性 - 直観性）尺度（内藤まゆみ他，2004）：合理性能力・合理性態度・直観性能力・直観性態度の 4 因子。3.大学生用過剰適応尺度（石津他，2011）：自己抑制・自己不全感・人から良く思われたい欲求・他者配慮・期待に沿う努力の 5 因子。

【結果と考察】RRS と情報処理スタイルおよび過剰適応尺度の下位尺度因子間の相関分析を行った（Table1）。その結果，RRS と情報処理スタイル尺度間では，改良型 SC と合理性能力・合理性態度とが有意な正相関，調整型 SC と直観性能力・直観性態度とが有意な正相関であり，外的要因と合理性能力・直観性能力とが有意な負相関であった。RRS と過剰適応尺度間では，改良型 SC・調整型 SC ともに自己不全感とは負相関であり，外的要因と自己抑制・人から良く思われたい欲求・期待に沿う努力・自己不全感とが有意な正相関であった。

Table2　情報処理スタイル、過剰適応の各因子間の相関係数

	自己抑制	自己不全感	人から良く思われたい欲求	他者配慮	期待に沿う努力
合理性能力	-.233 **	-.309 **	-.133 *	.089	.069
合理性態度	-.214 **	-.232 **	-.101	.050	.047
直観性能力	-.282 **	-.313 **	-.137 *	-.023	-.014
直観性態度	-.290 **	-.199 **	-.025	-.087	-.110

次に情報処理スタイルと過剰適応尺度の下位尺度因子間の相関分析を行った（Table2）。合理性能力・合理性態度および直観性能力・直観性態度と自己抑制および自己不全感とが有意な負相関であった。

さらに重回帰分析を行った結果，有意であった影響を Fig. 1 に示した。改良型 SC は期待に沿う努力に正の影響，調整型 SC は自己不全・期待に沿う努力に負の影響，外的要因は自己不全・人から良く思われたい欲求・期待に沿う努力に正の影響があった。

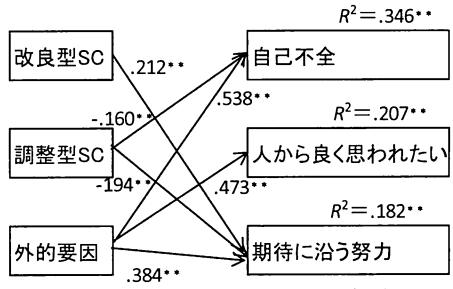


Fig.1　RRSと過剰適応の重回帰分析結果

以上のことから改良型 SC・調整型 SC そして外的要因による行動のコントロールには，異なる情報処理スタイルが関係することが考えられ，また外的要因による行動のコントロールは過剰適応につながることが示された。

セルフ・コントロールとは，自己を『抑制』することではなく，本来の持続的なセルフ・コントロールの実施には，自己の情報スタイルの実行が重要であろう。

（こばしまりこ・いだまさのり）

Table1　セルフ・コントロール、情報処理スタイル、過剰適応の各因子間の相関係数

	情報処理スタイル				過剰適応				
	合理性能力	合理性態度	直観性能力	直観性態度	自己抑制	自己不全感	人から良く思われたい欲求	他者配慮	期待に沿う努力
改良SC	.226 **	.200 **	.072	-.035	-.084	-.206 **	.016	.118	.090
調整SC	-.051	.061	.221 **	.242 **	-.111	-.228 **	-.017	-.082	-.170 **
外的要因	-.246 **	-.063	-.261 **	-.142 *	.330 **	.565 **	.456 **	.165 *	.365 **

一人ひとりに合わせた新人教育

板倉悠斗、市川春菜、大塚涼平、櫻井怜奈、杉山怜香、高橋香貴恵、外島裕
（日本大学商学部）

キーワード：　若年労働者の早期離職、コーチング、ソーシャル・スタイル

【目的】近年、日本の若年労働者の離職率は、高くなっている問題は深刻である。若年労働者の多くは企業に対して高いモチベーションを持ち入社するにも関わらず、労働条件や人間関係の問題から入社してから３年以内に離職する割合が、中学卒業者が約７割、高等学校卒業者では約５割、大学卒業者でも３割にも上る。『新規学卒者の離職概況』（厚生労働省、平成25年）では早期離職の主な理由として人間関係が大きく挙げられている。そこで上司による部下一人一人の個性に合わせたコーチングを行うことにより、部下である従業員にとって「働きやすい職場」、部下自身から企業に愛着を持つ「働きたい職場」を作り、魅力ある企業を作り出すことができれば若年労働者の離職率を低下させることができると考えた。

【方法】部下一人一人の個性を捉えた丁寧なコーチングをするために、私たちはコーチングの①＜傾聴＞②＜質問＞③＜承認＞を進める基本モデルであるGROWモデルと、他者や自身の話し方・表情の現れ方から、行動を四つのスタイルに分けるソーシャル・スタイルを組み合わせれば、上司は部下に対して適格なコミュニケーションが取れ、部下からも上司に対して言いたいことを伝えることができる良い垂直的交換関係が築けると考えた。コーチングの基本モデルである『GROWモデル』とは、Goal（目標の明確化）、Reality(現実)、Resource(資源)、Options（選択）、What will you do?（意志）といった人の考え方に沿ったコーチングをすることである。(図１)

GROWモデルを使ったコーチングを行うことで、部下の目標の立て方・目標に対しての現状の捉え方・目標に対しての選択・目標への意志など具体的な項目をもとにコーチングを行えるので、上司は部下に対しコーチングを行いやすくなる。しかし先に述べたように、人は様々な仕事の進め方のスタイルや考え方、価値観を持つので、GROWモデルに沿ったコーチングを行うだけでは、効果が十分に発揮されないこともあるのではないかと考えた。そこで、他者や自分の言動や表情の現れ方から行動を四つのスタイルに分けるソーシャル・スタイル（図２）を用いることで、部下の個性を理解したうえでコーチングを行えるので、コーチングの効果を最大限に引き出せると考えた。例として、主導型の部下は目標の明確化は立て易いが、少ない情報量で決定してしまうため、上司は選択肢を広げるための質問を行うなどのアプローチをするのがよい。

【結果】離職理由の大きな一因として「人間関係が良くない」ということが挙げられている。上司は部下に大きな影響を与えるため、私たちは上司と部下の人間関係に注目した。コーチングの①＜傾聴＞②＜質問＞③＜承認＞を進めるための具体的なモデルであるGROWモデルを使うことで、目標や現状・選択・意思などの具体的な項目があることにより上司は部下に対してコーチングを進めやすくなる。しかし、人は様々な仕事の進め方のスタイルや考え方、価値観を持つので目標の立て方や目標に対する現状の捉え方・目標までの選択の仕方・目標への意思決定なども、人それぞれ変わってくる。そこで私たちは、他者の言動や表情の表れ方から行動を理解するソーシャル・スタイルと組み合わせることで様々な仕事の進め方のスタイルや考え方、価値観を持った部下に対応した上司のアプローチを提案した。この提案が企業に取り入れられることによって、人間関係の悩みが改善され、上司と部下の理解が高まり、部下の組織コミットメントが高まることで、離職率は低下すると考える。

【考察】人間関係が改善されることによって、企業に勤める人が「この企業にいたい」と思い、組織コミットメントが高まる。それにより、部下は給料や業績を重視するだけではなく、企業に愛着を持ち自発的に他人の行動を援助する組織市民行動が行われる。そのため、組織内で協力関係が生まれ、集団のモチベーションも向上し、会社全体の仕事が円滑に進み会社の業績が上がる。このように一人一人に合ったコーチングを行うことで様々な効果が生じる。企業はこのことを認識しコーチングをもっと定着させるべきだと私たちは考えた。このように一人一人に合ったコーチングを行うことで様々な効果が生じる。企業はこのことを認識しコーチングをもっと定着させるべきだと私たちは考えた。コーチングをより定着させるためには、Off-JTで上司に対してソーシャル・スタイルと組み合わせたコーチングの仕方を教育し、OJTで部下に対して実践する。また、上司の評価項目に「コーチングを実践しているか」を入れたりするなどの具体的取り組みが必要である。実際に具体的取り組みを行うには、労力や時間が必要になるが、企業にとっても働く人にとっても良い効果をもたらすため実践するべきだと私たちは考えた。

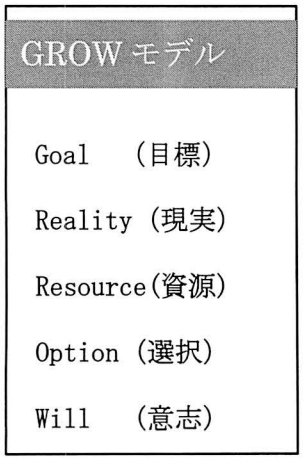


図１：GROWモデル

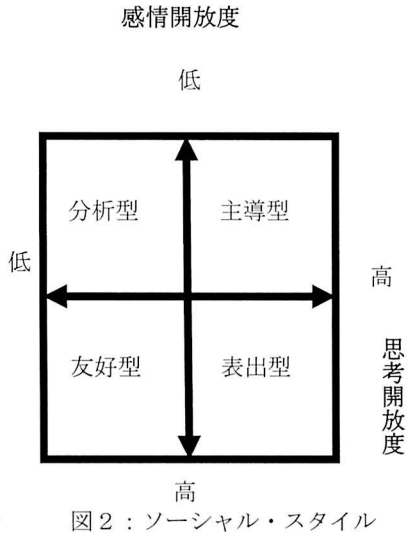


図２：ソーシャル・スタイル

【引用文献】1）田中堅一郎　編（2015）『産業・組織エッセンシャルズ[改訂三版]』ナカニシヤ出版
2）厚生労働省（平成25年）『新規学卒者の離職状況』
3）本間正人（2001）『[入門]ビジネスコーチング』日経文庫
4）本間正人・松瀬理保（2006）『コーチング入門』日経文庫
5）Robert H. Bolton, Ph. D.,/Dorothy Grover Bolton, MA 著　上野一郎監訳　宮城まり子訳（1985）『対人能力を伸ばせ』産業能率大学出版部
6）日本ウィルソン　ラーニング株式会社(1983)『MIR情況対応マネージメント　アクションプランガイド』日本ウィルソン　ラーニング株式会社
（いたくらゆうと・いちかわはるな・おおつかりょうへい・さくらいれな・すぎやまれいか・たかはしかきえ・としまゆたか）

ストレスフルな出来事への意味づけや対処可能感とSOC（首尾一貫感覚）の関係について

○銅直優子[1]
([1]流通科学大学　人間社会学部　人間社会学科)

キーワード：SOC（首尾一貫感覚)、ストレスフルな出来事、意味づけ

【目的】ストレスフルな出来事に直面した際にその出来事から受けるストレス強度は様々である。その出来事を非常に脅威であると感じる人もいれば、それほど脅威でないと感じる人もいる。ストレス対処能力の一つとして、Antonovsky(1987)によって提唱された、首尾一貫感覚（Sense of Coherence：SOC）がある。SOCは、ストレスフルな出来事に対しでも自分にとっての意味を見いだす「有意味感」や出来事を理解できる感覚の「把握可能感」や対処できる感覚の「処理可能感」の3要素から構成されている。SOCの能力の違いは、ストレスフルな出来事を上手く乗り越えられるかどうかに関係してくる。SOC研究では、具体的な場面を設定しその反応の違いを比較したもの見られないため、本研究では、具体的な出来事を取り上げていく。ストレスフルな出来事への反応を知るための方法として、回想法が用いられる場合もあるが、仮想場面を用いる場合もある。本研究では、体験内容を統一するため仮想場面を用い、ストレスフルな出来事における対処感覚やその出来事への意味づけの違いとSOC能力との関連をみることを目的とした。SOCはストレス対処能力の一つであることから、SOC能力の高い者は低い者よりも、ストレスフルな出来後に対して意味づけを行い、その出来事に対する対処感覚が高くなると考える。

【方法】対象と調査時期：対象は、関西私立A大学1年生で心理学関連講座の受講生72名（男性51名，女性21名）であった。調査時期は、2019年5月である。調査用紙：〔SOCスケール〕Antonovsky(1987)が作成した13項目を山崎ら(2001)が日本語に翻訳したものを使用した。回答方法は7件法である。〔仮想場面〕上條・湯川(2014)を参考に「学校」、「家族」、「対人関係」の3場面を作成した。「学校」に関する出来事は就職活動における最終面接場面の失敗、「家族」に関する出来事はパートナーが不慮の事故による他界、「対人関係」に関する出来事は恋人との別れに関する内容である。各場面195文字から213文字の範囲で構成し、主人公の性別は、回答者が主人公に同一視し易いように性別が特定されないようにした。〔仮想場面に対する調査項目〕各場面の主人公の立場で回答してもらった。出来事への「脅威」の程度については0～100で回答してもらい、出来事についての「不快」の程度、「未然防止可能性」(未然防止)、「他者からの助けでこの出来事に乗り越えられる可能性」(他者資源)、「自分の力で乗り越えられる可能性」(自己資源)、「結果の理由」(理由）と「この出来事への意味づけ（意味)」については5件法で回答してもらった。また、「この出来事が実際に起こる可能性」(頻度）については、回答者の立場で5件法にて回答してもらった。

調査手続き：仮想場面を読み上げ、各自調査項目に回答してもらった。各仮想場面に対して、不快感が強い場合には回答をやめるよう説明した。

【結果】場面の比較　調査対象者が場面の違いをどのように認知しているか確認するために、場面を独立変数（3場面）とし、「脅威」、「不快」、「未然防止」、「頻度」の得点を従属変数とし、1要因の分散分析を行った結果、すべての場面において有意差が認められた。

SOCの能力の高低と場面への脅威、意味づけと対処可能感の関係　3つの全ての場面に対する「脅威」、「理由」、「意味」、「他者資源」、「自己資源」でSOCの高群と低群の違いを見るために、t検定を行った。平均値と標準偏差は、表1の通りである。「他者資源」(t(214)=2.592, p<.05)と「自己資源」(t(214)=1.994, p<.05)で有意差が認められた。「脅威」(t(214)=1.727, p<.10)においては有意傾向であった。以上のことから、SOC高群はSOC低群よりも、ストレスフルな出来事に直面した場合、その状況を他者からの助けで乗り越えられると感じ、また自分自身でも乗り越えられると感じることが分かった。出来事に対してどの程度脅威に感じたかについては、SOC高群はSOC低群よりもその出来事に対する脅威の強度が低い傾向にあることが分かった。

表1　ストレス3場面込みでの平均値と標準偏差（SOC高群N=105, SOC低群N=111）

	脅威			理由		意味		他者資源			自己資源		
	低群	高群		低群	高群	低群	高群	低群	高群		低群	高群	
平均値	75.04	69.26	+	4.03	3.81	3.49	3.43	3.52	3.89	*	3.06	3.40	*
標準偏差	22.86	26.07		1.09	1.12	1.22	1.17	1.07	1.02		1.31	1.19	

**p<.001, *P<.05, +<.10・・・SOC高群と低群でのt検定結果

場面ごとの比較　ストレスフルな出来事の種類によって「脅威」、「理由」、「意味」、「他者資源」、「自己資源」の違いがあるかを見るために、SOC高群と低群でt検定を行った。平均値と標準偏差は表2の通りである。学校場面では、「自己資源」(t(70)=2.057, p<.05)で、対人関係場面では、「他者資源」(t(70)=2.812, p<.01)で有意差が見られた。以上のことから、SOC高群がSOC低群よりも就職面接での失敗体験は自分の力で乗り越えられると感じており、恋人との別れの体験は他の人の力で乗り越えられると感じており、**場面によって**利用可能資源が違うことが分かった。

表2　ストレスの3場面ごとの平均値と標準偏差（SOC高群N=37, SOC低群N=35）

場面		脅威		理由		意味		他者資源			自己資源		
		低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群		低群	高群	
学校	平均値	64.57	55.22	4.11	4.00	3.80	3.76	3.63	3.89		3.34	3.84	*
	標準偏差	24.66	23.50	0.90	1.00	0.96	0.93	1.00	0.97		1.08	0.96	
家族	平均値	93.43	89.19	3.71	3.32	2.8	2.86	3.29	3.54		2.51	2.76	
	標準偏差	10.77	12.61	1.34	1.31	1.43	1.25	1.25	1.12		1.52	1.21	
対人関係	平均値	67.11	63.38	4.26	4.11	3.86	3.68	3.66	4.24	**	3.31	3.59	
	標準偏差	18.68	26.82	0.92	0.84	0.91	1.13	0.91	0.86		1.16	1.12	

**p<.001, *P<.05・・・SOC高群と低群でのt検定結果

【考察】学校場面の就職活動は自分の努力がより必要とされる場面では自己資源で乗り越えられると感じ、恋人との別れのような対人場面では、就職活動よりも自己努力の効力が少ない状況であるから他者資源により乗り越えられると感じたと思われる。今回、出来事への意味づけにおいては違いが見られなかったのは、設問文や場面設定が影響したと考える。

【引用文献】

Antonovsky A(山崎喜比古・吉井清子 監訳)『健康の謎を解く：ストレス対処と健康保持のメカニズム)』(有信堂, 2001)
上條菜美子・湯川進太郎 (2014) ストレスフルな出来事に対する主観的評価と意味づけ動機―場面想定法を用いた基礎的検討―『カウンセリング研究』47, 137-146.

（どうべたゆうこ）

女性における醜形恐怖心性と Big Five との関連

○大村美菜子 [1)]
([1)]目白大学人間学部心理カウンセリング学科)
キーワード：醜形恐怖心性，Big Five

【問題と目的】

自分の容姿にとらわれる醜形恐怖症という病態が注目を集めているが，健常者においても，容姿にこだわりをもつ若者が増えてきている。大村他(2014)は，健常者における容姿に対する強いこだわりを醜形恐怖心性と名づけ,『自己の容姿に対する強いこだわりであり，容姿全体あるいは一部分に強い関心を向ける傾向』と定義している。

醜形恐怖心性の類似概念では、Brown et al.(1990)が作成した MBSRQ（Multidimensional Body-Self Relations Questionnaire の下位尺度である「容姿に対する評価(Physical Appearance Evaluation)」がある。「容姿に対する評価」とは、自己の容姿に対する主観的な評価であると同時に「ほとんどの人が、私をきれい・かわいいと思っていると思う」など他者の視点を意識した概念でもある。醜形恐怖心性も「容姿に対する関心集中」と「容姿に対する評価懸念」の２因子から構成されており、他者の視点が入っている点でも共通する。

「容姿に対する評価」と Big Five との関連を検討した研究では、「容姿に対する評価」が低い人と 5 因子のうち「情緒不安定性」に強い関連があることが報告されている（Kvalem et al, 2006)。一方で「容姿に対する評価」が高い人とと外向性の間に関連があったことも報告されている。

このことから日本の女性においても醜形恐怖心性と「情緒不安定性」も関連が見られることが予測される。そこで本研究では醜形恐怖心性と Big Five の関連を検討することを目的とする。

【方法】

<u>調査対象・時期</u> ： 2016 年 7 月～10 月，2017 年 5～11 月に，複数の大学の心理学関連の授業において，授業時間内の一部を用いて調査を行なった。女子学生 253 名が調査に参加した。

<u>分析に用いた尺度</u> ：

○醜形恐怖心性尺度（9 項目）

容姿に対する評価懸念は「人から褒められたいから容姿に気を使う」「人に嫌われたくないから容姿に気を使う」などの 5 項目，容姿に対する関心集中は「容姿よりも体力があるかどうかに関心がある（逆転項目)」「私は自分の容姿についてはめったに考えない（逆転項目)」などの 4 項目，合計 9 項目から構成されている。再検査信頼性および収束的妥当性，弁別的妥当性，併存的妥当性が確認されている。回答は“非常にあてはまる（5)”から“全くあてはまらない（1)”までの 5 段階評定で求めた。

○Big Five 尺度（60 項目）

和田（1996）による Big Five 尺度（60 項目）を用いた。この尺度は,「外向性」「情緒不安定性」「開放性」「誠実性」「調和性」の 5 下位尺度からなる。回答は“非常にあてはまる(7)”から“まったくあてはまらない(1)”までの 7 段階評定とした。

【結果と考察】

醜形恐怖心性と Big Five の 5 つの下位因子との単純相関係数を求めた（Table 1)。

醜形恐怖心性の「全尺度」および「容姿に対する評価懸念」と Big Five の「情緒不安定性」との間に正の相関が認められた（順に r=.19，.25)。また「容姿に対する関心集中」と,「外向性」との間に r=.14 と弱い負の相関が認められた。他の 4 つのパーソナリティ特性と醜形恐怖心性との関連は認められなかった。

醜形恐怖心性の「全尺度」および「容姿に対する評価懸念」と「情緒不安定性」に関連が見られた一方で「容姿に対する関心集中」は「情緒不安定性」と関連が見られなかった。すなわち、他者からの評価を懸念して容姿にこだわりを示した場合にのみ情緒不安定になることが示された。また「容姿に対する関心集中」と「外向性」に関連が見られた一方で「容姿に対する評価懸念」は「外向性」と関連が見られなかった。このことから、他者からの評価を懸念せず容姿にこだわりを示している場合にのみ社交的になることが示唆された。

Table 1 醜形恐怖心性とBig Fiveとの単純相関

	醜形恐怖心性		
	全尺度	容姿に対する評価懸念	容姿に対する関心集中
外向性	.07	.01	.14 *
情緒不安定性	.19 **	.25 **	.03
開放性	.01	-.03	.07
誠実性	.04	.03	.06
調和性	-.01	.00	-.03

* p<.05, ** p<.01

【主な引用文献】

大村美菜子・小島弥生・中田洋二郎・沢宮容子(2014). 女性の醜形恐怖心性尺度の作成　日本応用心理学研究 40, 186-193.

（おおむら みなこ）

主観的ウェルビーイング研究の動向

角野 善司
（高崎健康福祉大学 人間発達学部）
キーワード：主観的ウェルビーイング，レビュー，人生に対する肯定的評価尺度

筆者は、1998年の第65回大会で「主観的ウェルビーイング研究の現況と今後」と題した発表を行った（角野,1998）。それから20年余が経過した今、改めて近年の研究の動向を概観するとともに、今後の研究の在り方について論じていく。

角野（1998）は、それまで、主観的ウェルビーイング研究は、老年学・医療看護・福祉などの分野で多く行われてきたこと、心理学全体を見た場合、主観的ウェルビーイングのようなポジティブな心理的側面の研究より、不安・抑うつなどのネガティブな心理的側面に関する研究が圧倒的に多いことを指摘した。そして、その最大の理由は、ネガティブな心理的側面が、心理臨床の場において切迫した問題となることにあるだろうとし、そのうえで、ポジティブな心理的側面はネガティブな心理的側面と関連しつつも、その欠落としてでは捉えきれず、主観的ウェルビーイングのようなポジティブな心理的側面の更なる研究が必要だと主張した。

その後の20年間の主観的ウェルビーイングに関する国内論文数の年次推移は図1に示すとおりである。2000年前後は年間30件台であったが、近年では70件台、80件台と、着実に論文件数が増えており、この分野への研究関心が高まってきた様子が読み取れる。

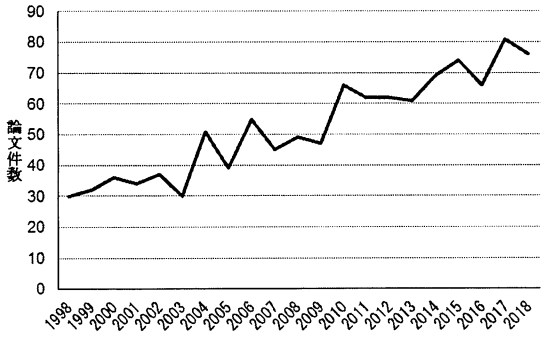


図1　主観的ウェルビーイング関連国内論文数[1)]の年次推移
注　1) CiNiiを用い、「主観的ウェルビーイング　OR　主観的幸福　OR　subjective well-being」で検索。

合わせて、表1には、1998年と2018年の主観的ウェルビーイングに関する国内論文数を分野別に示した。1998年には、角野（1998）の指摘するとおり、医療・看護・保健分野および福祉分野での研究が合わせて8割であった。これが2018年になると、それらの分野の論文数に大きな変化はないが、それ以外の分野の論文が顕著に増加し、7割以上を占めるに至った。このように心理学の広い分野における主観的ウェルビーイング研究の拡がりは、Seligman（1998）のAPA会長としての講演を一つの大きなきっかけとしたポジティブ心理学の勃興の流れの上にあるものとも言えよう。

2018年の研究を概観すると、主観的ウェルビーイングをレジリエンスの関連要因として用いた児玉ら（2018）や、性格検査の妥当性検討のために用いた岩佐・吉田（2018）など、関連他分野においても主観的ウェルビーイングが重要な概念として認識されていることが窺われる。

表1　主観的ウェルビーイング関連国内論文数の分野別比較

	1998年		2018年	
医療・看護・保健分野	8（	27%）	5（	7%）
福祉分野	16（	53%）	17（	22%）
内、高齢者対象	*15*（	*50%*）	*14*（	*18%*）
上記以外の分野	6（	20%）	54（	71%）
内、未就学児対象			*1*（	*1%*）
児童対象			*1*（	*1%*）
青年対象	*5*（	*17%*）	*20*（	*26%*）
成人対象	*2*（	*7%*）	*28*（	*37%*）

また、表1に見るように大きな割合を占めるのが、主観的ウェルビーイングを用いて青年期・成人期の発達・適応を検討する研究である。例えば、福島・沼山（2018a,b）は、中年期における子どもの有無と世代性・夫婦関係について、主観的ウェルビーイングとの関係から検討し、世代性行動が世代性関心を高め、さらに世代性関心が主観的ウェルビーイングを高めるという示唆などを得ている。諸研究は、主観的ウェルビーイングがこの領域において有用であることを示しており、今後とも研究が重ねられていくであろう。

さらに、寺田（2018）はインターネットの利用、安達・武藤（2018）はInstagramの利用と主観的ウェルビーイングの関連を調べている。このような今日的な課題にも、主観的ウェルビーイングの観点を有効に用いることができる。

いずれの分野においても、更に研究を発展させていくことが社会の期待に応えることになろう。

＝ 文献 ＝

安達悠子・武藤千晶　2018　大学生のInstagramの利用と主観的幸福感との関連　東海学院大学紀要（12), 117-122.
福島朋子・沼山博　2018a　子どもを持たない中年期成人における世代性と主観的幸福感　心理学研究　89,551-561.
福島朋子・沼山博　2018b　中年期における子どもの有無と夫婦関係：主観的幸福感との関係から　応用心理学研究　44(2), 103-112.
岩佐一・吉田祐子　2018　中高年者における「日本語版Ten-Item Personality Inventory」（TIPI-J）の標準値ならびに性差・年齢差の検討　日本公衆衛生雑誌　65, 356-363.
児玉壮志・米田龍大・安藤陽子・小川克子・木口幸子・志渡晃一　2018　高等教育機関に所属する学生のレジリエンスとその関連要因　北海道医療大学看護福祉学部学会誌　14(1), 65-71.
Seligman,M.E.P.　1998　Building human strengths: Psychology's forgotten mission.　APA Monitor, 29, January, 2.
角野善司　1998　主観的ウェルビーイング研究の現況と今後　日本応用心理学会第65回大会発表論文集，149.
寺田好秀　2018　インターネットの利用が幸福感に与える影響　情報教育ジャーナル　1(1), 66-69.

（すみの　ぜんじ）

擬人化エージェントを用いたカウンセリングの可能性に関する研究

○岩﨑和子[1]、来田宣幸[2]
([1]京都工芸繊維大学大学院、[2]京都工芸繊維大学)

キーワード：擬人化エージェント・カウンセリング・傾聴

【目的】擬人化エージェントとは、人や動物などの姿をした画像や物体があたかも人間のような振る舞いをするインターフェイスであり、人間とのコミュニケーションツールとして活用の機会が広がっている。特に、ヒト型ロボットと人間とのコミュニケーションや自動認識による音声対話型エージェントなど、様々な領域での研究が進められている。これらの研究の中で、擬人化エージェントを用いた面接によって、一部の被面接者の発話時間や沈黙時間に改善がみられたことが報告されている。カウンセリング場面において、カウンセラーはクライエントに対して緊張させず、話しやすい環境を作ることが必要である。そこで、擬人化エージェントを用いることで、クライエントの発話などに効果が期待できるのではないかと考え、本研究では擬人化エージェントによるカウンセリングのシステムを構築し、自由記述式の質問紙調査によってその可能性について検討することを目的とした。

【方法】本調査を実施するにあたり擬人化エージェント・カウンセリングのシステムを構築した。ノートパソコンのフロントカメラでカウンセラーの表情を読み取り、FaceRig を用いてリアルタイムでアバターに表情を反映させた。音声についてはボイスチェンジャ（VT-4、Roland 社製）を用いて、カウンセラーが発生した音声をハードウェアによる音声変換をおこなった。カウンセラーとクライエントの遠隔コミュニケーションには Skype を用い、カウンセラーの表情と音声は FaceRig とボイスチェンジャによって擬人化エージェントとして、クライエントの持つノートパソコンの画面に表示させた。このとき、クライエントにはカウンセラーの素顔や肉声は一切届かないようにした。一方、クライエントの表情や肉声については加工することなく、カウンセラーのノートパソコンに表示させるようにした。

システムの試行と調査は、一般の学生等 16 名を調査の対象者とし、1 つの教室にて集合調査法にて実施した。対象者は、生物、化学、電子工学などを専門とする工科系大学の大学院生であり、心理学および臨床心理学に関する専門的な教育は受けていなかった。調査では、まず、擬人化エージェントとカウンセリングについて簡単に説明し（25 分間）、本カウンセリングシステムの概要を理解させた。その上で、擬人化エージェントを用いたカウンセリングを実施する上で考えられるメリットとデメリットを自由記述法で回答させた。

次に、本カウンセリングシステムを体験するセッションを実施した。上述したシステムを用いて、16 名のうち 1 名（男性）がクライエント役になり、別室で待機していたカウンセラー（女性）とカウンセリングのデモンストレーションをおこなった。この様子をクライエントと同室で他の者は観察した（20 分間）。デモンストレーションには「いぬばら」を採用し、クライエントはバラになってカウンセリングを受ける形式を採用した。デモンストレーション後、カウンセラーによるカウンセリングや傾聴に関する説明を実施し（20 分間）、その後、2 人 1 組のペアで交互にカウンセリングのデモンストレーション体験を実施した（30 分間）。

カウンセリングに関する説明や体験を受けた後、再度、擬人化エージェントによるカウンセリングの可能性について考えられるメリットとデメリットを自由記述法で回答させた。

【結果】自由記述によって得られた記載内容をカテゴリー化した結果、カウンセラーのメリットとしては、クライエントがリラックスして話をしてくれることで問題解決に繋がりやすい点、擬人化エージェントであればクライエントを注視することでプレッシャーを与える危険性を回避することができ、クライエントの細かな表情や動作を観察することができる点、性別に関係なく対応できる点、遠隔地でのカウンセリングが実施できる点などがみられた。一方、クライエントのメリットとしては、緊張せず話しやすくなる点、自分自身の視線を気にしなくて済むようになる点、自宅で受けられる点などがみられた。本システムのデモンストレーション体験の前後の変化としては、「仕事場に行かなくてもカウンセリングが可能」など場所や時間に関する記述が増えた。また、「カウンセラーが危険な目に合わなくてすむ」などカウンセラーの安全についての言及も増加した。さらに、「対面が苦手な人や特定の性に抵抗がある人の対人緊張が軽減される」などカウンセリングを、クライエントの視点でとらえる意見が増えた。なお、デモンストレーションの体験前はアバターの外見やその是非に関するコメントが多かったが、体験後は擬人化エージェントをどのように利用できるか、特に外見を自由に変えられることに基づく意見が多くみられた。

【考察】今回、試作した擬人化エージェントによるシステムはカウンセリング自体を自動化することが目的ではなく、カウンセラーの容姿や声をアバター化して、カウンセラーの存在を匿名化することによってカウンセラーおよびクライエントに対する効果を期待するものであった。電話相談であれば容姿などはクライエントに伝わらないが、声だけでなくエージェントの存在がカウンセリング等に効果をもたらす可能性を考えた。自由記述法による評価を実施した結果、クライエントの緊張緩和やカウンセリング環境などにおいて肯定的な意見が多くみられた。しかし、調査に参加した対象者は心理学や臨床心理学の専門的教育を受けた者ではなく、友達同士の悩み相談などの感覚でカウンセリングを捉えている可能性も考えられる。実際の場面においては、表情や音声が実際の人物でなくエージェントの場合、クライエントの内面性へのアプローチを困難にする可能性や心理療法の技術である転移の発生がしにくくなり、変容をもたらしにくくなる可能性などの課題も考えられる。また、本システムではハードウェアを用いて音声を変換したため、時間遅れなどは発生しなかったが、機械的な音声になってしまう点や Skype を使用しているため動画像の安定性が通信環境に依存するなどの技術的な課題も観察された。したがって、今後、システムの改良をおこない、実際に擬人化エージェントによるカウンセリングを実施して、クライエントの発話内容や態度およびその変容について定性的、定量的に評価することで、本システムの効果を検証する必要がある。

【引用文献】

今泉陽介・中村亮太・上林憲行、非面接者の発言を促すための擬人化エージェント面接の提案と効果検証、2018
江原康生、こころの可視化―カウンセリングにおける会話の流れの可視化―、2016

（いわさき　かずこ・きだ　のりゆき）

福祉職員に対する研修とコンピテンシー変化

心理テスト（行動特性診断）による研修効果の測定

○星　洋　丹羽　勝
（　社団法人行動特性研究所　株式会社エイデル研究所）

キーワード：福祉職員　効果測定　コンピテンシー

1. 問題意識

介護・福祉職員に向けて専門性・組織性の向上を目的とした様々な研修が実施されているが、研修効果が実感されるものは多くない。決まりきったプログラムで、受講者一人ひとりの到達目標が設定されず、また効果的な実施への準備不足が挙げられる。一方、コンピテンシー向上を測る物差しがないことも大きな問題と考える。受講者の自己評価や上司等の評価アンケートでは評価基準の欠如による評価者間でのばらつきが大きく、研修の効果を客観的に測定することが難しいという声が多い。本研究では研修効果をコンピテンシーの変化と位置づけ、研修前後におけるコンピテンシー変化をアンケート方式ではなく心理テストにより測定し、研修効果の客観的な評価の方法を試みた。

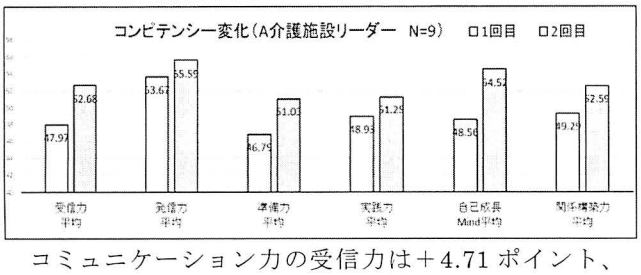
2. 調査方法

調査は介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）のリーダー職を対象に１年間の“チームリーダー研修”を行い、その前後で心理テストによるコンピテンシーの変化を測定した。コンピテンシーはグルーバル人材育成推進会議（2011）を参考に①コミュニケーション力６項目②問題解決力６項目③自己成長マインド５項目④関係構築５項目の 22 項目とした。

心理テストは（社）行動特性研究所が開発した行動特性診断テストを採用した。行動特性診断テストは現実に出現する行動を測定対象とし、その測定値に一定のアルゴリズムを施してコンピテンシーを数値化している。人事院(2005)や WHO(2017)においても「コンピテンシーとは行動に表れる能力、特性であり、結果や成果と結びつく能力、特性である」として能力をその構成要素である行動特性によって測定する方法が用いられている。

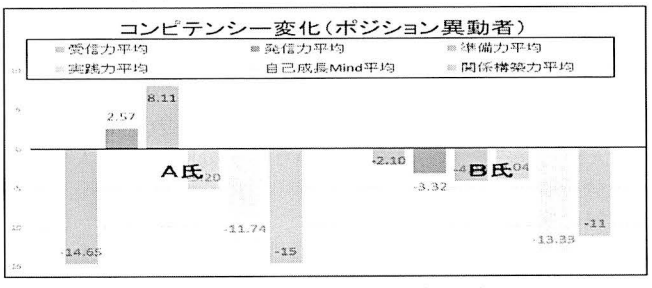
3. 調査結果

上記調査方法で述べたチームリーダー研修前後のコンピテンシー変化を測定した。（下記図）



コミュニケーション力の受信力は＋4.71 ポイント、発信力は+1.92 ポイント、問題解決力の準備力は＋4.24 ポイント、実践力＋2.33 ポイント、自己成長マインドは+5.95、関係構築力は＋3.30 ポイントと全体平均が変化しており、研修効果の測定値として機能していると思われる。

コンピテンシーの向上促進のために２年目も研修を継続したが、コンピテンシー変化の『見える化』が研修へのモチベーション向上に役立ち、１年目と同様に概ねコンピテンシーが上昇していた。但し、「総括リーダー長から一般リーダーへ、一般リーダーから総括リーダー職へ」という職種環境が大きく変化した２名はマイナスに変化していた。（下図）



２年に渡る研修効果の測定により①研修の効果をコンピテンシー変化として測定可能②コンピテンシー変化の『見える化』が研修効果を促進③行動特性診断テストによるコンピテンシー変化測定値の妥当性、の研究に貢献できたと思われる。

4. 考察と今後の課題

研修目標及び向上すべきコンピテンシーを明確にし、実践を個別面談で指導することによりチームリーダーとして自身を持って仕事を進められているという実感が上がり、仕事の質とコンピテンシー変化の相関が示されたと思う。

但し、単なる研修モデルとして留まらせないためには調査件数を増やし検証を重ね、真に実用的であることの研究が重要である。

【引用文献】

グローバル人材育成推進会議（2011）.
http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_kyodo/sanko1-1.pdf
World Health Organization (2017). Global Competency Model. (Retrieved May 27, 2017,
人事院(2005).　「人事管理情報 人物試験におけるコンピテンシーと「構造化」の導入」『人事管理』355
行動特性研究所（n.d.）http://iobt.jp/?page_id=339

（ほし　ひろし）（にわ　まさる）

あいまいな喪失を体験した子どもへの保育士による支援の実態と課題

質問紙調査の量的分析結果から

○加藤恵美[1]　いとうたけひこ[2]　井上孝代[3]
([1]静岡県立大学短期大学部　[2]和光大学　[3]明治学院大学)

キーワード：あいまいな喪失、子ども、保育士

【問題と目的】

子どもにとって、アタッチメント対象である親を失うことは人生における大きな出来事である。喪失後、新たなアタッチメント対象を得ることとともに、成長過程において、喪失体験を理解しなおし、意味付けをしていくことが精神的自立に向けて重要であるが、自殺や離婚といった“あいまいな喪失”（Boss,1999）を体験し、トラウマを抱え、これら喪の作業が困難な子どもも少なくない。よって、支援が急がれるが、日本では、病気や事故、自然災害、自殺や離婚などで親と離別あるいは死別する子ども（以下喪失体験児）のケアは、民間支援団体が主に担っており、体系的な支援は行われていないのが現状である。学校教員による喪失体験児支援の研究・報告は見られるものの、保育分野ではほとんど議論がなされていない。以上から、本研究では、保育の場における、喪失体験児支援の現状と保育士の支援に関する考えを明らかにすることを目的とする。

【方法】

研究協力者

A県の社会福祉法人運営保育所250か所を対象に質問紙調査への協力を依頼した。協力の承諾を得られた60か所411人から回答を得られた。このうち有効回答394人分の回答を分析した。

質問紙の構成

質問項目は、大曲（2017）の質問紙を参考にし、1．喪失体験児の保育の状況について、(1) 喪失体験児の保育経験の有無、(2) 親との離別要因、(3) 子どもの変化とその対応、(4) 保育経験の感想（自由記述）、(5) 保育所の対応、(6) 支援上の困難、2．喪失体験児の支援に関する考えについて、(1) 支援の担い手、(2) 個人としての支援能力の有無、(3) 保育士の支援能力の有無、(4) 支援に必要な資源（自由記述）を尋ねた。

分析方法

SPSSによる多変量解析による量的分析と、NTTデータ数理システム社のテキストマイニングソフトであるText mining Studio Ver.6.0.2の原文参照機能による質的分析を行った。

【結果】

1．喪失体験児の保育の現状

多変量解析の結果から、回答者の84.3%に喪失体験児保育の経験が有った。親との離別要因は「離婚」（80.7%）が最も多く、病気や自殺による死別は1割程であった。離別した親は「父」（67.5%）が多く、子どもの離別・死別時の年齢は、「2歳」（20.2%）、3歳（19.6%）が多かった。

保育士は、喪失体験児の、「感情の起伏が激しい」（21.8%）、「乱暴な行為」（13.7%）　「退行」（12.2%）などの変化を捉え、スキンシップを取る、見守る、感情表出を促す、子どもに事情を尋ねるなど、子どもの状態に合わせた多様な援助を行っていた。保育所においても、必ず行われる対応として、会議での報告（78.0%）、職員間の情報共有（79.8%）、個別の対応（55.9%）が挙げられていた。しかし、専門職による対応は「それほど行われない」（37.7%）が最も多く、離別・死別体験児支援のマニュアルの使用も同様で、「全く行われない」の割合が半数を占めていた。

そして、このように子どもへの個別・集団支援は充分に行われているなかで、保育士自身への支援は「あまり得られていない」が49.4%であった。

また、支援上の困難として最も割合が高いのが「専門知識の不足」（52.7%）、次いで「家庭の状況に対しどのように対応してよいかわからなかった」（44.9%）であった。その他、「支援の情報・リソースが無い」（33.7%）、「個人情報保護による支援の制限」（23.6%）、「連携先がわからない」（21.7%）が挙げられた。

2．喪失体験児の支援に関する考え

喪失体験児の支援の担い手については、最も割合が高いのが「身近な人（家族・友人知人・近隣）が行うべきである」で46.7%、次いで「専門機関や専門家が行うべきである」で30.0%、最も割合が低かったのが「保育士が担うべきである」で22.9%であった。

個人及び保育士一般の喪失体験児支援の能力の有無については、「個人として自分自身に支援能力がある」と回答したのは17.1%、「一般に保育士は支援能力がある」と回答したのは18.7%にとどまった。

【考察】

保育分野では、喪失体験児支援の実践・研究がほとんど見られないが、質問紙調査の結果、対象の保育所保育士のほとんどに喪失体験児保育の経験が有ることが明らかとなった。それは、親との離別後の子どもの変化を丁寧に捉え、子どもの発達や個別性に配慮した多様な援助であった。保育士だけでなく、保育所全体でも会議での報告や職員間の情報共有、個別対応を行っていた。しかしながら、保育士は、専門知識の不足や、どのように対応してよいかわからないことを感じていた。さらに、保育士がその支援を担うべきと考える割合の低さが明らかとなった。その理由として、ひとつは、喪失体験児支援を行う保育士自身への支援が不十分である。そして、二つ目に、離婚のような“あいまいな喪失”概念の理解が不足していると考えられる。加藤ら（2018）は、保育所保育士の面接調査から、親の離婚を経験し“荒れた”子どもに対して、保育士がどのように捉えてよいかわからない「戸惑い」があったことを指摘している。現代日本は、子どもの約10人に1人が親の離婚を経験している状況にある。“あいまいな喪失”に該当する離婚が、子どもにとっても同様のつらい状態を生じさせる可能性を理解することが、保育を行う上で重要となってくる。とはいえ、保育指針には、子どもの精神保健に関しては、事故や不測の事態発生時の対応が示されているのみであり、親を失った子どもの支援が保育士の役割として位置づけられていない。今後、養成課程及び現職研修として、子どもの喪失体験に関する知識や対応のスキルについて学ぶカリキュラムを計画し実施することが必要と考える。

【引用文献】

Boss, P. 1999 南山浩二（訳）2015 「さよなら」のない別れ　別れのない「さよなら」　学文社.
加藤恵美・いとうたけひこ・井上孝代 2018 離婚後の子どもの“荒れ”への保育：＜あいまいな喪失＞の一事例 日本カウンセリング学会第51回大会発表論文集,65.
大曲睦恵　2017　子どものグリーフの理解とサポート　明石書店.

本研究は、JSPS科研費17K04297の助成のもと行った。
（かとうえみ・いとうたけひこ・いのうえたかよ）

患者の主観的体験への看護―文献検討による枠組み構築の取り組み

山本勝則
（天使大学看護栄養学部看護学科）

キーワード：患者の客観的状態への看護、患者の主観的体験への看護、コミュニケーション

【目的】患者は二種類の看護を必要としている。第一に、客観的に観察され問題を分析・査定・診断され、計画的介入を受ける必要がある。そのために問題解決型の看護過程が開発されてきた。

第二に、患者は寄り添われ、病に伴う主観的体験を理解され、苦悩を癒される必要がある。しかしこの体験がどのようなものであり、どのようにすれば癒されるのかということは、まだ十分明らかにされていない。そこで、病に伴う主観的体験についてこれまで明らかになっていることを、文献を用いて確認する。

文献検討では、患者が病について主観的に体験した内容と、それに関して看護師から受けた影響を検討する。

【方法】主観的体験をキーワードとして、医学中央雑誌を用いて、文献検索を行う。検索された全文献数を確認後、看護文献に絞り、主観的体験についての調査が進んでいるのがどの看護領域であるかを数量的に確認する。

その後、原著論文について文献を読み、データの特徴を現わしている内容を抽出、整理する。そのやり方は以下のようなものである。①様々な疾患や状態に共通して見られる体験②特定の疾患に特徴的な体験③重要性が高いと思われる体験④意外性の高い体験（調査しなければそのようなデータがあることが予想しにくい内容）⑤その他特徴的な体験。

集められたデータの全体像を明らかにすることは目指さない。データを整理集約して平均化した全体を示す方法よりも、上記の①～⑤ような観点から、特徴的な傾向を抽出する方が、患者の体験をありありと示すことができると考える。

なお、病気と障害とは境界が不明確な場合や移行する場合もあり、ここで述べる患者には障害者も含むこととする。

【結果】2019年5月23日に医学中央雑誌を用いて、主観的体験をキーワードとして検索した。211文献検索された。それを看護文献に絞ったところ、67件となった。

主観的体験を明らかにすることへの取り組みが進んでいる分野を明らかにするために、看護領域別に分類したところ、母性看護領域が最も多く30件、次いで精神看護領域が14件、成人看護領域が10件、老年看護領域が4件、看護教育領域が3件で、その他が6件であった。

67件の中に会議録が24件含まれていた。それらを分析対象から除外した。残りの43件ついて、論文タイトルおよび抄録を読み、研究目的に沿った内容に関するものか否かを確認した。その結果、調査対象が看護師であるものが3件、看護学生であるものが4件、家族であるもの3件が含まれていた。また、内容として本研究に該当しない（主観的体験を扱ったものでない）論文が5件含まれていた。それらを除いて、28件を分析の対象とした。

今回の報告では、看護として標準的である成人看護領域の患者を取り上げる。致死の可能性を伴う急性：心筋梗塞（北村他，2001）、亜急性：造血器腫瘍（西多，2013）、慢性：慢性腎疾患（出射他，2001）の疾患について、共通する体験、異なる体験、看護師からの関わりの体験を報告する。

各疾患に共通していたのは、発病初期には病気を受け入れることができず、切迫した死の予感や生きる意味の喪失を体験したり、恐怖を感じどうでもよいと投げやりになったり、病気の重大性を認めまいとする体験をしていたことである。そして、その後の経過では、徐々に病気を受容している。例えば、生きていることの大切さやありがたさを強く感じ生きていることに感謝したり、病気の体験を受け入れて自己を変化成長させたりである。

ただし、心筋梗塞患者についての調査では、十分な受容には達しておらず、治療が成功して助かったと感じるとともに、今後の自分に不安を感じている。心筋梗塞は急性疾患であり、病気の経過が短期間であることがこの独自性を生じさせているかもしれない。一方、亜急性疾患の造血器腫瘍の独自性は身体面に特化しており、身体機能コントロール感の喪失があった。病気の初期から身体が思い通りにならない体験をし、後には身体機能のコントロールの困難さの増強を体験していた。以上のように、急性期あるいは亜急性期の疾患では、（徐々に病気を受容しているものの）何らかの否定的な体験も持続していた。それらとは異なり、慢性疾患である慢性腎疾患では、療養期間が長くなると困難な体験が克服されて、否定的な体験は記載されていなかった。

看護師からの関わりに関する体験は、心筋梗塞と慢性腎疾患を調査した文献にはあったが、造血器腫瘍の文献には記載されていなかった。急性疾患である心筋梗塞の看護師との体験としては、看護師の様子に余裕を感じる、見守られている、心遣いや人間的なかかわりを感じる、自分の苦痛に関心を向け対処してくれると感じるがあった。慢性疾患である慢性腎疾患の看護師との体験としては、看護師の対応が良かったことで楽になった、看護師は気軽に声をかけてくれて病気以外の話も出来て和めたがあった。今回用いた文献には

【考察】致死の可能性を伴う急性、亜急性、慢性いずれの疾患でも、発病初期には衝撃を受けるが、徐々に病気を受け入れている。これらは調査を受け入れることができた患者のデータである。患者支援のためにはより困難な体験に注目して調査する必要かもしれない。

看護師からの関わりは、肯定的な体験だけが報告されているが患者―看護師間のコミュニケーションの調和と不調和の両方を報告している文献（Thygesen et al., 2017）もあり、否定的な体験も調査する必要がある。

【引用文献】

北村直子・佐藤禮子 2001 心筋梗塞患者の急性期の主観的体験と看護援助に関する研究 千葉看護学会会誌，7（1），74-81.

出射史子・加藤久美子 2001 慢性腎疾患患者の主観的体験世界 岡山大学医学部保健学科紀要，12，19-26.

西 光代・宇都宮 與・堤　由美子 2013 造血器腫瘍患者の初期治療期における主観的体験と自己決定の質的分析 日本看護科学会誌，33（4），53-62.

Thygesen, M. K., Pedersen, B. D. 2017 How communication disharmonies between patients and nurses can affect patients—A qualitative study of illness experienced from the patients view. Psychology, 8, 526-537.

（やまもと かつのり）

自己援助(self help)としての病院広報誌の役割

林　　潔
(白梅学園短期大学)

キーワード：病院情報誌　読書療法　自己援助

目的

患者は医師に告げられたことを反芻する。一つの疑問の答えが分かれば，それによって次の疑問が生まれる。また言外の意味を考える。コミュニケーションには時間を必要とする。 患者は医師と十分話し合いたいと思っても患者数の多い大規模病院やクリニックでは，医療関係者の意志とは無関係に現実には困難であろう。

今日の患者は，医療現場から得た情報以上に，インターネットを含むメディアから得た情報に影響を受けることも少なくない。それらの情報の医学的な信頼性は保証されていない場合も散見されるが，適切な情報の取捨選択は，患者にとって容易なことではなく，医療者による適切な支援が重要となる（日本行動医学会,2015）。またスタンダードな本の情報であっても，時間が経過によって症状理解や治療方法などが相違してくる。医療情報の信頼性の判断は素人には難しい。そのなかで up to date の信頼できる情報を提供するものの一つが病院広報誌であろう。

自己援助を自分の問題解決に取り組もうとする方向を支持し，促進する自分自身の態度であると定義する。その過程において非専門家だけではなく，専門家の援助を受けることもあり得る（林・瀧本,1993）。本報告は病院広報誌の役割について検討する。

方法

東京都医師会発行誌「元気がいいね」の掲載記事を KJ 法で分類し，カテゴリーを設定した。これによって，2018 年発行の「元気がいいね」および日本行動医学会の学術総会開催校などの病院広報誌を対象とて検討した。

結果

各カテゴリー別の内容例は次のとおりである。

１．医療と病院への親近感　1)バルーンアートで患者さんやご家族に和みのひとときを（九大病院だより,68(4)）2)拝見！　医師の一日：いま，これから求められる医療を（元気がいいね,111(9,10)　東京都医師会）　3)ふれあい看護体験（いきいきらいふ,61(10)徳島大）　4)（高校生）外科手術体験セミナーin 青森を開催して（南塘だより,91(9)弘前大）　5)歯科衛生士とは（自治医科大学病院だより,27(8)）

２．病院案内と活動紹介　1)「病院サポートコーナー」（With,42(7)横浜市立大）　2)患者さまを支えるチーム医療（けやき,11(6)北里大）　3)病院職のユニフォーム（フェニックス 6(8)宮崎大）　4)８階西病棟の紹介（T.M.P.H. ニュース,22(春)東京警察）　5)外科医の眼と技で「脳神経疾患を治療する脳神経外科（桜ヶ丘だより,49(9)鹿児島）6)花粉症を発見・命名したのは医科歯科大出身の斎藤洋三医師でした！（オアシス,12(2)東京医科歯科）7)日本人ならではの繊細でこだわりの手術と創造性を世界に発信する（東大病院だより,93(10)）　8)JICA　沖縄感染症研修生が琉球大学附属病院に来院しました（新着情報,12(10)）13)入院患者さん満足度調査（阪大病院ニュース,70(4)）9)漢方医学科：老若男女の花粉症の漢方治療（金沢大学ニュース,18(2)）　10)鳥取県ドクターヘリ"KANSAI・おしどり"運行開始（とりだい病院ニュース,44(6)）　11)'生きる力'を支え，子どもが元気に育って行く子とを願って（すすめ,5(6)　慶大）　12)血管炎外来：リウマチ膠原病センター（St.Luke's,37(9)聖路加）

３．医療情報　1)耐性菌と抗菌薬適正使用（自治医科大学附属病院だより，26(3)）　2)ロボット支援した手術の保険適用の範囲が拡大されました（京大病院広報,115(6)）3)妊娠中の母子感染症に注意（名大かわらばん,110(10)）　4)知って備える脳卒中（hesso,20(8)東北大）5)医食同源：おいしい健康ごはん（CSR レポート(9)北大　common social responsibility　6)認知症の治療（まんだらげ,44（春）和歌山県立医大）　7)経カテーテル的大動脈弁植え込み術（TAVI）について（hospital news,52(4)大阪医大）

４．健康情報　1)ここからのおと：『心」と「体」と「脳」の健康のために（Tea Time,68(夏)日赤医療センター）　2)”体に良い”正しい姿勢とは（なんぶメール,23(10)済生会横浜市南部）　3)特定健診・特定保健指導ってなあに「（よどきり便り,18(7)淀川キリスト教）　4)免疫力を高める食べ物は（かわぴたる,157(11)河北総合）5)感染症を正しく知って予防しよう！：増加中の「輸入感染症」と「身近な「食中毒」（Robin,4(-)都立駒込）　6)不整脈を防ごう（MEWS,26(冬)三重大）　7)急な運動とケガ（名大かわらばん,110(8)）　8)廃用症候群を防ぐには！（たちばな,11(9)愛知医科）　9)「スポーツ医学」って何ですか（筑波大学附属病院だより,38(-)）10)筋力アップ・ダンス（ゆめダンス）を創作しました（新大病院だより和,55(8)新潟大）

ニュースとして掲載：長崎大，日本医大

考察

病院広報誌は拘束を受けない信頼できる安心できるかかわりの対象である。特色を出し，読みやすく、興味を引く構成がなされている。課題としては次をあげることができる。

1.目立つ場所に置かれているが，存在自体がよく知られていない。

2.インターネットでも読むことができることの周知。

3.IT の場合接続の分かりやすさ。ホームページの最初の段階に広報あるいは誌名が明示されていると分かりやすい、

4. 年間索引が用意されている場合便利である。可能であれば 2，3 年のインデックスがあると便利である。

確実な情報は未知の分野への予測を与え，不安感を軽減する。読者は自己や関係者と記事とを同一視あるいは投影する。他者の例は自分だけではないという実感を与える。これらのことから広報紙は Self help あるいは psucho-education の一つとして位置づけることができる。

なお読書療法と同様に効果の把握の手続きが課題となってくる。

参考文献

林潔・瀧本孝雄　1993　学生の自己援助行動と図書，交流分析の利用　学生相談研究,14,24-30.
日本行動医学会　2015　行動医学テキスト　中外医学社

(はやし　きよし)

ロコモ予防の健康教室参加者の継続性に関連する因子の検討

○内田誠也[1)]、山岡淳[1)]
([1)]一般財団法人 MOA 健康科学センター)
キーワード：健康教室、継続の意志、ロコモ度、QOL

【研究の目的】

ロコモティブシンドローム（以下，ロコモ）とは、運動器障害による要介護状態や介護リスクの高い状態を表す概念である。超高齢社会において、高齢者の介護予防や疾病予防のために、ロコモへの対策がますます重要となっている。そこで、地方自治体などでは、ロコモ予防を目的に、様々な運動を取り入れた運動教室を開催しており、一定の効果が得られている。しかし、自分の健康や運動に関心がある高齢者は教室に集まるが、運動したがらない高齢者に参加してもらうのは難しい。ある地域では、運動を週 2 回以上行っている高齢者は 21%で、運動を行っていない高齢者が 65%だったとの報告があり、全国的に見ても、運動を行っていない高齢者が多いと推測される。特に体に痛みがあると、痛みの増強を恐れて外出や運動を控えてしまう。それがさらにロコモを進行させ、QOL や認知機能が低下し、その結果さらに外出しなくなるという負のスパイラルに陥ると考えられる。そこで、著者らは運動を主としないでロコモ予防ができる教室を行政と企画し、ロコモ予防の効果があることを報告した(内田、2018)。しかし、ロコモ予防には教室に継続的に参加することが重要であり、行政にとっても大きな課題である。本研究では、継続性を高めるためにはどのような因子が重要であるかを検討することを目的とする。

【対象】

対象者は鳥取県南部町在住で、かつ膝や腰、肩等に痛みを持つ 38 名の高齢者であった。平均年齢は 69.5 歳(SD5.7)、男性 5 名、女性 33 名であった。

本研究は、(一財) MOA 健康科学センターの倫理審査の承認を得て、書面による同意を得て実施した。

【方法および解析】

地方行政に協力して、週 1 回の健康教室を、連続して 11 回行った。具体的には、相補代替医療に含まれる 40 分間のエネルギー療法の施術を毎週体験し、隔週で 20 分間の運動指導あるいは生け花を体験した。計測について毎週の体験前後にペインスケールで痛みを評価し、初日と最終日にアンケート調査（MQL10（QOL 質問票)、ロコモ 25（ロコモ度質問票)、チャレンジシート（生活習慣の自己評価用紙)）と各種計測（10 メートル速歩、開眼片足立ち、肩の筋硬度、体重、体脂肪）を行った。最終日には、「また、このような教室に参加したいか？」という教室に対する継続性に関する質問を対面式で行った。

初日と最終日のデータを Wilcoxon 検定で比較した。次に、継続性の質問でまた参加したいと答えた群（継続群）と答えなかった群（非継続群）に分けて、すべてのデータを Mann-Whitney 検定で比較した。

【結果】

対象者が 11 週間教室に参加することで、痛み($p<0.001$)および、MQL１０の総合得点($p<0.001$)、身体的得点($p<0.001$)、心理的得点($p<0.001$)、ロコモ度($p<0.001$)、チェレンジシートの休養得点(0.021)、10m 速歩の時間(0.038)、悪い方の足の開眼片足立ちの時間(0.022)、肩の筋硬度(0.003)が有意に改善した。

継続群は 19 名(男性 4 名、女性 15 名、平均年齢 59.5 歳)、非継続群は 19 名（男性 1 名、女性 18 名、平均年齢 59.5 歳）であった。継続群は非継続群比較して、初日のロコモ度が有意に低く(0.027)、ロコモ度の変化が有意に大きく(0.005)、初日の MQL10 の身体的得点が有意に低く(0.025)、初回のチャレンジシートの食事得点(0.010)および運動得点(0.0028)が有意に低かった（Table 1)。

【考察】

11 週の運動教室に、膝や腰、肩に痛みを持つ高齢者が参加することで、主訴となっている痛みが改善し、移動機能が改善し、QOL が改善した。その参加者の中で、半分が同様な教室の参加を希望され、継続の意志を表した。その参加者の特徴として、移動機能が低く、身体的な QOL が低く、食や運動に関するライフスタイルがあまりよくない人であった。また、教室に参加することで悪かった移動機能が大きく改善した人でもあった。つまり、移動機能や QOL、ライフルタイルがあまりよくない人が、この教室に 11 週間参加することで、教室による効果を実感して、継続の意志の表れになったと考える。参加者は心理生理的な効果を期待しており、教室の継続性を高めるためには、効果の実感が重要であることが示唆された。

研究限界として、本研究は行政の広報によって参加を希望された人を対象にした。応募された対象者は比較的健康意識が高いと考えられ、本研究の結果は偏った対象による結果であると思われる。

Table 1.継続群と非継続群との違い

	継続群		非継続群		Mann-Whitney 検定によるP値
	平均値	SD	平均値	SD	
初日 ロコモ度	23.6	19.2	11.1	6.9	0.027
最終日 ロコモ度	14.8	11.8	9.1	6.3	0.156
ロコモ度変化	-8.8	10.3	-1.9	5.1	0.005
初日MQL10 身体的得点	8.3	3.5	10.6	1.8	0.025
最終日MQL10 身体的得点	10.2	3.2	12.2	2.6	0.051
身体的得点の変化	1.9	2.0	1.6	2.5	0.374
初日チャレンジシート 食事得点	13.9	2.8	15.9	1.7	0.011
最終日チャレンジシート 食事得点	14.6	2.5	16.2	2.1	0.011
チャレンジシート 食事得点の変化	0.7	2.1	0.3	1.3	0.710
初日チャレンジシート 運動得点	9.4	3.0	11.7	3.0	0.028
最終日チャレンジシート 運動得点	10.1	3.1	12.0	3.0	0.073
チャレンジシート 運動得点の変化	0.7	2.0	0.3	2.4	0.615

【引用文献】

内田誠也　他 (2018) エネルギー療法が高齢者の体の痛みや運動機能、QOL に及ぼす効果について，日本統合医療学会誌, 11(1), 51-60.

（うちだ　せいや・やまおか　きよし）

スマートフォンによるネット依存傾向と対人ネットワークの関連

○黒川 雅幸[1]　三島 浩路[2]　小西 達也[3]（非会員）　永田 雅俊[3]（非会員）　本庄 勝[3]（非会員）　米山 暁夫[3]（非会員）
([1]愛知教育大学教育学部　[2]中部大学現代教育学部　[3]株式会社 KDDI 総合研究所）

キーワード：スマートフォン，インターネット，依存傾向

【問題と目的】

インターネット依存とは「寝食を忘れてインターネットにのめりこんだり，ネットへの接続を止められないと感じるなど，インターネットに精神的に依存した状態」のことである（小林・坂元・足立・内藤・井出久・坂元・高比良・米澤, 2001）。インターネットのコンテンツは拡大しつつあり，インターネット依存の問題が取り上げられた当時とは異なった利用がされている。20 代以下の若者では，およそ半数以上が LINE，Twitter，Facebook などの Social Networking Service（SNS）を利用していることが示されている（総務省, 2015）。インターネットを使用する機器に関しても，スマートフォンによるネット利用がパソコンによる利用と同じくらいの割合になり，従来のパソコンのみの利用とは異なってきている（総務省, 2016）。こうした変化から，スマートフォンへの依存を測定する尺度の開発も検討され始めてきた（e.g., Lee, Kim, Fava, Mischoulon, Park, Shim, Lee, Lee, & Jeon, 2017; Lin, Pan, Lin, & Chen, 2017; 戸田・西尾・竹下, 2015）。黒川・本庄・三島（2017）は依存の構成概念に承認に基づく依存も仮定して尺度の開発を行ったところ，スマートフォンによるインターネット依存は情緒，統制不全，スマートフォン誘因，承認欲求の 4 因子に分かれることが示された。本研究では，依存傾向と対人ネットワークの関係を明らかにし，他者との関係が依存傾向に関連するかどうかを明らかにする。

【方法】

調査方法　オンライン上で調査を実施した。調査は，株式会社マクロミルによって実施された。

調査対象者　高校生と高専生計 161 名（男子 86 名，女子 75 名）が対象であった。

スマートフォンによるインターネット依存傾向（短縮版）　スマートフォンによるインターネット依存傾向のうち，情緒，統制不全，スマートフォン誘因，承認欲求に高い因子負荷量を示した 4 項目ずつを使用した。まったくない，めったにない，ときどきある，よくある，いつもあるの 5 件法で尋ねた。

母親／父親／家族との対面的コミュニケーション（FTF）時間（平日／休日）　30 分未満，30 分以上 1 時間未満，1 時間以上，コミュニケーションをとらない／該当者はいないから選択してもらった。平日および休日について回答してもらった。

ネットを除く友だち（実際に会って時間を過ごせる存在）の人数　人数を回答してもらった。

ネット上の友だち（ネット上でのみコミュニケーションをとる存在）の人数　人数を回答してもらった。

インターネット社会関係資本　山﨑・井邑・深田・塚脇（2011）の 20 項目より，高校生にも理解しやすい項目を 10 選択し，一部修正して用いた。10 項目は，結合型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本が 5 項目ずつ含まれるようにした。

スマートフォンではまっているコンテンツ　平成 28 年度青少年のインターネット利用環境実態調査（内閣府, 2017）のコミュニケーション，ニュース，情報検索，地図・ナビゲーション，音楽視聴，動画視聴，電子書籍，ゲーム，ショッピング，その他，なし，から 1 位～3 位をつけてもらった。

【結果】

スマートフォンによるインターネット依存傾向（短縮版）　4 つの下位尺度の信頼性係数は情緒 α=.83，統制不全 α=.87，スマートフォン誘因 α=.78，承認欲求 α=.80 であったので，それぞれの項目平均を下位尺度得点とした。

母親／父親／家族との対面的コミュニケーション（FTF）時間（平日／休日）　Table1 の通りであった。

Table1　家族との対面コミュニケーション時間の分布

		30 分未満	30 分以上 1 時間未満	1 時間以上
母親	平日	41	49	63
	休日	28	40	85
父親	平日	83	35	23
	休日	55	31	56
家族	平日	43	53	60
	休日	33	37	87

ネットを除く友だち（実際に会って時間を過ごせる存在）の人数　平均 13.99 人（*SD*=20.30）であった。

ネット上の友だち（ネット上でのみコミュニケーションをとる存在）の人数　平均 15.02 人（*SD*=48.52）であった。

インターネット社会関係資本　因子分析（主因子法）の結果，1 因子構造と解釈できたため，平均値を尺度得点とした。

スマートフォンではまっているコンテンツ　1 位の得点を 3 点，2 位を 2 点，3 位を 1 点として回答者の加算得点を算出したところ。ゲーム（219 点），動画視聴（206 点），コミュニケーション（174 点）の順に得点が高かった。

スマートフォンによるインターネット依存傾向と母親／父親／家族との対面的コミュニケーション（FTF）時間（平日／休日），友だち／ネット上の友だちの人数との関連　Table2 の通りであった。

Table2　家族との FTF 時間（平日／休日）および友だちの人数と依存傾向との相関係数

	母平	父平	家平	母休	父休	家休	友人	ネット友人
情緒	-.10	-.01	-.07	-.08	.00	-.14†	-.18*	.01
統制不全	.04	-.06	.05	.08	-.06	.02	.06	-.03
スマホ誘因	-.02	.04	.04	-.02	-.04	-.05	-.06	-.00
承認欲求	-.10	.13	-.09	-.12	-.01	-.16†	.04	.20**

**p<.01　*p<.05　$^{\dagger}p$<.10

スマートフォンによるインターネット依存傾向とインターネット上の社会関係資本の関連　いずれの下位尺度も正の相関が得られた（情緒 r=.47, p<.01; 統制不全 r=.15, p<.10; スマホ誘因 r=.35, p<.01; 承認欲求 r=.35, p<.01）。

スマートフォンによるインターネット依存傾向とはまっているコンテンツの関連　はまっていると回答した人と回答しなかった人で依存傾向の平均値差の検定を行った。コミュニケーションにはまっている人は統制不全が低く（2.72<3.00, p<.10），動画視聴にはまっている人は統制不全（2.96>2.68, p<.10）やスマホ誘因（2.93>2.49, p<.01）が高かった。ゲームにはまっている人は情緒（2.34>2.04, p<.05），統制不全（3.01>2.69, p<.05），スマホ誘因（2.96>2.57, p<.01）が高い結果が得られた。

（くろかわ まさゆき・みしま こうじ・こにし たつや・ながた まさとし・ほんじょう まさる・よねやま あきお）

母親の就業形態と大学生の就業観および性役割態度の関連

佐藤　舞
（早稲田大学大学院文学研究科）
キーワード：就業観、性役割態度、モデリング

【目的】子は親をモデルとして多くのことを学習する。したがって，自分が子どもの頃に親がどのような働き方をしていたかによって，成長後の就業観や性役割態度が影響を受けると考えられる。ただし，日本では父親が主に働いている場合が多いため，母親の就労状況の違いによって大学生の就業観や性役割態度に差があるかどうかを検討する。また，母親の就労状況からの影響には，子の性別によって性差があると予測されるので，性差もあわせて分析する。

【方法】大学生に質問紙調査を行った。質問紙ではまず，以下の内容を尋ねた。①小学生のときの同居家族。②小学生のときの母親の就労状況。「働いていて，家にいることが少なかった」，「働いていたが，まあ家にいた」，「働いていなかったが，家にもあまりいなかった」，「働いておらず，家にいることが多かった」の中から一つ選択するよう求めた。ここまでで，小学生のとき母親と同居していなかった2名は分析対象から除外した。また，母親の就労状況を「働いていなかったが，家にもあまりいなかった」と回答した者は2名であり，数が少なかったため以降の分析から除外した。結果，得られた回答は103名（男性39名，女性64名）であり，平均年齢は男性が21.54歳（*SD*=1.17），女性が20.45歳（*SD*=1.56）であった。続いて，現在の自分自身に関して，以下の2尺度に回答するよう求めた。a.就業観：本研究のために11項目を新たに作成した（項目内容はTable 1を参照）。回答は「全く気にしない（1）」から「とても重要（4）」までの4段階評定で求めた。b.性役割態度：鈴木（1994）が作成した平等主義的性役割態度尺度短縮版を用いた。回答は5段階評定で求めた。

【結果と考察】まず，最尤法による因子分析を行った。就業観尺度ではスクリー基準より2因子が得られたのでプロマックス回転を行った。因子負荷量と因子間相関，各因子のα係数をTable 1に示す。項目内容から，「家庭志向」因子と「仕事志向」因子と名づけた。平等主義的性役割態度尺度では1因子が得られ，すべて逆転項目であったため，「伝統志向的性役割態度」と解釈した。寄与率は38.4%，α係数は.796であった。次に，尺度項目の平均値を下位尺度得点として，以下の分析を行った。母親の就労状況について，「働いていて，家にいることが少なかった」と回答した群を「フルタイム」群（男性11名，女性21名），「働いていたが，まあ家にいた」と回答した群を「パートタイム」群（男性17名，女性24名），「働いておらず，家にいることが多かった」と回答した群を「無職」群（男性11名，女性19名）とし，性（2）×就労状況（3）の2要因分散分析を行った。群別の下位尺度得点の平均と標準偏差および分散分析結果をTable 2に示す。「家庭志向」で性の主効果が有意傾向であり，女性の方が労働条件を重視すると示唆された。また，「伝統的性役割態度」で母親の就労状況の主効果が有意傾向であったが，多重比較の結果，群間に有意差は認められなかった。母親の働き方による違いは示唆されたものの，現代の大学生には，平等志向的な性役割態度が自明と受け入れられているのかもしれない。

Table 1. 就業観尺度の因子分析結果

項目	家庭志向	仕事志向	共通性
休みが取りやすい	.832		.690
安定した休みがある	.756		.570
通いやすい	.703	-.111	.496
産休・育休が取りやすい，復帰しやすい	.548	.345	.444
キャリアを積める見込みがある	-.212	.685	.495
長く働ける見込みがある	.230	.642	.484
自分の能力や技術が得られる		.619	.382
社風や既存社員が自分に合っている	.125	.502	.275
やりがいがある	-.275	.492	.300
α係数	.792	.715	
因子間相関	-	.065	

注）.1を下回る因子負荷量は省略。

【引用文献】
鈴木淳子　1994　平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成　心理学研究, **65**, 34-41.

（さとう　まい）

Table 2. 就業観と性役割態度の性別・母親の就労状況別平均と標準偏差および分散分析結果

		就労状況 フルタイム Mean	フルタイム SD	パートタイム Mean	パートタイム SD	無職 Mean	無職 SD	分散分析 性 F(1,97)	就労状況 F(2,97)	交互作用 F(2,97)
就業観										
家庭志向	男性	2.66	0.82	2.63	0.63	2.59	0.87	2.93 †	0.12	0.21
	女性	2.77	0.67	2.96	0.71	2.88	0.54			
仕事志向	男性	3.11	0.70	3.25	0.45	3.22	0.35	0.04	0.22	0.19
	女性	3.23	0.68	3.26	0.61	3.16	0.41			
伝統的性役割態度	男性	1.62	0.59	1.80	0.65	1.84	0.56	0.03	2.71 †	0.51
	女性	1.43	0.56	1.92	0.77	1.85	0.55			

†p<.10.

ブラック企業について

○中上博絵　水野愛美　渡辺茉耶　時田　学
（日本大学商学部）

キーワード：アルバイト・賃金・業務

【目的】

本研究では，学生の今現在置かれているアルバイトの現状を調査し，そこに示される学生のアルバイトや労働環境に対する意識について明らかにすることを試みる．また学生自身が不当な扱いを受けているという認識や，改善に対しての知識（板倉，2015）の有無について調査した上で，男女差について検討を加える．

【方法】

N 大学の学生のうち，調査日に対象とした授業に出席した学生を対象に科目担当教員の協力を得てアンケート用紙を配布した．対象者は 160 名．有効回答数は未記入などを除いた 152 名，有効回答率は 97.5%であった．授業の開始時に現在もしくは過去に務めていたアルバイト先についてのアンケート調査への協力を授業出席学生に願い，10 分程度で記入してもらい，その場で回収した．又，出席学生が本質問紙の回答を進めるうちに回答することが難しくなった場合には自由に回答をやめてよいこと，それらの行為は，出席学生の不利益には何ら当たらないことを教示した．初めに匿名である事，本研究終了後回答を破棄することを明記した上で，男女，年齢，アルバイト経験の有無，職種，現在又は過去に行っていたアルバイト先についてなどの項目について回答を求めた．

【結果】

アンケート調査の対象者の内訳は，男性 88 名（55.7%），女性 70 名（44.3%）であった．また，年齢は 18～27 歳の範囲，平均年齢は 20.17 歳，標準偏差は 1.392 であった．

問 3「あなたは現在アルバイトをしていますか」という質問に関して回答を求めたところ，はいと回答した者 126 名（79.75%），いいえと回答した者 32 名（20.25%）であった．本研究の 5 件法は、それぞれ「とてもそう思う」を 1,「そう思う」を 2,「どちらともいえない」を 3,「そう思わない」を 4,「とてもそう思わない」を 5 として，得点化を行った．

性別の違いによって，アルバイトに対する考え方は異なるのではないかと予想し，性別を要因，男女を水準として 1 要因 2 水準で分散分析を行った.有意差が示されたのは，問 7_1「アルバイト先の賃金に満足していますか」という質問のみであった（F (1,134) =9.57, p<.01　Mse=1.237）.

また，問 9「アルバイト先で不満に思っている点に何か行動したことがありますか」についての項目を 1 要因，回答者の回答（「はい」,「いいえ」）を 2 水準とし分散分析を行ったところ,有意差又は傾向が示された質問は以下の通りである.

問 7_1「あなたはアルバイト先の賃金に満足していますか」
F (1,128) =13.88, p<.01, Mse=1.237)

問 7_3「あなたはアルバイト先の業務内容について満足していますか」
F= (1.128) =13.27, p<.01, Mse=0.817

問 7_4「あなたのアルバイト先は働いているときの雰囲気がよいと思っていますか」
F= (1.128) =14.32, p<.01, Mse=0.717

問 7_8「あなたはアルバイト先で内面について悪く言われますか」
F= (1,129) =2.92, p<.1, Mse=0.868

問 7_9「あなたはアルバイト先で自分が持っている能力以上の業務を課せられますか」
F= (1,128) =3.75, p<.1, Mse=1.391

問 7_11「あなたはアルバイト先で業務することが体力的に辛いと思いますか」
F= (1,129) =4.24, p<.05, Mse=1.447

問 7_12「あなたはアルバイト先で上司や同僚から体罰のような行動をされて嫌な気持ちになることがありますか」
F= (1,129) =3.15, p<.1,　Mse=0.772

問 7_14「アルバイト先に行くことが精神的に辛いと思いますか」
F= (1,128) =6.48, p<.1, Mse=1.369

問 7_15「アルバイトで業務することが精神的に辛いと思いますか」
F= (1,129) =3.89, p<.1, Mse=1.369

これらの質問で有意差又は傾向がみられた.

【考察】

男女で有意差が示されたのは問 7_1「あなたはアルバイト先の賃金に満足していますか」という質問のみであった．平均値は男性 2.71，女性 2.11 であったことから，男女同一な賃金である事を女性の方がより意識し，賃金に満足している状況を表していると推察される．また今回の調査結果より，その他の質問項目での男女差は示されなかった．よって男女によるアルバイト先の就労状況，雇用の差については必ずしも明確ではないことが考えられる．また問 9「あなたがアルバイト先で不満に思っている点に何か行動したことがありますか」という質問と問 7 の全ての質問項目について分散分析を行った結果，15 問中 9 問に有意差が示された．これらの問いは「はい」と回答している者ほど，学生自身のアルバイト先がブラックバイト及びそれに近いと考え，不満な点について行動していることを示していると考えられた．一方で,「いいえ」と回答した者はそれらの問題解決よりも先に，当該職場を辞めることが合法で社会通念上許されるのか，という水準での疑問が彼らの悩みとしてまず表出されるという傾向が示されている（坂倉，2015）が、その点が本調査でも明確になったのではないかと考えることができた.またこのことは，アルバイト先がブラックバイト及びそれに近いものであっても，当該学生が何も行動を起こせない，起こす気がない状況になっているのではないかとも推察される．学生自身が不当な扱いを受けているという認識の低さや，その対応や改善に対しての知識等もほとんど持ち得ていないとの玉城（2017）の主張は，今後我々学生自身が向き合っていくべき問題であろう.

【参考文献】

坂倉昇平（2015）．なぜ学生はブラックバイトを辞められないのか（<小特集>若者「使い捨て」企業問題にどう取り組むか-社会的ネットワークの可能性）　社会政策, 6 (3), 68-74.
玉城直美（2017）.「大学生とアルバイト調査」結果を基にした考察:大学生生活とアルバイトの両立に向けて　沖縄キリスト教学院大学論集，13，11-21.

（なかがみひろえ・みずのまなみ・わたなべまや・ときたがく）

ネガティブな体験の日常的な語り頻度と顕在的・潜在的態度の関連

○佐藤研一郎[1]
([1]中央大学大学院文学研究科)
キーワード：語り，潜在的態度，Go/No-Go Association Task

【目的】

ネガティブな経験を繰り返し表現することでネガティブな感情が低減することが報告されている（Pennebaker & Beall,1986)。佐藤(2012)では，同一のネガティブ経験を筆記した群は，異なるネガティブ経験を筆記した群と比べてネガティブ感情が低下していたことから，同一の経験を繰り返し表現することが有効だと考えられる。ただし，これらの研究は実験的な手続きによるものであり，日常的に行われるネガティブ体験の言語表現については検討されていない。しかし，我々は日常の様々な場面で、ネガティブな体験について繰り返し考えたり言葉で表現したりすることがある。

本研究では言語表現のうち語りに着目し，日常的なネガティブ体験の語りの頻度と態度の関連について検討する。佐藤(2012)と同様の影響が日常的な語りにおいてもみられるのであれば，語りの頻度が高いほど体験に対してポジティブな評価がみられると考えられる。

また，ある対象を繰り返し呈示することで対象に対する好意度が増す単純接触効果が潜在的態度においても確認されている（川上・佐藤・吉田，2010）ことから，同一の出来事について繰り返し語った場合には，出来事に対する潜在的態度がポジティブなものに変容している可能性がある。そこで本研究では，主観的な評価である顕在的態度だけではなく，潜在的態度についても検討する。

【方法】

参加者　大学の授業で実験参加者の募集を行った。大学生92名（男性42名、女性52名，平均年齢19.09歳，*SD*=1.08）が実験に参加した。

材料　受験体験に関わる5項目のアンケートを用いた。受験体験を話す頻度や考える頻度に関する項目は6件法、受検結果の納得度や満足度、顕在的態度（受検体験の感情価）に関する項目は7件法であった。他の項目は得点が高いほど，変数名で示される度合いが高いものであった。顕在的態度については1:ネガティブ—7：ポジティブで尋ねた。潜在的態度の測度として受検GNAT（佐藤，2017）を用いた。

手続き　実験は，実験室で個別に実施した。実験開始前に，実験内容と個人情報の取り扱い，実験参加の同意についての説明を行った。参加者は実験のはじめに、受験に関するアンケートに回答した。その後、受検GNATを行った。受験GNATはPCで行われた。画面上部に目標カテゴリとして“受験”、属性カテゴリとして“ポジティブ”あるいは“ネガティブ”が呈示された。実験参加者は，画面中央に呈示された刺激語が，画面上部に呈示されている両カテゴリのいずれかに当てはまるか否かの弁別課題を行った。画面に呈示されたカテゴリと一致する刺激語が呈示された場合のみ，スペースキーを可能な限り速く押すよう求めた。画面中央に呈示される刺激語は，“受験”，“動物”，“ポジティブ”，“ネガティブ”のカテゴリに属する言葉であった。GNATのブロック構成やキー押し判断の制限時間は，Nosek & Banaji(2001)に倣った。

【結果】

受験GNATについては，Nosek & Banaji(2001)に倣い，GNAT得点を算出した。“受験-ポジティブブロック”のd'から“受験-ネガティブブロック”のd'を減算した値をGNAT得点とした。GNAT得点が高いほど受験に対するポジティブな評価を意味する。アンケートの各項目とGNAT得点の平均値と標準偏差を表1に示す。

アンケートの各項目とGNAT得点について相関分析を行った（表2)。

【考察】

受験体験を話す頻度と顕在的態度に正の相関がみられ，話す頻度が高いほど受験体験をポジティブだと捉えており，この結果は佐藤（2012）と一致するものである。受験体験を話す頻度と潜在的態度には関連がみられなかった。個人の経験については，繰り返し語られ接触頻度が高くても潜在的態度には影響がみられなかった。だが，本研究は相関研究であり，繰り返し語ることと顕在的・潜在的態度の因果関係については検討することができない。今後は縦断調査などで因果関係についても検討する必要がある。

【引用文献】

川上 直秋・佐藤 広英・吉田 富二雄 (2010). 単純接触がカテゴリ評価に与える効果——IAT と GNAT を用いて——心理学研究, *81*, 437-445.

Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The Go/No-go Association Task. *Social Cognition*, *19*, 625-666.

佐藤(2012).筆記開示はなぜ効くのか——同一経験の継続的な筆記による馴化と認知的再体制化の促進—— 感情心理学研究，*19*, 71-80.

佐藤(2017). 転換的語り直しが潜在的態度に与える影響——ネガティブな経験に対する潜在的態度の検討—— 日本社会心理学会第58回大会発表論文集，125.

（さとうけんいちろう）

表1　各項目とGNAT得点の平均値とSD

	平均	SD
受験体験を話す頻度	3.26	1.04
受験体験を考える頻度	3.41	1.21
受験結果の納得度	4.66	1.43
受験結果の満足度	4.32	1.68
顕在的態度（体験の感情価）	4.04	1.43
潜在的態度（GNAT得点）	0.48	0.75

表2　各項目とGNAT得点の相関係数

	1	2	3	4	5	6
1 受験体験を話す頻度	-					
2 受験体験を考える頻度	0.55 **	-				
3 受験結果の納得度	-0.09	-0.34 **	-			
4 受験結果の満足度	0.04	-0.21 *	0.76 **	-		
5 顕在的態度（体験の感情価）	0.29 **	0.09	0.24 *	0.39 **	-	
6 潜在的態度（GNAT得点）	-0.02	-0.17	0.05	-0.04	0.03	-

*p<.05, **p<.01

行動の道徳性判断と関係流動性、文化的自己観の関連

○伊坂　裕子
（日本大学国際関係学部）

キーワード：道徳性判断・関係流動性・文化的自己観

【目的】　道徳観や道徳的判断には、文化的影響があることは広く認められている。Haidt(2001)は道徳を構成する枠組みとして、①危害(harm)、②公平性、③互恵性(reciprocity)、④内集団に対する忠誠／尊敬、⑤純粋性(purity)の５領域を想定し、各領域が道徳を構成する程度は文化によって異なるとしている。一方、Buchtel, et. al.(2015)は、中国人とアメリカ人に不道徳な行動の例を挙げさせ、日常的に使用される「道徳」の概念について検討した。その結果、儒教的思想の影響を受けた中国の道徳観では、危害や公平性という観点より、礼節などを重視した道徳観が形成されていると指摘している。本研究では、Buchtel, et. al.(2015)の使用した行動について、日本人大学生による道徳的判断を求め、日本人大学生の道徳的判断に影響を与える要因を探索する。

【方法】　調査対象者　日本の大学に通う 130 名（男性 81 名、女性 49 名）に質問紙を実施した。そのうち、国籍が日本ではない９名、また、70 代以上の３名を分析から除外した。分析の対象となったのは、118 名（男性 74 名、女性 44 名；平均年齢 19.01 歳）であった。

調査内容

1) 道徳観に関する質問

Buchtel, et. al.(2015)の使用した 28 項目について、「不道徳」、「悪いことであるが不道徳というわけではない」、「悪いことではない」の３つのカテゴリーのどれかに分類させた。

2) 関係流動性

Yuki 他(2007)が作成した 12 項目の関係流動性尺度（日本語）を使用した。各項目について、自分の周囲の人たちに当てはまる程度を６段階で評定させた

3) 文化的自己観

高田他(1996)が作成した相互独立的—相互協調的自己観尺度（改定版）を使用した。相互独立的自己観・相互協調的自己観をそれぞれ測定する各 10 項目、計 20 項目について、自分自身にあてはまる程度を７段階で回答を求めた。

【結果】

１）各行動の道徳性判断

Buchtel, et. al.(2015)の採用した 28 項目の行動は、カナダ、オーストラリア、香港、中国の大学生に、「不道徳」な行動の例を記述させたものの中から、「道徳観」の違いを検討するために採用された 28 項目である。したがって、何らかの意味で「悪い」行動と考えられる。しかし、本研究では調査対象者の 25%以上が悪くないことと判断した行動が５項目あった（「遊びで多くの人とセックスすること(31.4%)」、「自分の行動を導く価値観を持たないこと(28.8%)」、「自分のために誰かを利用すること(27.1%)」、「利己的にふるまうこと、自分の利益のみを考えること(26.5%)」、「偽善的で裏表があること(25.6%)」）。一方、悪くないことと分類した対象者が 1%未満の行動は「汚職やわいろに加担すること(0.8)」など３項目で、明確に法律に違反する行動であった。

２）関係流動性と文化的自己観

関係流動性の 12 項目について、逆転項目の処理をした上で、平均値を求め、関係流動性得点(M=3.80, SD=0.67)とした。文化的自己観については、相互独立的自己観・相互協調的自己観を測定する各 10 項目の平均を求め、それぞれ相互独立的自己観得点、相互協調的自己観得点とした。相互独立的自己観得点から相互協調的自己観得点を減算したものを相対的自己観得点(M=-0.10, SD=1.41)とした。関係流動性と相対的自己観との相関はなかった(r=.005)。

３）関係流動性。文化的自己観と各行動の道徳カテゴリー

関係流動性の平均値を基準として、関係流動性低群(N=64)と高群（N=54）に分類し、各行動の道徳カテゴリーとクロス集計を行った。χ^2検定の結果、28 項目の行動の中で、「自国の法律に背くこと」「友だちを裏切ること」など８項目が $p<.05$ で有意であった。また、２項目が $p<.10$ で有意傾向であった。全般的にこれらの行動について、関係流動性を高く認める人がそうでない人に比べて、「悪くない」とする割合が少なく、「不道徳」とする割合が多かった(Table1)。

Table1 関係流動性の高さと各行動の道徳カテゴリーのクロス集計（例）

		低群 N=64	高群 N=54	$\chi^2(2)$
自国の法律に背くこと	不道徳	51.6%	75.9%	8.984 *
	悪いこと	35.9%	22.2%	
	悪くない	12.5%	1.9%	
	合計	100.0%	100.0%	
友だちを裏切ること	不道徳	54.0%	77.8%	9.664 **
	悪いこと	36.5%	22.2%	
	悪くない	9.5%	0.0%	
	合計	100.0%	100.0%	
いじめを傍観すること	不道徳	26.6%	49.1%	7.806 *
	悪いこと	53.1%	43.4%	
	悪くない	20.3%	7.5%	
	合計	100.0%	100.0%	
集団で特定の人を無視すること	不道徳	53.1%	74.1%	7.291 *
	悪いこと	40.6%	25.9%	
	悪くない	6.3%	0.0%	
	合計	100.0%	100.0%	

** p<.01, * p<.05, + p<.10

文化的自己観については、相対的自己観がプラスの独立的自己観優勢群とマイナスの協調的自己観優勢群に分け、各行動の道徳カテのゴリーとのクロス集計を行った。χ^2検定の結果、28 項目の行動の中で、「親を敬わないこと」「自国の法律に背くこと」など３項目が $p<.05$ で有意であった。また、３項目が $p<.10$ で有意傾向であった。協調的自己観群が独立的自己観群に比べて各行動に「不道徳」とする判断が多い傾向にあった。

【考察】道徳性判断に、関係流動性の影響があることが示唆された。流動性を高く認識する人は、新しい出会いの中で、自分を選んでもらうために自身の道徳性を高めていることが考えられる。本研究で使用した行動は、何らかの意味で「悪い」と考えられるとした行動であるが、「悪くない」という判断が比較的多いものもあった。日本社会は関係流動性が低い社会と考えられ、それが日本人大学生の道徳判断に影響を与えた可能性もあると考える。一方、文化的自己観による影響は、あまり顕著ではなかった。

【引用文献】

高田利武・大本美千恵・清家美紀(1996). 相互独立的—相互協調的自己観尺度（改定版）の作成　奈良大宅紀要, 24, 157-173.

Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K, Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. Center for experimental research in social science. Working paper series, No. 75.

（いさか　ひろこ）

期間限定と地域限定が購買意欲に及ぼす影響

濱　保久
（北星学園大学　文学部　心理・応用コミュニケーション学科）
キーワード：希少性，期間限定，地域限定

【研究の目的】

希少性が獲得欲求に少なからず影響を与えていることはよく知られている。また、Clee &Wicklund(1980)や Cialdini(2009)が指摘しているように希少性の原理は数量だけでなく、物理的な時間や距離にも影響を受けることも共通認識として成立しているといえよう。つまり、今を逃すとなかなか入手できないという場合に獲得欲求は高くなるのである。しかし、これまでの研究ではそれぞれの要因の効果を立証してはいるものの、時間的希少性と地域的希少性の交互作用を扱った研究は見当たらない。そこで、本研究では期間限定と地域限定が購買意欲に及ぼす影響を同時に検証したいと考えた。

【方　法】

本研究では、三村（2008）によって定義された①期間限定②数量限定③地域限定④チャネル限定⑤顧客限定の５つの希少性の中から、期間限定と地域限定に着目した質問紙実験を行った。また、扱った商品は比較的地域色が出やすいおにぎりと地域色が出にくい飲料水の２種類を準備したが、実験デザイン上の要因としては扱わなかった。実験協力者は北星学園大学大学生 182 名（男子 54 名、女子 128 名）である。

実際の設定では「あなたは現在＊＊の街を歩いています。少し喉が渇いたので、飲み物を買おうと思い、売店に立ち寄りました。するとドリンクコーナーで「期間限定で発売されている＊＊限定の飲料水」を見つけました。このような状況を想像した上で以下の質問にお答えください。なお、あなたは札幌の住民であると仮定します。」という内容の文章を質問紙で提示した。＊＊の街部分には、地域条件の違いにより京都、函館、札幌が入り、また、期間限定条件の違いにより下線部は削除された。おにぎりの場合は、「少し喉が渇いたので飲み物を買おうと思い」の箇所が「少しお腹が空いたのでおにぎりを買おうと思い」に「ドリンクコーナーで」の箇所が「おにぎりコーナーで」に「限定の飲料水」の箇所が「限定のおにぎり」にというように適宜表現が変えられた。

札幌在住が前提であるので、札幌の街条件は地域限定による希少性はほとんどなく、京都の街条件では地域限定による希少性は高い。函館の街条件はその中間に位置するものとして設定した。

すなわち、実験デザインとしては２（期間限定による希少性の有/無）×３（地域限定による希少性の操作：札幌/函館/京都）である。なお、従属変数は、設定条件を提示後に行った７件法による３項目の質問で得られた回答評定値である。１つ目は購買意欲の程度、２つ目は商品に対する魅力度で３つめはその商品にいくらお金をかけられますかという質問で、「他の商品より安い金額」が１で「他の商品より高い金額」を７とした７段階評定で回答を求めた。

【結　果】

１．飲料水の結果

１）購買意欲の程度について

評定値に基づいて、2（期間限定による希少性の有/無）×3（地域限定による希少性の操作：札幌/函館/京都）の 2 要因分散分析を行った。その結果。期間限定および地域限定の主効果が有意であったが、(F [1, 179]=29. 00, p<. 001 ; F [2, 179]=4. 53, p<. 05)、交互作用は有意ではなかった F [2, 179]=1. 17, *n. s.*)。

２）商品に対する魅力度について

評定値に基づき同様の２要因分散分析を行ったところ、期間限定および地域限定の主効果が有意であったが、(F[1,179]= 41.44, p<.001 ; F[2,179]= 3.65, p<.05)、交互作用は有意ではなかった F[2,179]= 2.91, *n.s.*)。

３）支払金額について

評定値に基づき同様の２要因分散分析を行ったところ、期間限定および地域限定の主効果が有意であったが、(F[1,179]= 21.97, p<.001 ; F[2,179]= 5.08, p<.01)、交互作用は有意ではなかった F[2,179]= 1.48, *n.s.*)。

２．おにぎりの結果

１）購買意欲の程度について

評定値に基づいて、2（期間限定による希少性の有/無）×3（地域限定による希少性の操作：札幌/函館/京都）の２要因分散分析を行った。その結果。期間限定および地域限定の主効果が有意であり、(F[1,179]= 15.33, p<.001 ; F[2,179]= 5.97 p<.01)、交互作用も有意であった(F[2,179]=4.46, p<.05)。下位検定の結果、非期間限定条件における札幌と京都、および札幌と函館の間に 5%水準で有意な差が認められ、期間限定条件においても同様の結果が認められた。また、札幌条件における非期間限定条件と期間限定条件の間にも 5%水準で有意な差が認められた。

２）商品に対する魅力度について

評定値に基づき同様の２要因分散分析を行ったところ、期間限定および地域限定の主効果が有意であり、(F[1,179]= 10.34, p<.01 ; F[2,179]= 3.72, p<.05)、交互作用も有意であった F[2,179]= 5.15, p<.01)。下位検定の結果、非期間限定条件における札幌と京都、および札幌と函館の間に 5%水準で有意な差が認められ、期間限定条件においても同様の結果が認められた。また、札幌条件における非期間限定条件と期間限定条件の間にも 5%水準で有意な差が認められた。

３）支払金額について

評定値に基づき同様の２要因分散分析を行ったところ、期間限定および地域の主効果が有意であったが、(F[1,179]= 6.50, p<.05 ; F[2,179]= 5.81, p<.01)、交互作用は有意ではなかった F[2,179]= 2.87, *n.s.*)。

【考　察】

先行研究の知見同様、地理的制約による希少性と時間的制約による希少性は、飲料水、おにぎりを問わずすべての従属変数において有意であった。注目すべきは、地域限定と期間限定の交互作用についてで、この交互作用が有意であったのはおにぎりにおける購買意欲の程度と商品に対する魅力度だけであった。これは地域色を反映しやすいおにぎりにおいては、地域限定の効果が期間限定の効果を吸収しているためであると考察した。したがって、観光客をターゲットにするような場合に地域限定だけで十分効果的で、これに期間限定をさらに付加しても意味が少ない。しかし、地域住民に対しては期間限定は有効であると考える。

本研究の遂行に当たり松原栞氏の多大なる貢献を得た。ここに記して謝意を表す。　（はま　やすひさ）

商店街の国民的キャラクター起用の有無と関心度から見るまちづくり

○山岡駿介　高橋七海　渡部名美　岡野谷和花　時田　学
（日本大学商学部）

キーワード：商店街・国民的キャラクター・関心度

【目的】

日本は「キャラクター」を手段として，国内外を問わず，観光振興や文化振興に尽力している（和田，2012）．キャラクターには「人格」や「性格」という言葉に表されるように生きている人のような特徴があり，多くはその背景にさまざまな物語や世界を持っている（陸川，西岡，2002）．本論では，キャラクターは「実在する人間のように生きている個性ある魅力的な存在」だと考え，「人格」を持っていると定義する．多種多様なキャラクターが存在する日本においては，国民のキャラクターに対する認知や好感を抱く対象は分散してしまうことが想定され，そのような中で認知度，好感度ともに高いキャラクターは“国民的キャラクター”と呼べるとの指摘がある（日本リサーチセンター，2015）．例えば，「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の漫画キャラクターを使用した亀有地区商店街や（亀有地区商店街協議会，2018），富山県の氷見市比美町商店街振興組合では「忍者ハットリくん」という漫画キャラクターを起用し，様々な取り組みを行っていること等から（氷見市比美町商店街振興組合，2018），多様なキャラクターが様々な活性化活動に使用されている．

本研究では，キャラクターを活性化活動に使用することに対する影響について検討するために，キャラクターの知名度に視点を当て，その様な活動を行っているウルトラマン商店街（祖師谷商店街振興組合（以下（商振））・祖師谷みなみ（商振）・祖師谷昇進会（商振)と，それ以外の複数の商店街を取り上げて調査対象とする．

【方法】

平成30年9月12～16日に，国民的キャラクターを起用していない下高井戸（商振），国民的キャラクターを起用している祖師谷みなみ（商振）・桜新町（商振）に来街していた消費者を対象として調査を行った．

被調査者　下高井戸（商振）70名（男性36名，女性34名），祖師谷みなみ（商振）75名（男性39名，女性36名），桜新町（商振）71名（男性35名，女性36名）であり，調査対象者総数216名であった．

質問紙　質問項目は計11項目であり，本研究で主に使用した代表的な項目を以下に記す．

性別，年齢，漫画やアニメーションキャラクターに対しての感情移入度（問3），国民的キャラクターの好感度（問5），愛着を持つ国民的キャラクターが地域に活用されていた場合，その地域への関心度（問6），国民的キャラクターが活用されていた場合，その商店街を利用したいと思うか（問8）である．

【結果】

対象者総数の年齢　19歳以下が12名(5.6%)と一番少なく，40代が59名(27.3%)と一番多かった．

問3　商店街を要因とした1要因3水準の分散分析を行ったところ，有意な結果が得られた（F（2，213）＝6.249，p <.05）．Tukey法により，下高井戸（商振）（M=2.86）と祖師谷みなみ（商振）（M=3.53）の間に5%水準で有意差が示された．

問5　x^2検定（3×2）を行ったところ，各国民的キャラクターのうち，ウルトラマン（x^2=6.874，p<.05）とサザエさん（x^2=24.497，p<.05）に有意な結果が得られた．残差分析により，ウルトラマンの好感度は祖師谷みなみ（商振），サザエさんの好感度は桜新町（商振）に5%水準で有意差が示された．

問6　各国民的キャラクターを好きと回答した対象者ごとに，商店街について1要因3水準の分散分析を行ったところ，ウルトラマンを好きと答えた対象者に有意な結果が得られた（F（2，110）＝4.245，p<.05）．Tukey法により，下高井戸（商振）（M=3.60）と祖師谷みなみ（商振）（M=4.10）の間に5%水準で有意差が示された．

問8　商店街を要因とした1要因3水準の分散分析を行ったところ，有意な結果が得られた（F（2，213）＝6.201，p<.05）．Tukey法により，下高井戸（商振）（M=3.00）と祖師谷みなみ（商振）（M=3.52），下高井戸（商振）（M=3.00）と桜新町（商振）（M=3.58）の間に5%水準で有意差が示された．

【考察】

問3　今回キャラクターは「人格」を持っていると定義したことから，ただの記号としての存在ではなく，1つの「人格」を持った存在として感情移入しやすい・親しみを感じやすいことが考えられ，商店街でのキャラクター起用の有無による有意差が生じたと推察される．

問5　祖師谷みなみ（商振）では，ウルトラマンを題材に商店街と円谷プロが一緒に盛り上げることで，その認知度と相まって好感度も上昇し，さらに長年に渡る商店街の人のウルトラマンを用いた街おこしの成果も好感度に影響を及ぼしていると推察される．また，桜新町（商振）では，原作の魅力を知ることができる特別企画や，駅から長谷川町子美術館までの通り沿いに，サザエさんのオブジェやイラスト，カフェが存在しており，サザエさんの街として根強く浸透し，住民や訪れる人に親しまれ続けていることから好感度に影響を及ぼしたと考える．

問6　祖師谷みなみ（商振）は，ウルトラマン起用商店街であり，前述した街おこしの成果による好感度への影響と，ウルトラマンと地域の関連をより強く身近に感じられるとともに，ウルトラマンに愛着を持つウルトラマン好きにも愛されることを通じて，地域への興味も増加すると考える．

問8　キャラクター起用商店街と非キャラクター起用商店街で有意差が示されたことから，商店街の国民的キャラクター活用の有無とキャラクターの存在による来街意欲の促進が，キャラクターの存在を商店街と結び付けることができる．また，冒頭のキャラクターによる活性化で関心を惹きつけることができれば，大きな話題性が生まれると考える．

【引用文献】

・和田　崇 2012 コンテンツを活用した地域振興活動の発展要因と活用パターン 日本地理学会発表要旨集，p.1.
・陸川和男・西岡直美 2002 図解でわかるキャラクターマーケティング 日本能率協会マネジメントセンター.
・日本リサーチセンター 2015 第2回 NRC全国キャラクター調査 Part4 マンガ・アニメキャラクター編.
・亀有地区商店街協議会 2018 亀有地区商店街協議会 亀有地区商店街協議会ホームページ.
・氷見市比美町商店街振興組合 2018 氷見市比美町商店街 氷見市比美町商店街ホームページ.

（やまおかしゅんすけ・たかはしななみ・わたなべなみ
おかのやのどか・ときたがく）

課題遂行順序が課題終了後のストレス反応に及ぼす検討

○伊藤晃碧[1]　古屋健[2]
([1]立正大学大学院心理学研究科　[2]立正大学心理学部)
キーワード：ストレス反応，ピークエンドの法則，メンタルワークロード

【研究の目的】

近年，特に職場において，過労やストレスに起因する心身の健康被害が問題視されており，労働者の 58.3%が強いストレスを感じていることが明らかとなっている(厚生労働省，2018)。学術的には，職務遂行といった作業による負担はワークロードと呼ばれ，精神的な負担はメンタルワークロードと呼ばれている(日本認知心理学会，2011)。その中で，個人に影響を及ぼす外的要因は外部負荷(work stress)，外部負荷によって影響を受ける内的要因は内部負荷(work strain)として区別されている。メンタルワークロードは特に外部負荷によって生じる負担を主に扱っており，外部負荷が負担感の総量や内部負荷の程度にかかわり，さらに内部負荷を通して促進的・減退的(ストレス反応)影響を及ぼすとされている。

また，内部負荷の程度は，外部負荷の大小に比例しておらず，認知的評価が媒介することで変化する。そのため，認知的評価に影響を与える現象であるピークエンドの法則が応用できると考えられる。この法則では，記憶に基づく評価は出来事のピーク時と終了(エンド)時の苦痛の平均でほとんど決まることと，出来事の持続時間は苦痛の総量の評価にはほとんど影響を及ぼさないことを示している(Kahneman et al, 1993)。つまり，出来事の評価は，その出来事の中で最も苦痛を感じた時の記憶と，出来事の最後に感じた苦痛によって決まるとされているのである。

メンタルワークロードにおいても，外部負荷が否定的に評価されることで内部負荷がより高まるため，ストレス反応が引き起こされる。そのため，難しい課題を最初に，簡単な課題を最後に遂行することによって，課題遂行という出来事があまり否定的に評価されず，苦痛が割り引かれると考えられる。このことから，課題遂行によるストレス反応の抑制効果が予想されるため，以下の仮説を実験的に検討した。

仮説：遂行する課題の難易度が簡単になっていく場合，難しくなっていく場合よりも内部負荷を感じないであろう。

【方法】

実験対象者：大学生と大学院生 50 名(男性 21 名，女性 29 名)を対象とした。平均年齢は 21.06 歳(SD＝1.74)であった。

実験計画：実験群として，課題の難易度が徐々に上がっていく Up 条件と，Up 条件の課題順序を逆転することで難易度が下がっていくようにした Down 条件を設けた。加えて，統制群として終始低難度な課題が続く Easy 条件と，終始高難度な課題が続く Hard 条件を設けた。また，ストレス反応等のデータ収集は課題の事前事後で行った。よって，本実験の独立変数は条件(Up／Down／Easy／Hard)×測定時(事前／事後)の２要因混合計画であった。

続いて，本実験では従属変数として感情反応を質問紙で測定し，田中(2008)の簡易気分調査票日本語版(BMC-J)12 項目４件法を使用した。また，身体的な反応として血圧や心拍数，唾液アミラーゼという生理指標を測定した。

ストレス課題：１回３分の暗算課題を６セット行った。具体的には，４桁の数字から高難度では３桁の数字(例：9246－224)，低難度では１桁の数字を引き続けた(例：1000－３)。Up 条件と Down 条件で使用した中程度の難易度では，２桁の数字を引き続けた(例：1000－24)。

手続き：本実験は，実験参加者を１人ずつ実験室に呼んで実施した。ストレス反応の測定は，感情反応は課題の前後 1 回ずつ，生理指標は課題の前後と，課題終了後 10 分後と 15 分後の計４回測定した。

なお，生理指標の１つである唾液アミラーゼは内部負荷が高まってから分泌が盛んになるまでに 10 分程度のタイムラグが存在しているため，課題終了直後が課題の中間地点，課題終了 10 分後が課題終了直後，課題終了 15 分後がクールダウン後の内部負荷を反映している。

【結果】

まず，唾液アミラーゼの事前測定値において，非常に大きなばらつき(３～83)が見られたため，測定値の平方根変換を行った。それ以外の生理指標については，そのまま分析を行った。感情状態については，項目を肯定感情と否定感情に分け，それぞれ平均値を算出して使用した。

その後，すべての指標において，それぞれ２×２の分散分析を行った。その結果，感情反応において，条件ごとの有意差は見られなかったが，課題前と比べ，課題後で肯定感情が低下し，否定感情が増加することが示された。

続いて，生理指標のうち，血圧と心拍数においてはすべての有意差が見られなかった。

一方，唾液アミラーゼでは条件ごとに有意差が見られ，Hard 条件と Up 条件では課題の中間から直後にかけてアミラーゼ値が上昇し，最終的に多くのストレスを感じる傾向が示された。なお，Hard 条件は有意，Up 条件は有意傾向であった。また，Down 条件では課題の中間から直後にかけてアミラーゼ値が低下し，最終的に感じるストレスは Hard 条件と Down 条件に比べて少ない傾向にあることが，有意傾向ではあるが示唆された(図１)。

以上のことから，本実験の仮説は支持された。

【考察】

本実験により，同じ内容の課題を遂行する場合において，遂行順序により実験参加者の生理的なストレス反応が異なり，Down 条件のほうが Up 条件よりも低い内部負荷で済む可能性が示された。

一方，感情反応では条件ごとの有意差が見られなかったが，ピークエンドの法則の先行研究では心理的ストレス反応の変化が報告されているため，その結果が再現できていない。そのため，本当にピークエンドの法則がメンタルワークロードの知見に応用できないのかを判断するため，先行研究の手続きに基づいた追試を行う必要がある。

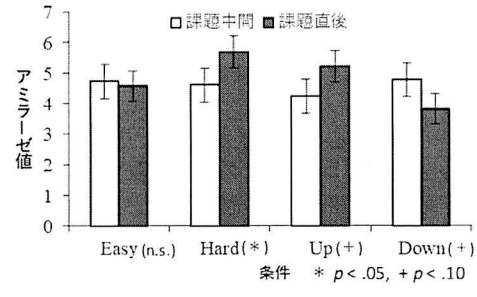


図１　課題によるアミラーゼ値の変化

(いとう　こうき・ふるや　たけし)

経営組織におけるメンタリング

メンタリングとストレスの関連性

遠藤慧　小林史佳　中園翔太　生沼萌　三田村南美　外島裕
（日本大学商学部）

キーワード：メンタリング，ストレス，ストレス対処

【目的】職場の60%以上の社員が「強いストレス・不安・悩み」を抱えているという現状を問題意識とした。独立行政法人労働政策研究機構（2007）では離職した者の前職でのストレスについて言及している。調査の中の「前職の職場ついて仕事上のストレスが過大である状態であったか」という質問に対しストレスが過大だったとする者（「そう思う」＋「ややそう思う」）は正社員で77.3%と、ほぼ4人に3人がストレスの過大を感じていた。本論考では、ストレス反応が現われる前に、対処行動であるコーピングを強化させることで、ストレス反応を未然に防ぎ離職率の低下を目的とする。
【方法】教育制度であるメンタリングを手段として用いてストレス対処との関連を示しながら、検討する。
【研究内容】本来教育制度として位置づけられているメンタリングとストレス対処の方法であるコーピングの関連性を検討する。メンタリングとは知識や経験が豊かな人（＝メンター）が、未熟な人（＝プロテジェ）に対して、一定期間継続して行う支援行動のことである。メンタリングには2種類の機能がある。第一にキャリア的機能があり、以下の5つの下位概念によって構成される。①「支援（sponsorship）」プロテジェがより望ましい配置異動や昇進が可能となるように支援をする行動。②「推薦と可視性（exposure&visibility）」プロテジェの将来の機会を向上するような仕事にプロテジェを推薦する行動。③「訓練（coaching）」プロテジェにフィードバックをもたらし、仕事の目標を達成するための戦略を提案する行動。④「保護（protection）」プロテジェの評判を脅かすような不必要なリスクを削減し、このようなリスクからプロテジェを守る行動。⑤「仕事への挑戦性の向上（challenging assignments）」挑戦のしがいがある仕事をプロテジェに割り当てることを意味する行動。以上の５つである。第二に心理・社会的機能とは、プロテジェの精神的、心理的健康の増進を目的とした支援行動である。この機能には4つの下位概念によって構成される。①「役割モデル（role model）」プロテジェにとってふさわしい程度や価値観に関するお手本を演じること。②「容認と確認（acceptance&confirmation）」プロテジェを一個人として尊重し、プロテジェに対して無条件に肯定的な関心を伝えること。③「カウンセリング（counseling）」プロテジェがオープンに心配や悩みについて語ることをできるような場や機会を提供する働きの全体を意味する。一方で、コーピング（対処）には二つのストレス対処方法がある。第一に問題中心の対処がある。問題中心の対処とは、ストレスの原因となる問題そのものに焦点を置いた対処行動のことを指す。第二に情動中心の対処がある。情動中心の対処とはストレスの問題そのものではなく、気持ちの整理に焦点を置いた対処行動のことである。私たちはこのメンタリングの「キャリア的機能」とコーピングの「問題中心の対処」が、そしてメンタリングの「心理・社会的機能」がコーピングの「情動中心の対処」と対応していると考えた。例えば昇進したいと思っている社員が昇進に関わる大きな仕事を任されたとする。このようなストレス下でメンタリングをしていればキャリア的機能の「訓練」によって備えられた知識や技能、また「支援」により得られたプロジェクトに参加した経験を活かして仕事を全うでき、ストレスを未然に防ぐことができる。さらに、課題が未達で落ち込む部下に対し心理的なアプローチが必要な場合、メンタリングをしていれば「カウンセリング」によって日頃から悩みを相談することができ、「役割モデル」によりメンターを信頼することができる。そのことからプロテジェはその場のストレス対処が可能となる。従ってメンタリングの2つの機能とコーピングの2つの対処方法が対応しているということがいえる。またメンター制度の導入企業である「株式会社オークローンマーケティング」ではメンター制度導入前に対し、メンター制度導入後の離職率は入社1年以内では11.6%、入社2年以内では10.0%に低下した。このことからもメンタリングがストレス対処に有効であり離職率低下にも影響を及ぼすといえる。
【結果】私たちは、ストレス対処行動である2種類のコーピングとメンタリングの2つの機能がそれぞれ対応していると考えた。（表1）問題中心の対処はキャリア的機能と、情動中心の対処は心理・社会的機能と対応しているといえる。そのため、メンタリングを行うことによって、ストレス対処行動であるコーピングを強化し、ストレス反応を未然に防ぐことができると考える。

コーピング	問題中心の対処	情動中心の対処
メンタリング	キャリア的機能	心理社会的機能

（表1）コーピングとメンタリングの関連性

【課題】メンタリングの運用の現状として、メンターはプロテジェに対して単なる教育制度とし、仕事を教えるということに留まっていると考える。しかしメンタリングの運用をするにあたりメンターはメンタリングの要素をきちんと理解しキャリア的側面と心理・社会的側面の双方からアプローチする必要があると考える。よって、メンターに対しても運用の仕方を教育する必要がある。更に、メンタリングの心理・社会的機能についてはメンターによってプロテジェの教育に対する熱量が異なる。従って、メンターを評価する制度を設ける必要がある。例えば、プロテジェに対して費やした時間や、第三者の客観的な評価を取り入れるなどの方略を考える。

【引用文献】

・Lazarus, R. S. &Follkman, s. [1984]Stress, appraisal, and coping. New York:springer.
・キャシー・クラム　渡辺直登・伊東知子（訳）[2003]『メンタリング』白桃書房
・久村恵子[1997]「経営組織におけるキャリアおよび心理・社会的支援行動に関する研究」『経営行動科学』第13巻第1号 pp. 43-50。
・久村恵子[1997]「メンタリングの概念と効果に関する考察」『経営行動科学』第11巻第2号 pp. 81-95。
・株式会社オークローンマーケティングホームページ http://www.oaklawn.co.jp/company/
・独立行政法人労働政策研究機構 [2007] https://www.jil.go.jp/

（えんどうけい・こばやしふみか・なかぞのしょうた　おいぬまもえ・みたむらみなみ・としまゆたか）

建築現場のハザード分類の検討

○高橋明子
（独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所）

キーワード：ハザード知覚，リスク知覚，建設作業者

【目的】高橋他（2016）は建設作業者向けの危険予知ツールを作成し，作業者を対象とした実験で教育訓練効果を明らかにした．しかし，作業者の学習は，訓練した危険要因のみを理解する限定的なものであり，訓練後，作業場面に他の危険要因があっても多くの作業者が指摘しなかった．他分野を見ると，蓮花他（2003）は交通環境に潜むハザードを特性に従って顕在的ハザード，行動予測ハザード，潜在的ハザードの3種類に分類し，高齢ドライバーのハザードの種類ごとの知覚特性を明らかにした．住宅建築現場においてもハザードを特性に従ってカテゴリーに分け，作業者がそれらを学習することができれば，応用性のあるハザード教育が提案できると考えた．そこで，本研究では建設作業者による作業場面の墜落転落リスクの主観評価をもとに，建設現場のハザードを特性によって定義・分類することを試みた．さらに，建設作業者の経験によるハザード知覚やリスク知覚の差異を検討した．

【方法】**実験刺激の作成**：ハウスメーカーの安全管理担当者11名へのヒアリングにより，予め墜落転落に関連するハザード分類の候補と各分類の典型例を抽出した．ハザードは顕在ハザード，潜在ハザード，他者行動予測（他者の行動の影響で墜落転落の可能性がある），自己行動予測（自己の行動の反動などにより墜落転落の可能性がある）の4種類が抽出され，各ハザードの典型例が3場面ずつ抽出された．これらの12場面について，作業者が墜落可能性のある場面を10秒程度の3DCGアニメーションで作成した．

実験方法：実験参加者は経験の浅い建設作業者64名（経験10か月，19.0±0.6歳），ベテラン建設作業者21名（経験21.0±6.5年，42.1±5.8歳）であった．実験は12場面を各2回提示し，場面ごとにハザードと発生事象を訊いた．次に，ハザードと発生事象の解説とともに12場面を再度提示し，主観評価として不安感，墜落可能性，ハザードへの気づきやすさ，普段の作業での類似場面の遭遇頻度を7件法で訊いた．実験環境の制約のため，経験の浅い作業者は3グループに分割し，教室にて115インチのスクリーンへプロジェクタで場面を投影し記述により回答を求めた．ベテラン作業者は住宅建築現場や事務所にてタブレット端末（Apple製iPad Air2）により場面を提示し口頭にて回答を求めた．本研究は労働安全衛生総合研究所の研究倫理審査委員会の承認（H29-安4）を得た．

【結果と考察】**ハザードの分類**：12場面の不安感の評価値について主因子法による因子分析を行った．固有値の変化から3因子に絞り，2回目の主因子法・Promax回転による因子分析を行った（累積寄与率58.83%）（表1）．第1因子は脚立作業の4場面すべてを含む6場面が含まれ，用具上でバランスを崩す可能性のある場面が多かったため，脚立因子（α=.788）と命名した．第2因子は3場面が含まれ，因子負荷量の高かった2場面が床面の墜落防止措置のない開口部で足を踏み外して墜落転落する可能性のある場面であったため，顕在開口部因子（α=.721）と命名した．第3因子は3場面が含まれ，因子負荷量の高かった2場面が固定されていない床面に乗って墜落転落する可能性のある場面であったため，潜在開口部因子（α=.669）と命名した．このように建築現場のハザードは想定された4種類のハザード（顕在・潜在・他者行動予測・自己行動予測）とは異なる分類となり，起因物（開口部や脚立）と墜落状況（バランスを崩す，足を踏み外す，未固定の床面がひっくり返る）によって分類されると考えられた．また，脚立因子は作業中の転落であり，顕在開口部と潜在開口部は移動時の転落であったため，作業者は移動時と作業時でハザードのとらえ方が異なる可能性もあった．

表1 不安感の評価の因子分析結果

場面		因子1	因子2	因子3	共通性（因子抽出後）
第1因子：脚立因子					
場面l	脚立から身を乗り出して釘打ち作業．釘打ち機の反動で脚立から墜落の可能性あり．	**.780**	.101	-.191	.583
場面f	砂利上に脚立を置いて身を乗り出す作業．脚立の脚が砂利に埋まり，バランスを崩して墜落の可能性あり．	**.723**	-.242	.189	.517
場面k	脚立上で雨を含んで重いブルーシートを引っ張って落とす作業．重いブルーシートの反動で脚立から墜落の可能性あり．	**.598**	.074	-.009	.412
場面g	クレーンで吊った荷の位置を修正する場面に近づく．動いた荷が当たり開口部から墜落の可能性あり．	**.497**	.047	.099	.342
場面b	片側の脚が2箇所ベニヤ板に乗った状態の脚立上に乗っている．脚立ごと転倒の可能性あり．	**.434**	.139	-.025	.269
場面c	出窓によりできた開口部の近くで点検作業をしながら移動．墜落の可能性あり．	**.425**	.067	.248	.404
第2因子：顕在開口部因子					
場面a	墜落防止措置のない階段開口部付近を材料を持って移動．開口部から墜落可能性あり．	-.011	**.832**	-.016	.674
場面i	作業者が荷受のため後進している場所に近づく．荷受の作業者がぶつかり，開口部から墜落可能性あり．	.228	**.671**	-.073	.650
場面h	近くを歩く作業者が長い梁材を持って方向転換．梁材が当たって開口部から墜落の可能性あり．	-.121	**.431**	.303	.270
第3因子：潜在開口部因子					
場面d	固定されていない足場板上を歩く．足場板がひっくり返って墜落の可能性あり．	-.041	.057	**.851**	.719
場面e	階段開口部の固定されていない仮床上で，脚立作業．仮床がひっくり返って墜落の可能性あり．	.041	-.045	**.631**	.410
場面j	墜落防止措置をしていない開口部付近で，重い柱を持ち上げる．重い柱の反動で開口部から墜落可能性あり．	.277	.167	**.286**	.357

ハザードの正解率と主観評価：ハザードの正解率について経験の浅い作業者の記述式の回答が明瞭であった9場面を分析した．脚立因子に含まれる場面は経験による正解率の差はなかったが，顕在的開口部因子の場面iと潜在開口部因子の場面jは経験の浅い作業者のほうがベテラン作業者よりも正解率が有意に高かった（どちらも$p<0.05$）．また，各主観評価について，各因子に含まれる場面の平均値を経験により比較した結果，不安感，墜落可能性，ハザードへの気づきやすさは経験による差はなかったが，普段の類似場面の遭遇頻度は，脚立因子においてベテラン作業者が経験の浅い作業者よりも有意に評価が高かった（$p<0.001$）．実験後のヒアリングで，ベテラン作業者から，経験に伴って現場に広く注意が向くようになるとの意見があり，建設作業者のハザード知覚やリスク知覚は経験によって異なると考えられたが，今回は明確な差異は見られなかった．これは，各場面のハザードが現実場面よりも明示的であったことや墜落可能性の解説後に主観評価を訊いたことで，経験の浅い作業者もハザードやリスクを十分理解できていたことが影響した可能性がある．脚立因子はベテラン作業者のほうが類似場面の遭遇頻度が高く，様々な墜落可能性のある状況を経験していると考えられたため，脚立作業の場面をより現実場面に近い複雑な場面にすれば，ハザード知覚やリスク知覚の特性が経験により異なる可能性がある．今後は本研究で得られた課題を整理し，実験方法や作業者の認知特性へのアプローチ方法の再検討が必要である．

【引用文献】

高橋明子他（2016）経験の浅い作業者の危険予知訓練による危険認知能力と自己評価の変化　労働科学，**92**（3/4），33-41．
蓮花一己他（2003）高齢ドライバーの運転パフォーマンスとハザード知覚　応用心理学研究，**29**（1），1-16．

（たかはし　あきこ）

保育者の就業継続に必要とされる支援[1]

日英比較研究を通じて

○山本　睦
（常葉大学　保育学部）

キーワード：再就職支援，キャリア発達，保育者，資格制度，日英比較

【目的】2014 年以降，Early Years(就学前；以下 EY)を対象とした教育の質向上への提言（Nutbrown, 2011, 2012, 2013）を基礎として，イギリスの Ofsted（教育監査局）は保育の有資格者を NVQ(National Vocational Qualification: 全国職業資格)Level6(４年制大学卒レベル；埋橋,2015)以上の保有者とした。これ以前の EY 施設では中等教育修了者も無資格で「保育見習い」として勤め始め，特定の子どもを担当する‘Key Person’を経て，管理職となることも認められていた。ヘックマン(2015)をはじめ，様々な縦断研究の成果から就学前教育の持つ重要性が強調された結果，イギリスでは国策として保育の上位資格を整備し，資格レベルによる業務分業制を推奨している（山本，2017)。一方で，日本は 2015 年度より保育者不足の深刻化に伴い，短期研修のみで現場に入る「子育て支援員」という無資格者による保育を認める(厚労省，雇児発 0521 第 18 号)こととなった。

このように資格の高度化と無資格者の採用という真逆の政策を採っているイギリスと日本の保育者において，保育者不足解消策として日本が取り組んだ「潜在保育士の掘り起こし」つまり保育者の再就職に際し，再就職経験者あるいは志望者が考える必要な支援を比較分析した。

本研究は，McMahon & Patton(1995,2018)のキャリア発達モデルである Systems Theory Framework(STF；個人に付随する特性を中心として社会的影響因が階層化して示されている)に含まれ，最も外側の層である「政策決定」の影響を考察することを目的として，日英比較を行っている。

【方法】対象；①S 県内２市公立園保育者（再就職経験者；非常勤・有資格者）13 名，②イギリスデヴォン州保育者（再就職志望者・経験者；無資格者）18 名，③イギリスデヴォン州保育者（再就職経験者；有資格者）13 名。園内空き部屋にて，調査者と１対１で半構造化インタビューを実施。「再就職に際し必要な支援」の質問に対する回答を抽出し，データとした。IBM SPSS Text Analytics for Surveys により，回答を品詞タイプ，コンセプトパターンの抽出後，出現頻度に基づくカテゴリ化を実施した。出現頻度は抽出カテゴリ数を見て，4 以上を共通基準として設定した。

【結果と考察】カテゴリの共起を表す視覚化を行った結果，Figure1,2,3 のようになった。

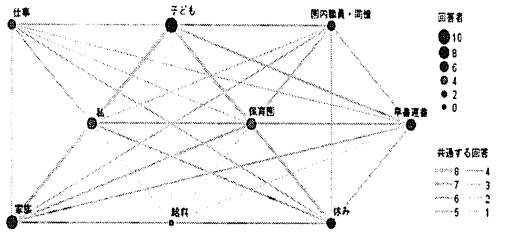


Figure1　支援；日本の保育者カテゴリWeb（グリッドレイアウト）

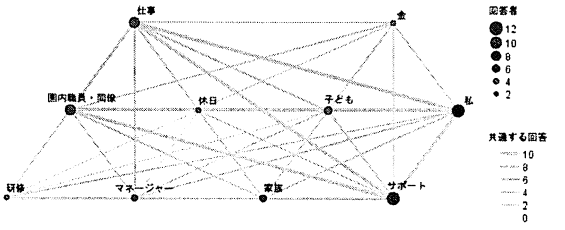


Figure2　支援；英国志望者無資格者カテゴリWeb（グリッドレイアウト）

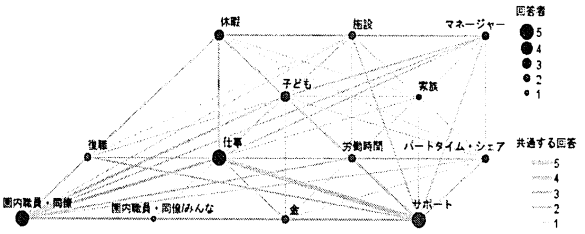


Figure3　支援；英国有資格者カテゴリWeb（グリッドレイアウト）

日本の保育者は，「支援」や「サポート」という中心化できるカテゴリが抽出されず，「子ども-私-家族」が強い共起を示していた。家庭内での支援が重視されている。英国志望者・無資格者は「サポート」が「私」「仕事」「園内職員・同僚」と同じ程度の共起で示され，英国有資格者は「仕事」と強い共起が示されているが，カテゴリ数が他２グループより多く，多様性が見られる。これは，英国の有資格者は「稀少性」によって再就職しやすく，「正規職員だがパートタイム」で復職でき，個人の事情を考慮した働き方ができることが背景にあると考えられる。つまり，有資格者は質向上の制度改革の恩恵を受け，キャリア継続のための多様な支援が受けられやすいことを示している。

【引用文献】

ヘックマン,J.J. 2015 幼児教育の経済学. 東洋経済新報者.

McMahon, M. & Patton, W. 1995 Development of a Systems Theory of Career Development. *Australian Journal of career development*. 4(2), 15-20.

McMahon, M.& Patton, W. 2018 Systemic thinking in career development theory: contributions of the Systems Theory Framework. *British Journal of Guidance & Counselling*, 46(2), 229-240.

Nutbrown, C. 2011 Nutbrown Review : Mapping the early education and childcare workforce - a background paper. Department for Education.

Nutbrown, C. 2012 Review of Early Education and Childcare Qualifications : Interim Report. Department for Education.

Nutbrown, C. 2013 Foundations for Quality : The indep-endent review of early education and childcare qualifications. Department for Education.

埋橋玲子 2015 イングランドの保育従事者の資格(EYT, EYE/Level3)について. *現代社会フォーラム*,11,26-38.

山本睦 2017 イギリスの保育者資格制度改革後の現状と課題. *常葉大学保育学部紀要*,4,49-60.

（やまもと　ちか）

[1] 本研究は JSPS 科研費 16K04321 の助成を受けている。

モデルの体型が購買意欲に及ぼす影響

—制御焦点に注目して—

○古橋朋果・馬渕里都・三好駿之介・井上裕珠
（日本大学商学部）

キーワード：モデルの体型、制御焦点、購買行動

【目的】

近年、画一的な美の基準から解放され、外見や体型の多様化を受けいれようという「ボディポジティブ」のムーブメントが欧米を中心に盛り上がっており、様々な人種や体型のモデルを起用するブランドが増えてきている。日本も例外ではなく、女性誌を中心に、ふくよかな女性を対象とした洋服の特集が組まれたり、雑誌が刊行されたりしている。このように、多様性を受け入れ尊重しようとする社会の流れのなかで広告モデルのあり方が変化しつつあるが、広告モデルの変化は消費者にどのような影響を及ぼすのだろうか。本研究では、モデルの体型に注目し、モデルの体型が消費者の購買意欲に及ぼす影響を検討することを目的とする。具体的には、洋服を着ているモデルが「細い」体型であるときと「普通」体型のときで、購買意欲が異なるかどうかを検討する。

なお、本研究では、モデルの体型が購買意欲に及ぼす影響を、制御焦点が調整すると予測する。制御焦点理論(Higgins, 1997)によると、私たちの目標志向性には、大きく分けて二種類あるという。利得の存在と不在に関心があり、目標を理想として捉える「促進焦点」と、損失の存在と不在に関心があり、目標を義務として捉える「予防焦点」である。促進焦点と予防焦点の取りやすさには個人差があることが知られている(Lockwood, Jordan & Kunda, 2002; 尾崎・唐沢, 2011)。

モデルの体型が購買意欲に及ぼす影響の調整変数として、これら二つの制御焦点を考えてみる。予防焦点傾向の高い人は否定的な結果の有無に対して敏感に反応する傾向があるため(尾崎・唐沢, 2011)、細い体型のモデルが着ている洋服を見たときには、同じ洋服を着ても自分(の体型)には似合わないかもしれないという否定的な結果により注目し購買意欲が高まらないだろう。それに対して、普通体型のモデルを見たときには、似合わないかもしれないという不安が軽減するため、購買意欲が高くなるだろう。他方で、促進焦点傾向の高い人は、肯定的な結果の有無に対して敏感に反応する傾向があるため(尾崎・唐沢, 2011)、「細くスタイル良く洋服を着こなしたい」という目標があることを前提にすれば、細い体型のモデルが着ている洋服を見ると、同じように着こなすという肯定的な結果に焦点をあてるため、普通体型のモデルが着ている洋服を見たときと比較して、購買意欲が高まるだろう。この仮説を検討するために、シナリオ場面を用いた心理学実験を以下のように実施した。

【方法】

参加者　大学生 234 名(男性 130 名、女性 104 名、平均年齢 20.35 歳)。留学生 5 名を除く 229 名を分析対象とした。

実験計画　1 要因 2 水準(体型: 細い/普通)参加者間計画。制御焦点(促進焦点/予防焦点)得点は、事後的に分析に用いた。

予備調査 1　洋服に対する購買意欲を検討するためには、参加者の購買意欲がある程度高い洋服を選出する必要がある。モデルが着ている洋服の画像を男女各 6 点用意し、45 名の大学生(男性 23 名、女性 20 名、平均年齢 19.74 歳)に、それぞれの画像に対して購買意欲を 7 件法で尋ねた。男女ともに購買意欲が低い傾向にあったため(男性: M=2.98、女性: M=2.94)、中点である 4 点よりも購買意欲が有意に低くなかった画像を男性用 2 点(Ms≥3.23)と女性用 2 点(Ms≥3.50)選出した。

予備調査 2　予備調査 1 で選出された男女各 2 点(洋服 A or 洋服 B)の画像において、モデルの体型を変えたものを 4 種類用意し、このモデルの体型は、どの程度痩せているもしくは太っていると思いますかという質問に対して、7 件法(1: とても痩せている-4: 普通体型-7: とても太っている)で回答を求めた。その結果、最も痩せていると回答されたもの(男性: Ms=2.45, 女性: Ms≤1.95)と、普通体型よりも少し太っていると回答されたもの(男性: Ms≤5.60, 女性: Ms≤4.75)を男女各 2 点の画像について選定した。

条件操作　提示するモデルの体型を条件間で変えることによって、条件操作を行った。

従属変数　参加者には画像を見て、「この洋服が気になる」、「この洋服を着てみたいと思う」、「この洋服を買ってみたいと思う」の 3 項目に 9 件法(得点が大きいほど当てはまる)で回答を求め、合算平均を購買意欲の指標とした(α_s≥8.93)。

手続き　授業時間中に「大学生の消費行動に関する調査」を実施し、参加者には性別ごとに、細い条件もしくは普通条件の質問紙をランダムに配布した。デモグラフィック項目と制御焦点尺度の 16 項目(尾崎・唐沢, 2011)に回答を求めたのち、インターネットで洋服を探しているという場面を想像するように教示し、購買意欲への回答を求めた。続いて、洋服やモデル等に関する複数の質問に回答を求め、実験は終了した。後日ディブリーフィングを実施した。

【結果と考察】

仮説の検討　個人の制御焦点傾向によって、モデルの体型が購買意欲に及ぼす影響が異なるかどうかを検討するために、促進焦点得点(M=3.40, SD=0.61)と予防焦点得点(M=3.37, SD=0.70)をそれぞれ中央値(Me=3.50, 3.38)分割したうえで、男女ごとに 2(体型:細い/普通)×2(制御焦点:促進高/促進低もしくは予防高/低)の分散分析を実施した。その結果、交互作用効果はいずれも有意ではなく、仮説は支持されなかった。女性においては、体型の主効果が有意に見られ(Fs(1, 95)≥9.79, ps=.002)、細い体型のモデルが着た洋服に対して(M=3.65, SD=2.15)、普通体型のモデルが着ていた洋服よりも(M=2.49, SD=1.71)、購買意欲が高くなることが示された。なお、本分析結果の詳細や、その他の分析結果については、発表当日に報告する。

考察　本研究では、仮説を支持する結果が得られなかった。仮説が支持されなかった理由として、購買意欲得点がフロア効果であった可能性が挙げられる。今後は、研究方法を工夫する必要があるだろう。

【引用文献】◆Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.◆Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 854-864. ◆尾崎由佳・唐沢かおり(2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性——制御焦点理論に基づく検討——. 心理学研究, 82(5), 450-458

（ふるはしともか・まぶちりと・みよししゅんのすけ・いのうえゆみ）

異質のリスクーベネフィット状況におけるリスクテイキング

○橋本采栄　森泉慎吾　中井宏　臼井伸之介
（大阪大学大学院人間科学研究科）
キーワード：リスクテイキング　個人差　価値判断

【目的】

リスクテイキングのメカニズム研究の多くは、リスクもベネフィットも金銭（同質）であり単純比較が可能なギャンブルなどを対象に検証している。しかし、労働災害や交通事故につながりうるリスクテイキングは、リスク（身体：怪我や事故）とベネフィット（例. 時間：信号無視による時間短縮）の質が異なる場合がある。例えば、骨折のリスクと時間短縮のベネフィットの価値を単純には比較できない。そこで本研究では、リスクとベネフィットが同質か異質かという点に注目し、リスクテイキングの心的過程を比較検討することを目的とした。

【実験 1】

目的：リスクテイキングのベネフィットが「時間」である時に、リスクが同質（時間）の場合と異質（金銭）の場合におけるリスクテイキングの違いを比較することを目的とした。また個人差の要因として、時間や金銭に対する個人の価値観（金銭重視もしくは時間重視）の影響を考慮した。

方法：実験参加者は大学生 27 名（男性 13 名、女性 14 名）、平均年齢は 21.5 歳（SD= 1.84）であった。事前に日常の「待ち」に関する 17 場面（例. 信号待ち）における「10 分の待ちの省略」に対する金銭価値を評価させ、その平均金額の下位群を「金銭重視群」、上位群を「時間重視群」に分けた。金銭重視群は 13 名、時間重視群は 14 名であった。

本実験では、Go-NoGo 課題（Chen & Kwak, 2017）を一部改変して使用した。参加者には、PC 画面上に提示される円の色（青:灰＝8:2 の出現率）について、青色の場合に反応し、灰色の場合に反応しないことを求めた。青色に対する反応時間が速いほど、報酬（実験時間の短縮）が得られ、灰色に誤って反応してしまうと罰（仮想の罰金または実験時間の延長）があることを教示した。リスクテイキングの指標として、灰色への誤反応率（FA 率）と青色への反応時間（RT）を測定した。実験デザインは、2(条件; 金銭リスク/ 時間リスク)×2(群; 金銭重視/ 時間重視)の混合計画であった。

結果と考察：条件と群別の FA 率 を Figure 1 に示す。2 要因分散分析の結果、FA 率について条件×群の交互作用が有意であった（F (1, 22) = 5.69, p = .03, ηp^2 = .21）。単純主効果の検定より、時間重視群は金銭リスク条件より時間リスク条件で誤反応が多かった（F (1, 22) = 3.81, p = .06）。また時間リスク条件では、金銭重視群より時間重視群の FA 率が高かった（F (1, 22) = 4.26, p = .05）。RT についても FA 率と同様の傾向が認められた。従って、時間に価値を置く人は金銭リスクよりも時間リスクの場合にリスクテイキングしやすく、また金銭に価値を置く人よりも時間リスクの伴うリスクテイキングをしやすいことが示された。

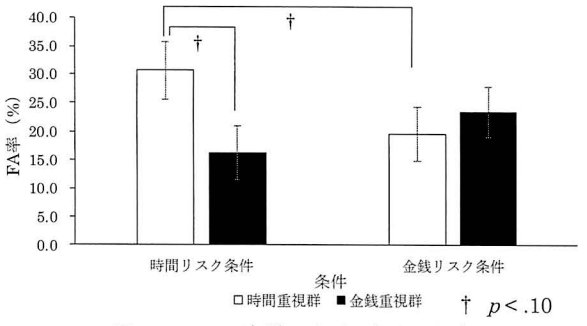


Figure 1　実験 1 における FA 率

【実験 2】

目的：リスクテイキングのベネフィットが「金銭」である時に、実験 1 同様にリスクの質によってリスクテイキングに変化が生じるかを検証することを目的とした。

方法：実験参加者は、35 名（男性 14 名、女性 21 名）、平均年齢は 20.54 歳（SD = 1.75）であった。実験 2 では、実験 1 で用いた「待ち」に関する質問紙について、参加者に 5 分の待ちを実際に経験させたうえで回答を求め、実験 1 同様に 2 群に分けた。金銭重視群は 16 名、時間重視群は 19 名であった。その他、実験課題や実験デザイン等については、Go-NoGo 課題の青色への反応時間の報酬が金銭（仮想の報酬金）であること除いて、実験 1 と同じであった。

結果と考察：条件と群別の FA 率 を Figure 2 に示す。2 要因分散分析の結果、FA 率について、条件×群の交互作用が有意であった（F(1, 23) = 5.47, p = .03, ηp^2 = .19）。単純主効果の検定より、金銭重視群が金銭リスク条件で時間リスク条件より FA 率が高かった（F (1, 23) = 4.58, p = .04）。また時間リスク条件にて、金銭重視群よりも時間重視群において FA 率が高かった（F(1, 23)= 4.99, p = .04）。従って、金銭に価値を置く人はリスク、ベネフィットともに金銭であった場合、時間がリスクであった場合よりもリスクテイキングをしたことが示された。なお、RT については条件、群の主効果および交互作用は非有意であった。

【まとめと展望】

本研究によって、金銭より時間を重視する人は時間リスクのある場合にリスクテイキングをする傾向にあったことから、価値の置き方に特有の認知・性格的特徴がある可能性が示された。また、リスクとベネフィットが同質かつ重視する価値である場合によりリスクを受容しやすくなることも示唆された。従って、個々人の金銭・時間への価値の置き方によって、それぞれの価値に更なる重みづけがなされてリスク受容に反映される可能性がある。しかし実験的検討に留まるため、今後は運転場面等より応用的研究に展開することが課題である。

（はしもと さえ・もりいずみ しんご・なかい ひろし・うすい しんのすけ）

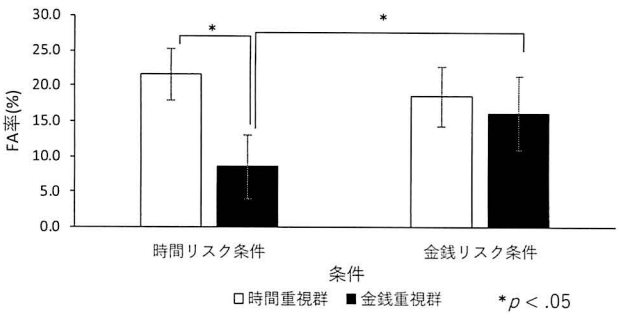


Figure 2　実験 2 における FA 率

上司からの被信頼が部下にもたらす心理的効用（2）

組織自尊感情に着目して

○藤原勇
（聖心女子大学現代教養学部）

キーワード：信頼，被信頼，上司・部下関係，自尊感情，ストレス

【目的】

上司・部下関係における被信頼（相手から信頼されていると思うこと）の心理的効用について，藤原（2017）は，部下は上司からの被信頼が高いほど，仕事への内発的動機づけや勤続意思，自尊心が高く，また自尊心を介してストレスを低減させる間接効果があることを示した。特に，部下の自尊心が上司に対する信頼や被信頼の心理的効用を大きく左右する要因であった。しかし，自尊心は，組織に限らず，様々な人間関係の受容度が反映された包括的な概念であり，組織内の人間関係の受容度を測定する上で適切な指標とはいえない。

そこで，本研究では組織自尊感情に着目し，部下の働きがいやストレス，関係性の評価（絆の効用）に対する上司からの被信頼の心理的効用を検討することを目的とする。

【方法】

対象者　部下や役職を有さず，勤続3年未満の20代正社員400名（男性200名，女性200名：平均25.5歳（SD = 2.32），勤続年数1.30年（SD = 0.62））を分析対象とした。

調査期間　2018年12月中旬にweb調査を実施した。

質問紙構成　藤原（2017）の上司からの被信頼尺度と藤原（2014）の上司への信頼尺度について指摘された問題点を踏まえて修正した各20項目，尾関・原口・津田（1994）のストレス反応7項目，国際経済労働研究所（1996）の働きがいに関する4項目，高木・戸口（2006）の母子間の絆尺度のうちの「否定的・不安定性」因子の項目を部下用に修正した5項目，Matsuda, Pierce, & Ishikawa（2011）の組織自尊感情尺度10項目，性別や勤続年数などのフェース項目の回答を求めた（本分析で使用しなかった項目の報告は省略する）。

【結果】

各尺度の因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った結果，上司への信頼（α = .93），ストレス反応（α = .83），組織自尊感情（α = .95），絆のネガティブな効用（α = .89）は各1因子が，働きがいは内発的動機づけ（α = .91）と勤続意思（α = .80）の2因子が，上司からの被信頼は専門性（α = .88），礼儀正しさ（α = .86），知識・能力不足（α = .89），注意の欠如（α = .72），真摯な態度（α = .87）の5因子（被信頼全体 α = .86）が抽出された。これらは概ね想定通りの因子であった。ただし，上司からの被信頼では，従来の因子の一つが専門性と真摯な態度の2因子に細かく分かれた。

次に，信頼と被信頼やその交互作用の効果を検討するため，階層的重回帰分析を行った。その際，説明変数には信頼や被信頼とその交互作用項を，目的変数にはストレス反応，内発的動機づけ，勤続意思，組織自尊感情，絆のネガティブな効用を投入した。投入した各変数の得点は各合計得点を用いた。ただし，交互作用が複雑化しないように，被信頼は抽出された各因子の得点をすべて合計し，被信頼得点とした。また，多重共線性の問題を考慮し，信頼や被信頼とその交互作用項の得点は信頼得点と被信頼得点を各平均値でセンタリングした値を用いた。なお，Step1では信頼と被信頼を投入し，Step2は交互作用項を投入した（表1）。

まず，R^2の変化量が有意であった絆のネガティブな効用ではStep2に着目すると，信頼による有意な負の影響がみられた。また，交互作用項が有意であったため，$\pm 1SD$を基準に単純傾斜の検定を行った。その結果，信頼が低い場合，被信頼が高いほど絆のネガティブな効用は高い傾向がみられ（β = .126, t = 1.93, p < .10），信頼が高い場合，被信頼が高いほど絆のネガティブな効用は有意に低かった（β = -.165, t = -2.66, p < .01）。一方，被信頼の高低にかかわらず，信頼が高いほど絆のネガティブな効用は有意に低かった（被信頼が低い場合 β = -.184, t = -3.15, p < .01；被信頼が高い場合 β = -.474, t = -6.76, p < .001）。

絆のネガティブな効用以外の目的変数ではStep1に着目すると，全変数で上司からの被信頼の有意な影響がみられ，ストレス反応以外では上司への信頼の有意な影響もみられた。

【考察】

上司からの被信頼が組織自尊感情に強く影響していた結果は，部下にとって，上司との関係が組織における所属欲求を充足するほど関係価の高いものであることを示唆している。

他方，関係の煩わしさを示す絆のネガティブな効用は，信頼していない上司から一方的に信頼される場合に高かった。これは藤原（2018）の知見とも整合し，信頼と被信頼の両方をバランス良く高める必要があることを示唆している。

加えて，被信頼はストレスを低減し，内発的動機づけや勤続意思を高める効用もみられた。このことから，上司からの被信頼がパフォーマンスとメンタルヘルスの両方の向上に有効であり，持続可能な関係の構築の鍵になると考えられる。

【主な引用文献】

藤原勇（2017）上司からの被信頼が部下にもたらす心理的効用―ストレスや動機づけへの直接効果と絆の効用や自尊感情を介した間接効果―　関西心理学会第129回大会発表論文集, 69.

藤原勇（2018）上司・部下関係における信頼と被信頼の心理的効用と相補性　関西大学心理学研究科博士論文.

※本研究は平成29～30年度JSPS科研費若手研究(B)（課題番号17K13907）の助成を受けた。

（ふじわら　いさむ）

表1　信頼や被信頼がストレス反応や内発的動機づけ，勤続意思，絆のネガティブな効用，組織自尊感情に及ぼす影響

変数名	ストレス反応		内発的動機づけ		勤続意思		絆のネガティブな効用		組織自尊感情	
	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2
	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$	$\beta(SE)$
上司への信頼	-.05 (.05)	-.06 (.06)	.21 (.06) **	.22 (.06) **	.34 (.07) **	.33 (.07) **	-.29 (.09) **	-.33 (.09) **	-.13 (.06) **	-.13 (.07) **
上司からの被信頼	-.37 (.07) **	-.37 (.07) **	.47 (.08) **	.47 (.09) **	.26 (.10) **	.26 (.10) **	-.03 (.12)	-.02 (.12)	.62 (.09) **	.62 (.09) **
上司への信頼*上司からの被信頼		-.02 (.08)		.03 (.09)		-.04 (.10)		-.19 (.13) **		-.01 (.09)
R^2	.16 **	.16 **	.35 **	.36 **	.26 **	.26 **	.09 **	.13 **	.33 **	.33 **
ΔR^2		.00		.00		.00		.04 **		.00
F	37.48 **	25.00 **	109.01 **	72.71 **	70.51 **	47.27 **	20.03 **	19.18 **	95.82 **	63.77 **
N	400	400	400	400	400	400	400	400	400	400

** p < .01

カイ2乗検定および事前検定を伴う分散分析の棄却率

○服部　環[1]　山際勇一郎[2]（非会員）
([1]法政大学現代福祉学部　[2]首都大学東京人文社会学部）
キーワード：心理統計教育　カイ2乗検定　分散分析

【目的】心理統計教育では，連関のカイ2乗検定の留意点としてセルの期待度数が5以上であることやYatesの修正が可能であること，また，参加者間要因の分散分析では，等分散性が満たされないときはWelchの分散分析を適用することなどが指摘されている。

一方，周辺度数が固定されていないクロス集計表ではセル度数が小さくても，カイ2乗統計量から比較的正確なp値が得られること（Camilli & Hopkins, 1978, 1979），等分散性の検定ではα=.20が適切であること（永田, 1992）などが指摘されている。そこで，本稿はこの2点を確認したシミュレーション実験の結果（服部・山際，印刷中）を報告する。

【方法】(1)連関の検定　(1.1)行数と列数：帰無仮説を真とする2行2列および2行3列のクロス集計表とした。(1.2)セルの母比率：2行2列のクロス集計表のセルの母比率を3条件，2行3列のクロス集計表では1条件とした。(1.3)セルの期待度数:4条件とした。(1.4)p値とα:カイ2乗値，Yatesの修正を行ったカイ2乗値，尤度比，Fisherの正確確率によりp値を算出し，α=.05とした。(1.5)シミュレーション実験の回数：各条件とも100,000回とした。計算にはR言語（R Core Team, 2018）を用いた。
(2)参加者間1要因の分散分析　(2.1)水準数:3水準とした。(2.2)参加者数:参加者数が等しい条件と異なる条件を設けた。(2.3)母分散:3水準の母分散を[1.0, 1.0, 1.0]，[2.0, 1.5, 1.0]，[4.0, 2.0, 1.0]の3条件とした。(2.3)等分散性の検定:Leveneの検定を用い，α=.05, .20, .30の3条件とした。(2.4)主効果の検定：2段階検定では，等分散とする帰無仮説が棄却された場合はWelchの分散分析を行った。また，事前検定を行わずにWelchの分散分析を行った。(2.5)シミュレーション実験の回数：各条件とも100,000回とした。

【結果】(1)連関の検定　セルの母比率と標本における期待度数，および実験結果をTable 1に示す（実験結果の一部）。表中の実験で棄却された割合（%）欄に示す「カイ2乗」はカイ2乗値，「Yates」はYatesの修正を行ったカイ2乗値，「尤度比」は尤度比，「Fisher」はFisherの正確確率に基づいて棄却された帰無仮説の割合（%）である。
(2)参加者間1要因の分散分析　3水準の参加者数と母分散，2段階検定において主効果が棄却された割合（%）をTable 2に示す（実験結果の一部）。表中の「Welch」は，等分散性の事前検定を行わずにWelchの分散分析を適用して棄却された帰無仮説の割合（%）である。

【考察】(1)連関の検定　カイ2乗検定は4セルの母比率が等しく，総度数が16以下の場合に棄却率が6%をいくらか超えているが，それ以外の条件では名目有意水準（5%）とほぼ等しい棄却率となっている。一方，Yatesの修正を施すカイ2乗値を用いた検定およびFisherの正確検定は棄却率が小さく，保守的な結果となっている。また，尤度比検定は総度数が小さくないときは名目有意水準（5%）とほぼ等しい棄却率となっている。

以上の結果より，周辺度数が固定されていないクロス集計表では，Camilli & Hopkins (1978, 1979)が指摘するように，セルの期待度数が小さい場合でも，Yatesの修正を施さないカイ2乗検定を使用するのがよいであろう。
(2)参加者間1要因の分散分析　各水準の参加者数が等しい場合，Leveneの検定を用いた2段階検定は名目有意水準(5%)とほぼ等しい棄却率となっている。しかし，参加者数が等しくなく，母分散の大きさが参加者数と逆比例する条件では，Leveneの検定のαを.20もしくは.30とした場合でも，棄却率が名目有意水準（5%）と大きく異なる。それに対し，Welchの分散分析の棄却率は，すべての条件において名目有意水準（5%）とほぼ等しい。

以上の結果より，等分散性に関する事前検定を行わずにWelchの分散分析を適用するのがよいと言えよう。

【引用文献】
服部　環・山際勇一郎　印刷中　心理統計法　サイエンス社

（はっとり　たまき・やまぎわ　ゆういちろう）

Table 1　連関の検定における帰無仮説の棄却率（%）（実験結果の一部）

セルの母比率（上段） / セルの期待度数（下段）				実験で棄却された割合（%）			
				カイ2乗	Yates	尤度比	Fisher
0.250	0.250	0.250	0.250				
2	2	2	2	6.334	0.571	0.000	0.745
4	4	4	4	6.958	1.358	5.211	2.397
0.083	0.167	0.250	0.500				
1	2	3	6	4.700	0.391	0.941	1.210

Table 2　分散分析における帰無仮説の棄却率（%）（実験結果の一部）

参加者数			母分散			Leveneの検定のα			
n_1	n_2	n_3	σ_1^2	σ_2^2	σ_3^2	.05	.20	.30	Welch
10	10	10	2.0	1.5	1.0	5.42	5.50	5.48	4.92
10	10	10	4.0	2.0	1.0	5.87	5.67	5.50	4.95
15	10	5	1.0	1.5	2.0	8.23	8.07	7.82	5.48
15	10	5	1.0	2.0	4.0	11.66	9.86	8.95	5.71
30	20	10	1.0	2.0	4.0	8.53	6.63	6.10	5.19

子どもをもたない有配偶女性の幸福感

－就労形態からの検討－

○沼山　博[1]　福島 朋子[2]
([1]山形県立米沢栄養大学健康栄養学部　[2]岩手県立大学社会福祉学部)

キーワード：子どもをもたない、幸福感、就労形態

【目的】福島・沼山(2018)において，子どもをもたない中年期成人の幸福感を夫婦関係が高めていることが示されている。そこでは、調査対象の男性の大半がフルタイムの職についていることもあり，就労形態については統制変数として投入して分析が行われているが、中年期女性の場合は，男性とは状況が異なり，フルタイム従事者やパートタイム従事者，家事専業という就労形態が混在している。また、子どもをもつ者を中心とした，中年期女性を対象とする先行研究では，キャリアや就労形態による幸福感への影響が指摘されている（西田，2000など)。そこで，本研究では、子どもをもたない中年期有配偶女性に対象を絞り，就労形態を含めた、幸福感への影響要因について検討を行う。今回は、幸福感としてRyffの心理的well-being尺度（西田,2000）を、影響要因として就労形態のほか、夫婦関係（福島・沼山,2018)、子どもをもつことに対する社会規範意識、そして経済的ゆとり感(福島・沼山,2015)をとりあげて分析した結果を報告する。

【方法】調査対象者：全国の45―60歳の有配偶女性461名。就労形態の分類は,非正規雇用であっても週40時間以上勤務している場合はフルタイムと同様に働いているとみなし，フルタイム群に含めた。平均年齢（人数）は，フルタイム群50.2歳(157名)，パート群51.4歳（150名)，家事専業群51.3歳(154名)であった。現在の職種は，フルタイム群・パート群ともに，事務系が最も多く（フルタイム群56.7%，パートタイム群42.7%)，次いでフルタイム群では販売・サービス系（11.5%)・医療・福祉系（9.6%）であり，パートタイム群では，販売・サービス系（25.3%）であった。雇用形態としては，フルタイム群は正規職員が約7割を占めているが，パートタイムでは非正規職員が76.7%，自営業・フリーランスが23.3%であった。調査方法・時期：インターネット調査で2018年10月に実施された。

調査内容：(1) 心理的well-being:西田（2000）がRyffの心理的well-being尺度に基づいて作成した日本語版心理的well-being尺度のうち、＜自己受容＞＜人格的成長＞＜人生における目的＞の3下位尺度を使用した（5件法)。(2)夫婦関係:夫婦関係の満足度について，最高を10点満点として回答を求めた。(3) 子どもをもつことに対する社会規範意識：山縣・武田・北島・小田・矢内原（2001）によるジェンダー・家族観についての考え方の項目より，子どもに関する5項目を使用した(4件法)。(4) 経済的ゆとり感:現在の家計状況のゆとりの程度について6件法で回答を求めた。(5)社会的属性：年齢，性別，職業、雇用形態、週あたりの実労働時間、世帯年収など。

【結果】(1)尺度の1因子性の確認：まず、心理的well-being尺度のうち、＜自己受容＞＜人格的成長＞＜人生における目的＞の3下位尺度、および子どもをもつことに対する社会規範意識5項目について、確認的因子分析を行い、1因子性を確認した。(2)就労形態による差の検討：各変数の合計得点について分散分析を行った。その結果、心理的well-beingの＜自己受容＞＜人生における目的＞＜人格的成長＞では，いずれも有意な差が認められ（自己受容 $p<.01$：人生における目的 $p<.05$：人格的成長 $p<.01$)，多重比較の結果，3つの尺度すべてにおいて，家事専業群よりフルタイム群で得点が有意に高かった。夫婦関係満足度，子どもをもつことに対する社会規範意識，経済的ゆとり感については，就労形態による有意差は認められなかった。(3)階層的重回帰分析：各変数間の相関を確認したうえで、階層的重回帰分析を行った。その結果がTableである。これによると、まず就労形態では，心理的well-beingの3つの下位尺度(＜自己受容＞＜人生における目的＞＜人格的成長＞）すべてにおいて有意な影響が認められ，フルタイムであることが心理的well-beingを高め，家事専業であることが心理的well-beingを低めているという関係性が示された。また、夫婦関係については，その満足度が＜自己受容＞＜人生における目的＞を高めており、子どもをもつことに対する社会規範意識については，＜人格的成長＞においてのみ，負の影響がみられた。経済的ゆとり感については，3つの心理的well-beingすべてで有意な影響をもっており,ゆとり感が高いと心理的well-beingも高まるという結果であった。

Table　階層的重回帰分析の結果（強制投入法）

	自己受容			人生における目的			人格的成長		
	Step1	Step2	Step3	Step1	Step2	Step3	Step1	Step2	Step3
年齢	.122	.118*	.127*	.117*	.114*	.111	.066	.061	.044
結婚年数	-.027	.002	.008	.014	.039	.051	-.046	-.013	.004
教育年数	.079	.065	.056	.070	.058	.038	.151**	.135**	.123**
世帯年収	.111*	.095*	.005	.193**	.180**	.040	.146**	.129**	.057
就労形態		-.138**	-.164**		-.118*	-.149**		-.157**	-.168**
子ども規範意識			-.019			-.055			-.153*
夫婦関係満足度			.184**			.141**			.012
経済的ゆとり感			.164**			.276**			.127*
R^2	.032**	.049**	.118**	.059**	.072**	.172**	.056**	.079**	.115**
ΔR^2		.018**	.069**		.013*	.101**		.023**	.036**

*p<.05, **p<.01

注）就労形態は，1フルタイム群，2パートタイム群，3家事専業群である。

【考察】就労形態による有意差がみられたのは、心理的well-beingの＜自己受容＞＜人生における目的＞＜人格的成長＞であり、いずれもフルタイム群の得点が高かった。階層的重回帰分析では、＜自己受容＞＜人生における目的＞では就労形態、夫婦関係満足度、経済的ゆとり感の影響が認められ、＜人格的成長＞では就労形態、子どもをもつことに対する社会規範意識の影響が認められた。就労形態の影響については西田（2000）と同様の結果であり、子どもをもたない中年期有配偶女性においても就労が心理的well-beingを高めることを示唆する。

【引用文献】

西田裕紀子（2000）. 成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究　教育心理学研究，48，433-443.
山縣然太郎・武田康久・北島智子・小田清一・矢内原巧(2001). 生殖補助医療技術に対する一般国民の意識　厚生の指標,48, 3-8.
福島朋子・沼山博(2018). 子どもの有無と夫婦関係－主観的幸福感との関係から－応用心理学研究，44，102-112.
福島朋子・沼山博（2015）. 子どもの有無と主観的幸福感－中年期における規定因－　心理学研究，86，474-480.

【付記】本研究はJSPS 科学研究費補助金(課題番号16K04307)による助成を受けて実施された。

（ぬまやま　ひろし・ふくしま　ともこ）

画像情報に基づいた筆跡の分類

関陽子
（科学警察研究所）

キーワード：筆跡，ニューラルネットワーク，画像データ

【目的】

紙に書かれた文字は，インクや紙が劣化しない限り書かれた文字が残るため，記録や情報伝達の手段として，紙の発明以来現在に至るまで長い期間にわたって用いられている。このように，文字は，情報の内容を伝えるという役割を持っているが，一方，文字の本来の形状を大きくは変えずに，読みやすく，あるいは美しく表現するという方向にも発達し，書道や種々のフォントのように美術的・芸術的な価値も付与されてきた。 文字，特に手書き文字が，情報伝達の手段という本来の役割のほかに，「形状を美しく表現する」という役割が付与されたのは，文字の由来が事物の形であったことや字画に曲線を加えるなどの加工がしやすかったことのために，本来の形状を大きく変えることなく美的価値を付与できた点が大きな理由であるが，書字の順序（筆順），筆圧，書字速度などの書字のための手の動きが文字の形状と相関があり，書道の筆やカリグラフィーのペンなどの書字の道具がそれらを表現できたことも理由であると考えられる。

一方，人間の行動には個人差があり，書字行動においても個人差が認められることから，行動の個人差が手書き文字の個人差となって表現される。このため，筆跡から筆者を識別できるのは，理にかなっているといえる。法科学の筆跡鑑定は，目視により筆跡の個人性を抽出しているが，鑑定人は，形状だけではなく，形状から行動的な側面も推測して筆者識別に利用している。

近年注目されている機械学習は，パターン認識で大きな成果をあげている。パターン認識は，文字の形状のみに注目しているように解されることもあるが，形状のほかに画線の濃淡などから行動の個人差にも着目していると考えられる。そこで，ニューラルネットワークを用いて，画像情報を基にした筆跡の分類を試みた。

【方法】

筆者 10 人が 5 回ずつ記載した「エ（カタカナ）」「力（漢字）」「違」の画像を用い，筆者一人あたり 4 回分を学習用データ，残りの 1 回分をテスト用データとし，それぞれの文字について学習用データで 10 人の筆者の筆跡を学習させた後，テスト用データを 10 人の筆者に分類した。

筆跡画像は，32pixel×32pixel，モノクロ画像を使用した。ソフトウェアは Neural Network Console（SONY）を使用し，ニューラルネットワークは LeNet および AlexNet を使用した。AlexNet については，実験に使用した画像サイズが AlexNet のオリジナルの設定とは異なっていたので，画像サイズ部分を実際に使用した画像サイズに合わせて修正した。

ニューラルネットワークでは，学習用データが多数必要であるので，オリジナルのデータによる分類に加え，以下の方法により学習用データを増やし，正答率を比較することにより，それらの効果を比較した。

・data augmentation：サイズ，縦横比，回転，ひずみ，輝度，コントラストを一定範囲内でランダムに変化させた。

・字種は異なるが，字体が同じ（もしくは酷似している）文字を同じ字種とみなしてサンプルを増やす：本実験では，「エ（カタカナ）」と「工（漢字）」，「カ（カタカナ）」と「力（漢字）」を用いた。筆者一人値のサンプ数ルが 2 文字分，すなわち 10 個になったので，筆者一人あたり学習用 8 個，テスト用 2 個に振り分けた。

・共通の部分を持つが字種の異なる漢字を使用して分類を行う：しんにゅうを共通に持つ漢字 18 字種（＝筆者一人あたり 90 サンプル）を使用し，2 通りの方法で分類した。

分類 1：全サンプルを筆者一人あたり学習用 72 個，テスト用 18 個に振り分け，分類した。

分類 2：15 字種を学習用（＝一人あたり 75 サンプル），残り 3 字種をテスト用（＝一人あたり 15 サンプル）に使用した。つまり，分類 2 では，学習用とテスト用のサンプルは、字種が異なっていたということになる。

【結果】

・data augmentation の効果

LeNet では，「エ」と「力」が，data augmentation なしで正答率がそれぞれ 50%と 60%，ありでは正答率 40%と 50%であったが，「違」では，なしの正答率が 50%，ありの正答率が 60%であった。

AlexNet では，「エ」，「違」は，なしで正答率がいずれも 20%，ありで 40%と 80%，「力」はあり，なしいずれの場合も 60%であった。

・2 字種を 1 字種として使用した場合の効果

LeNet では「エ」，「工」の正答率が各 50%，「エ＋工」では 55%，「カ」20%，「力」60%，「カ＋力」80%であった。

AlexNet では，それぞれの正答率は，「エ」20%，「工」50%，「エ＋工」60%，「カ」，「力」いずれも 60%，「カ＋力」85%であった。

・共通部分を持つ文字（しんにゅう）での分類の効果

LeNet では，分類 1 の正答率が 100%，分類 2 の正答率は 93%であった。

AlexNet では，分類 1 の正答率が 96%，分類 2 の正答率は 98%であった。

【考察】

「エ」，「力」の LeNet の data augmentation を除いて，学習用データを増やすことにより，分類の正答率が向上した。特に，しんにゅうの分類では正答率が 90%を超えていたことから，本分類課題で 90%程度の正答率を得るためには，筆者一人あたり最低でも 70 個程度のサンプルが必要であったと考えられた。

Data augmentation の効果が予想より小さかったが，変数の種類や変化量を調整することで、より効果が得られる可能性がある。一方，筆跡では，人為的に変形操作を行っても，実際の個人内変動による変化とは異なっていて，同一人の筆跡と認識されにくかったのかもしれない。

一方，しんにゅうの分類では，法科学の筆跡鑑定では行わない，異なる文字どうしで分類を行ったにもかかわらず，分類結果が良好であった。しんにゅうは，他の部分の形状にあまり影響を受けないことが要因であるかもしれないが，一方，このことは，文字が異なっても文字全体として，その人らしい書き方が共通に見られたということを示唆しているとも考えられた。

（せきようこ）

道路横断時の利き手の挙手またはその手ぶりの心理的意味

長塚 康弘

（新潟大学）

キーワード：交通事故原因、道路横断時の挙手、動態刺激

交通事故防止対策の根幹はスピード及び飲酒運転抑止にあると考える人が多く、最近もなおその考え方は根強い。

病気の治療のためにその原因を的確に見極め原因を除去すべきであることは世の常識であるが、同じ論理は交通事故の防止の場合にも該当するものと考えられる。

ここで重要となるのが、交通事故原因の見極めである。いかなる方法によって原因を見極めるか。

筆者は「公益財団法人 交通事故総合分析センター」刊行の年刊『交通統計』を活用している。自動車等（原付以上）運転者の違反別・年齢別・性別の資料を第１当事者別に参照している。この資料は違反別の事故内容、すなわちドライバーの運転行動別の考察を行うことができるので有効な資料となっている。

交通安全キャンペーン

各地で交通安全運動が行われる（図１）。大切な活動であるが、私には気がかりなことがある。前のことだが、公益財団法人交通事故総合分析センターの集計によれば、最近迄の5年間に通園時の交通事故は541人のけが人が発生し、歩行中の使者も４人いたことが分かったという。関連記事によれば、背が低い園児は運転者から見えないので、事故に巻き込まれるケースがあるのではないかという。

そこで筆者は歩行者を見えるように動態刺激として提示する方法を工夫することを考え実施した。その結果は表１の通りである。

このような結果から、横断する子どもに単に手を挙げさせるだけではなく、挙手した利き手を振らせる方法（手ぶり）に効果があると思われる。図２では数名の園児が右手を振っているが、多くは手を挙げているだけである。注目度を高めさせるためにグループ全員の園児に利き手を振らせるのである。

表1. 車は停止するか？

動態刺激	停止/対象車両数
道路（車道）を向いて立っている 手はあげていない	2/40
道路を向いて立っている 右手をあげている	2/32
道路を向いて立っている 右手を上下に振り動かしている	39/43



図１ 交通安全運動


春の交通安全運動

高齢者、子ども守ろう

新潟で出発式

春の全国交通安全運動が6日、始まった。新潟市中央区の県庁前では米山隆一知事らが出席して取り締まりや交通指導に当たる白バイ隊などの出発式が行われ、新潟市西区のあそびの森金鶏幼稚園の園児が横断歩道の渡り方の指導を受けた。

15日までの運動期間中、高齢者や子どもの事故防止に重点を置き、交通安全意識の向上を呼び掛ける。

出発式には黄色い帽子をかぶった県交通安全協会員のほか、金鶏幼稚園の園児約30人も参加した。米山知事は「一人一人がルールを守り、子供や高齢者など交通弱者に思いやりを持ってほしい」とあいさつ。園児たちは「私たちは道路に飛び出しません」などと横断歩道の渡り方を学んだ。

県警によると、16年の交通事故死者数は107人で、13年ぶりに前年を上回った。5日までの死者数は11人で16年の同日より4人少ない。

横断歩道の渡り方を教わる園児＝6日、新潟市中央区

図２ 子ども横断時の挙手

（ながつかやすひろ）

社会的望ましさを排除した体罰容認度を測定する潜在的指標の開発

ST-IATを用いた検討

○大工泰裕[1 2]　内田遼介[3]　寺口司[1]　綿村英一郎[1]　釘原直樹[4]
([1]大阪大学大学院人間科学研究科 [2]日本学術振興会 [3]流通科学大学人間社会学部 [4]東筑紫短期大学食物栄養学科)
キーワード：体罰　潜在的指標　コーチング

【目的】

教育現場において体罰を根絶することは喫緊の課題である。体罰が発生する原因としては、体罰に対して容認的な態度を示す教員の存在が挙げられており（e.g.,藤田他,2016)、こうした教員が、何らかの理由をきっかけに体罰行使に至ると推測される。したがって、このような体罰を容認する人々に対して教育(＝体罰防止教育)を行い、体罰に消極的になるよう態度変容させることが、体罰を未然に防ぐうえで重要である(e.g.,藤田他, 2015)。

しかし、体罰防止教育の効果を検討した研究は、体罰容認度を質問紙による自己報告を中心とした顕在的指標で測定しているため、社会的望ましさによって回答が歪められている可能性を否定できない。例えば、星川・土屋(2015)では、体罰防止教育受講後の体罰容認度の平均尺度得点が1～6点中1.26点という顕著な床効果が見られている。体罰が減らない実態を考えたとき、このような顕著な床効果は、実際に体罰容認派が少ないというよりも、社会的望ましさによって回答が歪められた結果として得られている可能性が高い。

社会的望ましさによるこの問題を解決するためには、潜在的指標を用いた体罰容認度の測定が有効とされる。潜在的指標とは、Implicit Association Test (IAT; Greenwald et al., 1998) に代表される、反応時間等で測定される行動レベルの指標である。この方法で測定される態度は、意識的な統制が困難であるため社会的望ましさが入り込む余地がない。そのため、体罰容認度のような社会的望ましさの影響を受けやすい態度を測定するのに適していると考えられる。

そこで、本研究ではIATの改変版であるST-IAT(Single Target IAT) を用いて体罰容認度を測定することを試みた。ST-IATとは、対となるカテゴリーが必要な従来のIAT（例：男性―女性、良い―悪い）を、対となる概念がない際にも適用できるようにしたものである。ST-IATを用いて測定された潜在的体罰容認度が妥当であれば、質問紙によって測定された顕在的体罰容認度とST-IATによって測定された潜在的体罰容認度とのの差分が、社会的望ましさであると解釈可能である。そこで、本研究では、潜在的体罰容認度と顕在的体罰容認度、それぞれの標準得点の差分が、別の質問紙で測定した社会的望ましさと相関すると仮説を立て、ST-IATで体罰容認度を測定することの妥当性を検証した。

【方法】

予備調査　ST-IATで用いる刺激語を選定するため､クラウドソーシングサービスを使用し、59名(男性36名，女性23名，平均年齢 39.44±9.73 歳）にアンケートを行った。真面目に回答していない人を特定する DQS 項目（e.g., 三浦・小林, 2018)には全員が正しく反応していた。参加者はまず､「体罰」カテゴリーとして用いる刺激語（例:たたく、殴る）24語に対して、どのくらい「体罰」という言葉と結びついてるかを6件法（1: 全く結びつかない～6: とてもよく結びつく）で回答させた。その後､「良い―悪い」カテゴリーとして用いる刺激語（例：楽しい、悲しい）36語に対して、「良いと悪いどちらのイメージに近いか」を6件法（1: 良い～6: 悪い）で回答させた。結果の平均値を参考にしながら、適切だと思われるものを刺激語として6語ずつ抽出し、本実験で用いた。

本実験　クラウドソーシングサービスを通じて 202名(男性110名，女性92名，平均年齢 40.97±9.92 歳）が参加した。同意の後、ST-IATが開始された。ST-IATではターゲットカテゴリとして「体罰」を、評価カテゴリーとして「良い―悪い」を用いた。反応時間から計算されたD-scoreを潜在的体罰容認度とした。D-scoreは正であれば「体罰」と「良い」の連合が強いことを表していた。ST-IATが終わった後、参加者は後述の質問に回答した。

質問項目　顕在的体罰容認度として、3つの運動部活動場面を提示し、それぞれの場面において行使された暴力行為（例：平手打ちする）6項目をどれくらい許容できるかを6件法で尋ね、計18項目の平均値を使用した。社会的望ましさ尺度としては、バランス型社会的望ましさ尺度（谷, 2008）を、統制変数としてBuss-Perry攻撃性尺度（安藤他, 1999）の身体的攻撃・敵意因子を測定した。その他、年齢、運動部所属経験、体罰被害経験などを測定した。

【結果・考察】

分析対象　IMC教示文およびDQS項目（e.g., 三浦・小林, 2018）に正しく反応しなかった者、実験中にエラーを報告した者、ST-IATの教示文が理解できなかったと報告した者を除外し、153名(男性83名，女性70名，平均年齢 41.16±10.25 歳）を分析対象とした。

仮説の検証　仮説の検証に際し、まず、顕在的体罰容認度と潜在的体罰容認度をそれぞれ標準化し、差分を取った変数を作成した。その後、変数間の相関係数を算出した（表1)。その結果、顕在的体罰容認度と潜在的体罰容認度の差分（図1の③）と社会的望ましさ得点との間に相関は見られず仮説は不支持となった。また、顕在的体罰容認度と潜在的体罰容認度との間にも相関は見られなかったため、ST-IATで測定された体罰容認度の妥当性は確認できなかった。むしろ、攻撃性尺度と顕在的体罰容認度の間に相関が見られ、質問紙による体罰容認度測定の妥当性が立証される形となった。

ただし、D-scoreの平均値は-0.58 (標準偏差: 0.30)と負の値であり、「体罰」と「悪い」の連合が強いことが示されていた。そのため、ST-IATで測定された潜在的体罰容認度は全くの検討外れというわけではないことが考えられる。今後は、行動や生理指標といった、自己報告式ではない指標との関連性を検討するなど、多面的に潜在的体罰容認度の妥当性を検討する必要があると考えられる。

表1 体罰容認度およびパーソナリティ間の相関係数

		①	②	③	④	⑤
①	顕在的体罰容認度					
②	潜在的体罰容認度	.11				
③	①－②	.67	-.67			
④	社会的望ましさ	-.05	-.03	-.01		
⑤	Buss-Perry	.18 *	.02	.12	-.55	

*Note: * p<.05*

本研究は2017年度日本応用心理学会若手会員研究奨励賞による支援を受けました。
(だいく　やすひろ・うちだ　りょうすけ・てらぐち　つかさ・わたむら　えいいちろう・くぎはら　なおき)

高校弓道選手に実施した心理的サポートの事例研究

○小松健一[1]
([1]アキラ株式会社)

キーワード：メンタルトレーニング，心理的競技能力，心理技法活用尺度

【はじめに】

2020年東京オリンピックの開催に向けて我が国では，スポーツ庁が柱となり，メダル獲得に力を注いでいる．その中には，「国際競技力の向上」として「トップアスリートの強化活動の充実」があり，その施策の一つに「ハイパフォーマンス事業」が盛り込まれている（スポーツ庁，2016）．ハイパフォーマンス事業では，メダルの獲得が期待される競技をターゲットとして，多方面から専門的かつ高度な支援を戦略的・包括的に行うものであり，具体的には，動作分析，ゲーム分析，情報収集，栄養サポート，コンディショニングサポート，心理サポートなどの専門スタッフからの支援などがある（スポーツ庁，2016）．

このような競技力向上を目的とした科学的なトータル支援は，オリンピアンだけでなく，各都道府県の体育協会等がそれぞれ，国民体育大会等を視野に入れ，地場の選手に対してトータル支援を行っている所もある．例えば山口県では，2011年に開催された，地元開催の国民体育大会にて2003年より，「やまぐちトップアスリート育成プラン」を策定し，2006年から各競技団体へスポーツドクター，スポーツトレーナー，スポーツ栄養士の派遣が開始され2011年には，スポーツメンタルトレーニング指導士の派遣もされている（山口県体育協会，2012）．

【目的】

そこで本研究では，このようなトータル的なスポーツ医・科学支援の中で，スポーツメンタルトレーニングの依頼を受けて実施した，20XX年の国民体育大会にて弓道遠的競技で優勝したA県少年弓道選手に実施した心理的サポートが選手の心理的側面にどのような影響を及ぼしたのか検討することを目的とした．

【方法】

1．対象者および指導期間

本研究の対象者は，20XX年国民体育大会の弓道競技に出場し遠的で優勝した，少年男子4名（15-18歳）であった．

また実施した心理的サポートの期間は，20XX年7月から20XX年10月までの約3ヶ月間であった．

2．調査方法

調査方法は，徳永・橋本（1988）の作成した心理的競技能力診断検査（DIPCA.3）と村上ほか（2010）が作成した心理技法活用尺度を用いて調査を実施した．

3．実施した心理的サポート

1)導入前（サポート1回目）

心理的サポートを導入する前に監督とミーティングを実施し，主訴と今後の進め方について打ち合わせをした後，選手の練習風景の観察を行った．

2)メンタルトレーニング講習会（サポート2回目）

メンタルトレーニングの理解を図るため，講習会形式でメンタルトレーニングの目的や具体的な方法の紹介を3時間実施した．具体的には，スポーツ心理テストを使った自己分析や心理的スキル（目標設定，リラクセーションとサイキングアップ，イメージトレーニング，集中力，プラス思考とセルフトーク）の紹介を行った．

3)練習時の心理的サポート（サポート3回目以降）

本研究者が国体強化練習に参加し，心理的サポートを実施した．具体的には，練習前や練習中，練習後の選手の表情や仕草の観察とフィードバック．練習開始前にリラクセーション，イメージトレーニング，サイキングアップ実施とその指導．練習中に気持ちを切り替える方法の紹介やその指導．自信をつけるためのセルフトークの指導，一流選手の考え方（プラス思考）について紹介，選手からの質問に対する回答（アドバイス）などであった．

4)大会期間中の心理的サポート

国民体育大会期間中に帯同し心理的サポートを実施した．具体的には，試合前と試合中の選手の表情，仕草の観察．試合前のリラクセーション，イメージトレーニング，サイキングアップの実施．ビデオカメラを使用しインタビュー形式で，試合に対するパフォーマンス目標とプロセス目標の確認などであった．

【結果】

1．心理的競技能力（DIPCA.3）

20XX年7月と20XX年9月の2回実施したDIPCAの得点の平均値の差を対応のあるt検定で検証した．結果は，18項目中（12尺度，5因子，総合得点）1項目において有意な向上が認められた．闘争心（$t(3)=2.89$）（いずれも$p<.05$）．

2．心理技法活用尺度

20XX年7月と20XX年9月の2回実施した心理技法活用尺度の得点の平均値の差を対応のあるt検定で検証した．結果は，8項目中2項目において有意な向上が認められた．セルフトーク（$t(3)=2.81$），ルーティン（$t(3)=2.87$），（いずれも$p<.05$）．

【考察】

本研究の結果より，実施した心理的サポートは選手にポジティブな影響を与えることが出来たと考えられる．ただし，約3ヶ月間という短い期間だったため，トレーニングという観点から，もう少し長い期間での心理的サポートによる影響を検討する必要があると考える．

【参考文献】

スポーツ庁（2016）国際競技力の向上．
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop07/1371878.htm

財）山口県体育協会　（2012）スポーツ医・科学サポート事業報告書．

徳永幹雄・橋本公雄（1988）スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニングに関する研究（4）-診断テストの作成-．健康科学，10：73-79．

村上貴総ほか（2010）心理技法活用尺度の作成-大学生競技者を対象として-．スポーツパフォーマンス研究，2．

（こまつ　けんいち）

研究発表（ポスター発表②）

8 月 25 日（日）

14:45～16:45　食堂マロニエ

光沢の有無による視覚的な触感の違いに関する研究

○稲葉隆[1]
([1]日本カラーデザイン研究所)
キーワード：光沢,触感

【目的】ものの表面の状態と表面の色の関係によって，視覚的に感じられる触感が異なることが示唆されている（稲葉, 2018)。たとえば，滑らかさについては同じ微細な凹凸もつ表面でも高明度の表面は低明度のものよりも滑らかに評定される。ものの表面を視覚的にとらえる場合，色に加えて光沢の度合いも知覚される。光沢は光の表面反射による視覚的な情報である。色同様に光沢が視覚的に感じられる触感に影響をもつことを検討することが本研究の目的である。

【方法】刺激は樹脂製のプレート（70mm×140mm×10mm）で，色はホワイト・ブラック・ゴールドの3色とし，それぞれ高光沢と低光沢の表面状態2種類，計6つを用いた。これらの3色は手に持って使用する製品の外観においてよく見られる色であり，高光沢（グロス）と低光沢（マット）の表面加飾もよく用いられている。
実験参加者は20～50才の男性21名・女性22名の計43名（M= 33.3, SD= 8.0）であり，事前に一般色覚であることを口頭で確認した。評定項目は主要な触感に関する5項目，「やわらかい/かたい」（柔硬感)，「なめらかな/あらい」（粗滑感①)，「あたたかい/つめたい」（温冷感)，「しめった/かわいた」（乾湿感)，「平らな/でこぼこした」（凹凸感）と粗滑感をオノマトペであらわした「つるつる/ざらざら」（粗滑感②)，及び，視覚的な印象である「はでな/じみな」（派手さ感）と，快不快をあらわす「ここちよい/ここちよくない」（快適感）の計8項目を用いた。それぞれの項目は，1.かなり○○，2.やや○○，3.どちらでもない，4.やや△△，5.かなり△△の5段階尺度で評定をおこなった。
実験参加者には，提示された1つの刺激を見て，その印象に基づいて回答用紙に記された全項目の評定をするように教示した。刺激を触ることは禁じ，評定に要する時間は実験参加者に任せた。6つの刺激は実験参加者ごとにランダムに提示した。実験環境は演色性の高い照明を用い，刺激を提示した机上面はグレーで照度は600lxに保たれた。

【結果】それぞれの評定項目において表面の色と光沢による影響が生じたか否かを検討するために，色（3)・光沢（2）の2要因の分散分析をおこなった。
1）柔硬感　色の主効果（$F(2,84) = 4.78$, $p < .05$）が有意で，光沢度の主効果（$F(1,42) = .03$, $n.s.$）と色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = 1.46$, $n.s.$）は有意ではなかった。
2）粗滑感①　色の主効果（$F(2,84) = .30$, $n.s.$）は有意でなく，光沢度の主効果（$F(1,42) = 52.71$, $p < .01$）は有意であった。色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = 2.28$, $n.s.$）は有意ではなかった。
3）温冷感　色の主効果（$F(2,84) = 4.62$, $p < .05$），光沢度の主効果（$F(1,42) = 5.26$, $p < .05$），色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = 4.35$,　$p < .05$）いずれもが有意であった。
4）乾湿感　色の主効果（$F(2,84) = .43$, $n.s.$）は有意でなく，光沢度の主効果（$F(1,42) = 7.13$, $p < .05$）は有意であった。色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = 2.21$, $n.s.$）は有意ではなかった。
5）凹凸感　色の主効果（$F(2,84) = 2.22$, $n.s.$）は有意でなく，光沢度の主効果（$F(1,42) = 70.75$, $p < .01$）は有意であった。色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = .52$, $n.s.$）は有意ではなかった。
6）粗滑感②　色の主効果（$F(2,84) = 4.69$, $p < .05$），光沢度の主効果（$F(1,42) = 273.87$, $p < .01$），色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = 5.72$,　$p < .01$）いずれもが有意であった。
7）派手さ感　色の主効果（$F(2,84) = 96.50$, $p < .01$），光沢度の主効果（$F(1,42) = 79.28$, $p < .01$），色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = 3.47$,　$p < .05$）いずれもが有意であった。
8）快適感　色の主効果（F (2, 84) = 3. 59, p < . 05）が有意で，光沢度の主効果（$F(1,42) = 3.45$, $n.s.$）は有意ではなかった。色と光沢度の交互作用（$F(2,84) = 4.90$, $p < .01$）は有意であった。
それぞれの評定項目ごとに下位検定をおこなうと，全ての色において高光沢と低光沢とで有意な差がみられたのは，粗滑感①・乾湿感・凹凸感・粗滑感②・派手さ感の5項目であり，高光沢は低光沢よりも「なめらかな」「しめった」「平らな」「つるつるした」「はでな」評定がされた。また，温冷感と快適感では，ホワイトとブラックにおいて光沢度による差が認められ，高光沢は低光沢よりも「つめたく」「ここちよい」評定がされたが，ゴールドでは光沢度による差は認められなかった。さらに，柔硬感においてはいずれの色にも光沢度による差は生じなかった。

【考察】表面の光沢度の違いにより，視覚的に感じられる触感が異なることが実験により示唆された。タイルのように平滑な表面状態では鏡面反射により光沢度が高くなり，コンクリートのように微細な凹凸がある表面状態では拡散反射によって光沢度が低くなる。粗滑感①②・凹凸感の評定項目で高光沢と低光沢とで差が生じたのは，光沢度の視覚的な情報から物理的な表面状態が予想されたためであると考えられる。同様に，乾湿感でも水に濡れたような表面状態が想起された高光沢が「しめった」印象を与えたことが予想される。また，派手さ感で高光沢が派手に感じられるのは反射する光の強さに基づいた印象の違いであろう。
しかし，温冷感と快適感では色により評定が異なり，白と黒では光沢度による差が生じたが，ゴールドでは差が認められなかった。温冷感は色相による影響が強く，暖色であるゴールドでは光沢度よりも色相の効果が強く生じたと考えられる。快適感においては，「なめらかさ」が「あらさ」よりもここちよく評定されることが示唆されていること（稲葉, 2017）から，高光沢の視覚的印象が表面の滑らかさを喚起して，ここちよさの評定がなされたと考えられる。しかし，ゴールドでは高光沢が滑らかさを喚起したが，ここちよさの評定には差が生じなかった。光沢度と色による視覚的な快適感については，今後他の有彩色を用いた検討が必要である。
以上から光沢が触感に及ぼす影響は粗滑感中心に生じやすく柔硬感では生じにくいが，それ以外の触感については色との関係によることが示唆された。

【引用文献】
稲葉 隆 (2017). 触感語の嗜好性に関する調査研究 日本応用心理学会第84回大会発表論文集, 16.
稲葉 隆 (2018). 色彩とテクスチャーが喚起する触感と色感 日本感性工学会論文誌, 17 (1), 99-108.

（いなば たかし）

中学生当時のいじめ被害が高校生の将来展望に及ぼす影響(1)

入学前・入学後調査結果による検討

○三島　浩路
(中部大学　現代教育学部)

キーワード：将来展望，いじめ，高校生

【目　的】

自分自身の未来について，ポジティブな指向性をもつことは，学校適応を促進し学習活動に対する参加意欲を高める要因の一つになると考えられる（e.g., 山本, 2011)。本研究では，未来に向けた前向きで現実的な考え方や自己イメージを「将来展望」と定義する。三島(2018)は，高校生の将来展望を測定する３因子構造の尺度を開発し，この尺度により測定した将来展望が，高校生の学校適応に関連することを示唆する結果を得た。学校適応に関連すると考えられる将来展望であるが，高校生の将来展望を高揚したり低下させたりする要因として，中学生当時のいじめ被害が考えられる。Zimbardo & Boyd(1999)は，*ZTPI* 尺度をもちいた研究で，過去の対人関係上のネガティブな経験が，将来に対する志向性の低下につながることを示唆する結果を得ており，高校入学時には過去のネガティブな対人関係上の経験である中学生当時のいじめ被害が，高校入学後の将来展望に影響を与える可能性がある。そこで，本研究では，中学生当時のいじめ被害の程度と，高校入学後の将来展望についての調査を行い，いじめ被害が将来展望のどのような側面に影響を与える可能性があるのかを検証する。

【方　法】

調査時期・対象

時期：2018 年３月・11 月の２回に分けて調査を実施した。
対象：2018 年４月にＡ県立Ｂ高等学校・Ｃ高等学校の２校に入学した高校生 561 人（Ａ高等学校：280 人　Ｂ高等学校 281 人）を対象に調査を実施した。なお，分析に用いたのは関係するすべての質問に回答した 473 人（男子 227 人　女子 246 人）のデータである。

質問内容と調査時期

<u>いじめ被害（入学前調査）</u>

2018 年３月下旬に両高等学校で行った入学説明会の折，質問紙を保護者に配布し，中学生当時のいじめ被害関連項目を含めた調査紙を生徒が自宅で回答した後，添付の専用返信封筒に厳封して入学式の日に高校に提出させた。

いじめ被害に関しては，以下の３項目で測定した（①中学生の頃，クラスのみんなからいじめられたように感じた。②仲間はずれにされたと感じた。③仲間からいじめられたように感じた)。なお，設問への回答は以下の５件法である
（５：感じた　４：時々感じた　３：あまり感じなかった
２：ほとんど感じなかった　１：まったく感じなかった)。

<u>将来展望</u>

2018 年 11 月に学級単位で学校適応に関する調査として実施した。利用した尺度は高校生用将来展望尺度の 15 項目（三島，2018）である。高校生用将来展望尺度は，向社会的努力志向因子７項目（例：前向きな生き方がしたい。努力すれば自分の未来は望む方向に変えられる），将来像・目標の明確さ因子３項目（例：高校や大学を卒業した後の就職先など，自分がやりたいことは決まっている。私には将来の目標がある），肯定的・積極的将来像因子５項目（例：自分の将来には，希望がもてる。自分の将来は，自分できりひらく自信がある）により構成され，各設問に対して５件法で回答を求めた。

【結果と考察】

■いじめ被害程度による3群化

いじめ被害程度を調べた３項目の中で，「３」が１項目以上あった者を弱被害群（n=59, 約 12%），「４」が１項目以上あった者を被害群（n=36, 約８%），それ以外を無被害群（n=378, 約 80%）の３群に分類した。

■いじめ被害群ごとの将来展望

将来展望尺度を構成する３つの因子ごとに負荷量の大きい項目の素点平均値を算出してそれぞれの因子の尺度得点とした。この尺度得点の平均値と標準偏差をいじめ被害３群ごとに求めて比較した（Table1)。

向社会的努力志向因子の尺度得点については，３群の平均値に有意なちがいがみられた（$F(2,470)=10.1, p<.001$)。多重比較（*Tukey* の *HSD*）を行った結果，無被害群に比べて被害群の尺度得点が有意に低く（$p<.001$)，中学生当時のいじめ被害が，将来展望を構成する一つの要素である向社会的努力志向を低下させる可能性があることが示唆された。

将来像・目標の明確さ因子の尺度得点について，３群の平均値を比較した結果，有意なちがいはみられなかった（$F(2,470)=0.7$, *n.s.*)。

肯定的・積極的将来像因子の尺度得点について，３群の平均値に有意なちがいがみられた（$F(2,470)=14.2, p<.001$)。多重比較を行った結果，無被害群に比べて被害群の尺度得点が有意に低く（$p<.001$)，さらに，弱被害群に比べても被害群の尺度得点が有意に低い（$p<.05$)。これらの結果は，中学生当時のいじめ被害が，肯定的・積極的将来像を低下させる可能性があることが示唆している。

以上の結果から，中学生当時のいじめ被害は高校入学後の将来展望に影響を与える可能性があると考えられる。

いじめ被害は被害者に学力低下や勤労意欲の低下を招いたり，抑鬱・不安傾向を強めたりすることが報告されており，いじめ被害の影響は長期間残存する。このうち，学力の低下や勤労意欲の低下に関しては，将来展望が介在している可能性がある。今回の調査は，中学生当時のいじめ被害と高校入学後半年以上経過した段階の将来展望であるが，この時期の将来展望に中学生当時のいじめ被害が影響を及ぼすことと同時に，この時期の将来展望がその後の高校生活に影響を及ぼすことも考え合わせれば，いじめ被害者への対応として，被害者の将来展望を育むキャリア支援などが情緒的な側面への支援と合わせて必要ではないだろうか。

Table1　いじめ被害3群の将来展望尺度得点平均値とS.D.

将来展望　3因子	無被害群	弱被害群	被害群
	平均値 (S.D.)	平均値 (S.D.)	平均値 (S.D.)
向社会的努力志向	4.02 (0.58)	3.84 (0.51)	3.60 (0.64)
将来像・目標の明確さ	3.00 (1.00)	2.97 (0.94)	2.08 (1.02)
肯定的・積極的将来像	3.19 (0.64)	3.00 (0.55)	2.63 (0.80)

■本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号 17K04379）によるものである。

（みしま　こうじ）

知能観を変化させることは可能か

○市村祐樹[1]　井田政則[2]
([1]株式会社 SHP　[2]立正大学心理学部)

キーワード：暗黙の知能観，知能観尺度，知能観への介入

目的

暗黙の知能観とは，一種の素朴理論といえるものであり，本人には特に吟味されずにいだかれている能力に関する考え方である（前泊・小野・岩木，2012)。Dweck（1986）は暗黙の知能観として2つの知能観を設定しており，それらは増大理論と実体理論である。増大理論とは知能は柔軟なもので，自身の努力によって成長させることが可能であるという考え方であり，実体理論とは知能の量は固定的で，自身での制御は困難であるという考え方である（藤井・上淵，2010)。

増大理論的信念の者は学校の成績が良いことが示されており（Blackwell et al，2007），調査対象者を増大理論的信念に変化させることが学校の成績に影響を与えるのかといった検討が行われてきた(Blackwell et al，2007）。

Yeager（2017）は介入によって信念を変化させることは可能であると論じている。そして，3 つの介入の効果があるとしている。1つ目は，脳の画像を用いて説得を行うと説得効果が高まるというジンクピリチオン効果（清水，2009）。2つ目は自分が信じていない事実を他人に説得することによって，認知的不協和が生じ，その認知的不協和の解消のため信じていなかった事実を信じるようになるというsaying-is-believing 効果。3 つ目は文章の内容が特殊な 1 事例ではなく広く一般的な内容にすることによって対象者の抵抗感を減らす一般化である。

本研究ではYeager (2017)が示す，3つの介入の効果が含まれる文章を提示することによって，信念が変化するのか，日本人を対象に検討を行った。

また，本研究では介入の効果の検証のため，サンプルの選定を行った。具体的には，増大理論傾向を高める場合は増大理論傾向が低い者を対象に，実体理論傾向を低める場合は実体理論傾向が高い者を対象に，研究を行なった。

以上のことから，本研究では介入の文章を読むことによって、増大的知能観傾向が低い者はその傾向が高くなり（仮説1），実体的知能観傾向が高い者はその傾向が低くなる(仮説2）という仮説を設定し，この仮説を検証した。

方　法

対象者　大学生63名（男性13名，女性50名，平均年齢20.1歳，*SD*=.97）。この63名をランダムに増大的知能観への介入群（以下，介入群）30名（男性5名，女性25名，平均年齢19.9歳，*SD*=.92）と統制群33名（男性8名，女性25名，平均年齢20.3歳，*SD*=.98）に分類した。

材料　(1) 2因子暗黙の知能観尺度：市村・井田（2019）が作成した尺度を用いた。この尺度は増大理論（3項目）と実体理論（3項目）によって構成されており，6件法で実施した。

(2) 介入の文章：3つの介入の効果が含まれる文章①を作成し，これを介入群に用いた。統制群には，暗黙の知能観と関連がなく，かつ，文字数が介入の文章と大きく異ならない文章②を用いた。

手続き　調査は2因子暗黙の知能観尺度を実施した。その1週間後，介入群には文章①を提示し，介入を行い。統制群には②を実施した。その後，2回目の尺度を実施し，介入の効果を検証した。

結果

2因子暗黙の知能観尺度における増大理論の3項目を加算した値を増大理論得点，実体理論の3項目を加算した値を実体理論得点とした。

増大理論に関する分析では増大理論得点が平均点より小さかった者（63名中，介入群15名，統制群19名），実体理論に関する分析では実体理論得点が平均点より大きかった者(63名中，介入群19名，統制群13名）のデータを使用した。

(1) 増大理論得点を従属変数とする介入の効果の検証

介入の前後×介入の群を独立変数，増大理論得点を従属変数とする混合計画による分散分析を行った。記述統計量をTable1に示す。

Table1 増大理論得点に関する記述統計量

介入の前後	介入の群	平均	標準偏差	度数
介入前	介入群	9.53	(1.46)	15
介入後		10.06	(1.68)	
介入前	統制群	9.11	(1.52)	19
介入後		9.84	(2.93)	

分析の結果，介入群における介入前と介入後の増大理論得点に有意傾向が見られた（$p < .10$，$partial\ \eta^2 = .113$）。従って，仮説1は支持された。

(2) 実体理論得点を従属変数とする介入の効果の検証

介入の前後×介入の群を独立変数，実体理論得点を従属変数とする混合計画による分散分析を行った。記述統計量をTable2に示す。

Table2 実体理論得点に関する記述統計量

介入の前後	介入の群	平均	標準偏差	度数
介入前	介入群	12.12	(1.50)	19
介入後		10.26	(1.88)	
介入前	統制群	12.46	(1.66)	13
介入後		12.23	(2.74)	

分析の結果，介入群における介入前と介入後の得点に有意差がみられた（$p < .01$，$partial\ \eta^2 = .331$）。従って，仮説2は支持された。

考　察

本研究では，信念への介入によって，暗黙の知能観を変化させることができるのか，研究を行なった。

分析の結果，仮説1と仮説2は支持された。従って，本研究では，介入によって日本人に対しても暗黙の知能観を変化させられることが示された。特に算出された効果量の大きさから，増大的知能観への介入を行うことによって，実体理論傾向が高い者の実体理論傾向を低めることに対する，本研究の介入の影響力は大きいことが示された。

今後の課題として，暗黙の知能観の介入に関する長期的視点から研究を行うことが考えられる。本研究では，介入の回数は1回であり，介入の影響力の持続の程度に関しては検討を行わなかった。長期的視点を含めた研究の実施が必要であると考えられる。また，Yeager (2017)が示す3つの介入の効果のうち，どの刺激が信念の変化に最も影響を与えるのか，検討する必要があると考えられる。

（いちむら　ゆうき・いだ　まさのり）

学習動機が先延ばし行動に及ぼす影響

○ 小野 洋平・谷口 泰富
（ 駒澤大学 ）

キーワード：先延ばし行動・学習動機・重回帰分析

先延ばし行動(procrastination)は，事態の悪化が予想される場合においても意図的に課題などの遂行を先延ばすことと定義される。藤田・岸田（2006）は，学習内容などへの興味の低さにより他の行動を優先することが先延ばし行動の原因の一つであることを示唆している。このことは，学習をどのように志向するかが課題に対する態度や先延ばし行動に影響を及ぼす可能性を示すものである。そこで本研究では先延ばし行動と学習動機の関連について検討した。

方　法

調査参加者

一般教養科目を受講する都内の大学生 129 名（男 55 名，女 74 名，平均年齢 19.3 歳，*SD* ＝3.26 歳）に対して調査を行った。

調査内容

学習動機の 2 要因尺度　市川（1995）の学習動機の 2 要因尺度を用いた。「勉強は何のためにするのか」に関する 36 問の質問に対し，「よくあてはまる」(5 点)から「まったくあてはまらない」(1 点)の 5 件法で回答させ，充実志向，実用志向，訓練志向，関係志向，自尊志向，報酬志向の 6 因子を得点化した。

課題先延ばし行動傾向尺度　藤田（2005）の作成した尺度で，「課題先延ばし」9 項目，「約束事への遅延」4 項目，計 13 項目であった。「非常にある」(5 点)から「全くない」(1 点)の 5 件法で回答させた。なお，逆転項目は点数を逆転させて得点化した。

先延ばし行動の原因に関する調査　藤田・岸田（2006）の作成した尺度で，「興味の低さによる他事優先」9 項目，「先延ばし肯定・容認」4 項目，「課題困難性の認知」3 項目，計 16 項目からなり，「かなりあてはまる」(4 点)から「全くあてはまらない」(1 点)の 4 件法で回答させた。

フェイスシート　先延ばし行動に関して，その主観的頻度と改善の意図ついて 5 件法で回答させた。

結　果

先延ばし行動に対する主観的評価

Figure1 は先延ばし行動の主観的頻度と改善の意図の平均得点を示したものである。分析の結果，いずれの得点も母平均に比べて有意に高くなっていた（行動頻度：t (128)=12.31, p <.01，d =1.08，改善の意図：t (128)=22.50, p <.01，d =1.98)。

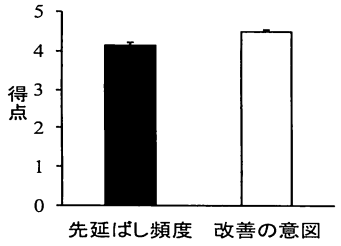


Figure 1. 先延ばし行動に対する主観的評価

先延ばし行動とその原因

先延ばし行動傾向とその原因の関係を検討するため，先延ばし行動傾向の得点を目的変数，先延ばし行動の原因に関する調査の 3 因子を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果，「課題先延ばし」得点と「興味の低さによる他事優先」得点の間に有意な正の回帰係数が得られた（R^2=.37, F(1,127)=76.72, p<.01)。

学習動機と先延ばし行動

先延ばし行動傾向に及ぼす学習動機の影響を検討するため，先延ばし行動傾向得点を目的変数，学習動機の 6 因子得点を説明変数とする重回帰分析を行った結果，「課題先延ばし」得点との間に有意な回帰式が得られた（R^2=.14, F(2,126)=10.37, p<.01）(Table 1)。

学習動機と先延ばし行動の原因

先延ばし行動の原因に及ぼす学習動機の影響を検討するため，先延ばし行動の原因を目的変数，学習動機の 6 因子を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果，「興味の低さによる他事優先」得点には訓練志向と負の回帰係数が，報酬志向と正の回帰係数が得られた（R^2=.07, F(2,126)=4.84, p<.01)。また，「課題困難性の認知」については自尊志向に正の回帰係数が得られた（R^2=.04, F(1,127)=5.39, p<.05）(Table 1)。

Table 1
先延ばし行動と学習動機の重回帰分析結果

	課題先延ばし		興味の低さによる他事優先		課題困難度の認知	
	標準偏回帰係数	単相関係数	標準偏回帰係数	単相関係数	標準偏回帰係数	単相関係数
充実志向	.00	-.16 *	-.02	-.14 †	.08	.13 †
訓練志向	**-.37 ****	-.32 **	**-.23 ****	-.19 *	-.01	.03
実用志向	-.13	-.23 **	-.06	-.13 †	-.07	.00
関係志向	-.09	-.06	.06	.06	.09	.17 *
自尊志向	**.19 ***	.10	.12	.13 †	**.20 ***	20 *
報酬志向	.00	.01	**.18 ***	.13 †	.09	.17 *
R^2	.14 **		.07 **		.04 *	
R	.37		.26		.20	

**: p<.01，*: p<.05，†: p<.10

考　察

まず，現代大学生は先延ばし行動の頻度が高いことを自覚し，改善を望んでいることが示された。一方，藤田・岸田(2006)が示唆しているように，本研究においても「興味の低さによる他事優先」が先延ばし行動の主たる原因であることが示された。また，「課題先延ばし」得点と自尊志向に正の回帰係数が，訓練志向に負の回帰係数が得られたことから，先延ばし行動に学習動機が影響を及ぼすことが示唆された。自身のプライドや競争心によって学習が動機づけられる自尊志向は，「課題困難性の認知」得点と正の回帰係数が得られており，課題が困難であると認識した場合に自尊心を低減させないよう先延ばし行動が選択されると考えられる。一方，知的能力の向上を目指して学習が動機づけられる訓練志向では，「興味の低さによる他事優先」に対して負の回帰係数が得られている。このことから，知的能力の向上を目指した学習を志向する者は，先延ばし行動が抑制され，「興味の低さによる他事優先」を原因とする先延ばしが少ないことが示唆された。しかしながら，本研究の決定係数は必ずしも高くないことから，他の要因の影響も考慮したうえで，学習動機と先延ばし行動の関連について検討することも必要かと考えられる。

（おの ようへい，たにぐち やすとみ）

人材育成とキャリア開発
経験学習による個人視点のキャリア開発

菊池夏帆　伊東拓海　可児佑吾　原みのり　堀内勇吾　村松真至　外島裕
（日本大学商学部）

キーワード：成果主義、経験学習、人材育成

【目的】1990年代のバブル崩壊によって、年功型賃金制度から職能資格制度を経て、成果主義の導入が行われた。かつては失敗する中で様々な経験を経て学習し、ブラッシュアップするというプロセスが多くあった。しかし、今日ではその失敗による学習が難しくなっている。その背景として、企業内での競争の激化・顧客からの要望の厳格化・プロジェクトの大規模化によって失敗へのリスクが増大したことが挙げられる。従って我々は、個人が自分自身のキャリアについて考えるためには、良質な経験を踏み、成長すること、すなわち経験学習が必要であると考える。そこで現代の成果主義に対して新たな評価制度の導入を目的とする。

【方法】成果主義に対する問題提起をし、経験学習の重要性を確かめ、新たな評価制度の導入を検討する。

【研究内容】

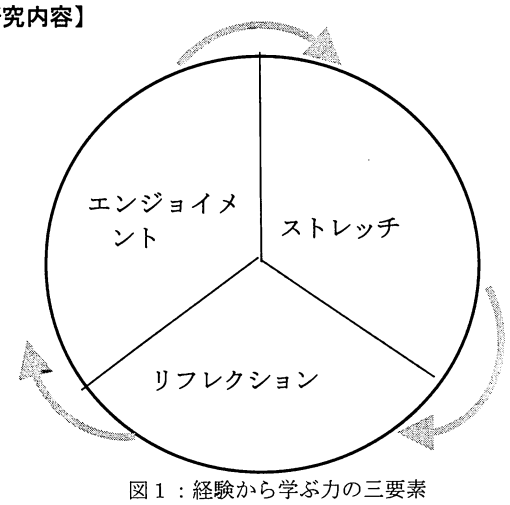


図１：経験から学ぶ力の三要素
（出所）松尾（2017）p.70参照 筆者作成

経験学習のサイクルを図１に示す。図１によると、松尾睦(2017)はストレッチについて問題意識を持って高い目標や新たな課題に取り組む姿勢のことだと論じている。また楠見孝(2014)はストレッチを、新しい経験に対して開かれた心、成長しようとする能力や達成動機、ポジティブな学習に向かう冒険心のことだと論じている。まとめるとストレッチ（挑戦的）課題、つまり自分の現時点での能力を少し超えた課題へ挑戦することでこの力が現れる。なぜなら挑戦的で新規性のある課題に取り組む際、自分が持っていなかった新しい知識やスキルを求められるからである。ここでいう挑戦的で新規性のある課題とは、初めての管理職に伴う、今まで経験したことのない仕事や、部下の管理・対処、挑戦性の高い海外事業の立ち上げ等である。ここで述べたストレッチ（挑戦的）課題に長期的に取り組むことで、人はその仕事における高度なスキルや知識を獲得することができる。

リフレクションとは、主に省察やフィードバックのことである。ストレッチ経験から学ぶ省察は２つある。１つ目は振り返り的省察である。過去の体験に意義や意味を見つけ解釈し、深い理解を得ることである。２つ目は見通し的省察である。未来に向けて、実践の可能性についての考えを深めることである。特に重要なことは失敗から学ぶ時である。失敗から学習する場合、１つ目の振り返り的省察をもとに、行動・計画を修正し、行動を改善することが重要である。またこの２つの省察の中間に、行為の中での省察がある。行為の中での省察とは、行為中に考えながら行動することである。行為中の状況に目を向け、行動を適切に把握し、そして行為の中で調整することである。実際の仕事の場では、状況が複雑に、そして多様に変化する。その中で省察しながら柔軟に対応する省察的実践が非常に重要視される。省察的実践とは、実践しつつ、意識的・体系的に状況や経験を振り返り、行動を適切に調整し、自分自身で洞察を深めることである。また、フィードバックは情報通知と立て直しの２つの要素が重要である。松尾(2017)によるとエンジョイメントとは、「仕事自体に関心を持ち、やりがいやおもしろさを感じることで意欲が高まっている状態、および仕事をやりきることで達成感や成長感を感じている状態のことだ。」と論じている。

これらの要素は各要素が互いにつながりあい、循環するという点が特徴である。つまり、挑戦的な課題に取り組むほど(ストレッチ)、課題中の試行錯誤や仕事の後の振り返りによって学ぶことのできる要素の質が高くなり(リフレクション)、その結果として感じるやりがいや意義は大きくなる(エンジョイメント)。そして仕事にやりがいや面白さを感じることができると、より挑戦的な新たな課題に取り組もうとする気持ちも強くなる(ストレッチ)。この循環を常に行うことで、人は経験を通して成長することができる。

【結果】経験学習サイクルがうまく機能することで、個人の成長にうまくつながり、個人のキャリアが開発される。しかし、実際はこのサイクルがうまく機能していない。したがって、組織全体のサポートとして、部下育成(OJT)を人事評価制度の新たな項目として導入することを我々は提案する。部下育成(OJT)によって部下が育つことで部下自身のキャリアが開発される。また部下育成の経験からマネジャー自身のキャリアが開発されると我々は考える。この効果によって組織社会化するとともに、組織コミットメントが高まり、長期にわたり組織に留まりたいという気持ちを持つ人が増加する。したがって、長い視点での成果主義における目標管理が可能になり、経験学習もより円滑に機能すると我々は考える。

【課題】経験学習のプロセスを、人事評価制度の新たな項目として部下育成を導入する。それにあたり、マネジャーの負担がさらに増加することが考えられる。また、マネジャーの負担を考えた人事評価制度についての調査まで行うことができなかった。

【引用文献】

1)松尾睦[2017]　『職場が生きる人が育つ「経験学習」入門』ダイヤモンド社
2)小林裕[2011]「人事評価制度」田中堅一郎 編『産業・組織心理学エッセンシャルズ 改訂三版』ナカニシヤ出版
3)楠見孝[2014]　「実践知の獲得」 楠見孝・金井壽宏　編『実践知-エキスパートの知性』有斐閣
4)金井壽宏[2002]『仕事で「一皮むける」』光文社新書
5) 中原淳[2013]「経験学習の理論的系譜と研究動向」『日本労働研究雑誌』

(きくちかほ・いとうたくみ・かにゆうご・はらみのり・
ほりうちゆうご・むらまつまさし・としまゆたか)

教職課程履修学生の能動的学習を活性化させる授業の在り方に関する検討

－養護教諭養成課程の実践を例として－

亀岡　聖朗
（桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部）

キーワード：協同的な学び合い，能動的学習，教職実践演習（養護教諭）

【目的】養護教諭養成課程の教職実践演習では，履修者(以下「学生」)の能動的学習を活性化する授業の在り方を検討している(黒岩・山本，2018)。大学教育における能動的学習は，2017年告示の新学習指導要領(小・中学校)に含まれる主体的・対話的な深い学びの実践に先んじて求められている。本報告では，学生同士の協同的な学び合いの成果とその学びの能動的学習への影響について質的検討を試みた。

【方法】調査対象：2018年度に養護教諭1種免許状取得を目指すA大学4年生の教職実践演習履修学生12名。
取り上げた実践と結果の処理：教職実践演習(4年次後期，90分15回)は，1つの単元を，講義と個人思考の熟成，事例検討，集団討議とその発表による個々人の課題のふり返りという3つの過程を基本に構成，学生は各単元の最後に学びの成果をまとめた。本報告では，「調べ学習に基づく模擬授業」と「教職実践演習の総まとめ」の単元を取り上げた。前者は，学生への調べ学習の希望調査から4領域(各3名で構成)の主題を設定(表1)，学生は各領域に別れて協同で調べ学習をし，教材を準備して40分の模擬授業に臨んだ。模擬授業は看護学科3年生に対して実施され，授業評価も行った。この評価の意見・感想(自由記述)から，授業内容を自分自身に引き寄せて捉えた記述の有無やその内容に注目し3年生への感化の様子を捉え，学生の協同的な学び合いの成果を検討した。後者では，学生各自が教師・子ども・保護者が期待する養護教諭の姿を考えて作成した「目指す養護教諭像」と題したレポートから，学生同士あるいは教員も含めた協同での学び合いの成果や，能動的学習の様子を検討した。

表1　模擬授業に対する事前講義、模擬授業の領域と主題

事前講義	学校で起こりやすい救急対応（2コマ） 児童生徒理解（1コマ）
模擬授業の領域	**その主題**
内科的領域	アレルギー疾患を持つ児童の対応
外科的領域	自分でできるけがの手当
心理的領域	養護教諭としての健康相談
教職一般の領域	児童生徒理解

倫理的配慮：調査対象学生に対して，研究協力は任意であること，参加の可否が成績評価には影響しないこと等を文書と口頭で説明し，協力への同意を得て実施した。

【結果】調べ学習に基づく模擬授業：意見・感想欄には，「自分でも救急の時に出来そうだと思いました(内科的領域)」(図1)，「発表を行うことで，色んな人の考えがわかり，いろんな見方が出来て良いと思った(教職一般)」(図2)，「私自身や身近な人がけがをしてしまったら，参考にしたいと思った(外科的領域)」，「自分自身でも学習しようという気持ちになりました(心理的領域)」等が見られた。これらの記述は，授業内容を自分に生かそうとする意欲や自分のことに近づけて授業内容を受け止めた様子を示すものと捉えられた。

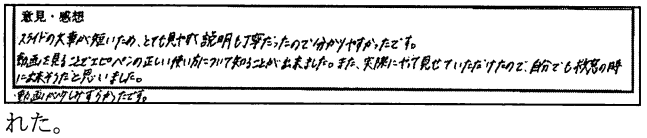

意見・感想
スライドの文章が短いため、とても見やすく説明も丁寧だったので分かりやすかったです。
動画を見ることでCPRの正しい使い方について知ることができました。また、実際にやって見ていたりしたので、自分でも救急の時に出来そうだと思いました。
勉強になりました。ありがとうございました。

図1　「内科的領域」の模擬授業に対する3年生による評価の一例（抜粋）

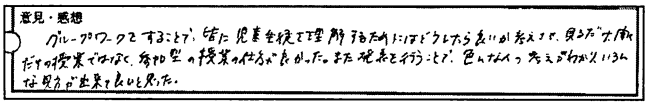

意見・感想
グループワークをすることで、互いに意見を交換して理解を深めるためにはどんどん良いが考えて、見方が広がるだけの授業ではなく、各知識の授業の仕方が良かった。また発表を行うことで、色んな人の考えがわかりいろんな見方が出来て良いと思った。

図2　「教職一般」の模擬授業に対する3年生による評価の一例（抜粋）

教職実践演習の総まとめ：レポートには，「事例検討をしていくなかで児童の情報を理解することの大切さや他教員と情報共有してみんなで考えることが必要であると学ぶことができた」(図3)，「養護教諭としての立場からどのように対応することが望ましいのか多くの意見を交わしたことも勉強になった」，「どのように児童と関わっていくのがよいか実際に周りの意見なども聞き勉強になることが多かった」等の記述が見られ，学生同士の協同の学び合いが各個人の学びに影響を与えている様子を示す記述が見られた。

またレポートには，「児童と向き合い，情報を収集し，児童一人に対してみんなで解決できるようにしたい」(図3)，「広い視野と確かな視点をもって，今後も継続して学んでいきたい」，「この4年間で学んできた事を学校現場で活かしたい」等，今後の展望に関する記述も見られた。

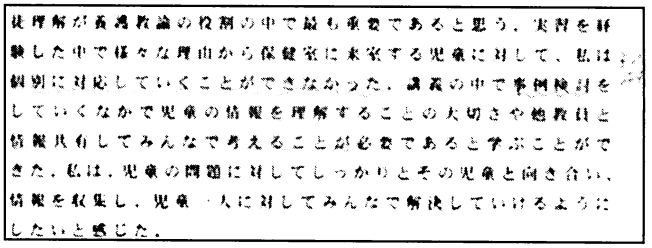

健康理解が養護教諭の役割の中で最も重要であると思う。実習を経験した中で様々な理由から保健室に来室する児童に対して、私は個別に対応していくことができなかった。講義の中で事例検討をしていくなかで児童の情報を理解することの大切さや他教員と情報共有してみんなで考えることが必要であると学ぶことができた。私は、児童の問題に対してしっかりとその児童と向き合い、情報を収集し、児童一人に対してみんなで解決していけるようにしたいと感じた。

図3　「目指す養護教諭像」レポートの一例（抜粋）

【考察】模擬授業の感想に，学習意欲の喚起や自分に近づけて内容を受け止めるような記述が見られたことから，3年生に対する感化があったと推察された。ただ，それが学生の協同の学び合いの影響か否かはさらに検討する必要があろう。

最終的なまとめのレポートからは，実践演習での学び合いが個々人の養護教諭への理解を深めることに繋がった様子を示す記述が見られ，協同の学び合いが学生の課題理解に結びついたと考えられた。また，今後の学習への展望を示す記述も認められ，実践演習での取組が学生の能動的学習への態度を刺激したことが示唆された。ただ，こうした記述がすべての学生から示されたわけではなかった。今回検討対象とした資料からは，実践演習中の能動的学習に関する具体的な記述が豊富に見られたとはいえず，自律的に学び続ける養護教諭の養成に関する内容を十分に捉えるまでには至らなかった。

今後，他単元の質的検討も進めるとともに，実践演習の目標達成や学生の能動的学習に寄与する授業構成への一層の工夫，教員の授業の展開力の伸長，そして学習プロセスやその成果の客観的把握のための手法の検討が課題と考えられた。

【引用文献】

黒岩初美・山本裕嗣 2018 「学び続ける養護教諭」の育成を目指した教職実践演習の取組－学生の能動的思考を活性化する学びの軌跡について－,桐生大学教職課程年報,1,79-92.

（かめおか　せいろう）

大学生のボランティア経験が大学生活ストレッサーに与える影響

○亀田 凌雅[1]・中地 展生[2]
([1]帝塚山大学大学院心理科学研究科・[2]帝塚山大学心理学部)

キーワード：ボランティア経験,ストレッサー,大学生

【目的】

近年,大学教育の過程において,課外活動の一種としてボランティア活動を推奨している場合がある。日本学生支援機構(2006)の調査によるとボランティア参加学生のうち65%が満足感を得ているという報告がなされている。松原・宮崎・三宅(2006)はメンタルヘルスの観点から「大学での充実感」が不登校傾向に繋がる主な要因として挙げている。このような要因はストレッサーであると考えられるだろう。他の大学生活におけるストレッサーとして,先行研究では「自己能力の低さ」「人から受ける不利益」なども挙げられている(高坂,2012)。このことからボランティア活動の参加によって学生生活の充実感などで変容が起こる可能性が考えられる。

本研究の目的は,既存の大学生活についてのストレッサー尺度を用いて,ボランティア経験の有無やボランティアの活動期間によってストレッサーへの影響に違いが生じるのかを検討することである。今回の研究では特に「自己能力の低さ」「人から受ける不利益」「充実感の乏しさ」に着目する。

【方法】

調査対象者　近畿圏の大学に通う大学生211名(男性104名,女性107名,学年別:2年生101名,3年生76名,4年生34名)であった。平均年齢は20.24歳(*SD*=1.18)であった。

質問紙の構成

(1)**フェイスシート**:属性として,性別,年齢について尋ねた。

(2)**大学生のストレッサーを測る項目**:大学生のストレッサーを測る尺度として,高坂(2012)の大学生用学校ストレッサー尺度と,菊島(2002)の大学生用ストレッサー尺度の2つの尺度を使用した。得点の算出は同じ項目について,体験頻度と嫌悪度(不快度)を尋ね,その素点を掛け合わせたものをその項目の得点として分析に用いた。なお,この両尺度の各因子得点について,高い場合は大きなストレッサーになっていると解釈することができるものである。

(3)**ボランティア経験について問う項目**:調査対象者のボランティア経験の有無を尋ね,経験のある者には継続期間を尋ね,活動期間の3か月以上の者のみをボランティア経験群(以下,経験群と表記する),そうでないものをボランティア未経験群(以下,未経験群と表記する)とした。

【結果】

各群の度数を算出した結果,経験群では37名(男性17名,女性20名),未経験群174名(男性87名,女性87名)であった。

「自己能力の低さ」得点では,経験群はM=35.84(SD=21.85),未経験群はM=28.51(SD=18.06)であり,対応のないt検定を行った結果,有意傾向が見られた(t (47.01) = 1.91, p <.10)。次に,「人から受ける不利益」得点では,経験群はM=15.89(SD=11.85),未経験群はM=11.65(SD=3.60)であり,対応のないt検定を行った結果,有意な差が見られた(t (209) = 2.34, p <.05)。最後に「充実感の乏しさ」得点では,経験群はM=4.49(SD=4.58),未経験群はM=7.27(SD=6.02)であり,対応のないt検定を行った。その結果,有意な差が見られた(t (209) = 2.65, p<.01)。信頼性を確認するためにCronbachのα係数を算出したところ,順にα=.895,α=.800,α=.746とそれぞれ十分な内的整合性が認められた。以上の結果を表1に示す。

表1　ボランティア経験群と未経験群の各因子の平均値の比較

	経験群 (n=37) *Mean* (*SD*)	未経験群 (n=174) *Mean* (*SD*)	t値
自己能力の低さ	35.84	28.51	1.91 †
α=.895	21.85	18.06	
人から受ける不利益	15.89	11.65	2.34 *
α=.800	11.85	9.59	
充実感の乏しさ	4.49	7.27	2.65 **
α=.746	4.58	6.02	

注) **p<.01, *p<.05, †p<.10

【考察】

経験群は「自己能力の低さ」「人から受ける不利益」でストレッサー得点が高く表出された。この2因子について,岩佐・山本(2008)のボランティア活動におけるストレッサーの研究では,「スキル不足によるストレッサー」「対象者から受けるストレッサー」が挙げられている。このことからも,ボランティア参加学生が,自己の能力やスキル,対象者との関係からストレスを感じていることが考えられる。一方で「充実感の乏しさ」では低い結果が示された。菊島(2002)では大学の授業に興味を持つことができず,何をやりたいかもわからない「曖昧な自己」の延長として生活を送ることがストレスとして現れるのではないかと述べられている。今回の結果は,ボランティア活動が単調な生活を改善する刺激として働くことで,充実感の向上に繋がり,日常の生活場面においてもこれらの要因によるストレスを感じることが少ないのだと考えられるだろう。このことから,大学生活においてボランティア活動を推奨することは一定の効果があるように思われるが,ボランティアに共に励む仲間や組織作りがより充実した体験として,大学生活に反映されていくのではないかと考えられる。

【引用文献】

岩佐 俊輔・山本 眞利子 (2008). ロールプレイを用いた構成的EGが対人援助ボランティア学生のストレス低減に及ぼす影響 久留米大学心理学研究, *7*, 87-93.

菊島 勝也 (2002). 大学生用ストレッサー尺度の作成 ――ストレス反応,ソーシャルサポートとの関係から―― 愛知教育大学研究報告 教育科学, *51*, 79-84.

高坂 茉里 (2012). 大学生の対人関係と学校ストレス ――1年生と3年生を対象とした調査研究―― 暁星論叢, *62*, 55-84.

松原 達哉・宮崎 圭子・三宅 拓郎 (2006). 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因 立正大学心理学研究所紀要, *4*, 1-12.

日本学生支援機構 (2006). 学生ボランティア活動に関する調査報告書 Retrieved from http://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/volunteer/__icsFiles/afieldfile/2015/10/09/houkoku_02.pdf(2018/6/4)

【謝辞】

本研究は,第2著者の指導の下に帝塚山大学心理学部に提出した2018年度卒業論文の一部を加筆修正したものです
(かめだ りょうが, なかじ のぶお)

アニメ教材と協同学習によるコンフリクト解決教育

DVD「インデ島へようこそ」で植民地問題を考える

○井上孝代[1]　杉田明宏[2]　いとうたけひこ[3]　高部優子[4]
([1]明治学院大学　[2]大東文化大学　[3]和光大学　[4]ビープロダクション)

キーワード：コンフリクト解決、協同学習、植民地主義

【目的】本研究の目的は以下の２点にある。
(1) 平和学習の方法としてアニメーション教材とジグソー法の結合の有効性を検討すること。(2) 平和学習の内容として植民地支配・被支配、さらにそれぞれの中の立場の多様性についての気づきが生まれることの意義を明らかにすること

【方法】　**研究協力者**　研究協力者は東京都内の私立大学の教育学専攻のゼミナール（教育学演習）を履修している学生14名。内訳は４年生７名、３年生７名であり、性別は女子３名、男子11名であった。ほとんどが小学校教諭免許・幼稚園免許・保育士資格の取得を目指している。

テーマは平和学習論であり、学年末に沖縄への現地スタディーツアーを実施する。このワークショップはそのための準備学習期間の初期に実施した。実施日時は2017年11月20日の３限授業中13時15分から15時までであった。**手続き**　当日のプログラムは大まかに、Ⅰプレ・ジグソー、Ⅱジグソー、Ⅲカウンターパート、Ⅳジグソー、Ⅴポストの５つのセッションから構成された。**分析**　NTTデータ数理システム社のテキストマイニングソフトである Text Mining Studio Ver.6.0.2 を用いて分析した。

【結果】(1)　授業前後の学生の「植民地」のイメージ

アニメ視聴前のQ1（「植民地」ということばで思い浮かぶのは、いつのどんな事例ですか？）への回答で「植民地」の例としてまず目立つのが、日本が近代において植民地化した朝鮮半島、満州国、台湾、東南アジアに関わる記述である。次いでオランダ・英国等のヨーロッパ諸国によって支配されたアフリカやアジア諸国である。北海道（アイヌ民族）と沖縄についての記述は見られなかった。

これに対して、アニメ視聴とジグソー法による討論終了後のQ7（インデ島と同様の植民地問題が起きている（いた）と考えられるのは、いつのどんな事例ですか？）への回答では、「植民地」としては韓国・朝鮮問題を含む東南アジアや東アジアの日本による植民地化の回答がやはり多かった。視聴前との比較で特徴的なことは、学習中に固有名詞を出さなかったにもかかわらず、「沖縄」についての言及が４人の回答に現れたことである。薩摩藩による支配、廃琉置県、沖縄語弾圧、米軍基地による土地の接収等が挙げられていた。

(2) アニメ視聴後に思い浮かんだことば（Q2）

一番多かった単語が「文化」（7回）であり次に「プランテーション」（4回）であった。また、「支配」「植民地」（3回）とともにインデ島の内容に関わる固有名詞が続いた。

(3) 視聴後、ジグソー学習を行った前後の共感と反発

アニメーション視聴直後、ジグゾー学習前の学生が共感するグループは、インデC（分離独立派）５人、インデA（リアリスト派）４人、インデB（油田開発反対派）２人で、計11人と、８割近くが先住民のインデ人に共感していた。また、反発を感じたグループは、コロナC（油田開発賛成派）が９人ともっとも多かった。

これに対して、ジグソー学習終了後は、共感するグループはインデC（分離独立派）が７人と最も多く、インデAとコロナBCが各２名、その他（「コロナ人」）が１人であった。また、終了後に反発を感じた対象は、コロナC（油田開発賛成派）が５人、コロナB（コロナ人分離独立派）が４人、コロナA（油田開発反対派）が２人、インデCが２人、その他（「インデ人」）が１名だった。

ジグソー学習以前と以後を比較すると、事前にインデCに共感していた５人のうち、４人は変化がなかったがコロナBに変化した人が１人いた。事前インデAだった４人は全員が変化し、事後にインデCに移行したのが２人、コロナBCが各１人であった。また反発については、コロナCに反発していた９人のうち、４人は変化がなかったが、３人がコロナCに変化し、コロナAとインデCに変化した人が各１名いた。

【考察】（1）アニメーション教材とジグソー法の有効性

本アニメーションの特徴は「ストーリーでは、先住民側・植民者側とひとくくりにせず、なるべく様々な立場を登場させ、しかし全体構造としての植民地支配の暴力性も描く」こととされている。すなわち、先住民「インデ人」対、支配者「コロナ人」という単純化を避け、それぞれの中に、ゴール（目標）を異にする三つずつの立場を設け、全体として六つのグループを設定して、ストーリーをより現実の問題に近づける工夫がなされている。そのため、各派の状況やゴールの違いを明確に理解することが学習を深める鍵となる。

アニメーションの役割の理解のためにエキスパート・セッションを６グループ、各2～3人で行い、ジグソー・セッションは14人全員で実施した。このやり方は、全体が少人数でありながら、エキスパートが６グループという今回の設定においては、有効に働いた様である。複数の教員により平和教育とグループワークの異分野の専門家の協同を行ったことにより意義のあるセッションとなった。

(2) 植民地問題の気づきが生まれることの意義

本授業時間中に「沖縄」という言葉を授業者は出さなかったので、「インデ島」の問題の理解を深めて行く中で、受講生自身が、ゼミで学習してきた琉球・沖縄の歴史や現在の基地問題との類似性に気づいたものと考えられる。このことから、今回の学習がゼミの沖縄学習プロセスの中で「沖縄社会の複雑なコンフリクトを解く手がかりとして機能する」可能性は見いだされたといえよう。今回のインデ島という教育内容およびジグソー法というアクティブラーニングの教育方法は、政府・文科省・学習指導要領などのもとでの教育によって植え込まれてきた日本という国土・国家の「常識」を揺さぶるものである。このような揺さぶり体験は、現状を肯定する否定するという個々人の態度の違いにかかわらず、すべての人間、とりわけ子どもたちにとって物事を深く考え、正しく行動するために必要な経験なのである。

【文献】杉田明宏・いとうたけひこ・高部優子・井上孝代 (2017) 平和学習におけるアニメーション教材と共同学習（ジグソー法）の結合」「インデ島へようこそ」を用いてマクロ・カウンセリング研究, **10**, 31-45.

(いのうえたかよ・すぎたあきひろ・伊藤武彦・たかべゆうこ)

ロール・プレイングを教育現場の中で生かすために

○時田　学
（日本大学　商学部）

キーワード：ロール・プレイング，道徳教育，効果的使用。

【はじめに】

「役割演技」や「ロールプレイング」は，一般的な教育研修の中で，研修技法としては比較的実施が簡便であり，営業などの分野では頻繁に実施されている技法であるとの指摘がなされている（菅谷・宮崎，2013）．この役割演技とは，一般的には「ロールプレイング」と同義で捉えられていることが示されている（デジタル大辞泉，2017）．また，一般的な教育研修の考え方として「ロールプレイング」は接遇などの基本的な部分で使用されている事実があり（菅谷・宮崎，2013），実施のハードルはそれほど高くない可能性が推察される．一方，道徳が教科化された教育現場の現状では，今まで比較的実施されることがなかった「役割演技」を積極的に評価し，実施を勧めている現状がある（文部科学省，2017），これらを踏まえ「役割演技」と「ロール・プレイング」に関連する問題点を整理・検討することは，教育現場に求められていることであると予測される．そこで，心理学的領域において，現在進められている心理劇・ロール・プレイングについての研究を基に，学習会で供覧され，使用された授業資料，当該学習会のヒアリング結果などを基に検討を進める．

【方法】

ヒアリングの対象とした学習会は，定期的に行ってるK学習会の中の事例を検討の対象とした（2016年1月～17年6月実施10回，対象延べ人数12名）．学習会の中で，中心的な話題として，比較的取り上げられた回数の多い観点を基に以下に検討を加えた．また，研究を進めるにあたり，本人と本人の実践した内容に対するプライバシーには十分配慮し，使用し他情報については，日本心理劇学会の倫理綱領，日本応用心理学会の発表基準に準拠した取り扱いを行った．

【結果と考察】

①集団としての関わりについて考える

「役割演技」が行われる場合は，集団と個人の関係について意識を向けることが，授業者の立場であっても，参加している児童生徒の立場（授業後感想）であっても体験される可能性が高いことが明らかになった（出現率100%）．また「役割演技」が行われる場合，参加者の児童生徒が，ある場面の演技を行う役割を，観客役割の参加者の前で行っている（演じている）時点では，演者役割の参加者は観客役割の集団と対面・対峙することになり，その状況の中で，前述のように演技を行う児童生徒は自ら考え，自発的に「役割演技」を行うことが重要になる．その時点で対象の児童生徒個人が「役割演技」が抵抗なく行えるように，その場を共有している参加者全員やその集団が「役割演技」を行う状況や場面（場所）について，それら環境の調整する必要が生ずることが必要となる．またその場合に行われる場面自体や，そこでの見方・感じ方が，そのままの現実（学級）でなく，「役割演技」の中の世界で行われていることについて，参加者全員が十分に理解した上で「役割演技」が実行されれば，自らの人間関係から良い意味で創造的に逸脱することを通じ，新たな視点や感じ方を体験することが可能になると考えられる．そのために大切なことは，演ずる者や観客側の状態を良く観察して十分環境調整することが必要である．現実の教室場面から「役割演技」をしている場面へと変化していくことについて，少しずつ丁寧に移行していくことが重要であろう．加えて「役割演技を」演ずる場所についても注意を払うことも必要になると考えられる，例えばテープなどを用いて場所を区切り，区切ったその中は教室ではあるが，自由などんな所にでも設定できる，所謂現実の教室でない（舞台），ということを理解した上で「役割演技」を行うことが参加者全体を危険な事態から守るために大切になると考えられる．しかし，実際には現実のまま何も手を加えられることなく「役割演技」がいきなり実施され，実施前後の配慮もなく繰り返し実行されてしまうこともあることが明らかになった（出現率32.2%）．このような，実際には必要な状態観察や調整が行われず，形として「役割演技」が行われてしまうことについては注意を払う必要がある問題であると考えられる．

②役割の固定化について考える

「役割演技」を行うことを通じて，参加した児童生徒は，それぞれ自らの役割を固定的に考えることなく，多様性を持った役割であると認識し，そのように考える切っ掛けとすることが可能であろう．この部分が，道徳教育の表現活動とされる指導方法（文部科学省，2017）の中で，劇化・動作化・疑似体験と「役割演技」の差異であると推察される．私たちは自らの振る舞いについては，多様性に富んでいると比較的考えがちであるが，実際には自らの振る舞いについて，その多くのパターンについて記憶し，その記憶を用いて自らの振る舞いを決定していくので，結果的に自らの役割は固定的になっていく可能性が指摘できる．しかし，振る舞いのパターンを記憶し，その行動パターンに基づいた振る舞いや反応であっても，厳密にはそれぞれの振る舞いや反応は一回毎にしか生起せず即興的である．しかしそのような厳密さは実際には記憶として残る可能性は低く，自らの役割を変えるのをためらい，同じ振る舞いのパターンを繰り返し，自らの考え方を固定的に捉えていくことが多い結果が示された．「役割演技」を行うことによって，これらの連鎖を意識的に考えることは，役割の固定化を防ぐ可能性を高めるであろう．なおこの点記述データの詳細な分析が求められる．

①・②共に，「役割演技」を既に回数を重ねて実行している者にとっては，自明のことであると考えられる．現在の急激な道徳教育を取り巻く環境変化を考えると，「役割演技」に加えてロール・プレイングを含めた幅広い関連分野からの情報提供が求められると考えられた．今回は，勉強会のメンバーの発言に基づいているが，厳密な定量的解析は行えなかった．今後その発言内容に関して更なる解析を行い，精緻な分析を行うことが今後求められる．

【参考・引用文献】

Corsini，R.J.（1966）Roleplaying in Psychotherapy A MANUAL. Aldine.N.Y.　（金子　賢（監訳）船田英世・猿山浩（訳）『心理療法に生かすロールプレイング・マニュアル』　金子書房
江橋照雄（1971）道徳指導シリーズ14　役割演技　明治図書
文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 特別の教科　道徳 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/11/02/1387017_12_2.pdf（2017,10,10閲覧）
松村明（編）（2017）デジタル大辞泉　小学館
外林大作（1950）『性格の診断　プロジェクティブテクニック』　牧書店
外林大作（1955）『改訂　性格の診断　プロジェクティブテクニック』　牧書店
菅谷新吾　宮崎聡子（2013）『何だ！そうやるのか　ロールプレイングマニュアル』　日刊自動車新聞社

本研究行うにあたり，日本大学商学部より研究助成を受けた．記して感謝する．

（ときた　がく）

叱っている子どもが反抗する時への対応

――教職経験者へのKH coderによる分析――

○佐　藤　大　輔
（福島学院大学大学院心理学研究科）

キーワード：叱る、反抗的、KH coder

【目的】子どもを教育する過程で、叱責が必要なことがある。その際、子どもが反抗してくる場合があるが、教職経験者は何からその状況を読み取り、どのように対処しようとするのであろうか。ここではKH coderを用いて、叱責した子どもが反抗した場合の、教職経験者がもつ対処行動のスキーマを探索することを目的とした。

【方法】＜被検者＞中学校の音楽教師を８年続け、養護学校で支援員として１年、小学校で５年の勤務経験がある女性A。

＜手続き＞「あなたが子どもを叱っている時、子どもが反抗してきたら、どんなことを感じますか。どんなことをしてしまいがちですか。そして、どのようなことをしたいと感じますか。また、子どもが「素直に聞いている」が、反抗的な態度をとっているのを、どのように見分けますか。そんな時にどのように対処しますか。」と伝えるとともに同内容の文章を提示して連想したこと聴き取り、重要度順に並べ、項目間の類似度を７段階で評価し、それをウォード法でクラスター分析し、それらの結果について連想する事を被験者に尋ね、聴き取った内容を文字に起こした。文字に起こした内容(質問者の発言は除く)をKh coderで分析し、被験者の発言の中の頻出語を表(figure.1)にし、共起ネットワーク(figure.2)を作成した。

【結果と考察】頻出語については［figure.1］、共起ネットワークについては［figure.2］のようになった。

［figure.1］で挙げられた回数の多いものを見ると、「自分」と同じくらい「子ども」「子」が多く挙げられ、「子ども」「子」をかなり意識していることが分かる。

［Figure.2］では抽出語の出現パターンが似通ったものを線で結び、共起関係を線で表したネットワークが描かれている。線で結ばれているか否かに意味があり、丸と丸の距離は関係がない。中心性に基づいて色分けされ、水色→白色→ピンクの順に中心性が高く、「態度」「聞く」「目」は中心性が高いと示されている。上記３つの中心性の高い語句を含む共起ネットワーク(a)とは違い、(b)には中心性の高い語句は無いが、(a)とは全く繋がっていない。ここから、(a)と(b)とは関係性の異なる別のグループであり、それぞれに違った意味があると読み取れる。中心性の高い語句を含む(a)は、含まれている語句の通り、その時に「目」の「前」で「起こる」状況を理解しようとしている状態であり、とっさに考えられたことであると考える。対して(b)は、「落ち着く」という語句が入っているように、落ち着いて冷静に対処し始めた時の反応であると考えられる。含まれる語句には「相手」や「子」のように相手のことを思慮しているかのような語句があり、「年齢」「考える」「力」「気持ち」等のように、落ち着いて相手を論理的に分析しようとしているかのような語句ばかりである。つまりは、(a)はとっさに反応した、自身がおかれている現状を理解するための《自分のための思考》であったのに対し、(b)は状況を理解した後の《相手を理解するための思考》であると考えられる。

【結論】子どもの反抗によって生じた自分の疑問を認め、落ち着こうと試み、相手の気持ちに寄り添う様子が読み取れる。別言すれば、反抗する現状を認め、「教育的に叱ることによって解決する」という行いがちな対応に疑義があり得ることを意識し、反抗の要因や心情を探ろうとしていると言える。

叱る際の、「教師が子どもの状況を判断するポイントや評価の適切さを確認するためのフィードバック情報の指標」として解釈できよう。他の有効な指標の探索も望まれる。

（さとうだいすけ）

抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回
思う	33	無い	3	エネルギー	1	行う	1	独りよがり	
自分	22	目	3	コントロール	1	行動	1	難しい	
子ども	21	落ち着く	3	タイプ	1	混乱	1	二つ	
感じ	18	意見	2	ポリ	1	事項	1	入る	
クラ	17	気持ち	2	ポリポリ	1	耳	1	納得	
スター	17	起こる	2	安易	1	取る	1	判断	
反抗	13	繋がる	2	異聞	1	終わる	1	付ける	
違う	7	言い分	2	違い	1	出発	1	分析	
動揺	7	向く	2	一緒	1	勝手	1	変わる	
態度	6	今日	2	一番	1	上	1	方法	
感じる	5	根本	2	音	1	場	1	本当は	
見る	5	視線	2	過程	1	状態	1	矛盾	
言う	5	似る	2	塊	1	深める	1	目線	
理性	5	出る	2	悔やむ	1	人間	1	予測	
考える	4	前	2	確認	1	誓う	1	落ち込む	
子	4	素直	2	感情	1	全く	1	理由	
初めて	4	想定	2	観察	1	相当	1	良い	
正しい	4	相手	2	関わり	1	存在	1	労	
聞く	4	大きい	2	関わる	1	多分	1	話	
グループ	3	注目	2	気	1	大いに	1		
解決	3	年齢	2	強い	1	大人	1		
最初	3	反省	2	興奮	1	短絡	1		
他	3	表情	2	驚く	1	注意	1		
知る	3	表面	2	禁止	1	聴く	1		
頭	3	敏感	2	欠点	1	痛い	1		
標語	3	力	2	嫌	1	的	1		
部分	3	いかが	1	言い聞かせ	1	踏みとどまる	1		
風	3	その他	1	言葉	1	同じ	1		
変化	3	やり方	1	硬い	1	特に	1		

figure.1 被検者A聴き取り時の頻出語

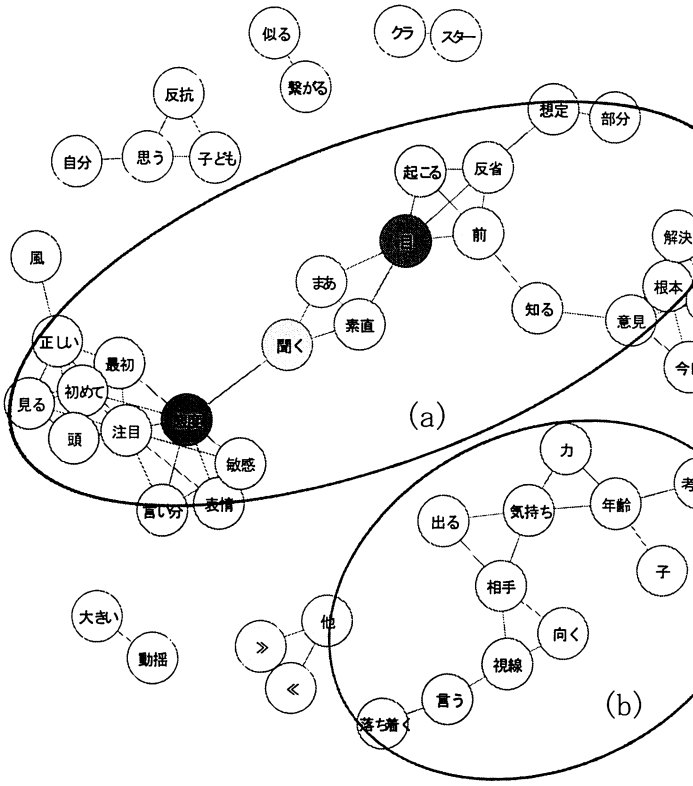


figure.2 被検者A聴き取り時の共起ネットワーク

日本人の逆フリン効果及びneurotoxicologicalな要因の可能性

○廣島克佳

キーワード：知能　水銀　心の理論課題

【目的】知能概念は「新しい環境に対する適応性(奥野, 1981)」として研究が続けられ，認知心理学や動物行動学等の進展及び情動・感情・動機づけの側面での個人差概念たるビッグファイブ理論の定説化も相まって，操作的には生活体の認知機能の多様な因子の総体と定義されていると言える。知能概念の研究は諸外国において継続している。フリン効果(Flynn,1987) は国や民族等の大規模な集団水準で知能水準が上昇する現象であるが，Trahan, et al.(2014)は国際比較レビューを行っている。他方日本においては，1960年代以降は知能の研究や調査は衰退している。知能の評価は，進学適性予測，職業適性予測及び能力開発において有益であり続けている。日本における知能関連の研究の不足を補うべく，知能に関連する諸現象を探索し，それらの相互の関連性及び全体構造を概括する。

【方法】日本人の知能水準変遷を直接評価した研究を探索しつつ，２つの研究領域を探索した。第１は，知能水準を反映する可能性のある発達心理学的現象のデータの国際比較やコホートによる推移の検討である。第２に，知能に悪影響を与える事が既知である諸要因の国際比較及びコホート毎の増減傾向の推移の検討である。本発表では，知能のコホート毎の推移と対比しやすいように，汚染の年代や推移が比較的明瞭な各種汚染物質を取り上げる。

【結果１：日本人の知能水準の変遷に関する諸研究】Lynn, et al. (1982) は1930年代後半から1970年生まれコホートの日本とアメリカ合衆国のWISC, WAISの得点推移を比較し，日本人は米国人よりもIQが高く，1940年代半ばから差が拡大したとした。佐野(1974)は，京都府の小学校4,5年生に1954,1972年に京大式NX9-15を適用し，全てのタスクで有意な上昇を見出した。川本(2015)は，1963, 1973, 1983年生まれの東京大学付属中高生に新制田中B式検査を実施したデータを解析し，「事物の関連性」に係るタスクにおいてコホート進行に伴う得点の低下及び加齢による得点上昇率の低下を見出した。郷間 (2003) は，1983及び2001年版K式発達検査標準データの各項目における月齢年齢別課題通過率を比較し，項目によって通過月齢が早くなったものと遅くなったものがあるが，月齢及び年齢が高くなる程，2001年データにおいて通過月齢年齢が全体的に遅くなっている事を見出した。

【結果２:知能を反映する可能性のある発達心理学的現象】Wellman, et al. (2001) は，心の理論課題の典型であるサリー・アン課題の通過月齢をレビューし，７か国の中でオーストリア及び日本が平均よりも通過月齢が遅く，日本が最も遅い事を示した。

坂上他(2016)は2004・2005年度及び2010・2011年度それぞれにおける日本人２歳児に対しての要請に対する従順/不従順行動を比較し，2010・2011年度では不従順行動の発現が遅れている事を見出し，他者と自己の意図の差異の明確化の発達が遅滞している可能性を指摘している。ただし，国別データの検討は行っていない。

【結果３:知能の発達に悪影響を与える化学物質】Grandjian, et al(2006)は，鉛，有機水銀，ヒ素，PCB，各種溶剤，各種殺虫剤，マンガン，フッ素，過塩素酸塩を列挙している。これらの他に，PBDE (Polybrominated diphenyl ether)は神経の成長に重要な甲状腺ホルモンの作用を阻害する事で知能に悪影響を与える事が知られている(Herbstman, et al.,2010, Zhang, et al.,2017)。自閉症は，知能の観点からは特定の知能因子，特に社会的知能や抽象的思考能力の困難と把握できるが，自閉症の要因の一つとして有機水銀被曝がある(藤原他, 2010, Mandy, et al., 2016)

Esteban-Vasallo, et al. (2012) は水銀，カドミウム及び鉛の胎盤中濃度のレビューを行い，日本人は体内水銀濃度のみが高く，世界平均の５～10倍であることを示している。

貴田(2010) は，世界の水銀総生産量が第二次世界大戦中及び1951-1989年頃の間にピークがあったとし，特に日本は1950-1970年代半ばの間をピークとして統計が残る1956年以降に27,400tを消費したとしている。特にこの期間，イネいもち病対策を嚆矢としてセレサン水銀剤(小川,1952) 等として水銀が年概ね200t散布された。他の有害物質について，日本人が特に高いとのデータは見いだせなかった。

【考察】アメリカ合衆国において1970年代後半以降，様々な全国学年毎テストにおいて一斉に得点が低下する現象が見られた(Waters,1981)。Sternglass, et al(1983)は1951年以降Nevadaで大規模に実施された核爆発実験から飛散した放射性ヨウ素による母体等の甲状腺ホルモン水準の低下が旧SAT(Scholastic Aptitude Test)の得点分布が約1σ下降した原因であるとしている。他方，Kane, et al.(2004)は旧SATの得点と各種知能検査課題を混合して因子分析し，SATの得点が全体の因子構造の一部となっていることを確認している。よって，Lynn, et al(1982)が主張する日本人のIQの上昇の過半はアメリカ人の低下による可能性があり，日本人におけるフリン効果の存在は疑わしい。

フリン効果に関する研究ではIQ等知能全体の水準を対象としたものが主体であるが，郷間(2003)，川本(2015)，坂上他(2016)の結果は，因子構造の一部において逆フリン効果を認めたものと考えられる。これらの知見において，各コホートの母親は日本において水銀汚染が激化した年代以降の誕生及び生育歴であると言え，水銀被曝による部分的な知能低下仮説と適合的である。

Wellman, et al. (2001) が示すところについては，日本人の集団主義的傾向での説明の試みやサリー・アン課題以外の心の理論課題における議論がなされたが，東山他 (2016) は日本人が他国民よりも集団主義的ではないことを示しており，本遅滞は知能発達の遅延を反映しているものと考えられる。

以上の事から，日本人においては幾つかの知能因子において逆フリン効果が有機水銀を主たる要因として生じている可能性がある。

【主要引用文献】※全リストを発表当日掲示予定。

Esteban-Vasallo, M.D., et al,2012, Mercury, Cadmium and Lead levels in human placenta: A systematic review, *Environmental Health Perspectives*,**120**(10):1369-1377

Grandjian, P.J.et al.,2006, Developmental neurotoxicity of industrial chemicals, *the Lancet.com*, DOI:10.1016/S0140-6736(06)69665-7

Lynn, R.,1982, IQ in Japan and the United States shows a growing disparity (Letters to Nature), *Nature* , **297**:222－223

（ひろしま　かつよし）

大村政男と血液型心理学

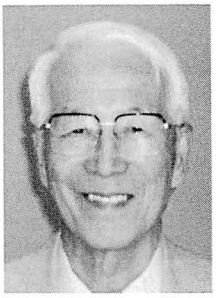
― 日本応用心理学会における活動を振り返って（４） ―

○藤田主一　（日本体育大学）
浮谷秀一　（東京富士大学）

キーワード：大村政男、血液型心理学、日本応用心理学会

【研究の背景と目的】

性格心理学者の大村政男が逝去したのは 2015 年 10 月 31 日であったから、今年で 4 年目の命日を迎える。大村は 1925 年東京新宿に生まれた。1948 年日本大学法文学部文学科心理学専攻を卒業（卒業論文は「人格の適応性に関する心理学的研究」、指導：渡辺徹）、大学院（旧制）に在籍する。法務技官として東京少年鑑別所勤務を経て日本大学へ戻り、教育・研究生活に入った。



大村政男（1925－2015）

もともと大村は、神経質 neuroticism や不安 anxiety を研究（学位論文は「顕現性不安の構造に関する研究」）していた学究肌の学者であり、その研究成果は日本応用心理学会をはじめ各種の学会での研究発表や論文公表へとつながった。

その後、大村はどちらかというと地道な神経質・不安研究から華々しい血液型心理学（血液型気質相関説または血液型性格学）の研究へと進んでいった。大村は「学者は自分の弱点を研究するものだ」とよく言っていた。彼は自身の弱点を昇華して神経質で不安な特性から脱却したように見えるが、大村の神経質で完璧性を求める性格が、「血液型と性格との関係」をとことん掘り起こすという行動に出たのであろう。

大村政男が志した血液型心理学の追究は、日本応用心理学会における大会発表に端を発している。彼の研究がわが国の社会を巻き込むようになったのは、ある意味で本学会が果たした役割の大きさを物語る。本研究は、大村が何を求めて血液型心理学の批判的研究に着手したのか、その先に見えたものは何かを振り返り、本学会における彼の足跡と研究活動を改めて問い直すことを目的にするものである。

【方法】

日本応用心理学会第 51 回大会（1984）～同学会第 81 回大会（2014）までの大会発表論文集、大会時の配布資料（補遺）、研究論文、著書、雑誌記事、新聞記事ならびに筆者が保持している資料やメモなどをもとに、大村政男と血液型心理学との関係をたどり、回顧展望する方法を採用した。

【結果】

（１）大村は、1989 年の第 56 回大会（福岡教育大学）のときに第 6 報を発表しているが、同時にはじめて「科学と偽科学の対決：血液型性格学の虚構性」と題する講演を行っている。司会は、高千穂商科大学（当時）の宮本昇教授であった。筆者も聴衆の 1 人となり、当日配布された冊子には、①体液心理学の歴史、②血液型性格学の誕生、③古川学説の先達たち、④古川があげた血液型性格特徴、⑤団体気質、⑥類似点を探る、⑦FBI 効果、という大きな 7 項目が記載されていた。

①にはガレヌスの四気質説が紹介され、大村は「日本史の人物でいえば、黒胆汁質（陰気な人）は明智光秀、粘液質（冷静な人）は徳川家康、胆汁質（短気な人）は織田信長、多血質（陽気な人）は豊臣秀吉ということであろうか」と述べている。②では、ABO 式血液型 4 型と気質（性格ともいえるか）との関連性の研究を回顧し、1916（大正 5）年 7 月の『医事新聞』に掲載された日本赤十字社長野病院医師の原来復・小林栄の「血液ノ類属的構造ニ就テ」、1925（大正 14）年 7 月に陸軍軍医の平野林・矢島登美太が学会で発表した「人血球凝集反応ニ就テ」、1927（昭和 2）年 4 月に陸軍軍医の中村慶蔵が学会で発表した「血液種族ト兵卒ノ個性ニ就テ」、そして 1927 年 8 月に古川竹二が日本心理学会機関誌『心理学研究』に発表した「血液型による気質の研究」を紹介している。また、古川が考案した「気質表（2 分割、4 分割）」を掲載し、④⑥では古川と能見正比古・鈴木芳正との類似点、すなわち血液型別の性格特徴は古川のコピーであることを指摘する。⑦の FBI 効果では、当時はまだ LABELING の「B」を標榜していたが、その後「B」は「BRAND」を指すようになった。大村の講演を拝聴した筆者は、研究者としての極めて真面目な語り口の中にも、ユーモアに富んだストーリーに圧倒されたことを覚えている。これも大村独特の A 型気質かもしれない（大村政男は A 型者）。

（２）第 6 報では「交通事故頻発者の血液型」が取り上げられた。ここでは能見が提示したデータを推定計算し、その数値の誤謬を指摘した。「もしも交通事故頻発者に血液型的特性があるならば、単独事故にどうしてそれが現れてこないのであろうか」と警鐘を鳴らす。大村の精力的な批判研究は 1990 年の第 57 回大会（茨城大学）の第 7 報以降も続く。第 7 報では能見の「気質特性表」を入れ替えて（例：A 型→O 型）提示し、大学生 430 名の認知的適合感をを調べた。その結果、たとえば O 型者 45 人のうち 30 人（66.7%）が O 型の特性だと思って A 型を選んだ。これがラベリング効果（後のブランド効果）である。今のバーナム効果であろう。1984 年の第 51 回大会（富士短期大学）の第 1 報から 1993 年の第 60 回大会（鹿児島大学）の第 10 報までは大村の単独発表であった。1994 年の第 61 回大会（城西大学）の第 11 報以降、2004 年の第 71 回大会（日本大学商学部）の第 21 報までは浮谷秀一との連名発表、2005 年の第 72 回大会（福島学院大学）の第 22 報から 2014 年の第 81 回大会（中京大学）の第 31 報までは藤田主一が加わり 3 名の連名発表となった。

（３）1990 年 10 月、大村は構想を重ね、満を持していたかように最初の著書『血液型と性格』（福村出版）を公刊する。1998 年 4 月に『新訂 血液型と性格』（同）、2012 年 9 月には『新編 血液型と性格』（同）を上梓する。この三部作は、大村の緻密な資料収集と軽妙なタッチで執筆された専門書である。三作目の「あとがき」の中で、大村は「この『新編 血液型と性格』が多数の人びとの愛読書になり、研究者たちの問題の書となることを祈念している」と綴っている。なお、「刊行によせて」を浮谷、「解説」を藤田が担当している。

【考察】

大村政男が人生の 3 分の 2 を過ぎるころから「血液型心理学」の魅力に取り憑かれたのには、いったいどのような意味があったのだろうか。ある人びとは「大村政男は血液型の信者ではないか」と揶揄しているが、大村自身も「そうかもしれない。ただ、この関係に大変魅力があることは間違いない」と漏らしている。大村がまだ果たし得なかった研究者としての魂を、我われ後塵を拝する心理学者は忘れてはならない。

（ふじた しゅいち・うきや しゅういち）

助産師・保健師がとらえる妊婦・褥婦の心理的特徴

○河野千佳[1)]　和田佳子[2)]　櫻井薫[3)]　横田正夫[1)]
([1)]日本大学文理学部　[2)]聖徳大学看護学部　[3)]防衛医科大学校医学教育部)
キーワード：母性心理，妊婦・褥婦，助産師・保健師

【目的】妊娠・出産は母子関係が始まる重要な時期である。Wada et al.（2009）は助産師・保健師に対する調査から，周産期の母親たちの中にうつ病など明らかな心理的問題があるとは言えないものの，このまま「支援の必要なし」としてよいのかが“気になる”グレーゾーンの母親が増えている，と報告している。現在の妊婦・褥婦の心理的特徴を明らかにするため，河野ら（2014）は，25年前の妊婦・褥婦と現在の妊婦・褥婦の不安やマタニティ・ブルーズ傾向等を比較した。その結果，現在の妊婦・褥婦のほうが妊娠中の不安は高く，出産後には自分は頑張ったという自己評価が高いものの情緒の不安定さを示していたことを見出した。さらに，現在の褥婦は，分娩体験を我が子への想いや母になるための頑張りととらえる一方で，我が子であるという実感のなさや喪失感を報告し，頑張りと実感のなさという両価的な評価をしていた。また母子画研究からは安定感の無い母子画と褥婦の情緒の不安定さとの関連がみられた(Kohno，2016)。これら妊婦・褥婦の両価的な自己評価は，助産婦・保健師が気になると評する母親たちの特徴に関連していると考えられる。

そこでこの妊娠・産褥期女性の両価的な認知や感情といった心理状態の要因を明らかにし，そこから妊娠・出産を巡る心理的支援とケアへとつなげていくため，周産期にかかわる助産師および保健師がとらえている現在の妊産褥婦の様子について半構造化面接を実施し，妊産褥婦の心理的特徴を明らかにすることを目的とする。

【方法】周産期医療現場や健診，家庭訪問事業による指導現場等で妊婦・褥婦にかかわっているあるいはかかわった経験を持つ助産師ならび保健師に，研究の趣旨と目的，方法および倫理的配慮についての説明を行い，協力の依頼し同意書にて同意を得た。①助産師・保健師としての臨床歴と仕事内容②周産期現場で働き始めたころの周産期臨床と現在とで変わったと感じること，同じだと感じること③現在の周産期医療現場で妊産褥婦の心理について気になることについて，45分～90分程度，１回に１名ないし２名を対象とした半構造化面接を実施した。その内容は同意を得たうえでICレコーダーに録音した。なお，面接の実施期間は2018年２月～2019年６月であった。

分析方法は，録音データから逐語録を作成し，研究者間で繰り返し読み，妊婦・褥婦の心理的特徴についての文脈に着目し，最小単位の意味内容を抽出した。抽出された意味内容を要約してコード化し，意味内容の類似性に基づいて集約し，分類してカテゴリーを生成した。カテゴリー化に際し，研究者間で一致が見られるまで検討，討議を行い，信頼性を確保した。

なお，研究者所属機関において研究倫理委員会の承認を受けた（聖大総第466，日本大学文理学部30-10)。

【結果】協力者は，４年～30年以上の周産期医療の臨床経験や母子保健指導経験を持つ助産師６名（20代後半～60代）と，10年から30年以上の母子保健指導の現場経験を持つ保健師５名（30代～60代）の計11名であった。

助産師，保健師それぞれの面接の内容を分析した結果，妊婦について，助産師が語った妊婦の心理的特徴としては【児よりも自分という自己中心性】【依存性の高さ】【情緒の不安定さ】の３カテゴリーが生成された。一方，保健師が語った妊婦の心理的特徴としては【受容しきれていない妊娠】【心理社会的未熟さにより親になる困難さ】【想像していた妊婦像と違う自分】【情緒の不安定さ】の４カテゴリーが生成された。

褥婦について，助産師が語った褥婦の心理的特徴としては【背景の多様さ】【児より自分という自己中心性】【産後の生活に不適応】【情報を処理しきれず助長される不安】【要支援にもかかわらず無自覚】【結果が大事な育児】【些細なことで不安定になる育児】【現実の育児に対応しきれずパニック】【理想像とのギャップのある育児】【産後の生活に対応しきれずパニック】の10カテゴリーが生成された。一方，保健師が語った褥婦の心理的特徴としては【背景の多様化】【相談機関への抵抗感】【保健師との距離の取り方の不安定さ】【育児経験や育児能力の不足】【産後の生活を思い通りにしようとする固着】【緩和されない次々に出現する不安】【情報を処理しきれずに助長される不安】【インターネット情報への依存】【対応できない予想外の育児】【現実の育児に対応しきれずパニック】の10カテゴリーが生成された。

【考察】助産師・保健師からみた妊婦については，心理面の不安定さ，自己中心性，未成熟さ，依存性の高さなどをとらえており，両者に共通しているカテゴリーは情緒の不安定さであった。一方，褥婦については助産師・保健師ともに背景の多様化をあげており，さらに情報を求めてインターネット上にアクセスするが，その情報量の多さに情報を処理しきれずに，かえって不安を助長させている褥婦の様子が浮かび上がってきた。また援助が必要なのに自覚がないことや相談行動がとれない，産後の新たな生活に対応できず，それまでの生活に固着し，育児が思い通りにならない状況に対応しきれずに褥婦自身が自分ではコントロールできない一種のパニック状態にあると，助産師，保健師ともにとらえていた。

これらは助産師・保健師が，日ごろの業務で対応の困難さを感じている妊婦・褥婦の心理的特徴について，面接の中で語られたものと考えられる。そのため，今後は妊婦・褥婦を対象にこれらの点についてさらに検討していきたい。また，妊婦・褥婦の支援という観点から専門家への相談につなげていくために，どう妊婦・褥婦にアプローチしていくかについても検討する必要があろう。

付記：本研究は科研費（17K04445）の助成を受けたものである。

【引用文献】

Wada, K.,Miyamoto, K.& Kumakura, M. (2009). Promoting MW and PHN Collaboration in MCH Care, The 1st Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education, 23.

河野千佳・和田佳子・櫻井薫・横田正夫,(2014). 妊娠・産褥早期の心理的特徴 日本応用心理学会第81回大会.

（こうのちか・わだけいこ・さくらいかおる・よこたまさお）

大学生におけるギャンブル依存傾向

：プロセス依存ならびにADHD傾向の関連性について

大久保純一郎[1]
（帝塚山大学心理学部）

キーワード：ギャンブル依存，ADHD傾向，　プロセス依存

【目的】

近年，依存症への関心が高まっている。ギャンブル依存症については社会的な関心は高いものの，政策的医療的な対応はほぼ手つかずであり，ギャンブル問題への対策は喫緊の課題となっている（松崎，2019）。日本におけるギャンブル依存症の生涯有病率は 3.6%と推定されている（樋口・松下，2017）。このような有病率の高さと，社会的な影響力の強さから，ギャンブル依存症等対策基本法（2018 年）などによりその対策計画が進められ，支援体制が整備されつつある。しかしながら，問題が起こってからの支援より，予防が重要であると考えられる。病的なギャンブル行動が生起するためのには，下地（ギャンブル行動への嗜好）は，青年期に形成されると考えられる。そこで，大学生のギャンブル行動や依存傾向について研究することは，大学生のメンタルヘルスの維持に資するのみならず，ギャンブル依存の予防にも有益であると考えられる。

他方，発達障害，中でも注意欠如多動症（ADHD）の人は，依存症への親和性が高く，病的賭博とも密接な関係がある事が証明されている（星野，2004）。ADHD の有病率も極めて高く，ギャンブル依存の予防において，ADHD 傾向の検討は重要な知見を与えてくれるといえる。

そこで，本研究では，大学生のギャンブル行動を調べるとともに，ADHD 傾向との関連性についても検討する。

【方法】

調査対象者　近畿圏の大学に所属する 2-4 年次の学生 165 名（男子 82 名，女子 83 名）を対象とした。

調査票　フェイスシートと 3 種の質問紙から構成された。

1）フェイスシート　調査の概要，倫理的な事項の説明が書かれ，対象者の性別の回答を求めた。

2）ギャンブル等に関する質問　ギャンブル経験の有無，そのきっかけ（自由記述），経験したギャンブルの種別，ギャンブルを継続的にしている場合はその継続理由（自由筆記），さらに喫煙の有無と飲酒の有無についても回答を求めた。

3）プロセス依存の評価　藤井（2016）が作成したプロセス依存尺度（30 項目）を用いた。同尺度は，ギャンブル依存の他，パソコン依存，ゲーム依存，携帯依存，買い物依存の下位尺度から構成された（5 項目から構成された）。

4）AD/HD 傾向の評価：ADHD 傾向を調べるために，Adult ADHD Self- Report Scale V1.1 (ASRS-V1.1：Kessler et al., 2005)の日本語版のパート A6 項目(5 件法)を用いた。

手続き　大学の授業時間内に教室で質問紙を配布し，教示等を行い集団法で質問紙調査を実施した。

【結果】

ギャンブル行動について　対象者 165 名中，ギャンブル経験のあるものは 40 名（全対象者中 24%）であった。その中でギャンブルを行ったきっかけは Table 1 のとおりであった。多くの学生が，周囲からの誘いによってギャンブルを開始していると言える。実際におこなったギャンブルの種類は，Table 2 のとおりであった。その多くがパチンコやスロットであることはが予想できたが，競馬をおこなっている学生がパチンコのそれに匹敵する数であることは特筆すべきかもしれない。また，喫煙経験のあるものは 18 名（11%），飲酒経験のあるものは 108 名（74%）であった。

Table 1
ギャンブルを行ったきっかけ(自由記述のまとめ)

きっかけ	人数	経験者中%	全学生中%
友人や周囲に誘われて	28	70	16
興味があったから	8	20	4
その他	4	10	2
計	40	—	24

Table 2
おこなったギャンブルの種類別経験数

ギャンブルの種類	人数	経験者中%	全学生中%
パチンコ	19	47	11
スロット	21	52	12
競輪	3	7	1
競艇	3	7	1
競馬	16	40	9
その他	3	7	1
総数	40	—	24

プロセス依存傾向とADHD傾向の相関　Table 3 にプロセス依存傾向と ADHD 傾向の相関係数を示した。

Table 3
プロセス依存尺度の下位尺度とADHD傾向尺度の相関係数

	ギャンブル依存	パソコン依存	ゲーム依存	携帯依存	買い物依存	ADHD傾向
ギャンブル依存	1					
パソコン依存	.210**	1				
ゲーム依存	.162*	.212**	1			
携帯依存	.044	.249**	.071	1		
買い物依存	.167*	.279**	.195*	.324**	1	
ADHD傾向	.084	.302**	.145*	.183*	.263**	1

*, $p<.05$; **, $p<.01$

【考察】

ギャンブル経験を有する学生は，40 名であった。この割合が多いのか少ないのかについて判断することは難しいが，今回の調査内容では，得られた知見には限界がある。ただし，ギャンブル行動の予防には友人関係を介した介入が効果的なのではないかと考えられた。

ADHD 傾向とプロセス依存傾向の相関分析では，全ての依存傾向が ADHD 傾向と有意な相関を示した。この知見は従来の研究に一致するものである。

【引用文献】

藤井 義久(2016).プロセス依存尺度(PDS)の開発と信頼性妥当性の検討　岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，*15*, 215-224.

星野 仁彦(2004). 知って良かったアダルト ADHD ヴォイス

松崎 尊信（2019）.ギャンブル障害の診断・疫学・治療　こころの科学，*205*, 44-48.

[1]本研究は，土居昂平，仲川昌宏両氏が，帝塚山大学 2018 年度卒業論文として提出した研究の一部を修正したものです。発表を許可していただきましたお二人に感謝の意を表します。

（おおくぼ　じゅんいちろう）

専門病院入職初期の職員に対する不安緩和と関係性構築を目的としたグループワークの効果

○上野まどか[1]　いとうたけひこ[2]
([1]明治学院大学心理学部付属研究所　[2]和光大学現代人間学部心理教育学科)

キーワード：グループワーク　メンタルヘルス　病院職員

【目的】　医療従事者のメンタルヘルスの研究によると，病院で勤務する職員の過重負荷および精神的健康の深刻さがうかがえる。病院職員のメンタルヘルス維持・向上のために組織的な支援が行われることが最重要課題であるが，メンタルヘルス体制がとられていない施設は52.2%であったことが報告され(黒木, 2012)，支援の不十分さが示されている。特に，新しい環境・職場に入った時点における職員のストレス反応は高く，入職初期にストレス緩和に向けたアプローチが重要である。本研究では，県立の専門病院に入職してきた職員を対象として，不安感の緩和と関係性構築のサポートを目的としたグループワークを実施し，その効果を分析する。

【方法】　**参加者**　A病院で新採用・中途採用された職員のうち，入職時オリエンテーション期間に実施されたグループワークおよび事後事前テストを受け，調査研究への協力に同意した者31名を対象とした。平均年齢は27.7 (SD=9.9) 歳であった (性別：女性28名・男性3名，職種：看護師24名，放射線技師2名，医師1名，臨床検査技師1名，臨床工学技士1名，無記入2名)。　**測度**　(1) 日本語版POMS短縮版 (以下, POMS)　グループワーク前後両方に測定した。(2) グループワークに対する主観的評価の調査票 (中村ら, 2011)「類似した悩みなどを抱えていることがわかった」「メンバーと悩みや苦痛を共有できた」などを含む12項目から構成され，Visual analog scaleを用いた。　(3) グループワークの感想　(4) デモグラフィック要因　**手続き**　グループワークの前に(1)を，後に(1)(2)(3)(4)を含む質問紙を実施した。本研究では量的結果を発表する。**グループワークの内容**　x-6年4月上旬の入職時オリエンテーション期間に行われ，メンタルヘルス研修の位置づけで実施した。所要時間は120分である。ファシリテーターは，院内にある職員対象のカウンセリングルームのカウンセラー(臨床心理士)が担当した。柳原(2012a, 2012b) を参考に，体を動かす動的アプローチから開始し，侵襲性が低く関係性構築に役立つワーク，そして不安や心配，対処法を語り合う言語的ワークに移行するという漸進的な形をとった。

【結果】群分け：気分の度合いを表す標準化得点 (T得点) を基に，協力者を3群に分けた。POMSの6尺度のうち1尺度でも受診考慮値がある人は受診考慮群，受診考慮値はないが1尺度でも要注意値があれば要注意群，全ての尺度得点が健全値である場合は健全群とした。本研究では，受診考慮群が事前は4名，事後は0名と少なかったため，要注意群と受診考慮群と合わせて「要注意群」とまとめた。

グループワークの効果の評価：POMSの欠損値がなかった29名を検定の対象とした。29名の事前事後のTDMをTableに示した。悪気分総合得点を表すTMD (Total Mood Disturbance) はPOMSの6尺度のうち，5尺度 (「緊張」，「抑うつ」「怒り」，「疲労」，「混乱」) を合計して「活気」を引いた得点である。28名が事後に気分の好転が見られた。1名のみ12点から13点に上がっていた (Figure 1)。事前事後の変化の効果量 (Cohen's *d*) を算出したところ，健全群は-0.16~0.68だった。要注意群は-0.73~2.01と非常に変化量が大きかった。

参加者間であるPOMS得点高低群 (健全・要注意群) × 事前事後の得点変化の関連について調べるため2元配置の分散分析を行った。結果，事前事後の全般的な変化を表す主効果は，「TMD」と6尺度共に有意であり，気分の改善を示した (「TMD」: $F(1, 27) = 159.9$ $p<.001$，「緊張」$F(1, 28) = 177.6$ $p<.001$，「抑うつ」$F(1, 27) = 120.4$ $p<.001$，「怒り」$F(1, 28) = 23.3$ $p<.001$，「疲労」$F(1, 27) = 90.1$ $p<.001$，「混乱」$F(1, 28) = 36.1$ $p<.001$，「活気」$F(1, 28) = 4.6$ $p<.05$)。2群の事前事後変化量の大小をあらわす交互作用は，「怒り」と「活気」を除く尺度で有意であった。「TMD」($F(1, 27) = 40.5$ $p<.001$)，「緊張」($F(1, 28) = 43.9$　$p<.001$)，「抑うつ」($F(1, 27) = 46.0$　$p<.001$)，「疲労」($F(1, 27) = 19.2$)　$p<.001$，「混乱」$F(1, 28) = 24.0$　$p<.01$ において有意差がみられ，いずれも要注意群が健全群よりもより多く気分が改善した。

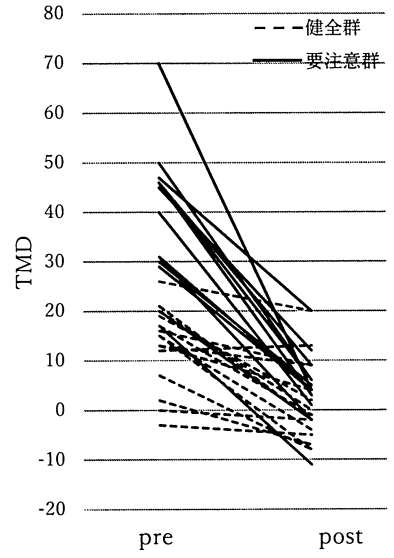


Figure 1　参加者の悪気分総合得点 (TMD) の変化

グループワークに対する主観的評価の調査票において，参加者が体験していたことは，高かった順に「類似した悩みなどを抱えていることがわかった」「メンバーと悩みや苦痛を共有できた」「メンバーとの仲間意識を感じることができた」などであることが示された。

【考察】「TMD」と全ての尺度において本介入の効果が示された。「TMD」，「緊張」，「抑うつ」，「疲労」，「混乱」において，要注意群が健全群の数値に追い付く形で好転していた。「怒り」と「活気」においては，事前テスト時点から「怒り」が低い，もしくは「活気」が保たれていた状態であったため，全体的な変化量が少なかった。効果量の数値からも，グループワークの効果が全般的に高く，特に要注意群にとって影響力が大きく有益なことが示された。事後テストによれば，参加者は，類似性，仲間との共有，仲間意識などを体験していた。

安心感を持てる場作りから始まり，言語的なワークに移行するまで漸進的な形をとったため，精神的健康度が低い人にも侵襲的にならないワークとなったと考えられる。この種の介入は病院職員のメンタルヘルスの向上，ひいては患者へのケアの質の向上に有益であると考えられる。

【引用文献】

中村和代・井上範江・分島るり子 (2011). 新人看護師の精神的支援策としてのグループカウンセリングの効果　看護展望, **36**, 82-87.

(うえの まどか・伊藤 武彦)

否定的・肯定的育児感情と養育行動の関連

○岡本大輔[1]　大澤香織[2]　礒部美也子[3]（非会員）
([1]甲南大学大学院人文科学研究科　[2]甲南大学文学部　[3]奈良大学社会学部）
キーワード：育児感情，養育行動，多項ロジスティック回帰分析

【目 的】

これまで，育児への不安，ストレスを含む，育児への否定的感情と子どもへの関わり方との関連が明らかにされてきた。（中谷・中谷，2006；岩立・倉田，1995）。一方で，母親が育児に抱く肯定的感情と，子どもへの関わり方との関連については十分に検討されていない。母親が育児に対して抱く複雑な感情と子どもへの関わり方との関連をより理解するためにも，肯定的感情も含めて検討する必要があると考えられる。そこで本研究では，育児に対して抱く否定的・肯定的感情と養育行動との関連を検討することを目的とする。

【方 法】

調査対象者　1歳から3歳の子どもをもつ母親114名（M＝33.86歳，*SD*＝3.96）であった。

手続き　2015年10月~2016年3月に，奈良県で実施された乳幼児健康診査の場で対象者に質問紙を配布し，その場で回答を得て回収した。質問紙の配布の際には，研究目的や回収したデータの処理に関する説明を行い，研究協力に同意を得たうえで回答を得た。

養育態度尺度　養育行動を測定するため，中道・中澤（2003）の親の養育態度尺度を，対象者に合うように項目を修正して使用した。この尺度は，「子どもの意図・欲求に気づき，愛情のある言動や身体的表現を用いて，子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」である「応答性」，「子どもの意志とは関係なく，母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し，それを強制する行動」である「統制」の2因子，計14項目で構成されており，各項目4件法によって評定された。

育児感情尺度　荒牧（2008）の育児感情尺度を使用した。「育児への束縛による負担感」，「子どもの態度・行為への負担感」，「育て方への不安感」，「育ちへの不安感」，「肯定感」の5因子，計21項目を使用し，各項目4件法によって評定された。

【結 果】

養育行動と育児感情との相関　親の養育態度尺度と育児感情尺度の各下位尺度間において，中程度から強い正の相関（r＝.49~.89）が認められた。育児感情である「子どもの態度・行為への負担感」は，養育態度の「応答性」と弱い負の相関（r＝.32）が，「統制」とは弱い正の相関（r＝.31）が認められた。育児感情の「育ちへの不安感」は，養育態度の「応答性」と弱い負の相関（r＝-.21）が認められた。また，「肯定感」と「応答性」の間には弱い正の相関（r＝.28）が認められた。

育児感情と養育行動クラスターの関連　養育態度尺度の得点に基づき，Word法によるクラスター分析を行った。クラスター数の適切さ，各クラスターに含まれる対象者数から養育行動クラスターは3群に分類された。その後，各群の特徴を明らかにするため，養育行動クラスターを独立変数，養育態度を従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果，「応答性」はF (2, 99) = 61.54 (p < .01)，「統制」はF (2, 99) =91.65 (p < .01）だった。Tukey法による多重比較の結果，第1群は応答性が高く，統制が最も低い群であることから，「許容的態度」と命名した。第2群は応答性，統制ともに高いことから，「権威的態度」と命名した。第3群は応答性が低く，統制が中程度に高いことから「権威主義的態度」と命名した。

次に，養育行動クラスターを独立変数，育児感情を従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果，「子どもの態度・行為への負担感」に養育行動クラスター間で有意差が認められた（F (2, 99) ＝11.11，p < .01)。Tukey法による多重比較の結果，「許容的態度」に比べ，「権威的態度」，「権威主義的態度」の得点が高かった。

続けて，育児感情を説明変数，養育行動クラスターを従属変数とした多項ロジスティック回帰分析を行った。その結果，権威的態度は許容的態度に比べ，「子どもの態度・行為への負担感」を強く感じることが明らかとなった。また，権威主義的態度は許容的態度に比べ，「子どもの態度・行為への負担感」を強く感じ，「肯定感」が低いことが明らかとなった（Table1）。

Table1　養育行動クラスターと育児感情の多項ロジスティック回帰分析結果

説明変数	*B*	*EXP (B)*
権威的態度 (n=20)		
子どもの態度・行為への負担感	.49**	1.63
育児への束縛による負担感	-.28	.76
育ちへの不安感	-.10	.90
育て方への不安感	-.03	.97
肯定感	.03	1.03
権威主義的態度 (n=39)		
子どもの態度・行為への負担感	.86**	
育児への束縛による負担感	-.10	
育ちへの不安感	-.07	.84
育て方への不安感	-.34	3.05
肯定感	-.30*	.56
-2対数尤度	158.44	
Cox and Snell R^2	.29	
Nagelkerke R^2	.34	
McFadden R^2	.17	
n	102	

参照カテゴリ：許容的態度（n=43）**p < .01, *p < .05

【考 察】

本研究の結果，「肯定感」と「応答性」には弱い正の相関が認められ，「肯定感」を強く感じる母親は，子どもの意図を満たすような関わりかけが増加すると考えられる。また，「子どもの態度・行為への負担感」を強く感じる母親は，「肯定感」が低下し，母親の子どもを「統制」するような関わり方が増加することが示唆された。以上を総合すると，母親は子どもの態度・行為に対して負担感を強く感じると，育児に対する肯定的感情が低下し，それに伴って子どもへの応答性が低下する一方で，母親の子どもに対する統制的な関わりかけが増加すると考えられる。

【引用文献】

荒牧美佐子 2008　幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化　家庭教育研究所，**30**，139–149.
岩立京子・倉田八枝 1995　育児ストレスが育児行動に及ぼす影響　日本教育心理学会総会発表論文集，**37**，390.
中道圭人・中澤 潤 2003　父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連　千葉大学教育学部紀要，**51**，173–179.
中谷奈美子・中谷素之 2006　母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響　発達心理学研究，**17**，148–158.

（おかもとだいすけ・おおさわかおり・いそべみやこ）

患者さんの主体性を引き出すための理学療法士のイメージ

～経験３年目の理学療法士を対象として～

○宍戸唯人[1)]　　佐藤弘一郎[1)]　　内藤哲雄[2)]
([1)]南東北福島病院)([2)]明治学院大学)

キーワード：患者の主体性、患者の動機づけ、暗黙のイメージ

【目的】理学療法では患者をチーム医療の一員としリハビリを進めることが重要視されている。患者が治療目標を共有し、主体的・自発的にリハビリテーションに参加することが動機づけを高めることになるからである。それでは、現職の理学療法士は患者の主体的な参加を高めるためのものとして、どのような暗黙裡の態度や治療介入行動のイメージを懐いているかを明らかにし、それに基づいて改善案を考察することを目的とする。

【方法】＜被検者＞理学療法士の24歳男性。**＜手続き＞**「理学療法士としての治療に際して、患者さんに主体的に関わってもらうためにはどのような視点や配慮、コミュニケーションが必要だと感じていますか？」と教示し、連想反応を得た。ついで連想反応の項目を重要な順に並べかえさせた。次に各項目の直感的なイメージの類似度を７段階で評定させた。次いでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージやクラスター間の関係について聴取した後、項目単独の+-イメージを質問した。

【結果】結果は、Fig.1のようになった。単独イメージは+が17項目、-が０項目、感情が喚起されない０が３項目であり、全体に+イメージが強いことを示している。

＜被検者の解釈：抜粋＞

クラスター1は、「リハビリ計画を段階的に説明」～「リハビリ以外の時間は何をするといいか」の13項目：堅いイメージ。自分自身もまだリハビリについて習熟・理解できていないための不安かな。患者に段階的に説明すること、長期・短期目標を説明することは、計画通りに行かなかった場合、自分に責任があるのではないかと感じるからかな。患者に分かりやすく説明できているか、患者が理解できているかわからない。仕事には慣れてきているがワンパターンの作業になってしまわないか不安。自分が考えたリハビリテーション計画で患者がよくなってほしい。仕事に疲弊していると、話をするだけでうんざりすることもあるしやる気が出ないときもある。その通りにできればいいがうまくいかないときはどうしようかと不安になりそう。

クラスター2は、「成果のアセスメントをしてほめる」～「説明を具体的に行う」の７項目：患者に寄り添っている感じはあるが相手の意見を聞いている様子ではなく、理学療法士の主観で行動しているような気がする。患者一人一人にあったフィードバックが行えているかわからない。患者に伝わりやすい方法で説明や理解させようと試みている。

＜クラスター1と2の比較＞どちらも患者のことを考えている感じであるが全部が全部ではない。クラスター2は患者に寄り添っているので一見すると問題ないような気もするが、理学療法士が内容を勝手に決めて押し付けていると感じられる。理学療法士の治療や介入方法に誤りがないことを、治療成果によって確認しようとしている。今見ていてですが、患者自身が主体的にリハビリを行うような方法や自主トレーニングを具体的に誘導し、それらの患者さん自身の実施した主体的行動を積極的に評価し、動機づけを高めていくことが必要だと感じ始めてきました。

【考察】クラスター1は、理学療法士のリハビリテーションの押し付けや、患者の意見を取り入れないリハビリテーションを行おうとしようとすることが読み取れる。また一見細かく患者に説明しているようではあるが、患者が知りたい情報や知らなくても良い情報が混在している。クラスター2は、理学療法士の未熟さにより、「自身の行った治療プログラムが有効であること」を患者をほめることで確認しているかのようである。単独イメージで＋項目が圧倒的に多いこともこれを裏付けると考えられる

【結論】自分自身の行ったプログラムの成果に意識が集中しており、患者自身に主体的にリハビリに参加させ、患者のリハビリが行った行動に対して強化が欠落している。今後の課題としては、患者自身にもリハビリ内で意見を提案させ、その患者の意見に対しほめることや内容を発展させることで、患者の日常生活の中で主体的にリハビリに参加させることができるのではないか。また、理学療法士も普段より患者の動機づけとなるような継続的アプローチを行うことで大切なのではないかと考える。

（ししどゆいと・さとうこういちろう・ないとうてつお）

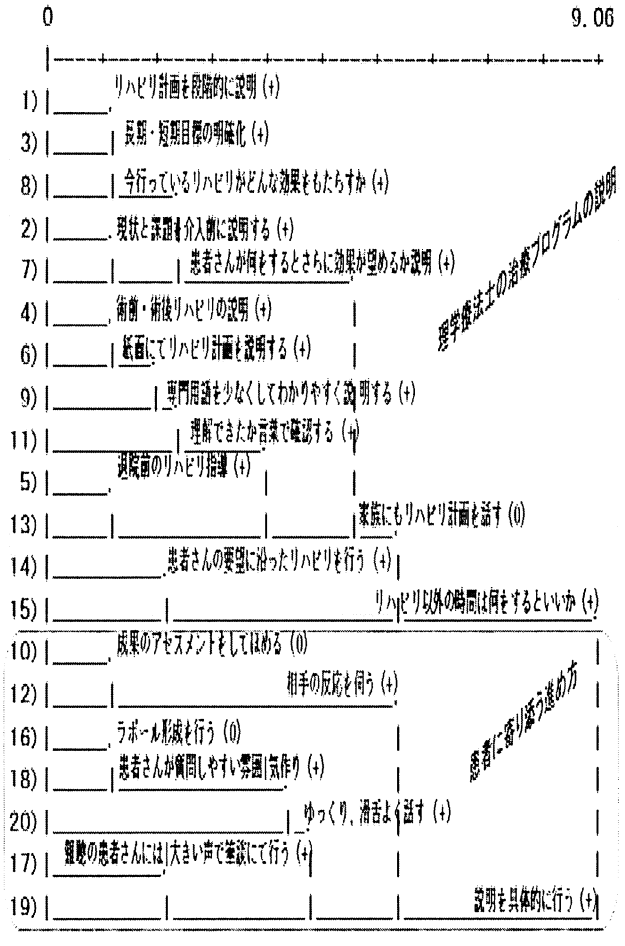


Fig.1　被検者Aのデンドログラム
1) 左の数値は重要順位
2) 各項目後ろの() 内の+-0は単独でのイメージ

記憶力が低下した認知症者への介護における PAC 分析

—ベテラン介護福祉士を対象として—

○伊藤敦史[1)]　　佐藤弘一郎[1)]　　内藤哲雄[2)]
([1)] 脳神経疾患研究所附属 南東北福島病院) ([2)] 明治学院大学)
キーワード：認知症者、アセスメント、チーム介護

【目的】「認知症により記憶力が低下した人に、介護福祉士としてどのような生活支援ができるか」について、在宅介護を含めて実務経験17年のベテラン介護福祉士が暗黙裡に持つ経験知の構造を、PAC 分析により明らかにすることを目的とした。

【方法】＜被検者＞現在は病院での回復期リハビリ病棟に勤務する、在宅介護を含め実務経験１７年の女性介護福祉士。

＜手続き＞「認知症によって記憶力が衰えている人への生活支援に関して、介護福祉士として、どのようなことがイメージされますか？」と教示し、連想反応を得た。次に重要順に並べ替えさせた後、各項目の直観的イメージ上の類似度を 7 段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージやクラスター間関係について聴取した後、項目単独の＋－0 のイメージを質問した。

【結果】連想項目の＋－イメージは、プラス項目 6、マイナス項目 0、0 項目 3 で、プラスの 6 項目は全て、連携を含め介護福祉士による判断や実施についてである（Fig. 1 参照）。

＜被検者の解釈：抜粋＞クラスター1 は【生活習慣の把握】～【何について介助が必要なのか】の４項目：介助する前のアセスメントであり、習慣や環境から考えて、どんな介助が必要なのか、どんな介助をしなければならないのか知る必要があり、介護しながら確認していく事によって適正な介助が行える。それが信頼関係をつくりあげることに繋がり、その人らしい生活の継続が行えて、介助方法を考えることができる。起きる時間や寝る時間、食事の時間などの生活スケジュールを考慮し、趣味や興味のある事を関連させていく。

クラスター2【認知症になった原因を考える】の１項目：環境の変化、ストレスなど、年齢と生活環境が関与。同居している人が話しかけない、話を聞かない、関心をもたない、一緒に過ごす時間を作らない。一人暮らしで関わる人がいない。趣味や生活に希望がもてない、など。

クラスター3【一人暮らしか、家族と同居か】～【調理時の注意点】の４項目：介助される人の置かれている環境、又は携わる人たち。介助してもらう人に関しての連携に関する事。調理手順などの手続き記憶や、言葉や仕草などを読み解くことで、表面上だけではなく根本の部分を共有することができ、連携によりチーム介護力が生まれてくる。たとえば調理時の注意や援助に関して、本人が好む食事を知ることだけではなく、盛り付けるお皿、好みの温度や付け加えるもの一つを共に考え、提供してあげることで生活の質が上がるのでないだろうかと思う。認知症の人を常時、介助する人の不安や困っていることを聴取する。周囲の人の理解と協力。小さな変化や変更の共有しそれらを連携すると同時に介助に必要な家族はいるのか。家族から情報を聴取し、介助する人に対して介護方法のアドバイス。他職種の関わる内容を把握し、統一した介護手順を共有することが求められると思う。

クラスター間の比較と全体について：クラスター１と２の比較：生活習慣、生活環境が共通している事。生活習慣や環境の把握により、必要な介助が見えてくる。阻害要因に応じて生活環境を変える。環境設定のようなもの。同じところは、生活習慣の原因が大きく、環境が原因となりうる。

クラスター１と３の比較：生活習慣と生活環境は、１人暮らしでも家族と同居と同じ。介護協力者の介護力は繋がるが、生活習慣の全てを家族が理解しているとは限らない。他職種との連携が必要。

クラスター２と３の比較：小さな変化に気付く人がいたか、いないか。他職種間の情報交換は適切に出来ていたかどうか。生きがいとなるも認知症という病気の理解はあったのか、知識はあったのか。介護福祉士の介護力というのは、原因ではなく、発症したあとに必要なことと感じる。配偶者や近親者とペット、友人、子どもの死や環境の変化が、認知症の発症や促進要因と考えられる。

【考察】クラスター1 は、＜症状と習慣、生活環境のアセスメント＞と考えられる。クラスター2 は＜症状を改善・強める要因を解明しようとする姿勢・構え＞。クラスター3 は＜介護支援者の介護力アセスメント＞についてである。介助協力者と共に進めていくチーム介護の重要性を示していると考えられる

本研究の連想はわずか９項目であるが、本人の興味や関心を生活から読み解くことで、介助者が連携して生活の質を向上させるための具体的方法を模索ができる。生活の質そのものを、生活だけでなく、実際の社会との関わり方など多面的に考える事で、チーム介護を生み出し、QOL を高めていくこと。その人の主体性を大切にしながら個別診断＝アセスメントをしていくことの重要性を示しているといえよう。ただし、どのような側面や次元において、具体的に実践していくかを明確にしていくことが今後の課題であろう。

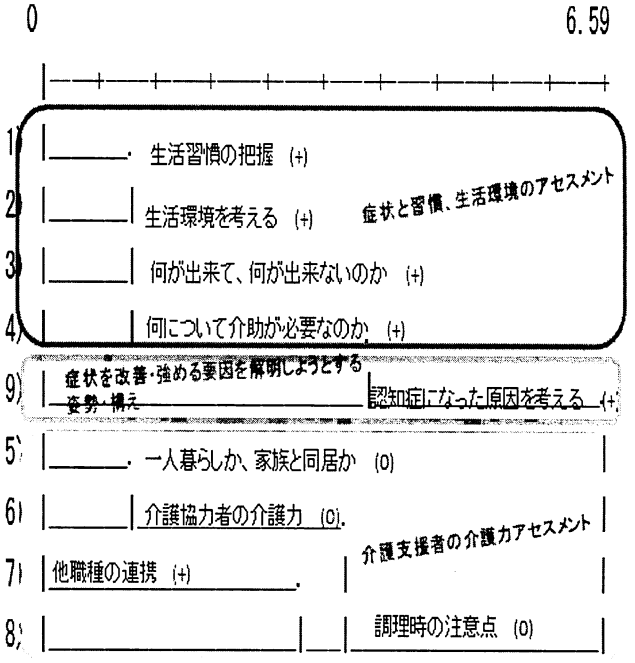


Fig. 1　被験者 A のデンドログラム
1) 左の数字は重要順位
2) 各項目後ろの（ ）の＋－0 は単独でのイメージ

(いとうあつし・さとうこういちろう・ないとうてつお)

看護と介護の相互理解と業務の分担

―中堅看護師を対象としたPAC分析―

○佐藤大輔[1)]　桑名美保[1)]　佐藤弘一郎[1)]　内藤哲雄[2)]

1）一般社団法人　脳神経疾患研究所附属　南東北福島病院　　2）明治学院大学

キーワード：看護、介護、相互理解

【目的】医師と共にパラメディカルとして、医師の診療補助、患者の入院生活や退院指導まで担ってきたのが看護師である。他方、訪問介護を主として担ってきた介護士が、病院での入院患者の介護も担うようになっている。このため看護と介護の業務分担と連携が不可欠であるが、今日においても十分な検討がなされていない。そこで本研究では、回復期病棟勤務のベテラン看護師が、看護と介護での互いへの要請しにくさや遠慮、現実の業務分担や連携について、暗黙裡に獲得している認知的枠組み(スキーマ)をPAC分析により明らかにすることを目的とした。

【方法】＜被検者＞実務経験16年の30代の女性看護師。＜手続き＞「看護と介護が連携する時、相手の職種に要請しにくいことはどんなことですか？　逆に要請しやすいことは何ですか？　相手への配慮や気遣いにはどんなことが思い浮かんできますか？」と口頭で教示し、連想刺激を提示した。次に連想項目を重要順に並べ替えさせた後、各項目間の直観的類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での＋－0のイメージを質問した。

【結果】＜被検者の解釈：抜粋＞クラスター1は、「相手の仕事を理解しているつもり」～「看護師は診療の補助」の9項目：被検者からみたCWの得意な業務は排泄と生活面の介助と感じている。看護の得意は診療補助で、相手の職種を理解しているつもりだが本当はわかっていないかも。

クラスター2は、「Ns声掛けにくい」～「看護師は忙しい」の3項目：看護師は生活援助のほかに診療補助もやっている。生活の援助は介護士にやってもらいたい。そこに問題があったら共有しなくちゃいけない。介護士と一緒に働いたことがない看護師もいる。

クラスター3は、「お互い声掛けが足りない」～「Nsは生活面はCwにまかせたい」の4項目：努力が足りない。歩

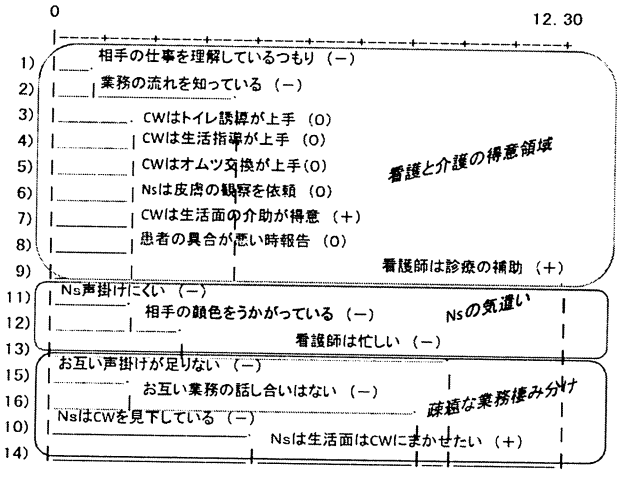


Fig. 1　被検者Aのデンドログラム
1）左の数字は重要順位
2）各項目後ろの（　）の＋－0は単独でのイメージ

みよろうとしない。実際は、看護師が考える生活と介護士が考える生活は違うのでは？　情報共有が足りない。

≪クラスター1と2の比較≫介護士さんは、生活の援助ができる。看護師は、相手（介護士）の仕事を理解しているのに、介護士を見下していることを意識化していないのだと思う。(介護士は)生活の援助が、得意だって知っているんだから、看護師から声掛けすればいいのではないか。

≪クラスター1と3の比較≫業務についてお互いに知ってるけど、話さない。お互いの良いところ、弱点を知らない。いま思いはじめたのだが、看護師はADL、介護士はQOL。≪クラスター2と3の比較≫看護師が介護士に気を遣っている。看護師は忙しいけど介護士に仕事を任せない。

【考察】本研究の結果は看護師からみてであるが、CWの得意な業務は排泄と生活面の介助と感じており、看護の得意は診療補助で生活面はCwに任せたいと感じている。他方で、明確に意識化してはいないが、お互いに声掛けが足りず、相手職種の業務内容の理解ができていないことを感じている。

（さとうだいすけ・くわなみほ・さとうこういちろう・ないとうてつお）

診療補助以外の本来の業務への視点転換について

―ベテラン看護師を対象として―

○桑名美保[1)]　遠藤さやか[1)]　佐藤弘一郎[1)]　内藤哲雄[2)]

1）一般財団法人　脳神経疾患研究所附属　南東北福島病院　2）明治学院大学

キーワード：診療の補助、看護計画、ステレオタイプ化

【目的】患者一人ひとりに応じた看護、診療補助ではない本来業務の遂行は看護の基本であるといえよう。ところが、日常業務に追われる看護師は、患者を一括りにしステレオタイプ化しがちである。本研究では、急変が少ない回復期の病棟勤務でのベテラン看護師が暗黙裡に感じている看護の本来業務実施の現実についてのイメージを、PAC 分析により明らかにすることを目的とした。

【方法】＜被検者＞看護師実務経験 16 年。うち、高血圧既往歴の多い回復期病棟勤務 10 年の女性。

＜手続き＞「診療補助重点から看護本来の患者の生活指導や自立支援を看護計画に取り込み、患者と目標を共有するにはどんなふうにしたらいいと感じますか。また、それらを具体化していくにはどんな課題や問題点があると感じますか」と口頭で教示し、連想刺激を提示した。次に連想項目を重要順に並べかえさせた後、各項目間の直感的類似度を 7 段階で評定させた。次いで、ウォード法でクラスター分析し、併合理由について聴取した後、項目単独での、＋－0 のイメージを質問した。

【結果】各項目の重要順位、クラスター分析及び単独＋－イメージの結果は、Fig.1 のようになった。単独のイメージは、プラス項目が 9、マイナス項目が 8、0 項目が 5 で全体としては葛藤状態にあることを示している。

＜被検者の解釈：抜粋＞クラスター1 は、「患者の個別性を考える」～「看護師の原点に戻る」の 11 項目：患者から話を聞いて、看護師の基本診療の補助だけではない、必要な情報を提供していく（患者へ）。患者のそばにいる看護師が、一番近く人いる看護師が、話を聞くことが大事だと、情報収集の重要性を感じている。

クラスター2 は、「家族が協力できる」と「栄養指導食生活を知る」の 2 項目：指導は、患者だけでなく、家族も巻き込むことが大事。協力者が必要と感じている。

クラスター3 は、「薬剤指導今まで薬を内服していた」～「薬剤情報を使って説明する」の 3 項目：既往歴に高血圧の患者が多い。退院後にも管理できるかの判断、薬の説明、実際に入院中に管理できるか評価すること。

クラスター4 は、「患者を 1 つの集団と考えている」～「看護計画に個別性がない」の 4 項目：患者はそれぞれ思いや不安も違う。患者と家族を巻き込んで治療を進めていくことで、おのずと個別性は出てくると感じている。

クラスター5 は、「業務中に患者と話す時間がない」と「診療の補助がメイン」の 2 項目：看護師は、診療の補助がメインではない。話をする、聞くのは大事だが、業務に入ると、患者とゆっくり話せる時間はほとんどない。

【考察】クラスター1 は、患者から「早く退院したい」「病前のように戻りたい」など、日常生活への不安や悩みを引き出す情報収集しているが、それを生かして看護計画につながる連想がなされていないし、目標を患者さんに共有してもらえるようにする具体策がイメージされていない。また、職種間での連携もない。＜看護計画に活かされない患者からの情報収集＞と解釈できよう。クラスター2 は、家族もチーム治療の一員としており、退院後の支援確保のための引き継ぎが大事。＜食生活に関しての家族への指導＞と命名できよう。クラスター3 は、高血圧の患者だからこそ薬剤管理に関して、退院後も含めての個々人に応じた看護計画を立案することが必要。＜薬剤自己管理のアセスメント＞とよぶことができよう。クラスター4 は、個々の患者への看護プロセスでの現時点で必要なことは、全員に共通ではない。にもかかわらず生じている、＜患者、看護行為のステレオタイプ化＞を示すといえよう。クラスター5 は、多くの患者の看護をしていくうちに、「本来業務が抜けているんじゃないか」とかすかに感じながら、診療補助業務に流されている。それに対する無意識の＜本来業務の実施困難さへの弁明＞と解釈することができよう。

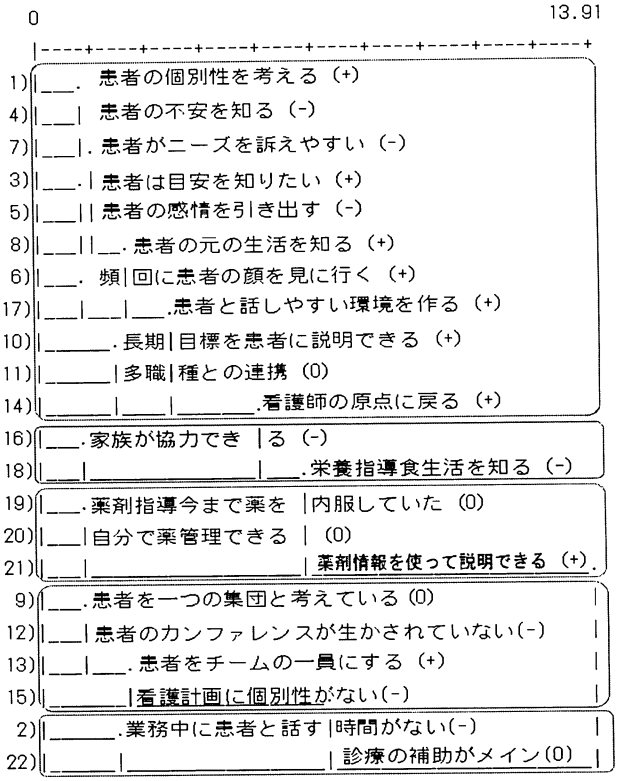


Fig. 1　被験者 A のデンドログラム
1) 左の数字は重要順位
2) 各項目後ろの（ ）の＋－0 は単独でのイメージ

【結論】個別性を踏まえた看護計画立案のための情報収集をしながらも、高血圧の患者に一般的ともいえる食生活の改善や薬剤の管理に終始し、患者と看護行為をステレオタイプ化し、その現状を弁明している。回復期の病棟特有である可能性は否定できないが、他の病棟でも留意すべき結果として解釈すべきであろう。患者の情報を本来の看護業務につなげて利活用するための、さらなる看護力の向上が必要とされる。

（くわな　みほ・えんどう　さやか・さとう　こういちろう・ないとう　てつお）

回復期病棟の患者からの悩みや相談を受けやすい看護師

―ベテラン看護師のPAC分析―

○遠藤さやか[1)]　桑名美保[1)]　佐藤弘一郎[1)]　内藤哲雄[2)]

1)　一般財団法人脳神経疾患研究所付属　南東北福島病院　　2）明治学院大学

キーワード：回復期、悩みや相談の受けやすさ、暗黙裡の経験知

【目的】回復期病棟での患者さんは、退院などを意識し始め、悩みや不安を抱きやすい。看護師は、これらの情報を収集し看護計画(退院指導)に反映していくことが求められる。そのため、看護師には患者さんの悩みや相談を受けやすい関り方が必要とされる。本研究では、回復期病棟のベテラン看護師が暗黙裡に持つ「患者からの悩みや相談を受けやすい関わり方」の経験知をＰＡＣ分析で探索していく。

【方法】＜被検者＞看護師実務経験 16 年、回復期病棟担当 10 年のベテラン看護師　＜手続き＞「回復期病棟の患者さんが悩みや相談をしやすい看護師のイメージはどんなものだと感じますか？」と口頭で教示し、連想刺激を提示した。次に連想項目を重要順に並べ替えさせた後、各項目間の直観的類似度を 7 段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、併合イメージを聴取した後、項目単独の＋－0 のイメージを質問した。

【結果】連想項目の＋－イメージは、プラス項目 10、マイナス項目 3、0 項目 4。マイナスイメージはすべて、患者さんからの情報の活用が奏効しなかった項目である（Fig. 1 参照)。＜被検者の解釈：抜粋＞クラスター1 は、「患者さんの気持ちを受け止める（聞く力が大切)」～「多職種との連携を図る」の 6 項目：一般的には、治療の初期段階での対処であり、看護師は、患者さんに関わり、それらを受け止める。看護師は意外とコミュニケーションスキルが低い。クラスター2 は、「患者さんに共感し、不安の軽減に努める」～「患者さんの表情・行動を把握する」の 7 項目：患者さんから不安や悩みなど深い自己開示を、治療的関係を深めることで引き出す。つまり、治療的な関係性を深めての情報収集とそれに基づく看護計画が必要。患者は看護師が忙しいと遠慮する傾向があり、看護師から積極的に話しかけないといけない。クラスター3 は、「患者さんの自尊心を傷つけない」～「忙しくて患者さんの話を聞く時間がない」

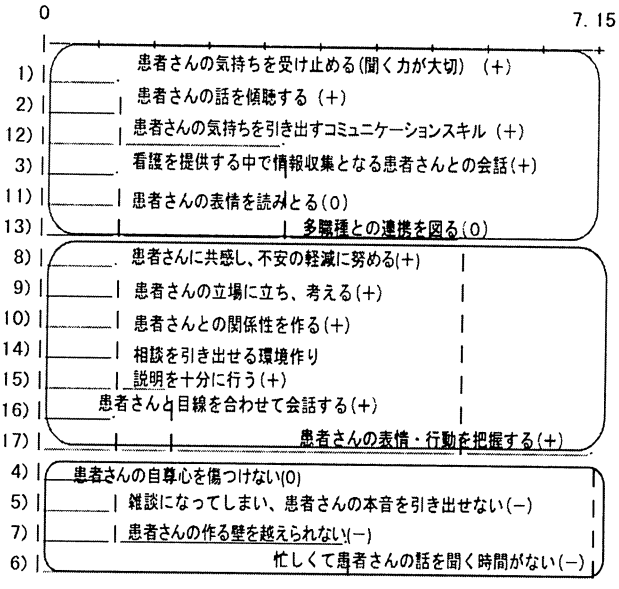


Fig. 1　被験者 A のデンドログラム
1) 左の数字は重要順位
2) 各項目後ろの（　）の＋－0 は単独でのイメージ

の 4 項目：患者さんから深い自己開示を引き出せないことへの思い。患者さんの自尊心に対峙、向き合う姿勢が看護師に求められる。コミュニケーションでは、沈黙も大事。

【考察】クラスター1 は入院の初期段階でも必要な＜一般的な傾聴姿勢＞で、クラスター2 は深い自己開示を得るための＜治療的関係を深めるための姿勢＞で、クラスター3 は＜患者さんの本音と対峙できない現実＞と解釈することができよう。暗黙裡であるが、悩みや不安の聞き取りが表面的で、看護の目標や計画に繋がらない、治療的関係が深まらず、患者さんと対峙しての深い開示を得られないと感じている。急変の少ない回復期病棟担当であるとはいえ、ベテラン看護師も、その日の業務に流されるパターンに陥りがちであることを示唆している。他の病棟も利活用すべき知見であると考えられる。

（えんどうさやか・くわなみほ・さとうこういちろう・ないとうてつお）

大学編入志願生の精神的健康状態に関する研究

○岡村靖人
（追手門学院大学大学院心理学研究科・日本学術振興会）
キーワード：大学編入，精神的健康，UPI

【目的】

近年，専門学校の大学編入コースから 4 年制大学への編入を志願する学生が増加している。これまで大学生および短期大学生の精神的健康については多くの研究がなされてきた(e.g., 木下ら, 1997)。しかし編入志願生の多くが 18 歳から 20 歳で，大学 1・2 年生時の年齢に相当するものの，大学生活と編入試験を目指す専門学校での生活は，カリキュラムや生活スタイルの点で多くが異なると考えられる。例えば，専門学校生は学校のカリキュラムに沿って 1 日の大半を学校で過ごす必要がある。それゆえ，大学と比べて専門学校特有のストレッサーが存在する可能性がある。さらに大学編入コースに特有の問題として，普段の授業に加えて編入試験に対する受験勉強も並行して行わなければいけない。このような状況で勉学を継続し試験に合格するためには，精神的健康状態を高く保ち続けることが必要である。そこで本研究では，大学編入コースに通う専門学校生の精神的健康度の実態を把握し，学生の学業継続を促すことに役立つ資料を得ることを目的とする。

【方法】

調査時期と対象者：大学編入を目指すコースに所属する専門学校生 1 年生を対象に質問紙調査を行った。調査時期は 2019 年 5 月下旬であった。回答の同意書にチェックが無いなどの回答不備があった者を除き，126 名(男性 92 名・女性 34 名，$M_{年齢}$= 18.78，SD = .92)を調査対象者とした。

調査方法：講義の途中で無記名による質問紙を一斉に配布し回答を求めた。所要時間は 10 分程であった。

使用尺度：精神的健康度の測定に関して UPI(学生精神的健康調査：University Personality Inventory)を用いた。UPI は大学の保健管理センター等で広く採用されており，学生の悩みを網羅していることで，学生の精神的健康を把握できることが指摘されていることから(西山・笹野, 2004)，本研究でも採用した。ただし今回は被調査者の負担を考慮して脇田ら(2007)が作成した短縮版 20 項目を用いた。各項目に当てはまるものには○を，当てはまらないものには×をつけ，○は 1 点，×は 0 点として合計した得点を精神的健康度とした。最後に，年齢，性別，居住形態(1 人暮らし，家族同居，その他)を回答した。ただし本研究では居住形態に関して「その他」を回答した者はいなかった。

【結果】

UPI の各項目の平均値を表 1 に示す。UPI の α 係数は.84 であり内的一貫性が確認された。UPI の合計得点の平均値は 5.90 点であり，この得点は，本研究と同様に UPI 短縮版を用いた春日・吉中(2010)で算出された先行研究における得点と比しても比較的高い得点である。各項目の得点に性差があるかを検討するために t 検定を行った。その結果，項目 8(t (1, 124) = 4.66, p = .033, η_p^2 = .036)，項目 16(t (1,124) = 4.95, p = .028, η_p^2 = .038)において女性が男性より有意に高得点であった。また，有意傾向であるものの項目 10(t (1, 124) = 3.83, p = .053, η_p^2 = .030)，項目 18(t (1, 124) = 3.36, p = .069, η_p^2 = .026)においても女性が男性より高得点であった。

続いて，UPI 得点を従属変数とした 2(性別)×2(居住形態)の 2 要因分散分析を行った。各変数の平均得点と SD を表 2 に示す。分析の結果，性別の主効果(F (1, 122) = 6.16, p = .014, η_p^2 = .048)が有意であった。このことから，女性は男性よりも精神的健康度が悪いといえる。さらに性別と居住形態の交互作用(F (1, 122) = 4.20, p = .043, η_p^2 = .033)が有意であった。単純主効果検定の結果，男性は居住形態にかかわらず UPI 得点に有意な差は見られなかったが，女性は一人暮らしの方が家族同居よりも精神的健康度が悪いといえる。

【考察】

本研究の結果，過去の調査結果と比較しても概して精神的健康度はあまり良好ではないことが明らかとなった。さらに女性のほうが男性より精神的健康度が悪いという過去の UPI 研究(e.g., 田中, 2014)とも一致した結果が得られた。一人暮らしの女性の精神的健康度の低さに関しては今後の詳細な検討が必要であるが，今野・佐藤(2006)の高校生を対象とした研究ではバランスの取れた良好な家族関係を有しているのは女子学生の方が多いことを指摘していることから，一人暮らしにより家族との対面コミュニケーションの時間が少なくなることが，女子学生においてより大きな影響を持つとも考えられる。

表 1. UPI 各項目の平均値

	男性	女性
1. 不平不満が多い	.44	.58
2. 自分が自分でない気がする	.21	.24
3. 悲観的になる	.35	.44
4. 気が小さすぎる	.32	.27
5. イライラしやすい	.41	.48
6. 怒りっぽくなる	.24	.27
7. 死にたくなる	.18	.22
8. 何事も生き生きと感じられない	.12	.30
9. どもったり，声が震える	.15	.15
10. 何事もためらいがちである	.24	.42
11. 他人に悪くとらえられやすい	.24	.20
12. 他人が信じられない	.35	.27
13. 気を回しすぎる	.27	.32
14. 付き合いが嫌いである	.30	.18
15. 引け目を感じる	.27	.26
16. 取り越し苦労をする	.01	.27
17. 繰り返し確かめないと苦しい	.18	.32
18. つまらない考えが取れない	.12	.27
19. 周囲の人が気になって困る	.24	.39
20. 気持ちが傷つけられやすい	.27	.25
合計得点の平均値	4.94	6.26

表 2. 分散分析の結果

性別	居住形態	平均得点(SD)
男性	一人暮らし	3.25(2.82)
	家族同居	5.46(5.63)
女性	一人暮らし	8.78(6.44)
	家族同居	5.98(4.07)

（おかむら　やすと）

AIとかっぱを用いた 科学的／非科学的対象物への印象評価 差異の検討

○高橋 綾子[1]・桐生 正幸[2]
([1] 東洋大学大学院社会学研究科・[2]東洋大学)

キーワード：妖怪，印象評価，原因帰属

目　的

本研究の目的は、科学的／非科学的な対象物への印象評価の差異を検討し、それらに内在する心的機能を探ることである。近代以前の日本において、「目に見えないもの」は予測または統制不可能な事象の原因を帰属をする対象としてその機能を果たしていた。中でも妖怪はその代表と言えよう。科学の進歩とともに予測や統制が可能な事象が増え、科学的説明が重視されるようになった。しかし、態度という点では、妖怪による説明を多くの人々が信奉してきたことと、現代において大多数が科学的説明を求め支持していることとは同質だと言えるだろう。それにも関わらず、妖怪が果たしていた機能は現代の代替物では補完しきれていない可能性がある（高橋, 2018）。そこで、科学的／非科学的な対象物への印象評価の差異を検討し、それらに内在する心的機能を探る。

方　法

1）方法　質問紙調査

2）参加者　都内の私立大学生に調査を依頼した。講義中、参加者は対象物の提示順が異なる2種類の質問紙をランダムに振り分けられ、回答した。無回答の4名と、欠損値のあった29名は分析から除外し、最終的な分析対象者は286名（M=20.3, SD= 0.97）、男性98名、女性188名であった。

3）質問紙の構成　科学的対象物「AI」と非科学的対象物「かっぱ」に、統制条件「一番親しい友だち」を加え、各対象に「励ましてほしい」とテキストメッセージを送った際の返答「元気を出して」に対する印象を評価する。より明確にイメージできるよう、各対象物とのやりとりはスマートフォンの画面を模したイラストで提示した。また、提示順によるカウンターバランスを取るため、かっぱを2番目に提示するかっぱ-AI群（①友だち②かっぱ③AI）と、AIを2番目に提示するAI-かっぱ群（①友だち②AI③かっぱ）の2種類の質問紙をランダムに振り分けた。評定は、一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）、安堵感尺度（門地・鈴木, 2000）から採用した形容語33語に、独自の7項目「正しかった」「うれしかった」「おかしかった」「親しみやすかった」「神秘的だった」「いらいらした」を加えた合計40語について、すべて過去形で提示し「まったく感じない」（1点）から「はっきり感じる」（5点）までの5件法で求めた。

4）統計分析　統計ソフトウェアR version 3. 4. 3 を用い、探索的因子分析、対応のある一元配置分散分析を実施した。

結　果

各条件の因子分析　条件ごとに40項目の評定値について因子分析（最尤法・独立クラスタ回転）を実施した結果、それぞれに異なる因子構造を持つことが示唆された。

＜友だち＞安堵（α=.92）、不可思議（α=.87）、静謐（α=.88）、溌溂（α=.68）の4因子解

＜AI＞安心（α=.93）、不可思議（α=.87）、高揚（α=.88）、悠然（α=.84）、冷静（α=.92）の5因子解

＜かっぱ＞明朗（α=.93）、不可思議（α=.89）、安息（α=.92）、静寂（α=.80）の4因子解

各項目の分散分析　条件ごとの因子構造が異なり、印象評価の各因子を比較する分散分析には至らなかったため、印象評価の各項目得点を従属変数とする対応のある一元配置分散分析を行なった。効果量検定にはη2、多重比較にはBonferroniの検定を用いた。結果、条件の効果は40項目中38項目で有意であり、効果量が高程度とされる目安（水本・竹内，2008）η2=.14以上であったのは8項目であった（Table1）。

Table1
各条件を独立変数、各項目の印象評価得点を従属変数とする分散分析・多重比較の結果（抜粋）

項目名	各条件の平均値 友だち(T)	AI(A)	かっぱ(K)	F value	η^2	多重比較
動揺した	1.755	1.902	2.815	92.889 ***	0.140	K>A *** K>T *** T>A ***
陽気だった	3.416	2.497	3.657	117.326 ***	0.171	K>A *** K>T ** A>T ***
科学的だった	1.339	3.633	1.566	498.376 ***	0.466	A>K *** K>T ***
おかしかった	1.993	2.045	3.143	120.243 ***	0.174	K>A *** K>T ***
楽しかった	2.101	2.003	3.280	177.703 ***	0.238	K>A *** K>T ***
親しみやすかった	3.080	2.350	3.559	98.280 ***	0.147	K>A *** K>T *** T>A ***
愉快だった	2.304	2.196	3.538	168.636 ***	0.228	K>A *** K>T ***
神秘的だった	1.367	1.783	2.766	137.163 ***	0.194	K>A *** K>T *** A>T ***

注）*p <.05 **p <.01 ***p <.001

考　察

条件ごとに因子構造が異なるという因子分析の結果と、ほとんどの項目で条件の効果が有意であった分散分析の結果から、各条件の印象評価が異なることが示唆された。分散分析の効果量が高程度であった8項目では「科学的だった」はAIが、それ以外はかっぱの得点が高かった。これら7項目はAIだけでなく、友だちと比較しても有意に高得点であった。「動揺した」「おかしかった」「神秘的だった」という奇妙で不可思議な印象は、自分と同質の人間・友だちと異質な非科学的対象物かっぱを比較すれば、かっぱにより強く感じるのは自然だろう。しかし、「陽気だった」「楽しかった」「親しみやすかった」「愉快だった」という親しみやすく好感を持つような印象についても同様に、友だちよりかっぱへの方が強く抱いていたことは注目すべき点である。なぜなら、非科学的対象物にそれらの機能が内在されている可能性が示されたからである。科学的な説明や対象物に不足しているのは、好感や親しみやすさを喚起する機能なのではないかと本研究では捉えている。

引用文献

水本 篤・竹内 理（2008）. 研究論文における効果量の報告のために –基礎的概念と注意点– 英語教育研究, 31, 57-66

門地 里絵・鈴木 直人（2000）. 状況からみた安堵感の因子構造 –緊張からの解放とやすらぎ– 心理学研究, 71（1）, 42-50

小川 時洋・門地 里絵・菊谷 麻美・鈴木 直人（2000）. 一般感情尺度の作成　心理学研究, 71, 241-246.

R Core Team(2017). R:A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing. Retrieved from https://www.R-project.org/. (May 23, 2018.)

高橋 綾子（2019）. 妖怪に対する社会心理学的手法を用いた探索的研究. 東洋大学大学院紀要, 55. 21-30

（たかはし あやこ・きりう まさゆき）

20項目版SKY式精神性尺度の信頼性および妥当性の検討

― ソーシャル・キャピタルとの関連に着目して ―

○木村　友昭[1)]　伊坂　裕子[2)]　内田　誠也[1)]　山岡　淳[1)]
([1)]MOA健康科学センター　[2)]日本大学国際関係学部)
キーワード：スピリチュアリティ、ソーシャル・キャピタル、質問紙法

【背景・目的】

厚生労働省が進める健康政策「健康日本21（第二次）」では、「全ての国民が共に支え合い、健やかで心豊かに生活できる活力ある社会の実現」のために、地域のつながりの強化、並びに健康づくり、自然環境保全や、防災などのボランティア活動の拡大に取り組んでいる。地域住民の支え合いや社会参加は、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の指標として取り上げられており、この政策のスローガンは、ソーシャル・キャピタルと心の持ち方、すなわちスピリチュアルな態度が関連していることを示唆するものである。

著者らは、スピリチュアルな態度を測定するため、25項目版SKY式精神性尺度(SS-25)を開発し(Kimura et al., 2016)、大学生や地域住民を対象に調査を行ってきた。これまでの調査結果と回答者のコメントを参考に、その短縮改訂版である20項目版SKY式精神性尺度（SS-20）を作成した。本研究は、SS-20の信頼性と妥当性を検証するとともに、SS-20とソーシャル・キャピタルの関連を明らかにするために行った。

【方法】

2014~17年、一般社団法人MOAインターナショナルの全国10ヶ所の地区（札幌市、仙台市、東京都港区、金沢市、名古屋市、大阪府吹田市、広島市、高松市、福岡市、および那覇市）に横断的調査を依頼した。調査項目は、性別・年代、SS-20、10項目版MOAQOL調査票（MQL-10）、およびソーシャル・キャピタルなどであった。調査に先立って、MOA健康科学センターの治験審査委員会の承認を受け、倫理的配慮と個人情報の保護につとめた。

MQL-10は包括的なQOLを測定するために開発された尺度で、WHOQOL-26との相関は0.81であった(木村他、2009)。その合計得点は40点満点で、高い得点はQOLが良好であることを示している。

SS-20の合計得点は100点満点で、高い得点は精神性が高いことを示す。下位尺度として、「社会・他者とのつながり」（社会）、「信仰的感性」（信仰）、および「人生への満足感」（満足）がある。

ソーシャル・キャピタルの質問項目は、①信頼感(「信頼」)、②互酬性の規範(「互助」)、③援助してくれる人数(「援助」)、および、④ネットワークへの所属（宗教団体を含む）から構成された。

統計解析は、SPSS ver. 20（IBM社)で行った。SS-20の信頼性（内部一貫性）は、Cronbachのα係数で分析した。また、SS-20の因子分析は、主成分分析法で因子を抽出し、promax法で回転を行った。SS-20と、年代、MQL-10、およびソーシャル・キャピタルとの関連は、Spearmanの順位相関係数で分析した。2群の比較（性別、および宗教団体の所属）はt検定で行った。

【結果】

本調査に4828人が参加し、調査票に回答した。そのうち、性別、年代、およびSS-20の全項目が有効で、20歳以上、79歳以下の3656ケースを分析対象とした。

SS-20の合計得点、および下位尺度得点において、女性の方が高い得点であり、年代と弱い正の相関が認められた。また、MQL-10とSS-20の間に有意な正の相関があり、とくにSS-20の「満足」とMQL-10の合計得点の間には、強い相関（$r = 0.61$）が見られた。

SS-20のCronbachのα係数は、全項目で0.89であり、下位尺度の「社会」「信仰」「満足」は、それぞれ0.80、0.89、0.67であった。また、因子分析により、20項目から3因子が抽出され、「信仰」の1項目を除いて、それぞれの成分は3つの下位尺度と一致した。

SS-20のすべての尺度得点と、ソーシャル・キャピタルの指標である「信頼」、「互助」、「援助」、およびネットワークへの「所属数」との間に有意な相関が認められた（表1)。また、宗教団体に所属している人は、所属していない人よりSS-20のすべての尺度得点が有意に高かった。

表1　20項目版SKY式精神性尺度（SS-20）の得点と、ソーシャル・キャピタルに関する質問項目との関連†

SS-20	信頼	互助	援助	所属数
社会・他者とのつながり	0.24	0.23	0.32	0.33
信仰的感性	0.13	0.14	0.22	0.34
人生への満足感	0.25	0.20	0.26	0.20
合計得点	0.24	0.22	0.31	0.37

† Spearmanの順位相関係数による（すべて$p < 0.001$）

【考察】

本研究の結果より、SS-20の信頼性と因子妥当性が確認された。また、女性の方が得点が高く、年代と相関があったことなど、SS-25と同様の結果が得られた。

ソーシャル・キャピタルの項目は、SS-20の「社会」と概念がオーバーラップしているので、「社会」との相関は当然であるが、「信仰」や「満足」との間にも相関が見られたことは、興味深い結果である。信仰心を持っている人の方が、住民同士の交流や支え合いに積極的である可能性がある。住民同士の支え合いが人生への満足感と関連することは、「健やかで心豊かに生活できる活力ある社会の実現」を推進する根拠の一つになると考えられる。

【謝辞】

共同研究者の広島大学医学部・烏帽子田彰名誉教授およびエムオーエー奥熱海クリニック・佐久間哲也院長、並びに調査に協力いただいた（一社）MOAインターナショナルのスタッフおよび関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

【引用文献】

Kimura T, et al. 2016 Depressive symptoms and spiritual wellbeing in Japanese university students. Int J Cult Ment Health, 9, 14-30.

木村友昭他　2009　大規模健康調査のためのQOL尺度開発とその妥当性の検証：10項目版MOAQOL調査票（MQL-10）　MOA健科報，13, 73-84.

（きむら　ともあき・いさか　ひろこ・うちだ　せいや・やまおか　きよし）

ムスリムイメージの日韓における等価性の検討

○向井智哉[1]　松木祐馬[2]　木村真利子[3]　金信遇[4]　近藤文哉[5]
([1]東京大学大学院法学政治学研究科　[2]早稲田大学文学研究科　[3]立正大学大学院心理学研究科　[4]ジェトロ・アジア経済研究所 研究推進部　[5]上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科)

キーワード：ムスリムイメージ，日本，韓国，文化比較

【目的】本研究の目的は，ムスリムイメージの因子構造が日本と韓国間でどのように異なるのかを検討することである。

近年には，日本においても韓国においても，ムスリム（イスラム教徒）に対してネガティヴなイメージが持たれていることが問題とされるようになっている。そこで本研究では，日本人および韓国人がムスリムに対してどのようなイメージを持っているのか，そしてムスリムイメージには日韓で差が見られるのかを検討する。

【方法】

調査対象者と手続き　日本人 330 名（女性 132 名，男性 198 名，平均年齢 48.4 歳，SD = 13.85），韓国人 339 名（女性 168 名，男性 171 名，平均年齢 43.8 歳，SD = 12.35）を対象とした。回答者はウェブ調査会社を通じて募集された。

質問項目　近藤・向井（2017）によって作成されたムスリムイメージ尺度を用いた。この尺度はムスリムイメージを「否定的イメージ」「肯定的イメージ」「信心深さイメージ」の 3 因子 26 項目で測定するものである。

【結果と考察】まず，日韓それぞれの回答者を対象に探索的因子分析を行い，因子構造を確認した。その結果，両国において先行研究（近藤・向井，2017）と同様の因子が抽出された。ただし，3 つの項目は日韓で異なる因子に負荷しており，1 つの項目は先行研究と異なる項目に負荷していたため，以下の分析ではこれらの 4 項目は除外した。

つづいて，多母集団の共分散構造分析を行い，因子構造の検討を行った。具体的には，以下の制約を置いた 3 つのモデルを比較した。まずモデル 1（CFI = .893）として，何の制約も置かないモデルをベースラインとして設定した。モデル 2（CFI = .888, ΔCFI = .006）として，因子負荷量が日韓で等しいという制約を置いたモデルを設定した。モデル 3（CFI = .884, ΔCFI = .004）として，モデル 2 の制約に加え，日韓で切片が等しいという制約を置いたモデルを設定した。各モデルの適合度を比較し，モデル 3 を採用した。

このモデルで得られた因子負荷量を Figure 1 に示す。因子間の関連を見ると，日韓両国において否定的イメージと肯定的イメージの間には負の関連，否定的イメージと信心深さイメージの間には正の関連があった。しかし肯定的イメージと信心深さイメージについては，日本では有意な関連が見られなかったのに対し，韓国では有意な負の関連が見られた。

つづいて因子平均を日韓で比較した。その結果，否定的イメージと肯定的イメージに差は見出されなかったものの（ps = .051, .189），信心深さイメージは，日本より韓国で高いことが示された（p < .001）。

以上の分析の結果，ムスリムイメージに関する日韓の類似点としては，1）同様の因子構造を有すること，2）肯定的イメージと否定的イメージの程度には差が見られないことが見出された。一方の相違点としては，1）肯定的イメージと信心深さイメージの関連について，日本では関連が見られなかったのに対し，韓国では負の関連が見られたこと，2）信心深さイメージは日本より韓国で強く抱かれていることが明らかにされた。

【謝辞】本研究は，2018 年度松下幸之助記念志財団助成顕彰プログラム研究助成を受けて行われた（研究代表者・近藤文哉）。

【引用文献】近藤文哉・向井智哉 2017. 計量的手法を用いたムスリムに対する受容的態度の規定要因の検討—「非ムスリム研究」の展開に向けて—　日本中東学会年報, **33**(1), 95–117.

(むかい ともや・まつき ゆうま・きむら まりこ・きむ しんう・こんどう ふみや)

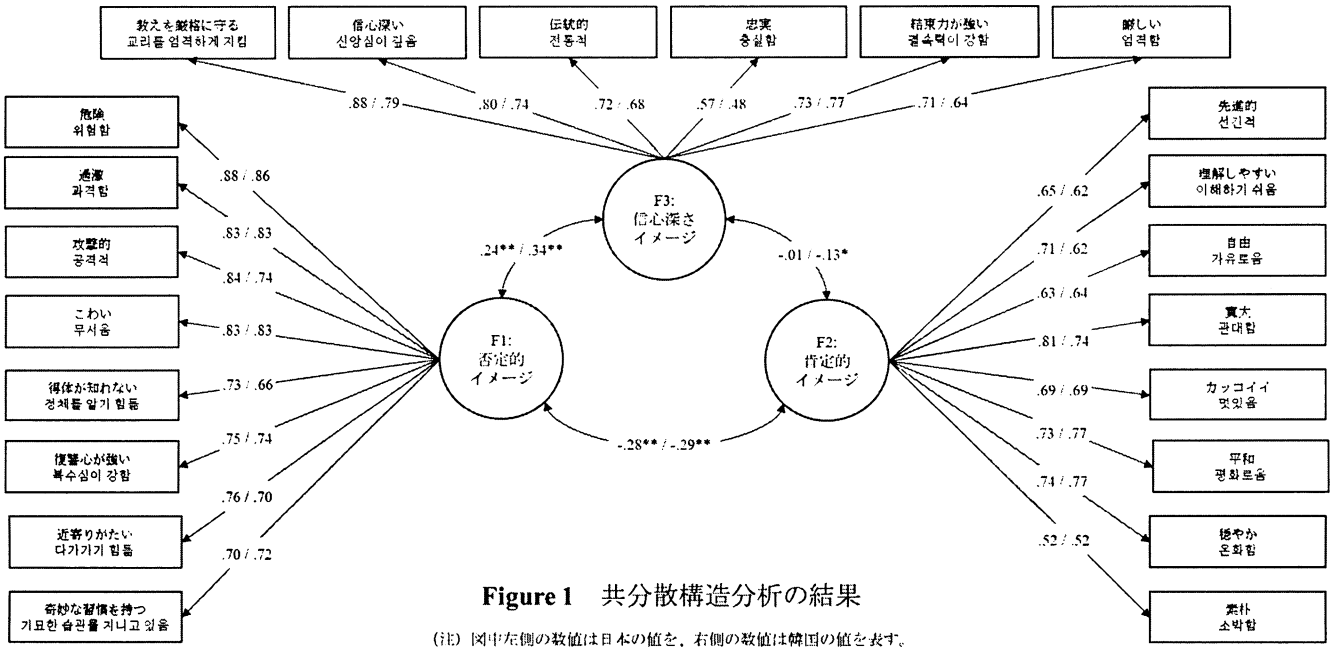


Figure 1　共分散構造分析の結果

(注) 図中左側の数値は日本の値を，右側の数値は韓国の値を表す。

宗教信者イメージ尺度作成の試み

○松木祐馬[1]　向井智哉[2]　近藤文哉[3]　金信遇[4]　木村真利子[5]
([1]早稲田大学文学研究科　[2]東京大学大学院法学政治学研究科　[3]上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科　[4]ジェトロ・アジア経済研究所 研究推進部　[5]立正大学大学院心理学研究科)

キーワード：宗教信者イメージ，受容的態度，尺度作成

【目的】

近年のグローバル化の中では，日本人が様々な宗教の信者たちと接触する機会が多くなりつつある。しかしながら，他国と比較し日本では無宗教を自認する人が多く（阿満，1996），何らかの宗教の信者として自己を捉える意識は希薄であるといえる。そのため，日本においては，メディア報道の影響などから，宗教一般は例えばテロの様に否定的な事象と結びつけられやすい危険性がある。このような背景を鑑みると，特定の宗教の信者に限定せず，日本人が宗教信者全般に対してどのようなイメージを持っているかを明らかにすることは，他者との共生や相互理解を向上する方策を提言するための有用な知見を提供すると考えられる。そこで本研究では，個別の宗教や宗派ではなく，「個人が宗教信者全般に対して抱くイメージ」を測定する尺度の作成を試みる。

【方法】

予備調査

調査対象　本調査に先立ち，33名（男性12名，女性20名，年齢性別不明1名，平均年齢33.3歳，SD =14.1）の一般成人及び大学生を対象に，調査項目の作成を目的とした予備調査を実施した。

項目の選定　8つの宗教（仏教，神道，キリスト教（プロテスタント，カトリック），ユダヤ教，ヒンドゥー教，イスラム教，新興宗教）を信じる人々に対するイメージを自由記述法で収集した。そして，収集された記述についてKJ法を用いて分類し，宗教信者全般のイメージを測定する上で妥当であると判断された計29項目を選定した。

本調査

調査対象　GMOリサーチモニター220名（男性130名，女性90名，平均年齢46.4歳，SD =12.6）を対象にウェブ調査を実施した。

調査内容　まず，「特定の宗教の信者ではなく，何らかの宗教を信仰している人々全般について，あなたが持つイメージは，以下の文章にどの程度当てはまりますか」と教示し，予備調査で選定された29項目について，「当てはまらない」から「当てはまる」の5件法で回答を求めた。そして，妥当性を検証するために，向宗教性を測定する8項目（金児，1997）について4件法で，イスラム教徒に対する受容的態度尺度（近藤・向井，2017）について，「宗教を信じる人」を対象に変更した上で5件法で，それぞれ回答を求めた。

【結果と考察】

因子分析　スクリープロットの形状と解釈可能性から3因子を指定し，因子負荷量が|.40|以上，多重負荷が|.35|以下であることを基準とし，探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果，最終的に24項目が得られた（Table1）。

項目内容から，第1因子は「精神的弱者イメージ」，第2因子は「敬虔的信者イメージ」，第3因子は「人徳者イメージ」とした。Cronbachのα係数はαs > .83であり，いずれも十分な内的一貫性が得られた。また，確認的因子分析の結果，適合度は良好であった（CFI = .94, RMSEA = .06）。

Table1
宗教信者イメージ尺度の探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3
F1: 精神的弱者イメージ (α = .88, M = 3.17, SD = 0.73)			
世の中に悲観的である	**.90**	-.29	.24
心が弱い	**.81**	-.27	-.03
騙されやすい	**.68**	.07	.01
他人に頼りがち	**.66**	.12	.01
精神的な問題を抱えている	**.62**	.07	-.11
人から影響を受けやすい	**.59**	.02	-.06
過激である	**.53**	.26	-.01
こわい	**.51**	.30	-.11
排他的である	**.45**	.32	-.02
F2: 敬虔的信者イメージ (α = .85, M = 3.34, SD = 0.82)			
生活を強く宗教に支配されている	.04	**.84**	-.20
信心深い	-.18	**.79**	.12
救いを求めている	.02	**.70**	.02
修行に打ちこんでいる	-.12	**.64**	.14
厳しい教義や規律を守っている	.05	**.61**	.31
日常生活で制限されていることが多い	.19	**.59**	-.05
F3: 人徳者イメージ (α = .83, M = 2.89, SD = 0.60)			
家族を大切にしている	.11	-.16	**.74**
勤勉である	.11	.07	**.66**
目上の人を敬う気持が強い	.06	.16	**.66**
地域のきずなを重んじている	-.05	.16	**.62**
博愛主義的である	-.00	.17	**.61**
温厚である	-.05	-.21	**.59**
親しみやすい	-.17	-.15	**.58**
禁欲的である	.07	.33	**.45**
頭が良い	-.14	.12	**.44**
因子寄与	5.44	5.20	3.64
因子間相関			
F2	.58		
F3	-.18	.02	

妥当性の検討　因子分析の結果抽出された3因子の尺度得点を説明変数，向宗教性と受容的態度の尺度得点を基準変数とした重回帰分析を行った。その結果，精神的弱者イメージと向宗教性（β = -.15, p < .05）及び受容的態度（β = -.15, p < .10）との間に負の関連がみられた。また，人徳者イメージと向宗教性（β = .51, p < .01）及び受容的態度（β = .23, p < .01）との間に正の関連がみられた。

分析の結果，作成された宗教信者イメージ尺度は，精神的弱者イメージ，敬虔的信者イメージ，人徳者イメージの3因子構造であり，高い信頼性を有することが示された。また，他尺度とも理論的に予測される関連が示され，一定の妥当性を有していると考えられる。無宗教を自認する人が多い本国において，宗教を信じる人々全般がどの様に認識されているかに関する知見を提供し得る本尺度には，一定の意義があると考えられる。

（まつき ゆうま・むかい ともや・こんどう ふみや・きむ しんう・きむら まりこ）

大学生が恋愛と結婚に求めるもの

○山岡重行
（聖徳大学心理学科）

キーワード：大学生、恋愛、結婚

【目的】　配偶者選択において、女性は男性に大学卒で経済力があることを求め、男性は女性に魅力的な容姿を求めること(Buss & Barnes, 1986)や、女性は自分より年上の経済力のある男性を求め、男性は自分より年下で魅力的な容姿の女性を求めること(Kenrick & Tront, 1989)が報告されている。

内閣府の「結婚・家族形成に関する意識調査」では将来結婚を希望する未婚者に結婚相手に求める条件を質問している。最多回答は「価値観が近いこと(75.6%)」、次が「一緒にいて楽しいこと(74.5%)」、「一緒にいて気をつかわないこと(73.5%)」だった。「経済力があること」の選択率が32.1%、「共通の趣味があること」は31.1%、「容姿が好みであること」の選択率は30.9%であった。

山岡(2019)は大学生371名を対象に、恋人選択と配偶者選択において、どのような条件を重視するか調査している。その結果、オタク度が高い腐女子群や男女オタク群は「趣味」を重視する傾向が強いことを報告している。

本研究の目的は山岡(2019)の研究にデータを追加し、大学生が結婚と恋愛に何を求めているのか、その性差も含めて改めて明らかにすることである。

【方法】　**調査対象者**　首都圏私立大学2校の大学生556名(男性119名、女性437名)。平均年齢20.03歳(SD=3.503)。

使用した質問項目　内閣府の「結婚・家族形成に関する意識調査」などを参考に、恋人の選択、および結婚相手の選択において一般的に重要視されると思われる「自分に対する愛情」「経済力・収入」などの20項目を設定した。

「あなたは恋人を選択するとき、あるいは結婚相手を選択するときに以下の条件をどの程度重要だと考えますか。恋人と結婚相手の選択それぞれの回答欄の1～5の数字を○で囲んでください」という教示文で、1つの質問項目につき、「恋人」と「結婚相手」の2つの回答を求めた。回答方法は、「1：全く重要ではない、2：どちらかといえば重要である、3：わりと重要である、4：かなり重要である、5：極めて重要である」の5件法である。

調査手続　通常の授業時間の一部を利用して上記の20の質問項目を用いて質問紙調査を行った。調査は2017年から2018年にかけて実施した。

【結果と考察】　調査対象者である大学生にとって、結婚よりも恋愛の方が身近な問題であるため、恋人選択の重要度評定値を用いて、主因子法プロマックス回転の因子分析を行った。結果の解釈のしやすさから5因子モデルを採用した。

第1因子は「趣味の一致」「どれだけ一緒に趣味を楽しむことができるか」などの6項目に負荷量が高く、趣味に関する因子と解釈できる。6項目の平均値を恋人の趣味得点とした(α=.780)。配偶者選択に関する同じ6項目の平均値を配偶者の趣味得点とした(α=.783)。

第2因子は「人生に対する前向きな態度」「まじめさ」などの8項目に負荷量が高く肯定的なパーソナリティに関する因子であると解釈できる。8項目の平均値を恋人の肯定的パーソナリティ得点とした(α=.757)。配偶者選択に関する同じ8項目の平均値を配偶者の肯定的パーソナリティ得点とした(α=.760)。

第3因子は「自分に対する優しさ」「自分に対する愛情」などの4項目に負荷量が高く、相手と一緒にいるときの快適さに関する因子と解釈できる。4項目の平均値を恋人の快適さ得点とした(α=.772)。配偶者選択に関する同じ4項目の平均値を配偶者の快適さ得点とした(α=.719)。

第4因子は「職業」「学歴」「経済力・収入」などの4項目に負荷量が高く、これらは社会的な評価に関する因子と解釈できる。4項目の平均値を恋人の社会的評価得点とした(α=.752)。配偶者選択に関する同じ4項目の平均値を配偶者の社会的評価得点とした(α=.769)。

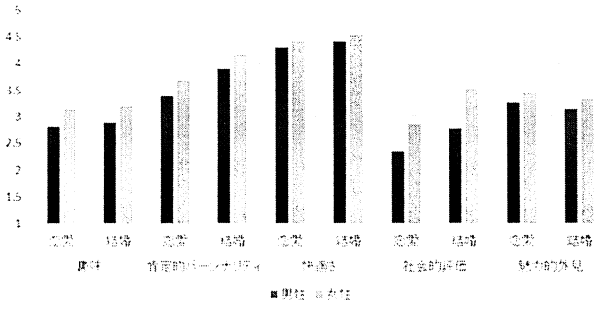
第5因子は「男らしさ・女らしさ」「外見の美しさ」「服装のセンス」などの4項目に負荷量が高く、魅力的外見の因子と解釈できる。5項目の平均値を恋人の魅力的外見得点とした(α=.680)。配偶者選択に関する同じ4項目の平均値を配偶者の魅力的外見得点とした(α=.661)。

調査対象者の性別、条件の違い、恋人と配偶者の違いの3要因を独立変数とした2要因が繰り返し要因である3要因分散分析を行った。その結果、女性の方が男性よりも選択条件の重要度が高いことを示す性別の主効果($F=35.991, df=1/522, p<.001$)、条件の違いの主効果($F=441.765, df=4/2088, p<.001$)、恋人より配偶者の方が重要度が高いことを示す恋人と配偶者の違いの主効果($F=220.492, df=1/522, p<.001$)、条件と性別の交互作用($F=10.529, df=4/2088, p<.001$)、条件と恋人と配偶者の違いの交互作用($F=148.416, df=4/2088, p<.001$)、それに3要因交互作用($F=5.656, df=4/2088, p<.001$)が認められた。

男性の恋人選択では、快適さ＞肯定的パーソナリティ・魅力的外見＞趣味＞社会的評価、女性の恋人選択では、快適さ＞肯定的パーソナリティ＞魅力的外見＞趣味＞社会的評価、男性の配偶者選択では、快適さ＞肯定的パーソナリティ＞魅力的外見＞趣味・社会的評価、女性の配偶者選択では、快適さ＞肯定的パーソナリティ＞社会的評価＞魅力的外見＞趣味の順にそれぞれの条件を重視することがわかった。

本研究の結果、現代の大学生が恋人や配偶者に重視する条件は第1に一緒にいるときの快適さであり、第2に肯定的パーソナリティであることがわかった。先行研究が指摘するように女性は男性よりも配偶者選択において学歴や経済力などの社会的評価を重視する傾向が強いが、それらは第一義的な条件ではなかった。現代では大学卒業後、あるいは大学院修了後、女性も就職することが当然視されている。女性の経済力の高まりとともに、女性が配偶者に求める学歴や経済力などの社会的評価の重要度が相対的に低下したと解釈できる。また男女とも魅力的な外見を重視している。男性も外見の美しさで女性から選択されるようになり、男女間格差が減少し双方向的な関係になったと解釈できる。(やまおか　しげゆき)

図1　恋人/配偶者選択における重要度得点



老舗の「重み」が商品評価に及ぼす影響

○小嶋優花・坂本拓海・柴田江玲奈・松田健太郎・井上裕珠
（日本大学商学部）

キーワード：老舗、パッケージ、購買行動

【目的】

2018年6月4日、井筒八ッ橋本舗が、聖護院八ッ橋総本店に対して、聖護院八ッ橋総本店が公表している「創業年(1689年、元禄2年)や起源に偽りがあるとして、広告や商品説明への創業年などの記載の差し止めと、損害賠償を求める訴訟を京都地方裁判所に起こし(伊藤, 2018)」た。この訴訟には、「元禄という江戸時代の年号は、大正や昭和に比べて消費者に由緒正しい歴史を有する商品という印象を与え、商品選定に影響を与える(伊藤, 2018)」という前提が存在する。すなわち、「老舗」であるという歴史の重みによって、消費者は購買意欲を高めるという考えである。

しかしながら、著者らが知る限り、「老舗」表記が消費者の購買意欲を高めるのかどうかは、これまでの先行研究で明らかにされていない。そのため、本研究では、「老舗」表記が消費者の購買意欲に及ぼす影響を調べることを目的とする。その目的のために、「老舗」表記のある八ッ橋パッケージと、表記のないパッケージを作成し、購買意欲に違いがあるかどうかを実証的に検討する。ただし、「老舗」という表記から想像される歴史の重み(創業年)の違いが購買意欲に影響する可能性があるため、創業年を具体的に表記する条件も合わせて設ける。

【方法】

参加者　大学生234名(男性130名、女性104名、平均年齢20.35歳)。留学生5名を除く229名を分析対象とした。

実験計画　1要因3水準(パッケージ表記: 老舗/創業年/表記なし)参加者間計画。

条件操作　参加者に提示する八ッ橋のパッケージを条件間で変えることによって条件操作を行った。図1に示されているように、老舗条件では、「生八ッ橋」の左側に「老舗」と表記されていた。それに対し、創業年条件では、「生八ッ橋」の左側に、「創業一六九〇年」と記載され、表記なし条件には、「生八ッ橋」の左側に何も書かれていなかった。

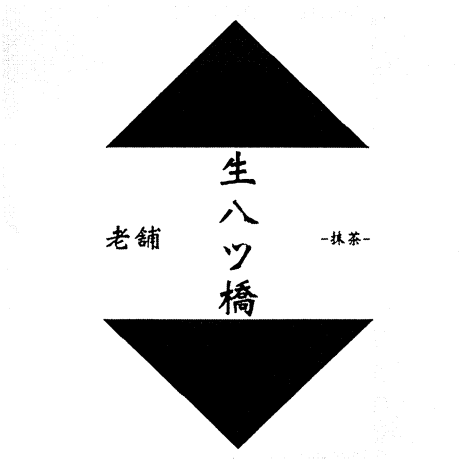


図1.八ッ橋パッケージ(老舗条件)

従属変数　参加者には、八ッ橋のパッケージを見て、「この生八ッ橋が気になる」、「この生八ッ橋を食べてみたいと思う」、「この生八ッ橋を買ってみたいと思う」、「この生八ッ橋をお土産候補の一つとしようと思う」の4項目に9件法(得点が大きいほど当てはまる)で回答を求め、この4項目の合算平均を購買意欲の指標とした(α=.93)。

手続き　授業時間中に「大学生の消費行動に関する調査」を実施し、参加者には、老舗条件、創業年条件、もしくは表記なし条件の質問紙をランダムに配布した。デモグラフィック項目に回答を求めたのち、「あなたは、京都に旅行に来ています。今日東京へ帰るので、八ッ橋をお土産として買おうと考えています。八ッ橋に詳しいわけではないので、どの八ッ橋にするか、お店をブラブラと見ています。」という場面を想像するように教示した。その後、「お店を見ていると、以下の生八ッ橋が目に留まりました。」と教示し、八ッ橋のパッケージを提示して、購買意欲への回答を求めた。続いて、八ッ橋に関する複数の質問に回答を求め、実験は終了した。後日ディブリーフィングを実施した。

【結果】

パッケージの表記が八ッ橋の購買意欲に影響を及ぼすかどうか検討するために、一元配置の分散分析を実施した。その結果、パッケージ表記の主効果は見られず($F(2, 226)=0.20$, $p=.820$)、老舗条件($M=6.22$, $SD=1.86$)、創業年条件($M=6.23$, $SD=1.88$)、表記なし条件($M=6.39$, $SD=1.89$)には、購買意欲に違いが見られなかった。

違いが見られなかった理由として、老舗条件と創業年条件の参加者が、パッケージの「老舗」や「創業年」表記に注目していなかった可能性が考えられる。参加者には、購買意欲を回答したあとのページで、「先ほど見た、生八ッ橋のパッケージについて覚えていることを以下に書いてください。」と教示し自由記述させていたため、その記述内容を分析した。その結果、老舗条件では71名中44名(61.97%)が「老舗」について記述し、創業年条件では82名中49名(59.76%)が「創業年」について記述していた。記述が見られた参加者のみを分析対象として、再度一元配置の分散分析を実施した。その結果、パッケージ表記の主効果は見られなかった($F(2, 133)=1.72$, $p=.183$)。多重比較の結果、老舗条件($M=6.57$, $SD=1.67$)は創業年条件($M=5.76$, $SD=2.03$)よりも購買意欲が高い傾向にあり、老舗条件および創業年条件と表記なし条件($M=6.39$, $SD=1.89$)には、購買意欲に違いが見られなかった。

なお、その他の分析結果については発表当日に報告する。

【考察】

本研究では、「老舗」や「創業年」表記が購買意欲に影響するのかを実証的に検討することを目的とした。その結果、「老舗」や「創業年」が表記されていたときと、表記がないときでは、購買意欲に違いが見られなかった。そのため本研究においては、「老舗」表記が購買意欲に影響するという上記訴訟における前提は再現されなかった。

パッケージ表記に注目していたと思われる参加者を対象にしたところ、老舗条件では創業年条件よりも購買意欲が高いことが示された。なぜ、このような違いが得られたのかに関しては、更なる分析を進めていく必要があるだろう。

【引用文献】

伊藤歩 (2018),「八ッ橋」訴訟、なぜ業界各社は沈黙するのか――井筒 vs.聖護院、内容次第ではルーツも揺らぐ――, 東洋経済 ONLINE, 2018年7月7日（2019年7月30日閲覧）

（おじまゆうか・さかもとたくみ・しばたえれな・まつだけんたろう・いのうえゆみ）

職場交流活動の体系化に向けた試み

～探索的因子分析を用いて～

○二瓶　哲[1]　田中堅一郎[1]
([1]日本大学大学院総合社会情報研究科)

キーワード：職場，人間関係，チームワーク

【目的】二瓶（2017）は，職場交流活動について，「職場メンバー間の相互関係促進あるいは職場の活気を高めるため，ひいては効果的な業務がなされるための，業務内あるいは業務外での活動」と定義している。本研究の目的は，同定義に基づく職場交流活動の体系化を試みることである。

【方法】1. 調査時期：2018年9月～10月。2. 調査手続き：インターネット調査業者に委託して行った。具体的には，民間組織に勤める男性；400名，女性；400名の計800名に達するまで調査を継続した。3. 調査内容：職場交流活動の38項目，探索的因子分析結果の構成概念妥当性を検証するための尺度（職場の人間関係尺度，チームワーク尺度，ビジョン・戦略尺度）を，日本労働研究機構（2003）の一部を修正して用いた。特に，ビジョン・戦略尺度の活用については，高木（2003）を参考に，職場や組織における行事や形式的な要素がある職場メンバーとの関わりを含む因子と組織の将来についての関心や自我関与の程度を示す尺度との相関を捉えることにした。

【結果】1. 回答者の属性　平均年齢は42.3歳（*SD*=12.6）であった。職層では，一般社員（職員）層が627名，リーダー・管理職層が173名であった。

2. 職場交流活動項目の探索的因子分析　計6回にわたる分析を経て，33項目による計5つの因子が抽出された。第1因子（10項目）は，「一体感の醸成」と命名された。具体的な項目は，「私の職場では，メンバー同士で道具を使って共に楽しむこと（ゲームをする等）をする」「私の職場では，メンバー同士で互いの親近感が湧く，あるいは団結を感じるような儀式的なやり取りをする（例：グータッチ，ハイタッチをする等）」「私の職場では，メンバー同士でスポーツ活動をする」「私の職場では，仕事の成果とは関係のない内容（例：笑顔の多さ，頼られやすさ等）について表彰されている」「私の職場では，通常とは異なる場所（社内に設けられた特別な場所，飲食店，宿泊施設等）でミーティングを行う」「私の職場では，お中元，お歳暮といった風習に基づく物品のやり取りがある」「私の職場では，年賀状，暑中見舞い等，季節に応じた文面のやり取りがある」「私の職場では，飲食を伴いながらのミーティングを行う」「私の職場では，メンバーの誕生日を祝う」「私の職場では，休日においてメンバー同士でレジャー活動をする」である。第2因子（10項目）は，「メンバー同士の関係促進」と命名された。具体的な項目は，「私の職場では，メンバー同士で，仕事とは関係のないことについてほめている」「私の職場では，仕事をしながら雑談がなされる」「私の職場では，メンバー同士でプライベートなやり取り（仕事以外の話等）をする」「私の職場では，メンバー同士でプライベートな相談をする」「私の職場では，勤務時間外において雑談がなされる」「私の職場では，メンバー同士で，ねぎらい・気遣いの言葉をかけている」「私の職場では，ユーモアあふれる会話がなされている」「私の職場では，メンバー同士がふざけ合う（笑顔につながる行動として）」「私の職場では，業務とは関係のないやり取り（笑顔になるようなきっかけづくり等）を行う機会がある」「私の職場では，メンバー同士で，仕事のしかたや成果等についてほめている」である。第3因子（4項目）は，「公式的な親睦の推進」と命名された。具体的な項目は，「私の職場では，飲み会がある」「私の職場には，忘年会（あるいは暑気払い）がある」「私の職場では，歓送迎会がなされている」「私の職場では，仕事の打ち上げ会がなされている」である。第4因子（5項目）は，「息抜きの場の共有」と命名された。具体的な項目は，「私の職場では，“おやつタイム”のような，少しの時間くつろげる機会を設けている」「私の職場では，メンバーがお菓子（買ってきたもの，手作りのもの等）等を振る舞っている」「私の職場では，メンバー同士でモノ（本，趣味の道具等）の貸し借りをしている」「私の職場では，メンバー同士でランチをとっている」「私の職場では，メンバー同士で食事（ランチ以外）をとっている」である。第5因子（4項目）は，「組織的行事の企画・推進」と命名された。具体的な項目は，「私の職場では，会社全体で開催される行事がある（または，実施に向けた話が出る）」「私の職場では，自部署にて（または周辺部署と共に）開催される行事がある（または，実施に向けた話が出る）」「私の職場では，部やサークル活動がある（または，設立に向けた話が出る）」「私の職場では，社員旅行がある（または，実施に向けた話が出る）」である。

3. 信頼性の分析　探索的因子分析結果の信頼性を検証するため，内的一貫性を示すα係数を算出した。その結果，「一体感の醸成」：.91，「メンバー同士の関係促進」：.93，「公式的な親睦の推進」：.83，「息抜きの場の共有」：.80，「組織的行事の企画・推進」：.81であった。

4. 妥当性の検証　職場交流活動の探索的因子分析結果における構成概念妥当性を検証するため，3つの尺度（職場の人間関係，チームワーク，ビジョン・戦略）との相関係数を算出したところ，Table 1のような結果となった。

Table 1　職場交流活動因子と妥当性検証尺度との相関係数

尺度	1	2	3	4	5	6	7	8
1 一体感の醸成	－	.51**	.41**	.53**	.57**	.31**	.34**	.48**
2 メンバー同士の関係促進		－	.58**	.68**	.40**	.68**	.68**	.55**
3 公式的な親睦の推進			－	.54**	.47**	.44**	.44**	.40**
4 息抜きの場の共有				－	.43**	.45**	.47**	.43**
5 組織的行事の企画・推進					－	.28**	.30**	.41**
6 職場の人間関係						－	.80**	.65**
7 チームワーク							－	.72**
8 ビジョン・戦略								－

**pく.01　相関係数は，Spearmanのρとした。

【考察】職場交流活動について，探索的因子分析の結果，5因子が抽出された。また，信頼性や構成概念妥当性についても確認がなされた。よって，本研究により，職場交流活動について一定の体系化がなされたといえる。

【引用・参考文献】

二瓶　哲 2017 職場交流活動と職場の結束力との関係—職場メンバーの交流活動意識，職場環境要因を含めた分析を通して—　日本大学大学院総合社会情報研究科紀要，**18**，135-145.

日本労働研究機構 2003 組織の診断と活性化のための基盤尺度の研究開発—HRMチェックリストの開発と利用・活用— 調査研究報告書 No. 161.

高木浩人 2003 多次元概念としての組織コミットメント：先行要因，結果の検討　社会心理学研究，**18(3)**，156-171.

(にへい さとる・たなか けんいちろう)

職務遂行行動への自己覚知研修の実践効果

－研修参加者6事例のフォローミーティングから－

外島　裕
（日本大学　商学部）

キーワード：リーダー開発、自己覚知、研修効果

【序論】リーダーの影響力の開発は、従来は対人的な社会的スキルとしてのinterpersonalな視点からが中心であったが、そのスキルの基本にはintrapersonalな視点からの開発が不可欠である（e.g.Day,2000）。特に、self-awareness（自己覚知）を深めるには、かなりの工夫を必要とする。かつては、Tグループ、あるいは、構成的エンカウンターなどが応用された。しかしながら、これらによる自己理解はリーダーとしての職務遂行行動との関連を具体的に把握することは難しいといえる。さらに、多くのキャリアカウンセリングの理論、技法もあるが、仕事の意味づけを再構成することを主眼としており、リーダー行動の開発との観点からは間接的となりがちである。リーダーの具体的な職務遂行行動を把握して、なぜそのような行動を習慣的にとりがちであるのかを深く自己覚知し、行動開発の実践につながる、効果的な方法と理論の検討が必要であると思われる。すでに免疫マップとの研究もあるが（Keganら,2009）、認知面がつよく情動面が少ないとの課題を感じる。職務遂行行動に関連する心のメカニズムの自己覚知については、例えば外島（2019）が紹介している。

【目的】本研究では、リーダー開発の重要な基本となる自己覚知のメカニズムについて、集合研修とその後の2回にわたるフォローミーティングを通して、職務遂行行動の課題に関する行動計画の実践の様子を報告し、研修の効果を考察する。

【方法】事例対象：関東圏A企業1社。中堅社員・管理職社員6名、3グループ。本報告では、このうち1グループ6名。

研修実施時期：1）第1回集合研修2018年8月－9月。
2）第2回フォローミーティング2019年2月－3月。
3）第3回フォローミーティング2019年5月。

研修構成：研修はつぎのように構成される。
1）3日間の宿泊を伴う集中的な日程で構成される。①参加者に対する職場メンバーからの多面観察フィードバック（いくつかの項目に基づく自由記述による期待やアドバイス。参加者1人に対して15名前後）。②心理検査（TPI：東大版総合人格目録）－影響力分析。③ライフライン。④心理検査（TPI）－背景分析。⑤グループ研究。⑥個別カウンセリング。⑦ディスカウントの研究。⑧行動開発計画。これらのステップにより、特徴的な職務遂行行動とその影響のプロセスやメカニズムを整理して、リーダー開発における自己覚知の重要性と効果について理解する。職務遂行行動と、その背景にある価値観、情動をも含めた認知マップ、スキーマについて、能力開発的なカウンセリングの視点から自己覚知の支援を試みた。事例の取り扱いについては、本人から直接の了解を得た。
2）集合研修の後、6か月後に、研修参加者の行動計画の実施の状況について、各自が振り返り、その状況を相互に話し合う。このフォローのミーティングは、約1時間おこなった。
3）さらに、このフォローのミーティングの後、3か月後に、再度のミーティングをおこなった。参加者に対する職場からの多面観察フィードバックを再度実施した。このアドバイスを参考として、行動計画の実践状況を振り返り、確認することとなる。行動計画を再検討する。研修参加者が相互に話し合い、職場での理解につなげる。4時間の構成である。

【結果および考察】ここでは、研修参加者6名の、第3回目のフォローミーティングにおける、行動計画で実践できたことと、できなかったことの振り返りと、他のメンバーからの印象の概要を紹介する。

①H氏（男性。40代後半）。
実践できたこと：仕事の指示の内容が伝わったか確認する。
実践できなかったこと：経営者との会話で回りくどい言い訳と聞こえてしまう。
他メンバーからの印象：相手の反応を見ながら話している。
②I氏（男性。30代後半）。
実践できたこと:自分の考えを周囲に強要することが減った。
実践できなかったこと：業務を共有せず、自分でおこなってしまう。
他メンバーからの印象：強い言い方が減り、意見を聴く。
③N氏（男性。30代後半）。
実践できたこと：部下との接触回数を増やした。
実践できなかったこと：他部署のメンバーへのフォロー。
他メンバーからの印象:若手との接触を増やし、言葉を選ぶ。
④A氏（男性。30代前半）。
実践できたこと：他メンバーとの会話の頻度を増やした。発言する際には、感情的にならず、相手に配慮した。
実践できなかったこと：忙しいときには、配慮不足となり、助けることが不足する。
他メンバーからの印象：発言が増えた。
⑤K氏（男性。30代前半）。
実践できたこと：後輩のメンバーに、話しやすいように、声掛けをする。その上で、きちんと指導もする。
実践できなかったこと：キャリア面談になるような共感的な面談が不十分となった。
他メンバーからの印象：後輩と関わることが増え、言うべきことを言っている。
⑥S氏（女性。20代後半）。
実践できたこと:特に、新入社員との面談。相談にのること。
実践できなかったこと：他者と接するのが面倒に感じて、接触を避けがちとなる。
他メンバーからの印象：若手の話をよく聴いて、情況を知っている。

本研究では、3回にわたる研修により、行動計画の実践が可能となった。無論、今後も取り組んでいく行動課題も残されている。フォローとして、さらなる行動計画が考えられた。

研修の効果が課題となるが、1回のみの研修にとどまらず、その後も機会を用意して、フォローをおこなうことが大切である。自己の行動計画を意識する機会を増やし、実践について自分自身で意識することのできるメタ認知が重要である。また、職場メンバー同士の相互理解も欠かすことが出来ない。

【引用文献】1）Day, D.V.（2001）“Leadership development：A review in context,” *Leadership Quarterly*, Vol.11, No.4. pp.581-613.
2）Kegan, R. and Lahey, L. L.，池村千秋訳(2013)『なぜ人と組織は変われないのか　ハーバード流自己変革の理論と実践』英治出版，pp.162-189.
3）外島裕（2019）「行動開発における自己覚知の深化の研究」『商学集志』第88巻第4号、pp. 170－220.

注1）本研修のファシリテータは筆者がおこなった。
注2）本研究は、日本大学商学部個人研究費平成30年度「リーダー開発における自己覚知とスキーマ療法に関する研究」の一部である。

（としま　ゆたか）

産業組織の部署間で発生するコミュニケーション・エラーとその要因の検討

産業組織での行動をシミュレートする課題を使用した安全研修のケーススタディ

○工藤大介[1]　余村朋樹[1]　施桂栄[1,2]　細田聡[1,2]　井上枝一郎[1]
([1]公益財団法人大原記念労働科学研究所　[2]関東学院大学)

キーワード：集団間コミュニケーション，安全教育，ケーススタディ

【目的】産業組織におけるコミュニケーション・エラーについては，これまで個人内過程（Gibson et al., 1999）や集団内過程（大坪ら，2003）から説明がなされてきた。しかし，業務や組織構造の複雑化・多様化によって，部門や部署の間といった，集団間におけるコミュニケーション・エラーの重要性に近年言及がなされている（HR総研，2018）。本稿では実際の産業組織での安全研修において，産業現場におけるヒューマンエラー防止教育の一環として開発がなされてきた作業シミュレーション課題（井上・細田，2006；施ら，2013）を使用し，どのような集団間コミュニケーション・エラーが発生するのか，また，どのような要因がエラーへと繋がるのかについて探索的に検討を行った。

【方法】参加者はインフラ系事業者の従業員19名であった。方法は井上・細田（2006）に従い，安全研修の一環として実施された。具体的には，参加者をある組織に属する3つの課（J：ジャック課・Q：クイーン課・K：キング課と呼ぶ）に分け，トランプの「神経衰弱」を行うものであった。グループ間での競争・協働といった実際の組織行動をシミュレートすることを企図し，どの課も決められた得点（13点）を取らなければ組織は破綻するというものである。課題設定ならびにルールの概要を以下に示す。

各課で一人ずつ課長役を設定。課長役はカードを引くことは出来ないが，課題開始前の「現場視察」と，1クール（6試行）毎に行われる「課長会議」で，他課の課長役とのコミュニケーションを行う役割をもつ。カード引きは課長役以外のメンバーで，各課決められた順に一人ずつ行う。1試行に引けるカードは2枚であり，数字のペアが揃えば1点，自課のシンボルマーク（J・Q・K）のペアが揃えば3点である。シンボルマークのペアについては，1番最初に見つけた課には3点，2番目には2点，3番目には1点のボーナスを加算する。なお，他課のシンボルマークを1枚でも引いた場合はマイナス2点のペナルティとなる。カードは一定の配列（法則）で配置され，中に1枚だけペアにならないカードが含まれている。法則とそのカードを発見した場合には7点が加算される。各課が引いたカードと得点は試行毎に記録した。そして，本事例では課長役に特に着目し，現場視察や課長会議でどのような議題設定がなされるか，どのように議事進行がなされるか，各課長役の発言と行動について記録を行った。これらの記録を参照し，現場視察や課長会議でのコミュニケーション・エラーにつながる発言・行動について抽出を行った。

【結果】まず，開始前の現場視察時に各課長役の間で，「各課13点を取りながらも競争する」ことの確認，「カード引きを行う位置（ただし，右上や左上といった相対的な表現に留まる）」の確認と「カード情報は共有する」ことの確認が行われたが，「まずは好きにやって2回目の課長会議以降に考えよう」というQ課長の発言に最終的に合意した。1クール（1～6試行目）ではJ課がQのカードを引きペナルティとなった。1回目の課長会議の際にこの情報共有はなされたが，各課員は自主的に座標（例：A-1，A-2...）でカードの位置を把握していたのに対し，各課長は相対的な表現（例：右上から下に2番目）での情報共有を行っていた。2クール（7～12試行目）ではJ課がKのカードを引き，さらにペナルティを受けた。2回目の課長会議時では，シンボルマークの位置に関する情報を共有するかどうか議論となったが，最終的に情報は共有する方向で合意した。J課長の提案により，カードの位置について座標で表現することとした。3クール（13～18試行目）では，各課が自課のシンボルのペアを獲得した。3回目の課長会議で各課長は，獲得したシンボルの位置情報を共有しなかった。さらに，Q課長から「各課の座標の認識に齟齬がある」との指摘がなされたが，黙殺され，各課長が牽制し合う様子であった。4クール（19～24試行目）ではJ課が自課のシンボルと7点のボーナスカードを獲得した。4回目の課長会議では各課の点数情報の共有と，なぜJ課が独断でボーナスを取りに行ったかが議題となり，カードの位置情報に関する議論はなされなかった。5クール（25～30試行目）でK課が自課のシンボルのペアを引いた。5回目の課長会議では，カードの位置情報の共有の齟齬が見られたが，修正が試みられることはなかった。6クール（31～36試行目）に続く6回目の課長会議で，Q課長の指摘から，座標の再確認とカードの位置情報の修正が試みられた。この時，カードを取りきったため，存在しない列があることがK課長の指摘から明確となった。7クール（37～42試行目）に続く，7回目の課長会議で今後どのように得点を分配し，各課が13点ずつ獲得できるようにするか議論が行われた。しかし，ここで時間切れとなり課題終了となった。

【考察】まず，カードの位置情報について，各課内では座標を設定していたのに対し，各課長は最初の現場視察から2回目の課長会議まで，「上下左右」といった相対的な表現で議論を行っていた。その結果，各課間で配列の認識に齟齬が生じた。競争を意識した発言や，敢えて情報を出さないといった牽制から不正確な情報共有方法を続けたと考えられる。その後，座標を使った位置情報共有を行うことに合意したが，各課の座標に齟齬が見られた。つまり，共有情報が一致しないことによって各課長間で相互不信が生じ，座標認識に齟齬があるとの指摘の黙殺や，大きな得点となるシンボルマークの位置情報の非共有につながったと考えられる。次に，J課がボーナスカードを引いた際の課長会議では，なぜ相談せず，独断でボーナスを取りに行ったのかと議論がなされており，現場視察時に競争をすると合意をしながらも，非協力行動を許容しない構造が確認された。そして，各課長は相互不信から自課内でカードの位置情報について正当化を行い，他課長から認識のずれの指摘があっても，立ち止まり確認や修正を行えなかったと推察される。

本事例からは，情報を統制し，他課とやり取りを行う課長役がカードの位置情報について不正確な共有を行う，意図的に位置情報を共有しない，各課間での情報の齟齬を修正しないといった，集団間におけるコミュニケーション・エラーが確認された。競争を選択することや，相互不信が要因として考えられる一方，「抜け駆け」は許容しないといった構造が存在している点も興味深い。今後はなぜそのような行動をとったのか，課長役へのインタビュー等から背景要因について，より深く検討していく必要があるだろう。

（くどう だいすけ・よむら ともき・し けいえい・
ほそだ さとし・いのうえ しいちろう）

カロリーはどこに表示すべきか？

—カロリー表示位置が食品選択に及ぼす影響—

○庄子遼・杉田篤也・畠文槻・井上裕珠
（日本大学商学部）

キーワード：カロリー表示、消費行動、選択行動、健康意識

【目的】

消費者の健康のためには、無理なくカロリーの摂取量を減らす方法を考えることが重要である。低カロリー選択行動を促すための方法の一つとして、食品にカロリー数を表示することが挙げられるが、カロリー表示位置が重要であることが近年の研究で明らかになっている。Dallas, Liu and Ubel (2019)は、カロリーをメニュー名の左側に記載すると、右側表示および表示なしのときよりも、消費者の低カロリー食品選択が増えることを実証的に示した。文章を左から右に読む文化圏の消費者は、カロリーが左側に表示されていると、その情報を重視して選択を行うため、左側のカロリー表示が低カロリー選択につながるのである。

Dallas *et al.* (2019) は、レストランでのカロリー表記が一般的なアメリカで実験を実施しているが、日本では必ずしも一般的とはいえない。そこで本研究では、日本でも同様の結果が得られるかどうかを検討することを目的とする。カロリー数をメニュー名の左側に表示すると、右側や、カロリー表示がないときよりも、低カロリー選択が増えるだろう。

【研究 1 方法】

参加者　大学生 158 名(男性 88 名、女性 70 名、平均年齢 20.14 歳)。留学生 2 名を除く 156 名を分析対象とした。

実験計画　1 要因 2 水準(左／右条件)参加者間計画

条件操作　イタリアンレストランのメニューのカロリー表示の位置を条件間で変えることによって、条件操作を行った。左条件では、メニュー名の左側にカロリー数を表示し、右条件では、メニュー名の右側に記載された価格の右側にカロリー数を表示した。

従属変数　参加者には、パスタ、サラダ、デザート、ドリンクの全カテゴリーから、注文するメニューを 1 つずつ選択させた。選択メニューの合計カロリー数を従属変数とした。

手続き　授業時間中に「大学生の食行動に関する調査」を実施し、参加者には左条件もしくは右条件の質問紙をランダムに配布した。デモグラフィック項目等に回答を求めたのち、イタリアンレストランでパスタセットを選ぼうとしているという場面を想像するように教示し、注文するメニューを選択させた。続いて、メニューに関する複数の質問に回答を求め、実験は終了した。後日ディブリーフィングを実施した。

【研究 1　結果と考察】

操作チェック　左条件では右条件よりもカロリー数に注目していたかどうかを検討するために、メニューを見てカロリーが最初に目に入ったかどうか(得点が大きいほどあてはまる)を尋ねる項目への回答を分析した。その結果、左条件(M=2.96, SD=2.17)の方が右条件(M=2.21 SD=1.63)よりも、最初にカロリー数に注目しており(t(141.01)=2.42, p=.017)、操作には成功していたと考えられる。

仮説の検討　左条件と右条件で合計カロリー数に違いがあるかどうかを検討するために、対応のない t 検定を実施した。その結果、左条件(M=1091.28, SD=95.52)と右条件(M=1100.90, SD=97.00)には、合計カロリー数の違いはなく(t(153.97)=0.62, p=.53)、仮説は支持されなかった。

考察　本研究では、仮説を支持する結果は得られなかった。選択されたパスタの 60%が 3 種類に集中していたように、参加者に好まれるメニュー数が少なかったために条件操作の影響を捉えられなかった可能性がある。そこで研究 2 では、メニューを再考する。また、カロリーを気にするかどうかは、個人差が大きいと考えられるため、健康志向の程度を尋ねる項目を追加する。さらに、カロリー表示なし条件を設け、カロリー表示の効果をさらに詳細に検討する。

【研究 2 方法】

参加者　大学生 66 名(男性 39 名、女性 27 名、平均年齢 20.82 歳)。留学生 2 名を除く 64 名を分析対象とした。

実験計画　1 要因 3 水準(左／右／なし条件)参加者間計画

条件操作　左条件と右条件は研究 1 と同様であり、なし条件はカロリー数を表示しなかった。

従属変数および手続き　研究 1 と同様であった。

【研究 2　結果と考察】

仮説の検討　左／右／なし条件で合計カロリー数に違いがあるかどうかを検討するために、一元配置分散分析を実施した。その結果、主効果が有意傾向であった(F(2,60)=2.55, p=.086)。多重比較の結果、左条件(M=1146.52, SD=251.32)は、なし条件(M=1312.45, SD=234.42)よりも合計カロリー数が有意に低かった(p=.032)。左条件と右条件(M=1192.59, SD=240.3697.00)および、右条件となし条件には、合計カロリー数の違いは見られなかった。そのため、仮説は一部支持された。

探索的検討　食事の際に健康志向を意識する程度によって、カロリー表示位置が低カロリー選択に及ぼす影響が異なるかどうかを検討するために、食事をする際にカロリー・糖質量・ヘルシーさを気にする程度(得点が大きいほど気にする; α=.88)の合算平均値を健康志向の程度として、中央値(Me=3.00)分割し、3(条件)×2(健康志向:高/低)の分散分析を実施した。その結果、条件の主効果が有意傾向であり(F(2,57)=2.96, p=.060)、健康志向の主効果が有意であった(F(1,57)=6.36, p=.015)。条件×健康志向の交互作用効果は有意ではなかったが、試みに単純主効果検定を実施したところ、健康志向の低い参加者において、左条件(M=1144.36, SD=255.44)の方がなし条件(M=1413.50, SD=175.52)よりも、合計カロリー数が有意に低かったが(p=.009)、健康志向の高い参加者ではそのような効果は見られなかった(図 1 参照)。

考察　本研究では、一部仮説を支持する結果が得られた。健康志向性が低い消費者には、左側にカロリー表示を行うことが有効である可能性を示唆した点に意義があるだろう。

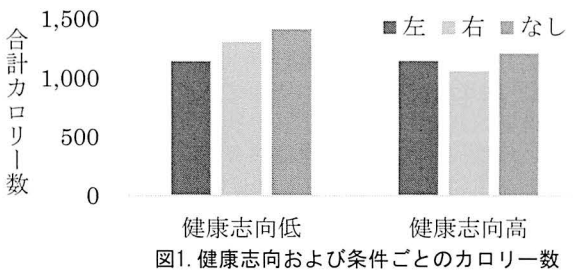


図1. 健康志向および条件ごとのカロリー数

【引用文献】 Dallas, S. K., Liu, P. J., & Ubel, P. A. (2019). Don't count calorie labeling out: Calorie counts on the left side of menu items lead to lower calorie food choices. *Journal of Consumer Psychology*, 29(1), 60-69.

(しょうじりょう・すぎたあつや・はたふみき・いのうえゆみ)

PCキーボードのキースイッチの物理パラメータとユーザビリティの関連分析

○富田　新
（明星大学心理学部心理学科）
キーワード：PCキーボード，キースイッチ，物理パラメータ，ユーザビリティ評価

【問題】富田・大原(2015)は、6台のノートPCについて評価言葉を用いた質問紙調査を行い、ユーザのキーボードのキースイッチの押し心地（ユーザビリティ）評価の特徴について解析した。タッチタイピングができるエキスパート35名と、できないノービス40名、計75名の参加者の評価データの解析から、以下のような知見が得られた。(1) いずれのPCにおいても、キーボードの押し心地評価において抽出される因子はほぼ共通しており、次の5因子であった。スムーズ感、ストローク感、クリック感、弾力感、操作感。(2) エキスパートとノービスの2群間で、キースイッチの押し心地評価がどのように異なっているかについて検証した。その結果、ストローク感やキーの固さ(柔らかさ)についてはエキスパートの方が高く評定し、クリック感や操作感についてはノービスの方が高く評定する傾向があることがわかった。残された課題は、各ノートPCのキーボードのキースイッチの物理特性（物理パラメータ）と、キーの押し心地（ユーザビリティ）評価との関連性を探ることであった。キーの物理パラメータとキーの押し心地評価の関連を調べることができれば、キーボード設計において有用な指針を得ることができる。

【目的】6台のノートPCのキーの物理特性（差動圧曲線から得られる幾つかの物理パラメータの値）と各PCのキーの押し心地評価（心理評定値）との関連を、重回帰分析を用いて調べた。重回帰分析の結果に基づき、エキスパート、ノービスの各群において、キーのどの物理パラメータがどのような押し心地評価につながっているのかを検証した。

【方法】富田・大原(2015)の実験で得られたデータを使用し、新たに重回帰分析を行った。重回帰分析の説明変数には6台のPCの物理パラメータが使用された。**説明変数**：差動圧曲線をもとに、キーの押し心地をある程度規定していると考えられる物理パラメータの幾つかをPCごとに測定し、重回帰分析の説明変数として投入した。測定された物理パラメータは16種類(V1～V16)であった。作動圧曲線の読み取りから直接得られたパラメータがV1～V12、また、上記のパラメータを組み合わせて新たに算出されたパラメータ（2次パラメータ）がV13～V16であった。2次パラメータはいずれもキーボードの設計において重視されていたパラメータで、その数値如何でキーの押し心地評価が変わることが経験的に知られていた。その後、物理パラメータの内部相関の精査を行い、説明変数の絞込みを行った。説明変数として採用されたのは、以下の9つのパラメータであった。V1（初圧(f_0)）・V2（ピーク荷重(f_P)）・V3（ドロップ荷重(f_D)）・V8（ピーク位置(S_P)）・V9（ドロップ荷重位置(ΔS_1)）・V13（クリック率(Click Ratio)）・V14（ピーク勾配($\tan\theta_1$)）・V15（ドロップ勾配($\tan\theta_2$)）・V16（終圧勾配($\tan\theta_3$)）。**目的変数**：富田・大原(2015)の分析に基づき、キーボードのキースイッチの押し心地（ユーザビリティ）を規定すると思われる基本因子5因子の評定平均値（全体平均値）と、それぞれの因子に因子負荷の高かった質問項目の評定平均値を群ごとに算出し、目的変数とした。・スムーズ感・・・押し始めがスムーズ(問1)、軽い(問2)、なめらか(問3)・ストローク感・・・キーが深い(問4)、キーが厚い(問7)、キーに高さがある(問14)・クリック感・・・クリック感がある(問5)、底付き感がある(問8)、確認感がある(問9)、どこを押しても引っかかりがなく確実にON(問19)・弾力感・・・・反発性がある(問10)、弾力がある(問13)・操作感・・・操作感が良い(問12)、指にフィットする(問15)、楽(問16)、キーが固い(問6)、疲れる(問17)。

【結果】説明変数として選択された物理パラメータの中には、内部相関の高いものが若干含まれていた。内部相関の高いパラメータが含まれることにより、妥当性の低い重回帰モデルが採択される危険性も高まる。今回の分析では、ステップワイズ法による変数選択と多重共線性診断を行い、統計的に見て妥当と思われる重回帰モデルのみを抽出した。エキスパート、ノービスの両群において、統計的に妥当かつ有意な重回帰モデルが得られたのは、クリック感と弾力感に関連した評定項目のみであった。本稿には、エキスパートのクリック感とノービスの弾力感の全体平均値の結果のみを記載する。

・クリック感（エキスパート）= .837×V3(ドロップ荷重)
(R^2=.626, F=9.373, p=.038：係数の検定 t=3.061,p=.038)
・弾力感（ノービス） = .850×V2(ピーク荷重)
(R^2=.654, F=10.439, p=.032：係数の検定 t=3.231,p=.032)

【考察】複数の重回帰分析の結果より、エキスパートにおいては、ドロップ荷重の大きなキーほど、よりクリック感・確認感が高まること、ドロップ勾配が大きいほどキーが固く感じられることが示唆された。また、ノービスでは、ピーク荷重が大きいキーの方がより弾力感が高まること、ドロップ勾配が大きいほどキーがより固く感じられることが示唆された。これら以外の心理評定値については、残念ながら統計的に妥当な重回帰モデルを得ることはできなかった。以上の結果は、エキスパート、ノービスそれぞれの好みの押し心地のキーを設計する上で1つの指針となる。今回の分析の問題点は、ケースに当たるノートPCの台数が少なすぎる（6台）ということである。35名のエキスパートと40名のノービスから得られた各ノートPCの心理評定値（平均値）の信頼性はそれなりに高いと考えられるが、ケース数の少なさは如何ともしがたい。今後は、ノートPCの台数（ケース数）をより増やした上で、分析の精度・信頼度を上げていく、という方向が考えられる。また、実際にパラメータを操作しながら、キー押しの心理評価がどのように変わるかを、精神物理学的測定法等により追跡していく、という方向も考えられる。

【文献】富田新・大原貴弘 2015 PCキーボードの操作性評価に関する研究，応用心理学研究，41，No. 1，87-97.

【謝辞】本稿は、平成18年度～平成20年度に行われたアルプス電気（株）による委託研究（「入力機器の操作性に関する研究」：研究代表者：いわき明星大学科学技術学部システムデザイン工学科・教授　清水信行：研究協力者：同大学人文学部心理学科・准教授　富田　新：同学科・准教授　大原貴弘：同大学理工学部機械工学科・修士課程2年　東　哲也：所属・肩書きは当時のもの）の成果に基づくものである。研究実施に当たっては、アルプス電気（株）より多大なご支援・ご協力をいただいた。ここに記し、深く感謝の意を表します。

（とみだ　あらた）

ビジネスマナーの効力感が就労者のウェルビーイングに与える影響

中嶋葉子
（成城大学大学院文学研究科）
キーワード：ビジネスマナー，自己効力感，well-being

【目的】近年，ビジネスマナーを中心としたマナー教育を初年度教育やキャリア教育と絡めながら実践している大学が多くなってきた(加野，2014)。文部科学省が後援する「ビジネス能力検定（B検）ジョブパス」の試験内容には，習得すべき基礎的な内容にビジネスマナーが含まれている。このようにビジネスマナーは習得すべき基礎能力であると広く普及されているが，ビジネスマナーに関する研究は少ない。

また，ビジネスマナーは就労者及び就労希望者に基礎能力として求められる中，義務としての普遍性やルールとして制度化された権威を持っているわけでもなく(加野，2014)，どのようなビジネスマナーがベストであるかについて一概に言うことはできない。主観的に「できる」と実感している程度である自己効力感については，測定が可能かつ容易である。

そこで本研究では，ビジネスマナーの自己効力感に注目しビジネスマナーの自己効力感を測定する質問紙「ビジネスマナー効力感調査票」を作成し調査を行う。また，若年就労者が基礎的なビジネスマナーを習得することによる主観的効果を検討するため「ビジネスマナー効力感得点の高い若年就労者の主観的幸福感得点は高い」という仮説を立て，他尺度を用いて調査を行い検討する。

【方法】

（1）調査対象

2018 年 6 月に東京都内に勤務する若年就労者 134 名（男性 56 名，女性 78 名）を対象に調査を行った。未回収や記入漏れのあるものを除き 119 名（男性 47 名，女性 72 名）を分析対象とした。平均年齢は男性 25.60（SD 2.14）歳，女性 25.25（SD 2.17）歳であった。

（2）調査内容

ビジネスマナー効力感調査票

若年者就職基礎能力習得のための目安策定委員会報告書（若年者就職基礎能力習得のための目安策定委員会，2004）にて報告されたビジネスマナーに関する基礎能力習得の目安にある項目群で構成される質問紙を作成した。19 項目を 7 件法で回答する形式である。

主観的幸福感尺度

伊藤ら（2003）によって作成された主観的幸福感尺度を用いた。WHO の開発した「心の健康自己評価質問紙（Subjective Well-being Inventory）の項目を整理して作成された尺度で 12 項目を 4 件法で回答する形式である。社会人を対象にした調査で信頼性と妥当性が確認されている。

自尊感情尺度

山本ら（1982）によって作成された自尊感情尺度を用いた。ローゼンバーグ（1965）により作成された自尊感情尺度の 10 項目を山本らが翻訳したもので，大学生以上の成人を対象とし，5 件法で回答する形式である。

フェイスシートでは性別・年齢・職種の記入を求めた。

【結果】

ビジネスマナー効力感調査票 19 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化及び因子の解釈可能性から 2 因子構造が妥当であると考えられた。再度 2 因子を仮定した主因子法 Promax 回転による因子分析を行った。回転前の 2 因子で 19 項目の全分散を説明する割合は 73.74％であった。第 1 因子は 12 因子で構成され，「名刺の受け方・渡し方が適切にできる」など人と直接対面して行う行動の項目が高い負荷量を示していたため「対面ビジネスマナー因子」と命名した。第 2 因子は 7 因子で構成され，「電話をかけるときの適切な慣用的な言い回しができる」など電話を使って行う行動の項目が高い負荷量を示していたため「電話ビジネスマナー因子」と命名した。

第 1 因子，第 2 因子それぞれに高い負荷量を示した平均値を算出し，対面ビジネスマナー得点　電話ビジネスマナー得点とし，内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ，対面ビジネスマナー得点で α＝.96，電話ビジネスマナー得点で α＝.97 と十分な値が得られた。

また，t 検定による男女差の検討を行った。対面ビジネスマナー得点においても電話ビジネスマナー得点においても男女間の有意な差は見られなかった。

対面ビジネスマナー得点と電話ビジネスマナー得点を合算したビジネスマナー効力感得点と，主観的幸福感尺度によって得られた主観的幸福感得点，自尊感情尺度によって得られた自尊感情得点の各得点間の相関分析を行ったところ，全ての組み合わせに有意な相関が確認された。

ビジネスマナー効力感得点が主観的幸福感得点に与える影響を検討するために Amos 26 を用いて共分散構造分析を行った。ビジネスマナー効力感は主観的幸福感に直接的に影響を与えている一方で自尊感情を介しても影響を与えており直接効果よりも間接効果の方が大きい値となった。

【考察】

本研究ではビジネスマナー効力感調査票を作成し若年就労者を対象に調査を行った。その結果，対面ビジネスマナー因子と電話ビジネスマナー因子の 2 因子が見出された。また他尺度との検討を行ったところ，ビジネスマナー効力感は主観的幸福感及び自尊感情と相関関係が確認され，ビジネスマナー効力感は主観的幸福感に直接的に影響を与えている一方で自尊感情を介しても影響を与えており直接効果よりも間接効果の方が大きいという結果が示された。ビジネスマナー効力感の高い若年就労者の主観的幸福感は高いという仮説は支持された。本研究により若年者就労者が基礎的なビジネスマナーを習得することの主観的効果の一端が示された。

【引用文献】

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　心理学研究，74，276–281.

加野芳正 編著 2003 マナーと作法の社会学 東信堂

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image.* pp16-35. Princeton University Press, New Jersey.

山本真理子・松井豊・山城由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教心理研，30，64–68.

若年者就職基礎能力習得のための目安策定委員会 2004 若年者就職基礎能力習得のための目安策定委員会報告書 中央職業能力開発協会

（なかじま ようこ）

現代における理想のリーダーシップとは

佐藤祐弥　山口真莉　阿部花菜子　長部楓　佐藤優希　本多祥悟　外島裕
（日本大学商学部）

キーワード：サーバントリーダーシップ　変革型リーダーシップ　インフォーマル・リーダーシップ

【目的】本論考では現代における理想のリーダーシップを考えていく。理想のリーダーシップとは何か。市場が成熟して経済が行き詰っている現在は、新たな突破口を見つけることに誰もが苦戦している。こうした時代では、状況や環境の変化を察知することが必要である。私たちは、そのような状況を解決するリーダーシップとして、上司と部下が寄り添い、思ったことを話し合える関係を作るサーバントリーダーシップ、変革することに注視し革新的で創造的な意見を取り入れる変革型リーダーシップの２つの有効性について考えた。

【方法】現代の経営環境を明らかにした後、サーバントリーダーシップと変革型リーダーシップ、２つのリーダーシップを文献や実際の企業の情報を踏まえて比較しながら、現代における理想のリーダーシップを探っていく。

【結果】現在の経営環境は「VUCA 時代」と呼ばれている。VUCA とは変動性（Volatility）、不確実性（Uncertainty）、複雑性（Complexity）、曖昧性（Ambiguity）の４つの言葉を省略した造語である。この言葉は現在の経営環境を象徴する言葉として世界中で頻繁に用いられている。そして、現在、アメリカでは「権限に頼らないリーダーシップ（インフォーマル・リーダーシップ）」が注目されており、それぞれの人が主体的に活動していくことが重要だと考えられている。ここで言うインフォーマル・リーダーシップとは、権限や役職の力に依存せず、人々の課題解決をもたらす新たな取り組みを、多様な他者と連携しながら推進していくことである。

変革型リーダーシップは、組織変革を求める組織にはとても有効的なリーダーシップである。要素はカリスマ性、志気を鼓舞する動機づけ、知的刺激、個別配慮性の４つだ。そのうちカリスマ性の力は組織を崩壊させる危険性を持ち合わせている。ダイエーの例を挙げると、社長である中内功は強いリーダーシップ、カリスマ性から変革をもたらしダイエーを大企業に成長させた。しかし、その強力な変革型リーダーシップは組織をワンマン体制にしてしまい、流動的なニーズの変化に対応できずにダイエーは衰退していった。このように変革型リーダーシップは、カリスマ性が組織変革をもたらし、組織崩壊をもたらす要因になっているのである。

一方サーバントリーダーシップは、一見理想主義的リーダーシップ、つまり業績よりも職場内環境に重きを置いているように思われるが、変革にも有効である。

資生堂の 12 代目社長池田守男はサーバントリーダーシップを基に、逆ピラミッド型組織をつくった。社長自らが社員に対し奉仕し、徹底的に社員を支えるというリーダーシップである。社員に対して行われる逆ピラミッド型組織の意識改革のひとつが、販売店の POS 導入だ。POS 導入により一つ一つの商品に視点をあてるようになり、店舗やお客様の視点にあった提案をし、店頭を支える営業をするようになった。お客様のためにどうすれば役に立つのかという、「仕える」という気持ちが社員に芽生えたのである。

また、池田はサーバントリーダーシップの自分の考え方を社員全員に理解してもらおうと、社員がいつでも見られるようイントラネットで想いを伝えることにした。このようなメッセージに対し、社員たちは池田のメッセージの感想や具体的な改善提案、本社に対する希望なども送り、とても有益な場になったという。すぐに実行できるような提案については、即座に改善にうつるよう池田は心掛けた。この取り組みは、サーバントリーダーシップの 10 の属性の「傾聴」にあてはまる。社長が自らサーバントな姿勢で、社員との距離を縮め、改善提案をすぐ実行することで、社員にとって働きやすい環境が生まれる。それこそが、部下に対するサーバントな姿勢なのだ。その結果、逆ピラミッド型組織の頂点に存在するお客さまに集中して対応することができる。この社長のサーバントな姿勢が、会社にもお客さまにも良い影響を与えている。実際に資生堂も、このサーバントリーダーシップを取り入れたことで業績が回復した。サーバントリーダーシップは、社員の働きやすい環境づくりをすることで成果をあげることができるのである。

【考察】ここまで変革型リーダーシップとサーバントリーダーシップを紹介してきたが、２つの間には決定的な違いがある。それは変革型リーダーシップの構成要素の１つであるカリスマ性だ。ダイエーの例のように、変革型リーダーシップを発揮したとしても、４要素の中のカリスマ性だけが一人歩きしてしまうと、企業の衰退につながってしまう。カリスマ性が持つ危険性を示している。また、カリスマ性にはメンバーを惹きつける力があるため、この要素がメンバーの自主性を妨げてしまう可能性がある。一方で、サーバントリーダーシップの資生堂の例からわかるように、カリスマ性がなくても組織は十分に変革し得る。このことから、変革型リーダーシップよりサーバントリーダーシップは危険が少なく、メンバーの自主性も尊重されるため、優れているといえる。これは前述したインフォーマル・リーダーシップと共通しており、現在の経営環境に適しているといえる。

以上のことより、我々は、サーバントリーダーシップが現代における理想のリーダーシップであると考える。ただし、カリスマ性は状況によって組織を変革させる際に有効に働く場合もあるため、今後さらなる研究が必要である。

【引用文献】

・池田守男・金井壽宏（2007）『サーバントリーダーシップ入門』かんき出版
・金井壽宏（2005）『リーダーシップ入門』日本経済新聞出版社
・佐久間祐二（1999）『ダイエー中内帝国の終焉』エール出版社
・山口裕幸（2016）「職場集団におけるリーダーシップ」田中堅一郎（編）『産業・組織心理学エッセンシャルズ 改訂三版』ナカニシヤ出版　pp. 127-157
・田畑俊明（2005）『ダイエーの蹉跌―企業参謀の告白』日経 BP 社
・藤田晶久（2007）「顧客志向の組織運営におけるサーバント・リーダーシップについて」『中京経営紀要』第７号 pp. 47-62
・日本能率協会マネジメントセンター研修ラーニング事業本部（2017）『インフォーマル・リーダーシップ涵養のための提言』日本能率協会マネジメントセンター
・Robert K Greenleaf　金井壽宏監訳　金井真弓訳　（2008）『サーバントリーダーシップ』英治出版

（さとうゆうや・やまぐちまり・あべかなこ・おさべかえで・さとうゆうき・ほんだしょうご・としまゆたか）

親会社と子会社・関連会社間における安全文化の評価方法の検討

○余村朋樹[1]　工藤大介[1]　施桂栄[1,2]　細田聡[1,2]　井上枝一郎[1]
([1]公益財団法人大原記念労働科学研究所　[2)]関東学院大学)
キーワード：安全文化，産業組織，組織間

【研究の目的】 産業界では分業や外注化が進んでおり，複数の組織が協働することで生産やサービスの提供といった組織活動を行っている。例えば，エネルギープラントの保守管理は，作業の計画から実施までを複数の組織で分担して遂行している。このように活動に関わる組織が多くなれば，その分，活動の中で伝達される情報の精度は低下すると推察される。例えば，発注組織の安全方針を協力会社の作業現場に周知することや，逆に協力会社が受け持つ作業現場に存在するリスク情報を発注組織へ伝達することは，１つの組織内で全てが完結している場合よりも困難になると考えられる。つまり，組織の構造が重層的になれば，「組織内」だけでなく「組織間」にもリスクが発生することになる。さらに，同一企業であっても，本社，支社，事業場と分かれているならば，そこにも組織間リスクは発生する。そのため，全体の安全性を高めるには，各組織を包括した組織間全体での取り組みが重要となる。そこで近年筆者らは，組織間全体の安全文化を評価・醸成する方法に関する研究を行っている(余村ら，2018 など)。

ところで，実際の組織活動は様々な組織間構造で行われている。そのため，安全文化評価をより妥当なものにするには，その組織間構造や運用状況などに合った調査方法を用いるべきである。そこで本研究は，ある産業組織の組織間構造に合った安全文化評価方法を検討し，さらにそれを用いて実際に評価を行うことを目的とする。

【方法】 産業組織の安全文化の評価は，Safety Culture Assessment Tool （以下 SCAT）(余村ら，2015；yomura et al., 2016 など）を用いた。これは安全に関する 10 の分野について職層間もしくは組織間で相互評価を行うもので，結果は評定値得点と共有性得点で示される。

調査対象は，あるサービスを一般消費者に提供する国内のグループ組織で，親会社と複数の子会社（各地域），さらに別資本も入っている複数の関連会社（各地域）で構成された。親会社は商品開発，システム設計，サービス実施計画，管理等を行う。子会社と関連会社は各地で実際にサービスの実施を行う。

まず，親会社の調査担当者と打ち合わせを繰り返し実施し，質問項目のワーディングを行うとともに，SCAT の評価構造を対象組織に合うように検討・調整した。例えば，当該グループは親会社と各地の子会社との間に統括管理を行う中間組織が入っている。そこで当初は各組織内の相互評価に加え，３組織間の相互評価を同時に行うことを検討した。しかし，評価構造が複雑になり回答し難くなること，回答に要する時間が長くなり過ぎること，さらに中間組織は安全に影響を及ぼすと思われる業務にはほぼ関わっていないことなどから，調査対象から中間組織を省くことにした。一方，子会社・関連会社の各組織内は，管理者（経営），責任者（サービス実施管理），作業者（サービス実施）で構成されている。この組織内の安全文化を評価するためには，組織内の各職層が相互にどのように認識しているかを把握することが重要である。また，様々な施策を指示する親会社の認識が，子会社・関連会社の各層の認識とどの程度一致しているかの確認も求められる。このような当該組織の構造や運用状況，さらには回答の負担などを総合的に判断し，本調査は最終的に親会社と，各子会社・関連会社内の３職層（管理者，責任者，作業者）の計４層で相互評価を行うことにした。主な分析は「親会社と子会社の組織間」と「親会社と関連会社の組織間」に分けて実施した。

尚，本質問紙調査は，所属機関の倫理審査委員会の承認を受けるとともに，調査対象組織ならびに回答者の同意を得た上で実施した。また，個々人の回答内容が明らかにならないようプライバシーの保護に最大限の配慮を行った。

【結果】 当該グループ組織の総合評価を行ったところ，これまでに SCAT を用いて評価した他の産業組織と比べ，全体的に評定値得点も共有性得点も低かった。次に子会社の組織間と関連会社の組織間に分けて分析すると，子会社組織間は相対的に評定値得点が低く，関連会社組織間は共有性得点が低い結果となった。子会社組織間の評定値得点の低さは，特に親会社に対する評価の厳しさによるところが大きいが，親会社の自己評価も非常に低かった。関連会社組織間については，組織内評価（特に作業者層に対する評価）は全国の産業組織と比べても高かった。しかしその一方，親会社からの評定値得点が低いため，組織間での共有性得点が低くなった。

続いて評価分野毎に分析したところ，例えば「情報経路・コミュニケーション」分野について，子会社ならびに関連会社の組織内（３層）評価は高いが，親会社との組織間評価は両者とも極めて低いなど，幾つかの特徴的な結果が得られた。

【考察】 今回の調査対象組織においては，親会社と子会社・関連会社の間の安全に関する相互認識のズレが極めて大きい。どちらの評価がより妥当であるかは，別途ヒアリング調査等で具体的な状況や背景にある問題を把握した上で判断する必要がある。仮に，親会社による評価が妥当で，子会社・関連会社の自己評価（組織内評価）が高過ぎる場合，親会社が指示する安全活動の必要性は子会社・関連会社に理解されない可能性がある。逆に，親会社が子会社・関連会社の状況を把握出来ていない場合，親会社の指示する活動が現場に合うものになっているか確認する必要がある。

いずれにしても，対策は具体的状況を確認した上で検討すべきであるが，例えば情報共有のインフラ整備や，組織間での人材交流など，親会社と子会社・関連会社がお互いの状況を理解するための方策を導入することが望ましい。

以上，本研究では，組織間構造などを考慮し，親会社従業員と，子会社・関連会社の組織内３層の計４層で相互評価することにした。これにより，幾つかの安全文化上の特徴を抽出することが出来た。今後も様々な構造の重層的産業組織でデータ収集と分析を行い，知見を蓄積することが求められる。

【引用文献】 余村朋樹，細田聡，井上枝一郎．産業組織における安全文化の現状把握に関する検討－職位間におけるコミュニケーションギャップという指標を導入して－，応用心理学研究，40(3)，194-202，2015

【謝辞】 本研究は JSPS 科研費 JP26380863 の助成を受けた。

（よむら　ともき・くどう　だいすけ・し　けいえい
・ほそだ　さとし・いのうえ　しいちろう）

2000年三宅島噴火から13年後の被災者の精神健康

○　大森哲至（帝京大学 外国語学部）田宮憲（帝京大学 短期大学）　岩井美路子（湘南歯科衛生士専門学校）

キーワード：自然災害 精神健康　GHQ28

【目的】2000年に起こった東京都三宅島の噴火は、15年という長期間にわたり人体や植生に有毒な火山ガスの放出が継続するなど火山学的にも極めて特異な噴火であった。2000年三宅島噴火の被災者のように、継続する自然災害下で生活する被災者の精神健康と支援対策に関する研究は、国内・海外を問わず少ないのが実情である。

その例外は大森（2010）、大森・藤森（2011）などの研究である。これらの研究では、日本語版精神健康調査票28項目版（以下GHQ28）を使用し、継続する自然災害下で暮らす三宅島被災者の精神健康状態について、災害から7年後、9年後と縦断的に検討している。これら研究の結果では、いずれも被災者の6割以上に精神健康の悪化の疑いのあるとされるハイリスク者が認められている。また精神健康の回復を抑制している要因として、継続する自然災害との関わり、例えば、継続する火山ガスの放出による、生活再建の困難、仕事の再開の困難、経済的な回復などの困難、生きがいの喪失などが関係していることが見出されている。このことは一過性の自然災害の被災者の精神健康状態よりも悪化、持続している可能性が実証研究から見出されている。

しかしながら、これまでの先行研究の結果では、災害から9年以上が経過する時点でも三宅島被災者の精神健康の回復は認められていないのが実情である。したがって、時間的な経過とともに、被災者の精神健康状態がどのように変化していくのかについては、未だに解明されておらず課題を残している。以上のような課題を踏まえ、本研究では2000年三宅島噴火の被災者を対象とし、13年後の被災者の精神健康状態について解明することを目的とした。

【方法】実施時期：本調査は、2000年三宅島噴火から13年3ヵ月後の2013年9月3日から7日まで、13年9ヵ月後の2014年3月18日から3月22日までに実施した。
調査対象者：東京都三宅村坪田地区に住む20歳以上の住民を調査対象者とした。
調査方法：本研究は複数の調査員が調査票を住民に直接配布し、数日後に回収する配布回収法を使用した。
調査内容：調査票では、①対象者の個人的特性、②災害の被害程度、③現在の状態、④ストレスイベント、⑤精神健康状態について質問した。被災者の精神健康の測定尺度には日本語版GHQ28を使用した。

【結果】回答者数：有効回答者数は204名、回収率76.4%であった。回答者の基本属性：回答者の性別は男性が91名（44.6%）女性が113名（55.4%）であった。年齢は21歳から89歳まで分布しており、平均年齢は64.8歳（SD=13.5）となっていた。回答者の職業は無職（29.4%）、農業（17.6%）、パート（17.2%）、専業主婦（12.7%）、自営業（8.8%）、会社員（4.9%）公務員（2.5%）、その他（3.4%）、公務員（2.5%）となっていた。
12年後の被災者の精神健康：本研究で使用したGHQ28では、精神医学的障害を有する事例あると判定される閾値点は6点以上である（中川・大坊, 1985）。この判定基準にしたがい6点以上をハイリスク者、6点未満を非ハイリスク者に分類した。その結果（図1）、三宅島被災者の噴火から12年後のハイリスク者の割合は50.5%になっていた。各年齢層のハイリスク者の比率の違いを調べた結果、高齢者（65歳以上, 70.9%）と高齢者以外（65歳未満, 42.6%）で有意差が認められ、高齢者のハイリスク者の割合が高かった（$P<.001$）。

その他のハイリスク者の比率で有意差の認められた項目は、ひとり暮らしをしている（$P<001$）、居住区が高濃度地区だった（$P<.05$）、健康状態が悪い（$P<.001$）、住宅の被害が残っている（$P<,001$）、仕事が順調でない（$P<.001$）、世帯収入が減少した（$P<,001$）、生活満足度が低い（$P<,001$）、日常生活でストレスを感じている（$P<,001$）などであった。

ハイリスク者の発生に寄与しているリスク要因を特定するため、多重ロジスティック回帰分析を実施したところ、健康状態が悪い（2.68倍）、生活満足度が低い（1.79倍）、日常生活でストレスを感じている（0.41倍）などの項目で有意差が認められた。

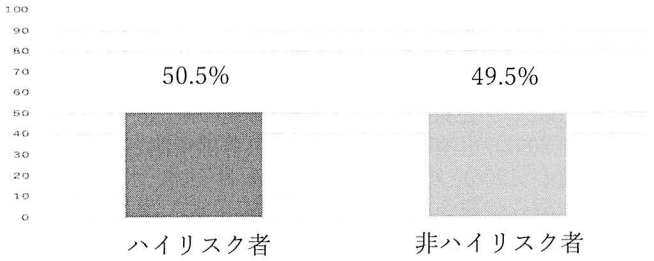


図1．三宅島被災者の13年後のハイリスク者の比率

【考察】本研究では、継続する自然災害下で暮らす2000年三宅島被災者の精神健康状態を明らかにするため、GHQ28を用いて調査した。分析の結果、2000年三宅島噴火の被災者のハイリスク者の割合は50.5%と判定された。

大森（2010）、大森・藤森（2011）では、2000年三宅島噴火の被災者を対象に、2000年の噴火から7年後と9年後の被災者の精神健康状態について測定している。それら結果では、三宅島の被災者のハイリスク者の割合は7年後では63.4%、9年後では60.0%となっており、12年後の三宅島の被災者の精神健康状態は、回復している傾向が認められた。しかしながら、日本の一般成人を対象にしているGHQ28の結果では、ハイリスク者の割合は14%と報告されている（中川・大坊, 1985）。したがって、このような一般成人の結果と比較すると、三宅島の被災者のハイリスク者の割合は、噴火から13年が経過しても依然として大きく上回っていることが示された。

【引用文献】

・大森哲至（2010 繰り返される災害下での精神健康の問題 −2000年三宅島雄山噴火後の坪田地区住民の精神健康について− 実験社会心理学研究　第50巻1号
・大森哲至・藤森立男（2011）繰り返される自然災害と被災者の長期的な精神健康の問題　−2000年三宅島雄山噴火後の坪田地区住民の精神健康について− 応用心理学研究 第36巻2号

本研究の調査は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号24530858 研究代表者：藤森立男）からの支援を受けた。

（おおもり てつし・たみや けん・いわい みちこ）

青年の抱く自尊感情に関する研究(Ⅰ)

－児童期のつらい出来事に対する両親の対応を通して－

○尾形和男[1]　増南太志[2]

([1]埼玉学園大学　[2]埼玉学園大学)

キーワード：青年の自尊感情，児童期のつらい出来事，両親の対応

【目的】青年の自尊感情は自分らしく生きること，友人関係を良好に保つこと，そして大学生活そのものを有意義なものとして過ごすために重要な役目を持つ。自尊感情そのものの形成要因については家庭の中にその基本を置く研究が見られる。その中でも親の影響を取りあげる場合が見られる，しかも父親よりも母親の影響力が強いとする指摘が多い(例えば，渡邊・平石，2007;小玉，2010;春日・宇都宮，2011)。本研究ではこのように視点に基づいて，児童期のつらい出来事に対する両親の対応の仕方をとりあげ,父親・母親それぞれの対応と両親間の対応の一致度に焦点を置き,子どもの有能感と関連する自尊感情と他者軽視形成への影響力を検討する。

【方法】(1)調査対象:埼玉県某大学学生 178 名(男子 79 名，女子 98 名，不明 1 名:平均年齢 18.87 歳　SD＝1.13:学年;1 年生 69 名，2 年生 85 名，3 年生 10 名，4 年生 13 名，不明 1 名)
(2)調査用紙:①児童期のつらい時の父親の対応を尋ねる 20 項目(藤井，2002)，②児童期のつらい時の母親の対応を尋ねる 20 項目(藤井，2002)，③有能感を構成する自尊感情測定 10 項目(Rosenberg，1965)と他者軽視測定 11 項目(速水・水野・高木，2004)。(3)調査時期:2019 年 4 月。(4)調査手続き:講義の中でアンケートの趣旨説明，プライシー保護の説明などを行い，協力してもらえる学生に配布しその場で記入の上回収した。

【結果と考察】(1)質問紙の構造化:①児童期のつらい時の父親の対応を問う質問紙について，因子分析(最尤法，プロマックス回転)を実施し，因子負荷量.35 以上を有する項目を基準として 4 因子抽出した。各因子順番に「受容・支持的対応」「気遣いの対応」「責める対応」「普段と変わらない対応」と命名した。α係数は順に,.912, .746, .867, .685 であった。②児童期のつらい時の母親の対応を問う質問紙についても同様の手法と手続きに基づいて因子分析を実施し,父親と同様に 4 因子抽出した。それぞれのα係数は,.919, .837, .923, .732 であった。また，有能感を測定する項目の中の，「自尊感情」「他者軽視」のそれぞれの平均得点は 3.70 と 3.82 であり，α係数は,.832, .881 であり高い信頼性が確認された。
(2)児童期のつらいときへの父親と母親の対応

児童期のつらい時に対する父親と母親の対応「受容・支持的対応」「気遣いの対応」「責める対応」「普段と変わらない対応」それぞれの父親と母親の関わりの程度を比較した。「受容・支持」「気遣い」においては母親の方が有意に高く，「責める」では父親の方が有意に高いことが示された。

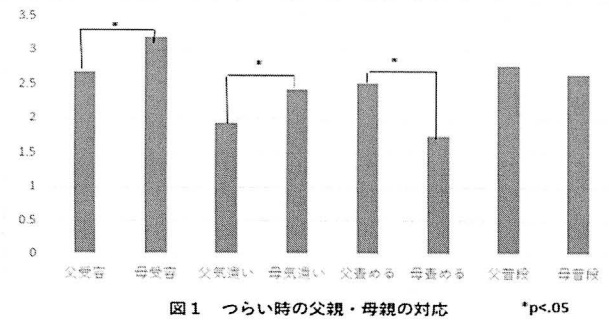


図1　つらい時の父親・母親の対応　　*p<.05

(3)児童のつらい時の父親・母親の対応の一致度と「自尊感情」「他者軽視」

次に，児童期のつらい出来事に対する父親と母親の対応について，両親の一致度を基にして検討を加えた。この際，4 つの対応様態「受容・支持的対応」「気遣いの対応」「責める対応」「普段と変わらない対応」それぞれについて父親と母親の一致度を基本とした。具体的には「受容・支持的対応」の場合，父親と母親の平均得点を基に,「父受容・支持的対応高」×「母受容・支持的対応高」,「父受容・支持的対応高」×「母受容・支持的対応低」,「父受容・支持的対応低」×「母受容・支持的対応高」,「父受容・支持的対応低」×「母受容・支持的対応低」の 4 群を形成し「自尊感情」,「他者軽視」それぞれ別々に群間の比較検討を加えた。分散分析により有意差が見られた場合には多重比較(*Tukey* 法)を行った。

表1　父母の受容と有能感

有能感	父受容高 母受容高 Ⅰ	父受容高 母受容低 Ⅱ	父受容低 母受容高 Ⅲ	父受容低 母受容低 Ⅳ	*F*値	多重比較
自尊感情	2.56(62)	2.49(27)	2.51(27)	2.30(45)	1.74	
他者軽視	2.33(62)	2.33(28)	2.12(27)	2.33(45)	0.99	

表2　父母の気遣いと有能感

有能感	父気遣い高・母気遣い高 Ⅰ	父気遣い高・母気遣い低 Ⅱ	父気遣い低・母気遣い高 Ⅲ	父気遣い低・母気遣い低 Ⅳ	*F*値	多重比較
自尊感情	2.60(58)	2.25(29)	2.50(26)	2.42(54)	2.56†	Ⅰ>Ⅱ*
他者軽視	2.32(60)	2.37(29)	2.04(22)	2.27(54)	1.63	

†p<.10　　*p<.05

表3　父母の責めと有能感

有能感	父責め高 母責め高 Ⅰ	父責め高 母責め低 Ⅱ	父責め低 母責め高 Ⅲ	父責め低 母責め低 Ⅳ	*F*値	多重比較
自尊感情	2.59(28)	2.54(37)	2.27(42)	2.50(56)	2.25†	
他者軽視	2.43(29)	2.26(38)	2.42(41)	2.11(57)	3.10*	Ⅰ>Ⅳ†,Ⅲ>Ⅳ*

†p<.10　　*p<.05

表4　父母の普段通りの対応と有能感

有能感	父普段高 母普段高 Ⅰ	父普段高 母普段低 Ⅱ	父普段低 母普段高 Ⅲ	父普段低 母普段低 Ⅳ	*F*値	多重比較
自尊感情	2.53(64)	2.26(26)	2.57(28)	2.41(46)	1.76	
他者軽視	2.32(65)	2.19(26)	2.29(29)	2.26(46)	0.31	

平均値(人数)

表から，気遣いの対応において「父気遣い高」×「母気遣い高」は「父気遣い高」×「母気遣い低」よりも自尊感情が高いことが示された。同様に，責めにおいては「父責め高」×「母責め高」が他者軽視に影響力を持つことが確認された。

以上の結果から，有能感形成には児童期のつらい出来ごとに対する両親の気遣い(両親ともに高い場合)が自尊感情形成に，両親の責め(両親ともに高い場合，父が低くても母が高い場合)は他者軽視に関連することが示されたといえよう。

(おがたかずお・ますなみたいじ)

青年の抱く自尊感情に関する研究(Ⅱ)

－児童期に受けたしつけを通して－

○増南太志[1]　尾形和男[2]

([1]埼玉学園大学　[2]埼玉学園大学)

キーワード：青年の自尊感情，児童期に受けたしつけ，両親の対応

【目的】大学生活を充実させることは，学生の退学や不適応を未然に防ぐうえで重要な課題である。増南・尾形(2018)は，大学生を対象とした研究を行い，自尊感情と他者軽視によって分類された有能感の類型によって，大学生活充実感の違いが見られることを示した。また，自尊感情の形成には，家庭，特に両親の影響が指摘されている。

したがって，本研究では，両親のしつけ，有能感の類型，大学生活充実感の関係について検討する。

【方法】(1)調査対象：埼玉県某大学学生178名(男子79名，女子98名，不明1名：平均年齢18.87歳　SD＝1.13：学年；1年生69名，2年生85名，3年生10名，4年生13名，不明1名)。

(2)調査用紙：①児童期に父親から受けたしつけを尋ねる10項目(葛西・藤井，2013)，②児童期に母親から受けたしつけを尋ねる10項目(葛西・藤井，2013)，③有能感を構成する自尊感情測定10項目(Rosenberg，1965)と他者軽視測定11項目(速水・水野・高木，2004)，④大学生活充実感を測定する23項目(「交友満足」「期待感」「学業満足」「不安」の4領域それぞれに対し，大対(2015)において因子負荷量が高かったものを用いた)。

(3)調査時期及び手続き：調査は2019年4月に実施した。講義の中でアンケートの趣旨説明，プライシー保護の説明などを行い，協力してもらえる学生に配布しその場で記入の上回収した。

【結果】(1)質問紙の構造化：①児童期に父親から受けたしつけを尋ねる質問紙について，因子分析(最尤法，プロマックス回転)を実施し，因子負荷量.35以上を有する項目を基準として2因子抽出した。各因子順番に「ほめるしつけ」「けなすしつけ」と命名した。α係数は順に.888，.835であった。②児童期に母親から受けたしつけを尋ねる質問紙についても同様の手法と手続きに基づいて因子分析を実施し，父親と同様に2因子抽出した。それぞれのα係数は.911，.823であった。③有能感を測定する項目の中の，「自尊感情」「他者軽視」のそれぞれの平均得点は3.70と3.82であり，α係数は.832，.881であり高い信頼性が確認された。④大学生活充実感を測定する項目では，因子分析の結果5因子抽出した。各因子順番に「大学生活充実感」「孤独感」「友人・学生生活への不安」「大学生活への期待感」「学業満足感」と命名した。α係数は順に.879，.846，.747，.697，.810であった。

(2)有能感の類型化：有能感の構成状況を明らかにするために，自尊感情の平均得点(3.70)と他者軽視の平均得点(3.82)を基準として，Ⅰ：全能型(自尊感情，他者軽視ともに平均得点以上)，Ⅱ：自尊型(自尊感情平均得点以上，他者軽視平均得点未満)，Ⅲ：萎縮型(自尊感情，他者軽視ともに平均得点未満)，Ⅳ：仮想型(自尊感情平均得点未満，他者軽視平均得点以上)に対象者を分類した。

(3)児童期に受けたしつけと有能感の関係：父あるいは母からの「ほめるしつけ」「けなすしつけ」を有能感の類型で比較検討した(表1上)。分散分析により有意差がみられた場合には，多重比較(*Tukey HSD*)を実施した。その結果，父と母のいずれにおいても，「ほめるしつけ」「けなすしつけ」の両方で有意差あるいは有意傾向が認められた。特に，自尊型と仮想型で比較した場合，父であろうと母であろうと，「ほめるしつけ」は仮想型よりも自尊型が高く，「けなすしつけ」は自尊型よりも仮想型が高かった。

(4)有能感と大学生活充実感の関係：大学生活充実感の各因子を有能感の類型で比較検討した(表1下)。分散分析により有意差が見られた場合には，多重比較(*Tukey HSD*)を実施した。その結果いずれの因子においても，有意差あるいは有意傾向が認められた。多重比較の結果，「大学生活充実感」を除く因子において，有意な結果が得られた。特に仮想型は，「孤独感」「友人・学生生活への不安」などのネガティブな側面が他の類型よりも高めであり，「大学生活への期待感」「学業満足感」などのポジティブな側面が他の類型よりも低めであった。その一方で，自尊型は，「孤独感」「友人・学生生活への不安」などのネガティブな側面が他の類型よりも低めであり，「大学生活への期待感」が高めであった。全能型は「孤独感」「友人・学生生活への不安」「大学生活への期待感」「学業満足感」のいずれにおいても高めであった。

【考察】自尊型では「ほめるしつけ」を受けていることが多く，「仮想型」では「けなすしつけ」を受けていることが多かったことから，児童期の「ほめる」あるいは「しかる」しつけが有能感の違いに影響する可能性が考えられた。また，そのような有能感の違いは，大学生活充実感のポジティブあるいはネガティブな側面と関係があることが考えられた。

表1　有能感の類型ごとの児童期に受けたしつけ（上）及び大学生活充実感（下）

有能感の類型	Ⅰ：全能 平均(*SD*)	Ⅱ：自尊 平均(*SD*)	Ⅲ：萎縮 平均(*SD*)	Ⅳ：仮想 平均(*SD*)	*F*	多重比較(*Tukey HSD*)
児童期に受けたしつけ						
父ほめる	2.77(0.80)	3.09(0.80)	2.55(0.73)	2.47(0.96)	4.92**	自尊>仮想**，萎縮*
父けなす	2.02(0.83)	1.61(0.61)	1.79(0.75)	2.23(0.88)	5.28**	全能*>自尊，仮想>自尊**，萎縮†
母ほめる	3.20(0.66)	3.42(0.61)	3.09(0.85)	3.04(0.85)	2.21†	自尊*>仮想
母けなす	2.18(0.80)	1.62(0.69)	2.00(0.86)	2.09(0.72)	4.51**	全能**，仮想*>自尊
大学生活充実感						
大学生活充実感	3.08(0.56)	3.06(0.54)	2.85(0.59)	2.80(0.74)	2.38†	
孤独感	2.25(0.73)	1.78(0.62)	2.08(0.67)	2.35(0.80)	5.54**	全能*，仮想**>自尊
友人・学生生活への不安	2.46(0.75)	2.10(0.52)	2.49(0.65)	2.77(0.60)	8.60**	全能*，仮想**，萎縮*>自尊
大学生活への期待感	3.17(0.62)	3.17(0.50)	2.91(0.68)	2.85(0.70)	3.05*	全能，自尊>仮想*
学業満足感	3.17(0.64)	3.15(0.57)	3.03(0.68)	2.84(0.78)	2.32†	全能*>仮想

†p<.10　*p<.05　**p<.01

（ますなみたいじ・おがたかずお）

完治主義から多機能補完リハビリテーションへ

○佐藤　弘一郎[1)]　　宍戸唯人[1)]　　内藤哲雄[2)]
1）一般財団法人　脳神経疾患研究所附属　南東北福島病院　2）明治学院大学）
キーワード：転倒、骨折、多機能補完リハビリテーション

【目的】高齢社会となり、高齢者の転倒が寝たきりへつながることがあり、本人及び家族の生活の質の低下が社会問題となっている。本研究では、転倒、骨折に深くかかわっている整形外科医がこの問題にどのように対峙しようとしているか、あらたなアプローチを探索することを目的とした。

【方法】＜被検者＞整形外科経験 25 年の 50 歳の男性医師。**＜手続き＞**「整形外科の骨折の予防として、大事に至らない転び方が必要なこととして、どんなことが頭に浮かんできますか？　患者さんは、治療や自身の状態をどのようにイメージしていると感じますか？　患者さんへの関わり方やコミュニケーションで考慮すべきことはどんなことでしょうか？」と教示し、連想反応を得た。次に重要順に並べ変えさせた後、各項目の直観的イメージ上の類似度を 7 段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージやクラスター間関係について聴取した後、項目単独の＋－0イメージを質問した。

【結果】連想項目の＋－イメージは、プラス項目 20、マイナス項目 4、0 項目 0 で、治療アプローチの影響もあろうが、全体に＋イメージが優位だった（Fig. 1 参照）。

＜被検者の解釈：抜粋＞クラスター1 は、「いざという時、壁にもたれられるよう壁伝いに歩く」～「又、転ぶかもしれない」の 8 項目：恐怖心がある。ゆっくり転べば、確かに誰かが支えてくれるかもしれない。転び方によって骨折したり、しなかったりする。大腿骨よりは手首の骨折にとどめておけば、歩けると思います。コンクリートのような硬いところよりも畳のような柔らかいところに転んだほうが、骨折しにくいと思います。転ぶ、骨を折る、歩けなくなる、という不安がある。歩くことを優先している。

クラスター2は、「手すりなどの支えを利用しながら、脚力強化訓練を指導する」～「今回は失敗したが、もう転ばない自信がある」の 12 項目：転ぶということは、体力、すなわち筋力が低下している、ということを意識しなければいけない。転びにくくなるには、自分の周りの環境を変化させる。歩行の手助けになる道具を使う。人の手を借りる。食生活を見直すなど、できることは色々ある。

クラスター3 は、「人生、終わった」～「痛みだけでも何とかしてほしい」の 4 項目：個人的な問題としては、痛みに耐えなければならない。一人では生きていけない。人に頼らなくてはいけない。自由が奪われる。家族に迷惑がかかるといいつつ、実は、そのかかわりが増える不自由さを感じているのではないか？　家族とは、おそらく子であろう。夫や妻に対しては、なんとも思わないはず。子に従いたくない。親の優位が崩れる。プライド。

≪クラスター1 と 2 の比較≫骨折しないための対策。クラスター1 は、転んだ瞬間の対策。クラスター2 は、これから転ばないための長期的な対策。

≪クラスター1 と 3 の比較≫転んだ瞬間から、骨折したわずかな時間経過の出来事。クラスター1 は、何とか骨折を避けようと努力している。クラスター3 は、結局骨折したことを後悔している。この先どうしよう。

≪クラスター2 と 3 の比較≫人と協力すること。人に協力してもらい、助けてもらうことの正の面と、人と関わることで煩わしくなる負の面。転倒・骨折前後での家族の関わり方で差が出るのではないだろうか。

【考察】クラスター1 は、何とか転ばないようにしよう、せめて大腿骨は折らないようにしようと、上肢を使用したり、上肢を犠牲にしようとしたり、無意識のうちに上肢を意識している。**＜歩行体勢と上肢筋力への期待＞**の気持ちが喚起されていることがうかがえる。クラスター2 は、低下した脚力を杖や手すりなど道具で補おうとしている。その道具を有効に使うには、上肢の力が必要であることを示しており、**＜低下した脚力を補完する道具や上肢機能への期待と希望＞**と解釈できよう。クラスター3 は、一度は、歩く希望を失ったが、若い頃には戻れないとしても、他の機能による補完で再び歩く希望を持つ**＜身体機能低下の受容と多機能補完による適合への自己意識変化＞**と命名することができよう。

【結論】高齢者の転倒・骨折は、下肢や体幹の筋力低下およびバランス機能低下からくるものである。入院治療してもこの衰えた筋力を若い頃のように取り戻すことは容易でない。今回の研究では、その衰えた筋力を補完するものとして道具以外に上肢が有効に活用できる手段であることを引き出した。一見、当たり前のように思われるかもしれないが、転倒予防指標や転倒後のリハビリテーションのほとんどは、下肢筋力についてである。完治主義としての脚力強化訓練だけでなく、多機能補完リハビリテーションとして、歩行体勢や上肢の筋力強化の訓練を併用すべきであるとの暗黙知を現役の整形外科医から構造として引き出した意義は大きい。

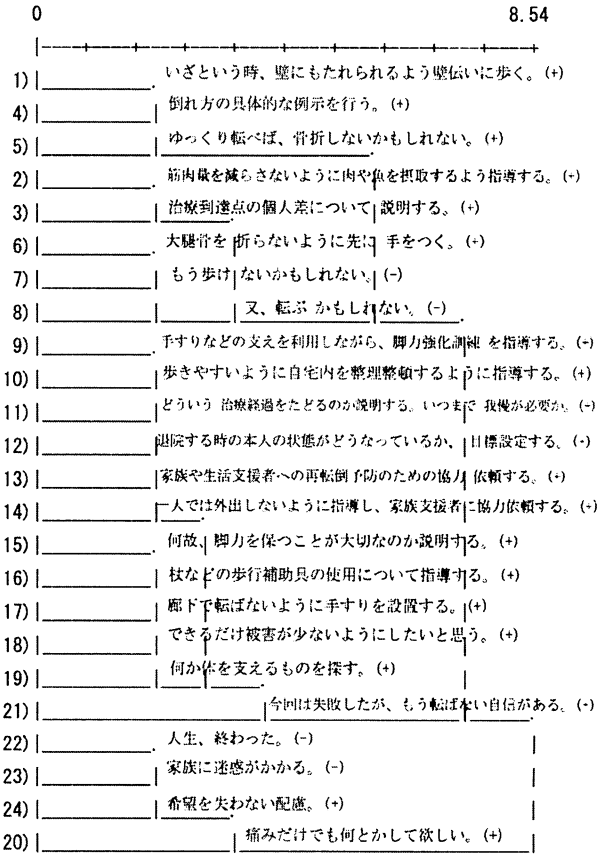


Fig. 1　被検者 A のデンドログラム
1)左の数値は重要順位
2)各項目後ろの（ ）内の＋－0は単独でのイメージ

（さとうこういちろう・ししどゆいと・ないとうてつお）

虚偽検出検査における質問文の影響

○石岡綾香
（ 駒澤大学文学部 ）

キーワード：虚偽検出，CIT，末梢皮膚血流

目　的

虚偽検出検査において検出効率を上げるには，種々の方法が考えられるが質問法や返答法を検討することも重要である。すでに石岡他（2014）は，仮想犯罪場面に関する調査研究から質問形式や質問語尾といった質問文の違いにより質問に対する抵抗度や選択される返答方法が異なることが明らかにしている。この結果は虚偽検出検査における質問文が被検査者に対して何らかの心的影響を及ぼすのみならず，生理心理学的虚偽検出における検出率の変動にも影響を及ぼす可能性を示唆するものである。そこで本研究では，虚偽検出検査において２種類の質問形式を採用し，同一の返答を繰り返させた場合に，質問語尾の違いが末梢皮膚血流に及ぼす影響について検討を行なった。

方　法

実験参加者　健常な男女 34 名（平均年齢 19.7 歳）

測定指標　レーザードップラー血流計（ALF21D；アドバンス）を用いて末梢皮膚血流を測定した。電極部位は非利き手第２指末節とし，測定用ディスク型プローブを固定してサンプリング周波数 400Hz で連続記録を行なった。

刺激（音声）　①質問刺激：裁決刺激･･･「鉛筆」；非裁決刺激･･･「クリップ」「消しゴム」「定規」「のり」②質問文：質問 A･･･「…を盗ったのですか」；質問 B･･･「…は盗らなかったのですか」；質問 C･･･「…を盗ったのですね」；質問 D･･･「…は盗らなかったのですね」

返答条件　いずれの質問に対しても「とっていません」と返答させた。

質問呈示法　５つの質問刺激をランダムに配置した６系列の刺激を作成し，肯定形式または否定形式を混在させて呈示した。さらに，前半３系列と後半３系列で質問語尾（「…か（質問 A と B）」，「…ね（質問 C と D）」）を変更した。

手続き　まず，実験参加者に模擬窃盗を行なわせ，その後，測定器具を装着し，模擬窃盗に関する６系列の質問を呈示した。質問には「自分は何も盗っていない無実の人間である」という意図のもとに返答をさせた。実験の刺激間間隔は 20 秒で，第３系列と第４系列の間に１分間の休憩時間を設けた。

結　果

Figure 1 と Figure 2 は，各質問語尾に対する血流量および各質問形式に対する血流量を示したものである。

分析の結果，質問形式および質問語尾に関わらず，全ての条件で非裁決刺激呈示期より裁決刺激呈示期の血流量に有意な減少が認められた（いずれも $p<.01$）。また，両質問語尾においても質問形式により血流量に有意な違いが認められた（語尾「か」において $p<.05$，語尾「ね」において $p<.01$）。一方，質問語尾による血流量の違いは肯定形式質問においてのみ確認された（$p<.01$）。

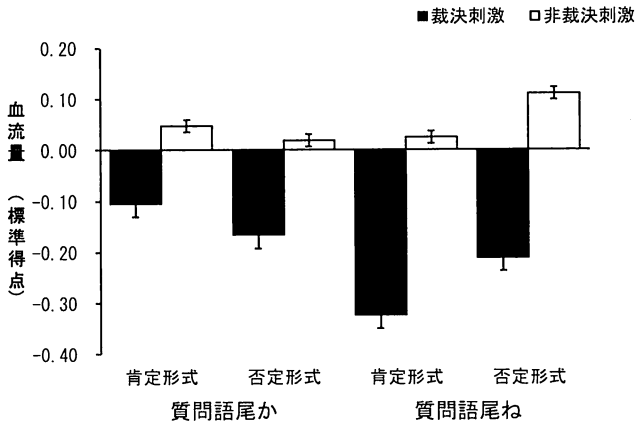


Figure 1.　各質問語尾に対する血流量

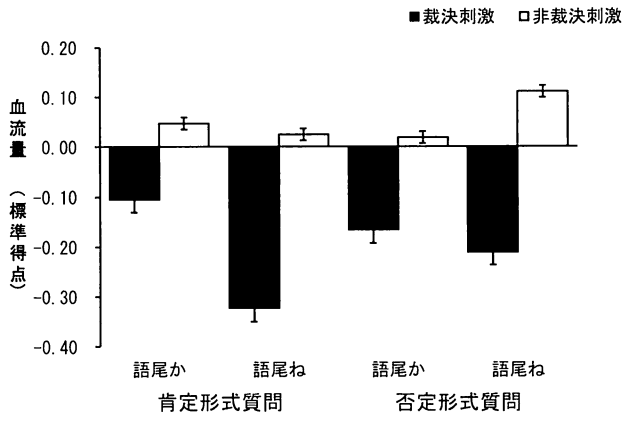


Figure 2.　各質問形式に対する血流量

考　察

本研究の結果，裁決刺激と非裁決刺激に対する血流量に有意な違いがすべての条件で確認されたことから，実験参加者は模擬窃盗品に関する質問刺激を，他と明らかに区別していたものと考えられる。一方，質問語尾「…か」である場合には肯定形式よりも否定形式質問に対する血流量の有意な減少が確認され，質問語尾「…ね」である場合には否定形式よりも肯定形式質問に対する血流量の有意な減少が確認された。また，肯定形式質問で呈示された場合においてのみ質問語尾に対する血流量の違いが認められ，質問語尾「…ね」で裁決刺激が呈示された場合に血流量の抑制が最大となった。これらの結果は，質問語尾によって抵抗感を感じる質問形式が変更されること，質問文が「…をとったのですね」の場合に質問に対する抵抗感が最大となったことを示した石岡他（2014）と軌を一にするものである。つまり，虚偽検出における検出率は質問文が与える心的影響によって変動したことが推察される。このような質問文の違いが与える影響は，より正確な検査結果の把握に重要な知見を与えるものであり，より詳細な検討が今後俟たれている。

（いしおか あやか）

運転能力を過大評価する高齢運転者の特徴

○小菅律　岡村和子　中野友香子　藤田悟郎
（科学警察研究所交通科学部）

キーワード：高齢運転者、自己評価、過信

【目的】

一般的に運転者には自分の運転能力を過大評価する傾向があることが指摘されてきた(Svenson, 1981 等)。高齢運転者も同様であり(Freund et al., 2005)、高齢になるほど過大評価傾向が大きいとする研究もある(太田他, 2004)。この過大評価を修正し、自分の運転能力をより正確に評価できるようになれば、能力に応じた適切な補償的運転行動・運転中止の判断が可能となると考えられる。本報告では、運転能力の過大評価の原因についての示唆を得るため、自分の運転能力を過大評価する高齢者の特徴について検証する。

【方法】

調査参加者　日常的に運転継続中の東京都内在住の 70 歳以上の運転者 144 人。但し、最近半年以上運転していない者 5 人は以降の分析から除いた(男性 134 人、女性 5 人)。

調査内容　東京都 23 区内の自動車教習所で実車調査・質問紙調査を行った。実車調査では、調査参加者が約 6km の路上コースを運転し、指導員が助手席に乗車して運転技能を評価した。この評価は、運転免許更新時の高齢者講習の実車指導で用いる運転行動診断票 17 項目(信号機のある交差点走行時 3 項目、一時停止標識のある交差点走行時 6 項目、進路変更時 4 項目、カーブ走行時 4 項目)に、蓮花(2012)の運転行動指標を参考に、他道路利用者との関係に関する 4 項目を加えた 21 項目であった。質問紙調査の内容は、年齢、年間走行距離、過去 2 年間の交通事故経験、運転の自己評価 21 項目(指導員が用いたものと同じ)、危険運転・補償運転各 15 項目(Matsuura, 2011)、運転に対する不安 6 項目(Multidimensional driving style inventory の anxious driving (Taubman-Ben-Ari et al., 2004)より)、運転の安全性の統制の所在に関する Multidimensional Traffic Locus of Control Scale(T-LOC)15 項目(Özkan et al., 2005)であった。

分析方法　調査参加者ごとに、運転に対する本人と指導員の評価各 21 項目の平均値を算出し、本人評価の平均値から指導員評価の平均値を引いた値を評価のずれ得点とした(正は過大評価,負は過小評価)。評価のずれとその他変数(年齢、年間走行距離、危険運転経験、補償運転、運転の不安、T-LOC)の関係については Pearson の積率相関係数の算出、事故経験についてはマンホイットニーの U 検定を行った。

【結果】

評価のずれは-0.57～2.62 で、93.5%と大多数が過大評価(正の値)であった。評価のずれとその他変数の関係を Table 1 に示した。相関が有意であったのは、運転能力自己評価、危険運転経験、運転不安、統制の所在のうち他者であった。また事故経験がない方が評価のずれが大きかった。それ以外(年齢、年間走行距離、補償運転、統制の所在の自己・環境・運命)は有意な関連がなかった。

【考察】

自分の運転能力を過大評価している人ほど、運転能力自己評価が高かった。また、危険運転経験が少ない、運転不安が低い、事故経験がないと報告していた。能力評価のみならず、感情(運転の不安)や実際の経験(危険運転・事故)という異なる側面からも自分の運転を楽観的に捉えている傾向が示され、自己評価が安定しており変わりにくい可能性がある。

また過大評価者は事故の原因を他者に帰属させる傾向があった。したがって、事故や危険な経験があっても他者が原因であると捉え、自己評価の変化に至らない可能性がある。

今回の参加者の多く(83%)が調査終了後に評価結果を知りたいと希望したように自分の能力を知りたい気持ちは強い一方、先行研究では能力のフィードバックも運転能力自己評価の変化に影響しないことが指摘されている(Ackerman et al., 2010)。本報告の結果からも過大評価の修正は容易でない可能性が示唆された。これまで開発されてきた介入の多くでは、実際の能力のフィードバックや能力の振り返り(自覚)の促しに着目されてきた(Eby et al., 2003 等)が、過大評価の修正のためには客観的な能力を自覚させるだけでなく、それをどう捉えるかの解釈を教育する必要がある可能性がある。

Table 1 各変数の平均値と評価のずれとの関係 *$p<.05$, **$p<.01$

		平均値	取りうる値の範囲	評価のずれとの関係
評価のずれ		1.12	-4～4	—
年齢		74.58	70～	$r=.10$
年間走行距離		3752.01		$r=-.04$
事故経験(有の割合)		6.5%		$U=344.0^{*}$
運転能力自己評価		2.81	1～5	$r=.67^{**}$
危険運転経験		3.02	0～15	$r=-.23^{**}$
補償運転		10.27	0～15	$r=-.06$
運転の不安		16.17	6～54	$r=-.28^{**}$
統制の所在(T-LOC)	自分	2.46	1～5	$r=-.09$
	他者	3.57	1～5	$r=.18^{*}$
	環境	3.01	1～5	$r=.10$
	運命	2.65	1～5	$r=-.13$

【引用文献】

Ackerman et al. (2010). The impact of feedback on self-rated driving ability and driving self-regulation among older adults. *Gerontologist*, 51(3), 367-378.

Eby et al. (2003). Improving older driver knowledge and self-awareness through self-assessment: The driving decisions workbook. *J Safety Res*, 34(4), 371-381.

Freund, B. et al. (2005). Self-rated driving performance among elderly drivers referred for driving evaluation. *Accid Anal Prev*, 37(4), 613-618

Matsuura, T. (2011). Older drivers risky and compensatory driving. In D. Hennessy (Ed), *Traffic Psychology*. (p.87-113) New York: Nova Science Publishers, Inc.

太田博雄他 (2004). 高齢ドライバーの自己評価スキルに関する研究. 応用心理学研究, 30(1), 1-9.

Özkan et al. (2005). Multidimensional traffic locus of control scale (T-LOC). *Pers Individ Dif*, 38(5), 533-545.

蓮花のぞみ (2012). 加齢と補償方略に関する研究. 大阪大学博士論文

Svenson, O. (1981). Are we all less risky and more skillful than our fellow drivers? *Acta Psychol*, 47(2), 143-148.

Taubman-Ben-Ari, O., et al. (2004). The multidimensional driving style inventory. *Accid Anal Prev*, 36(3), 323-332.

(こすげ りつ・おかむら かずこ・なかの ゆかこ・ふじた ごろう)

保護者のシートベルト着用頻度とチャイルドシート使用との関連

○中野友香子　岡村和子　小菅律　藤田悟郎
（科学警察研究所交通科学部）

キーワード：チャイルドシート，後部座席シートベルト

【目的】　車両シートベルト（seatbelt：以下 SB）は衝突事故時の傷害軽減に有効である。SB は大人の体格を基準に設計されているため，子どもの身長が概ね 135－140cm に到達する 10 歳頃まではチャイルドシート（child restraint systems：以下 CRS）を使って安全を確保する必要がある。日本では 6 歳未満の子どもの CRS 使用が義務化されているが，その使用率は伸び悩んでいる（警察庁／日本自動車連盟，2018a）。

CRS 使用率は保護者の SB 着用率と関連することが予想される。運転席や助手席の SB 着用率が 95%を超える一方で，一般道路の後部座席の着用率は 38%と低く（警察庁・日本自動車連盟, 2018b），こうした SB 着用に対する意識の低さが，CRS 使用率の伸び悩む原因の一つとなっている可能性がある。

本報告では，保護者の後部座席での SB 着用頻度と CRS 使用頻度や使用意図との関連を検討する。中野・岡村（2018）が計画的行動理論（Theory of Planned Behavior；以下 TPB）に基づいて 6 歳未満の子どもの CRS 不使用と関連する要因を検討した結果，保護者の CRS に対する態度や行動統制感などが CRS 不使用と関連していた。そこで本報告では TPB 変数の影響を統制し，SB 着用と CRS 使用との関連を検討する。

【方法】　2018 年 4－5 月に，警察庁と日本自動車連盟による CRS 使用状況全国調査を実施している施設（東京都内又は福岡市内計 3 施設）で調査を行った。本調査の対象者は 10 歳未満の子どもと自家用車で来所した保護者 354 名（うち男性 199 名）であり，335 名は親，19 名は祖父母や親戚であった。

調査項目　(1) 保護者の性別・年齢・過去 3 年間の事故経験の有無・過去 3 か月の運転頻度・子の年齢・子との乗車頻度・子との関係（親／親以外）。(2) 後席 SB 着用頻度：保護者の一般道路の後部座席の SB 着用頻度。(3) CRS 使用頻度：一般道路を約 10 分程度走行／一般道路を 1 時間程度走行／高速道路を走行／子がぐずる の 4 場面の使用頻度。(4) CRS 定期点検実施度：子の体格に適合しているか／きちんと取り付けられているか。(5) CRS 使用意図：6 歳未満／6 歳以上の子に CRS を使おうとする意図。(6) CRS に関する TPB 変数：有効性に対する否定的な態度，行動統制感（購入／取り付け／装着 の困難さ），記述的規範（重要他者の使用頻度）。(1) の運転頻度・子との乗車頻度，(2) － (6) は 6 件法で回答。

得点化　(1) は「月 1 回未満」から「ほぼ毎日」，(2) (3) (6) の記述的規範は「全く着用しない」から「常に着用する」，その他は「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」を 1－6 点として得点化した。(3) は 4 項目の合計を CRS 使用頻度得点として分析に使用した。

【結果】　CRS 使用頻度，6 歳未満／6 歳以上の子に対する CRS 使用意図，CRS 定期点検実施度（体格適合／取り付け）の 5 変数の平均評定値を目的変数とした階層的重回帰分析（強制投入法）を行った。Step 1 では保護者の性別（男性 0，女性 1），年齢，事故経験（なし 0，あり 1），運転頻度，子の年齢，子との乗車頻度，子との関係を投入し，Step 2 では TPB 変数を，Step 3 で後席 SB 着用頻度を投入した。

その結果，Step 2 のモデルは 5 つの目的変数すべてに対して有意であった（R^2s = 0.26－0.50, $ps < .01$）。Step 3 で後席 SB 着用頻度を投入した結果，6 歳以上の子に対する CRS 使用意図と CRS 定期点検実施度（体格適合／取り付け）の 3 変数に対するモデルの説明力は有意に増加したが（6 歳以上の使用意図 $\Delta R^2 = 0.01$，$p < .05$；体格適合の定期確認 $\Delta R^2 = 0.03$，$p < .01$；取り付けの定期確認 $\Delta R^2 = 0.01$，$p < .05$），CRS 使用頻度と 6 歳未満の子に対する CRS 使用意図の 2 変数に対する説明力は有意には増加しなかった（ΔR^2s < 0.01, *n.s.*）。最終モデルの標準偏回帰係数（β）の結果を Table に示す（目的変数すべてに対して β が有意でなかった運転頻度，子との乗車頻度，子との関係，行動統制感（購入・取り付け）は除く）。

Table　CRS 使用頻度，使用意図，定期点検実施度を目的変数とした階層的重回帰分析（最終モデル）の標準偏回帰係数

	CRS 使用頻度	CRS 使用意図		CRS 定期点検実施度	
		6 歳未満	6 歳以上	体格適合	取り付け
性別（女性 1：）	**-0.13****	-0.08	**-0.14****	**-0.12***	**-0.15****
年齢	**-0.14****	-0.04	-0.04	0.01	0.00
事故経験（あり：1）	-0.07	-0.07	-0.08	**-0.10***	**-0.19****
子の年齢	**-0.35****	-0.03	**-0.12***	-0.10	-0.04
態度（否定的）	0.00	**-0.17****	-0.04	**-0.17****	**-0.17****
行動統制感（装着）	**-0.09***	**-0.14***	**-0.15****	-0.06	-0.01
記述的規範	**0.40****	**0.38****	**0.34****	**0.33****	**0.32****
後席 SB 着用頻度	0.04	-0.01	**0.12***	**0.12***	**0.17****

$^{**}p < .01$　$^{*}p < .05$

【考察】　保護者の性別や年齢，事故経験，子の年齢，TPB 変数，後席 SB 着用頻度が CRS 使用頻度や使用意図，定期点検実施度と関連していた。5 つの目的変数すべてに対する記述的規範の標準偏回帰係数の値が大きく，保護者が自分にとって重要な他者は CRS を使っていると認識することは，本人の CRS 使用に影響を及ぼすことが示唆された。

本報告の目的である保護者の SB 着用の影響に着目する。TPB 変数などを統制した場合，後席 SB 着用頻度は 6 歳以上の子に対する CRS 使用意図や CRS 定期点検実施度と有意な関連がみられたが，CRS 使用頻度や 6 歳未満の子に対する CRS 使用意図と有意な関連はみられなかった。これは，SB 着用に対する意識が高く自分自身が一般道路の後部座席でも SB を使っている保護者ほど，子どもにも CRS を適正に使い続けようとする，ということを示唆する結果だと解釈できる。

本報告を踏まえると CRS の適正使用を促すためには，保護者の SB 着用促進を組み込んだ対策が有効だと考えられる。自動車乗車中の子どもの安全を守るためには，CRS をきちんと取り付けて，6 歳を過ぎても体格に合わせて CRS を使い続ける必要がある。そのためには保護者に CRS の有用性だけでなく，SB の有用性と SB の代替機能を有する装置としての CRS の必要性を理解してもらうことが効果的だと推察される。

【謝辞】本調査実施にあたり，日本自動車連盟にご協力いただいた。

【引用文献】

警察庁／日本自動車連盟（2018a）チャイルドシート使用状況全国調査
警察庁／日本自動車連盟（2018b）シートベルト着用状況全国調査.
中野友香子・岡村和子（2018）チャイルドシート不使用と関連する保護者の認識，日本応用心理学会第 85 回大会発表論文集，p.104

（なかの ゆかこ・おかむら かずこ・こすげ りつ・ふじた ごろう）

長期的課題の遂行における情熱と希望

楽観傾向群と悲観傾向群の比較

○本多麻子
（東京成徳大学応用心理学部）

キーワード：楽観性，情熱，希望

目的

長期的課題の目標達成には情熱と粘り強さから構成されるGritが必要である。Gritは楽観性や能力観と関連し，興味，練習，目的，希望に特徴づけられ，長期的な目標追求やその結果と関連する（Duckworth et al., 2007）。希望（hope）は将来の目標達成への肯定的期待であり，肯定的な目標指向的計画と目標指向的意思を伴う認知的傾向である。目標指向的計画とは個人が望む目標に到達可能な道筋を見出す主観的な能力であり，目標指向的意思とは目標達成への思い描いた目標指向的計画に沿って活動を起こし，それを維持するための主観的な能力である（Snyder et al., 1991）。希望は楽観性と類似しており，両者には正の相関がある。本研究ではスポーツや芸術（e.g., ピアノ）などの長期的課題の遂行における楽観性，Grit，希望の関連を楽観傾向群と悲観傾向群の間で検討した。

方法

対象者　大学生249名（平均20.6±1.4歳）であった。長期的課題の継続年数は平均10.3±3.1年であった。研究実施に際し，大学内の研究倫理審査委員会の承認を得た。

調査票　楽観・悲観性尺度（外山, 2013），日本語版Grit-S尺度（西川他, 2015），日本版ホープ尺度（加藤 & Snyder, 2005）を用いた。フェイスシートでは年齢，性別，長期的課題の遂行経験の有無，課題の具体的内容，継続期間，練習頻度（回／週）と1回あたりの練習時間，努力度（%），最終的な結果（目標達成・克服・継続中・挫折・辞めた・その他）について記入を求めた。

手続き　大学の授業において集団式で実施した。あるいは個別に調査票を渡して記入後に回収した。

分析方法　各質問紙の得点を算出後，それぞれ相関係数を求めた。楽観性得点と悲観性得点の平均と*SD*を算出後，楽観性得点が平均＋*SD*以上の者を楽観傾向群（37名），悲観性得点が平均＋*SD*以上の者を悲観傾向群（34名）とした。群ごとに各質問紙の平均得点と*SD*を求めて，*t*検定を行った。群ごとに最終的な結果（目標達成・克服・継続中・挫折・辞めた・その他）についてあてはまる人数を計数し，比較した。

結果

各得点と継続期間の相関を表1に示した。楽観性得点はGrit，根気，目標指向的計画，目標指向的意思，継続期間とそれぞれ正の相関があった。悲観性得点は目標志向的計画，目標志向的意思とそれぞれ負の相関があった。

各群における各得点と継続期間の平均と*SD*を表2に示した。*t*検定の結果，楽観傾向群の目標指向的計画と目標指向的意思はいずれも悲観傾向群よりも高かった（$p < .05$）。

各群における各最終結果の人数を表3に示した。χ^2検定の結果，有意な偏りはなかった（χ^2（4）= 0.75, n.s.）。

表1　各得点と継続期間の相関

	Grit	根気	一貫性	目標指向的計画	目標指向的意思	継続期間
楽観性	.15 *	.15 *	.07	.28 **	.28 **	.13 *
悲観性	-.03	-.05	.01	-.20 **	-.20 **	-.06
Grit				.07	.01	.12
根気				.12 †	.11 †	.10
一貫性				-.03	.03	.08

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表2　各群における各変数の平均，*SD*，統計結果

	楽観傾向群		悲観傾向群		*t*	効果量
	M	*SD*	*M*	*SD*		(*d*)
楽観性	37.1	2.2	23.7	5.6	13.1 **	3.2
悲観性	14.3	5.2	31.0	2.4	17.5 **	4.0
Grit	25.6	3.7	25.8	4.4	0.3	0.1
根気	13.5	3.0	13.8	2.8	0.3	0.1
一貫性	12.0	2.1	12.1	2.3	0.1	0.0
目標指向的計画	11.8	2.1	10.6	1.6	2.5 *	0.6
目標指向的意思	11.7	1.6	10.2	2.4	3.1 **	0.7
継続期間	10.9	3.1	10.2	2.9	1.0	0.1

** $p < .01$, * $p < .05$

表3　各群における各最終結果の人数

群	目標達成	克服	継続中	挫折	辞めた
楽観傾向	13	14	5	3	2
悲観傾向	9	14	5	4	2

考察

楽観性得点が高いほど，Grit，根気，目標指向的計画，目標指向的意思の各得点が高く，継続期間も長かった。悲観性得点が高いほど，目標指向的計画と目標指向的意思の各得点が低かった。したがって，希望は楽観性と正の相関があり，悲観性と負の相関があるといえる。Gritのなかでも，根気は目標指向的計画と目標指向的意思とそれぞれ有意傾向の正の相関があった。楽観傾向群の目標指向的計画と目標指向的意思の各得点は悲観傾向群よりも高かった。したがって，悲観傾向群と比較して，楽観傾向群は個人が望む目標に到達可能な道筋を見出す主観的な能力と，目標達成への思い描いた目標指向的計画に沿って活動を起こし，それを維持するための主観的な能力がいずれも高いといえる。Grit，根気，一貫性の各得点と継続期間に群差はなく，群ごとの最終結果（目標達成・克服・継続中・挫折・辞めた）の人数にも偏りはなかった。楽観傾向群のGritと根気は悲観傾向群よりも高いと報告した本多（2018）の結果と一致しなかった。

引用文献

Duckworth et al. (2007). GRIT: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 1087-1101.

本多 麻子 (2018). 長期的課題における伸び悩み時の反応と克服　日本応用心理学会第85回大会発表論文集, p. 94.

加藤 司・Snyder, C. R. (2005). ホープと精神的健康との関連性　心理学研究, **76**, 227-234.

西川 一二他 (2015). 日本語版Short Grit（Grit-S）尺度の作成　パーソナリティ研究, **24**, 167-169.

Snyder et al. (1991). The will and the ways: development and validation of individual-differences measure of hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 570-585.

外山 美樹 (2013). 楽観・悲観性尺度の作成ならびに信頼性・妥当性の検討　心理学研究, **84**, 256-266.

本研究はJSPS科学研究費（16K01769）の助成を受けた。

（ほんだ　あさこ）

実動画とスティックピクチャを用いたテニスフォームの印象評価について

○堀内俊孝[1]　来田宣幸[2]
(株式会社ジャパンスポーツネット[1]　京都工芸繊維大学[2])

キーワード：感性　モーション　スポーツ

【目的】近年、画像認識技術の進化によりマーカレスモーションキャプチャ技術が発展している。これらの技術を用いることで、従来までは大がかりな装置が必要で、かつ、撮影や画像処理などに多くのコストがかかっていたモーションキャプチャが簡易に実施できるようになってきた。これらの技術を活用することで、従来までは難しかった動作の印象評価を簡便に実施できる可能性が高くなってきた。スポーツのフォームは、バイオメカニクスの技術によって精緻に分析された結果に基づく指導は非常に重要であるが、コーチが持つ主観的な指導ポイントについては、印象によるところが多く、この印象とバイオメカニクス的な数値との関係を定量的に評価することは非常に重要な課題とされてきた。特にテニスなどの球技は三次元的な動きが多く、時系列での動作パターンも多様であるため、多次元のモーションデータを低次元の印象評価から説明することは価値が高いと考えられる。近年、プロを目指すジュニアが多くテニススクールに通っており、生徒と育成を担当するコーチにとって選手の動作評価における基準の作成が必要と考えられる。本研究では動作評価の基準として「誰から見ても美しいフォーム」について先入観なくフォームの美しさそのものを評価するための手法として「実動画」と「スティックピクチャ」での印象評価法を開発し、その概要と課題について明らかにすることを目的とした。

【方法】**調査用動画の撮影**　テニススクールに通う選手6名を対象として調査用の動画を作成した。対象者10歳から20歳までの女性、初心者から関西ランキング上位者までで、調査用の動画に使用することを説明し、全員及び保護者より同意を得て実施した。対象動作はフォアハンドストロークとし、正面からネット越しにボールを出し、ストレートにリターンさせた。撮影者は打球の邪魔にならないよう、被験者から3m以上離れて、球出し方向から垂直にフォアサイドの方向から撮影した。撮影は10球とし、安定したストロークができた1球をテニス指導者が選んで刺激動画作成用の試技とした。

調査用動画の作成　調査用動画として「実動画」と「スティックピクチャ動画」を作成した。実動画は、撮影したストロークの1試技を連続3回の反復再生をさせた。スティックピクチャ動画は、身長や見た目の影響を取り除くため、OpenPoseを用いて関節座標を取得し、MATLABを用いてスティックピクチャ動画を作成し、連続3回の反復再生をさせた（図1）。再生の速度や解像度については、実動画およびスティックピクチャ動画とも元動画と同一とした。



図1　スティックピクチャ動画のサンプル

動画視聴による印象評価　印象評価調査の対象者はテニス未経験者の9名の男女とし、対象者には実験の概要などを伝え、同意を得たのちに実施した。調査では、まず、スティックピクチャ動画を対象者に視聴させ、フォームの美しさを5段階で評価させた。なお、対象者には何度でも繰り返し再生をしてもよいと伝えた。また、評価の理由と着目したポイントについて聞き取り調査を実施した。その後、実動画を視聴させ、同様に美しさに関する5段階評価とその理由および着目したポイントについて聞き取りをおこなった。対象者には、実動画とスティックピクチャ動画で同一人物が存在することについては伝えなかった。また、指導に当たっているコーチが実動画を視聴し、6人のフォームに対して、10点満点で技量レベルの評価をおこない、この値を妥当性評価の基準とした。

【結果】動画の種類（実動画とスティックピクチャの2水準）と動画対象者（6名）が美しさ評価に与える効果を検討するため、両要因を被験者内効果とする2要因分散分析をおこなった。その結果、有意な交互作用は認められず（$F_{5,48}$=1.40, n.s.）、動画対象者に有意な主効果がみられた（$F_{5,48}$=22.86, p<.01）。次に、動画の印象評価について、動画対象者ごとに平均値を求め、コーチによる技量レベル評価点との相関係数を算出した。その結果、実動画およびスティックピクチャ動画ともに有意な相関がみられ（実動画, r=.831, p<.05; スティックピクチャ動画, r=.948, p<.01）、スティックピクチャ動画でより高い値が得られた。

【考察】本研究では、テニスのストローク動作について、フォームの美しさについて印象評価をおこなった結果、スティックピクチャ加工をした動画の方が、実動画よりコーチの技量レベル評価との相関が高い値であった。このことから、テニス未経験者が技術評価をおこなう際、実動画よりもスティックピクチャ動画の方が、指導経験を持つコーチに近い評価が可能である可能性を示すといえる。本研究において、実動画での評価をおこなった場合、まだ身体の完成していない小学生のフォームに対する評価が低く、体格の良い中学生の評価が高い値であった。このことから、人の目は見た目や先入観に大きく影響を受けやすいことを示唆している。

聞き取り調査をおこなった際にも、スティックピクチャ条件のあと、実動画を視聴させた際に、動画のほとんどが子どもであったことに驚きを示した対象者が大半であった。このことから、スティックピクチャ動画でフォームの印象評価をおこなう場合には、選手の動きから初心者や経験者などについて推測しているものの、体格や服装などがわからないスティックピクチャでは年齢までの予想はできず、実動画では体格の良い中学生の評価に色を付けてしまったと考えられる。

今後の課題として、動画の種類を増やし、また、評価する対象者数を増やすことで、フォームの評価に関する特徴を抽出することが必要となる。また、評価者の属性（テニス経験者、スポーツ経験者等）が動作の評価に及ぼす効果についても検討が必要と考えられる。

また、動画作成の技術的な課題としては、OpenPoseではヒトの骨格のみしか座標算出することができず、ラケットやボールの表示ができないこと、また、テニスにとって必要な腕や腰の回旋を表示出来ないという難点があることが挙げられ、これらの課題解決は必要である。ただし、AIなどの技術を活用した画像の自動認識によるマーカレスモーションキャプチャ技術は、今後、さらに発展・汎化することが予想されるため、これらの技術を用いて得られた動作パラメータとヒトの印象評価パラメータとの間の関係を定量的に評価することが可能になれば、技術向上に繋がる動作評価が進むと考えられる。

（ほりうち としたか・きだ のりゆき）

索　引

人名索引

氏名	ふりがな	
ア		
アニーシャ　ニシャート	あにーしゃ・にしゃーと	20
阿部　花菜子	あべかなこ	107
伊坂　裕子	いさかひろこ	54, 96
石岡　綾香	いしおかあやか	26, 113
石橋　裕子	いしばしゆうこ	35
礒部　美也子	いそべみやこ	88
磯　友輝子	いそゆきこ	37, 38
板倉　悠斗	いたくらゆうと	40
井田　政則	いだまさのり	39, 75
市川　春菜	いちかわはるな	40
市村　祐樹	いちむらゆうき	75
伊藤　敦史	いとうあつし	90
伊藤　晃碧	いとうこうき	57
伊東　拓海	いとうたくみ	77
いとう　たけひこ	いとうたけひこ	46, 80, 87
伊東　昌子	いとうまさこ	17
伊藤　将史	いとうまさし	36
伊東　由菜	いとうゆいな	34
稲葉　隆	いなばたかし	73
井上　枝一郎	いのうえしいちろう	103, 108
井上　孝代	いのうえたかよ	1, 3, 5, 8, 46, 80
井上　裕珠	いのうえゆみ	61, 100, 104
岩井　美路子	いわいみちこ	109
岩﨑　和子	いわさきかずこ	44
上野　まどか	うえのまどか	87
浮谷　秀一	うきやしゅういち	11, 84
臼井　伸之介	うすいしんのすけ	62
臼谷　海都	うすたにかいと	34
内田　誠也	うちだせいや	49, 96
内田　遼介	うちだりょうすけ	68

遠藤　慧	えんどうけい	58
遠藤　さやか	えんどうさやか	92, 93
生沼　萌	おいぬまもえ	58
尾入　正哲	おいりまさあき	7
大門　耕平	おおかどこうへい	36
大久保　純一郎	おおくぼじゅんいちろう	86
大澤　香織	おおさわかおり	88
大塚　涼平	おおつかりょうへい	40
大西　彩子	おおにしあやこ	32
大橋　信夫	おおはしのぶお	7
大林　裕司	おおばやしゆうじ	8
大村　美菜子	おおむらみなこ	42
大森　哲至	おおもりてつし	109
尾形　和男	おがたかずお	110, 111
岡野谷　和花	おかのやのどか	56
岡村　和子	おかむらかずこ	114, 115
岡村　靖人	おかむらやすと	94
岡本　大輔	おかもとだいすけ	88
荻野　七重	おぎのななえ	10
長部　楓	おさべかえで	107
小嶋　優花	おじまゆうか	100
小野　洋平	おのようへい	76

カ

角山　剛	かくやまたかし	7, 37, 38
片岡　大輔	かたおかだいすけ	18
加藤　恵美	かとうえみ	46
加藤　博己	かとうひろき	9
可児　佑吾	かにゆうご	77
上瀬　由美子	かみせゆみこ	27
亀岡　聖朗	かめおかせいろう	78
亀田　凌雅	かめだりょうが	79
軽部　幸浩	かるべゆきひろ	26
川本　利恵子	かわもとりえこ	11
菊池　夏帆	きくちかほ	77
来田　宣幸	きだのりゆき	36, 44, 117
木下　雅博	きのしたまさひろ	32

金　信遇	きむしんう	97, 98
木村　友昭	きむらともあき	96
木村　真利子	きむらまりこ	97, 98
桐生　正幸	きりうまさゆき	11, 26, 95
釘原　直樹	くぎはらなおき	68
工藤　大介	くどうだいすけ	103, 108
黒川　雅幸	くろかわまさゆき	50
桑名　美保	くわなみほ	91, 92, 93
河野　千佳	こうのちか	85
小菅　律	こすげりつ	114, 115
越河　六郎	こすごうろくろう	7
後藤　祐里奈	ごとうゆりな	34
小西　達也	こにしたつや	50
小橋　眞理子	こばしまりこ	39
小林　敦子	こばやしあつこ	12
小林　剛史	こばやしたけふみ	31
小林　寛子	こばやしひろこ	37, 38
小林　史佳	こばやしふみか	58
小松　健一	こまつけんいち	69
小室　央允	こむろひさよし	9
近藤　文哉	こんどうふみや	97, 98

サ

齊藤　勇	さいとういさむ	11
坂本　拓海	さかもとたくみ	100
櫻井　薫	さくらいかおる	85
櫻井　怜奈	さくらいれな	40
佐藤　研一郎	さとうけんいちろう	53
佐藤　弘一郎	さとうこういちろう	89, 90, 91, 92, 93, 112
佐藤　大輔(福島学院大学)	さとうだいすけ	82
佐藤　大輔(南東北福島病院)	さとうだいすけ	91
佐藤　舞	さとうまい	51
佐藤　優希	さとうゆうき	107
佐藤　祐弥	さとうゆうや	107
施　桂栄	しけいえい	103, 108
宍戸　唯人	ししどゆいと	89, 112
静間　健人	しずまたけと	23

柴田　江玲奈	しばたえれな	100
柴田　隼	しばたはやと	34
庄子　遼	しょうじりょう	104
白井　真菜美	しらいまなみ	31
白木　三秀	しらきみつひで	1, 4, 5
杉田　明宏	すぎたあきひろ	80
杉田　篤也	すぎたあつや	104
杉山　怜香	すぎやまれいか	40
角野　善司	すみのぜんじ	43
関　陽子	せきようこ	66

タ

大工　泰裕	だいくやすひろ	68
髙田　莉恵	たかたりえ	33
高橋　明子	たかはしあきこ	59
高橋　綾子	たかはしあやこ	95
高橋　一公	たかはしいっこう	37, 38
高橋　香貴恵	たかはしかきえ	40
高橋　七海	たかはしななみ	56
高橋　浩子	たかはしひろこ	9
高橋　良博	たかはしよしひろ	9
高　史明	たかふみあき	13
高部　優子	たかべゆうこ	80
高見澤　由紀	たかみざわゆき	8
竹内　啓恵	たけうちひろえ	9
田崎　ほのか	たざきほのか	34
田中　堅一郎	たなかけんいちろう	12, 101
谷口　淳一	たにぐちじゅんいち	25
谷口　泰富	たにぐちやすとみ	76
玉井　寛	たまいひろし	11
玉瀬　耕治	たませこうじ	10
田宮　憲	たみやけん	109
土田　昭司	つちだしょうじ	23
寺口　司	てらぐちつかさ	68
銅直　優子	どうべたゆうこ	41
時田　学	ときたがく	52, 56, 81
外島　裕	としまゆたか	1, 5, 34, 40, 58, 77, 102, 107
富田　新	とみだあらた	105

ナ

内藤　哲雄	ないとうてつお	14, 89, 90, 91, 92, 93, 112
中井　宏	なかいひろし	62
中上　博絵	なかがみひろえ	52
長澤　里絵	ながさわりえ	9
中地　展生	なかじのぶお	33, 79
中嶋　葉子	なかじまようこ	106
中園　翔太	なかぞのしょうた	58
永田　雅俊	ながたまさとし	50
長塚　康弘	ながつかやすひろ	67
中野　友香子	なかのゆかこ	114, 115
西山　浩次	にしやまこうじ	12
二瓶　哲	にへいさとる	12, 101
丹羽　勝	にわまさる	45
沼山　博	ぬまやまひろし	65

ハ

橋上　愛子	はしがみあいこ	1, 2, 4
橋本　采栄	はしもとさえ	62
畠　文槻	はたふみき	104
服部　環	はっとりたまき	64
埴田　健司	はにたけんじ	37, 38
濱　保久	はまやすひさ	55
林　潔	はやしきよし	9, 48
林　幸範	はやしゆきのり	35
原　健之	はらたけゆき	24
原　みのり	はらみのり	77
日向野　智子	ひゅうがのともこ	37, 38
廣島　克佳	ひろしまかつよし	83
福島　朋子	ふくしまともこ	65
福原　眞知子	ふくはらまちこ	10
藤田　悟郎	ふじたごろう	114, 115
藤田　主一	ふじたしゅいち	7, 10, 84
藤原　勇	ふじわらいさむ	63
Bryan Sherman	ぶらいあん・しゃーまん	1, 3, 5
古橋　朋果	ふるはしともか	61
古屋　健	ふるやたけし	57

星　洋	ほしひろし	45
細田　聡	ほそださとし	103, 108
堀内　俊孝	ほりうちとしたか	117
堀内　勇吾	ほりうちゆうご	77
本庄　勝	ほんじょうまさる	50
本多　麻子	ほんだあさこ	116
本多　祥悟	ほんだしょうご	107

マ

鈎　治雄	まがりはるお	20
増南　太志	ますなみたいじ	110, 111
松木　祐馬	まつきゆうま	97, 98
松田　健太郎	まつだけんたろう	100
馬渕　里都	まぶちりと	61
眞谷　国光	まみやくにみつ	1, 4
三島　浩路	みしまこうじ	50, 74
水野　愛美	みずのまなみ	52
三田村　南美	みたむらみなみ	58
宮川　裕基	みやがわゆうき	25
三好　駿之介	みよししゅんのすけ	61
向井　智哉	むかいともや	97, 98
村上　裕子	むらかみゆうこ	8
村田　教枝	むらたのりえ	12
村松　真至	むらまつまさし	77
森泉　慎吾	もりいずみしんご	62
森田　亜矢子	もりたあやこ	19

ヤ

山岡　淳	やまおかきよし	49, 96
山岡　重行	やまおかしげゆき	99
山岡　駿介	やまおかしゅんすけ	56
山際　勇一郎	やまぎわゆういちろう	64
山口　真莉	やまぐちまり	107
山本　勝則	やまもとかつのり	47
山本　孝子	やまもとたかこ	10
山本　睦	やまもとちか	60
横田　正夫	よこたまさお	6, 10, 85
米山　暁夫	よねやまあきお	50
余村　朋樹	よむらともき	103, 108

ラ

李　同帰	りとんぐ	9

ワ

和田　佳子	わだけいこ	85
渡部　名美	わたなべなみ	56
渡辺　茉耶	わたなべまや	52
綿村　英一郎	わたむらえいいちろう	68

日本応用心理学会第 86 回大会　賛助団体等御芳名

本学会の開催にあたり、下記団体・企業の皆様方からご協賛をいただくことができました。深く感謝し、御礼申し上げます。

株式会社　エクサウィザーズ
株式会社　風間書房
株式会社　北大路書房
株式会社　クロス・マーケティング
啓明出版　株式会社
特定非営利活動法人　このはな児童学研究所
株式会社　三京房
東京海上日動メディカルサービス 株式会社
株式会社 ナカニシヤ出版
株式会社 日本能率協会マネジメントセンター
福村出版 株式会社
株式会社 ブックマン京都
株式会社 有斐閣
楽天インサイト 株式会社

（敬称略・五十音順）

本学会の開催にあたり、下記団体からご協力をいただくことができました。深く感謝し、御礼申し上げます。

一般財団法人 日本心理学諸学会連合心理学検定局

日本大学管弦楽団

本学会の開催にあたり、下記団体の皆様方からご後援をいただくことができました。深く感謝し、御礼申し上げます。

学校法人 日本大学商学部

本大会を開催するにあたり、上記の諸団体より多大なご支援を賜りました。
ここに、その御芳名を記して感謝の意を表します。

2019 年 8 月吉日

日本応用心理学会第 86 回大会
大会委員長 外島 裕

日本応用心理学会第 86 回大会委員会

大会委員長	外島　裕	日本大学　商学部
大会事務局長	時田　学	日本大学　商学部
大会副事務局長	山本　真菜	日本大学　商学部
事務局幹事	深見　将志	日本大学　商学部
委員	武田　圭太	日本大学　商学部
委員	中川　充	日本大学　商学部
委員	井上　裕珠	日本大学　商学部
委員	堀尾　志保	日本大学　商学部
委員	河田　美智子	日本大学　商学部
大会顧問	横田　正夫	日本大学　文理学部
委員	和田　万紀	日本大学　法学部
委員	河野　千佳	日本大学　文理学部
委員	加藤　恭子	日本大学　経済学部
委員	櫻井　研司	日本大学　経済学部
委員	吉野　大輔	日本大学　芸術学部
委員	伊坂　裕子	日本大学　国際関係学部
委員	木村　敦	日本大学　危機管理学部
委員	種ケ嶋　尚志	日本大学　スポーツ科学部
委員	山﨑　晴美	日本大学　歯学部
委員	眞邉　一近	日本大学大学院総合社会情報研究科／生物資源科学部
委員	田中　堅一郎	日本大学大学院総合社会情報研究科

委員補助

外島ゼミナール

佐藤　裕弥	遠藤　慧	中園　翔太	阿部　花菜子	田崎　ほのか	生沼　萌	三田村　南美
小林　史佳	長部　楓	後藤　祐里奈	伊東　拓海	山口　真莉	本多　祥悟	臼谷　海都
柴田　隼	佐藤　優希	櫻井　怜奈	村松　真至	可児　佑吾	伊東　拓海	大塚　涼平
堀内　勇吾	杉山　怜香	市川　春奈	高橋　香貴恵	原　みのり	板倉　悠斗	菊池　夏帆

時田ゼミナール

飯田　浩市	長尾　萌	米山　友太	三浦　明日香	荒川　玲子	西村　健太郎	松岡　実穂
雨宮　純菜	阿部　舜起	山岡　駿介	水野　愛美	髙橋　七海	渡辺　茉耶	岡野谷　和花
中上　博絵	渡部　名美	志村　麻実	渡邊　黎次郎	長田　浩哉	東郷　紅吏	波田　雄杜
小野　琢人	安重　友香	平元　美穂	市村　さくら	丸山　莉奈		

武田ゼミナール

高岡　海音	田中　温大	四宮　知世

井上ゼミナール

海野　瑠香	大川　隼外	佐藤　一真	佐藤　大樹	張替　彩椰	村上　史帆	吉岡　里佳
和田　絵梨奈	小嶋　優花	坂本　拓海	柴田　江玲奈	庄子　遼	杉田　篤也	畠　文槻
古橋　朋果	松田　健太郎	馬渕　里都	三好　駿之介			

山本総合研究

宗方　しおり	増田　那知	松浦　芽衣那	入江　修己	山川　秀明	地曳　拓渡	佐藤　優太
大原　舞香	松本　智宏	松浦　克哉	後藤　剛	藤井　丈嗣	堀井　太久郎	

日本応用心理学会第86回大会プログラム

発　行　日　　2019年8月24日
発　行　者　　日本応用心理学会
　　第86回大会委員長　外島　裕
　　〒157-8570 東京都世田谷区砧５－２－１
印刷・製本　　株式会社正文社

北大路書房

〒603-8303　京都市北区紫野十二坊町12-8
☎075-431-0361　FAX 075-431-9393
http://www.kitaohji.com

人とロボットとの幸せな未来［仮題］

―2019年秋刊行予定―　上出寛子・新井健生編著
四六・約200頁・予価2500円＋税　ロボットは人間にとって安心できる存在になりうるか。本書はこの問いを工学に限らず，心理学など人文学的側面も交えて考える。各章，人型ロボットと暮らす一家のフィクションを交えロボット化社会の可能性や課題についてわかりやすく読み解く。

産業・組織心理学講座 第1巻 産業・組織心理学を学ぶ

―2019年秋刊行予定―　産業・組織心理学会　企画
金井篤子編　A5・約280頁・予価2500円＋税　学会設立35周年記念講座シリーズ全5巻刊行開始！　第1巻は，「人を活かす」「組織を科学する」「安全に働く」「豊かな消費生活」の4部構成で，公認心理師をはじめ，すべての心理職が習得すべき産業・組織心理学の知見を網羅した初学者向け教科書。

認知心理学のフロンティア 神経経済学と意思決定論［仮題］

―2019年刊行予定―　E. ヴィルヘルム他編　竹村和久・高橋英彦監訳　A5・約344頁・予価3800円＋税　現在，判断や意思決定の過程とその理論の探求は，経済的な影響のみならず，人の幸福と関連する重要な課題として位置づけられ，学際的な広がりを見せている。本書では，心理学から社会科学，神経科学まで網羅し統合的な研究レビューを提供。

心理系公務員試験対策　実践演習問題集　2
特訓式　試験にでる心理学　心理測定・統計編

山口陽弘著　B5・192頁＋60頁・本体3400円＋税　平成18年～30年度までの公務員の各種試験から合格力の基礎をつくる頻出の118問を厳選。統計の基礎概念，各種検定，正規分布，実験計画法，信頼性と妥当性，多変量解析，調査法を扱い，様々な出題パタンを網羅。問題演習と精読を繰り返すことで，解答の方針を立てる論理力を養成できる。

シリーズ 心理学と仕事9 知能・性格心理学

太田信夫監修　浮谷秀一編集　A5・192頁・本体2300円＋税　前半では，知能の基本的な知識，とらえ方，構成要素，測定方法を説明。後半では，性格にまつわる様々なことばの適切な使い方や類型論と特性論を中心に理論的側面を詳説し，知能と性格の密接なつながりを明らかにする。また，感情とのつながり，測定方法，仕事との関連について取り上げる。

新・動機づけ研究の最前線［仮題］

―2019年秋刊行予定―　上淵　寿・大芦　治編著　A5・約240頁・予価3200円＋税　達成目標理論の細分化や自己決定理論の進展に伴う実証研究，さらには学習観の変遷に伴う動機づけとの関係など社会文化的なアプローチや，発達的観点も織り込みつつ，脳神経科学的なアプローチまで射程に含んだ最新の研究成果を紹介する。

ワーキングメモリの探求［仮題］

―2019年秋刊行予定―　A. バドリー著　佐伯恵里奈・齊藤　智監訳　A5上製・約480頁・予価6200円＋税　バドリー教授自らが厳選した論文を収録。長期－短期記憶とWMの関係，WMと注意の働きとの関係など，今なお論争の最前線にある問題について，これまでどのように検討・考察を進めてきたのかをたどり，彼の研究の全体像を窺い知ることができる。

たのしいベイズモデリング2

―2019年秋刊行予定―　豊田秀樹編著　A5・約240頁・予価2700円＋税　身近で親しみやすい話題でベイズモデリングの魅力を伝える好評書の第2弾。自由なモデリングを可能とするベイズ統計では，心理学を含めた広く人間行動を扱う学問領域でも広がりを見せている。第2弾では，心理に限らず，工学やビジネスなど幅広い領域の関心を惹きつける内容。

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ 心理学と仕事［全20巻］

シリーズ監修　太田信夫
●A5判・約160～220頁・予価2000～2600円＋税

1 感覚・知覚心理学	2 神経・生理心理学	3 認知心理学	4 学習心理学	5 発達心理学
6 高齢者心理学	7 教育・学校心理学	8 臨床心理学	9 知能・性格心理学	10 社会心理学
11 産業・組織心理学	12 健康心理学	13 スポーツ心理学	14 福祉心理学	15 障害者心理学
16 司法・犯罪心理学	17 環境心理学	18 交通心理学	19 音響・音楽心理学	20 ICT・情報行動心理学

2019 SKB

新刊 **BAQ Buss-Perry 攻撃性質問紙**

【原　著】 Arnold H. Buss　Mark Perry　【日本版開発】 HP2000 研究会

新刊 **SASS-J 自記式社会適応度評価尺度**

【原　著】 Marc Bosc　Adriana Dubini　Valérie Polin　【日本語版構成】 中村 純　樋口 輝彦

新刊 **J-ZBI/J-ZBI_8 Zarit 介護負担尺度日本語版 / 短縮版**

【著　者】 荒井由美子　【ZBI 原著者】 Steven H. Zarit・Judy M. Zarit

MMPI® ミネソタ多面的人格目録
S. R. Hathaway　J. C. McKinley
MMPI 新日本版研究会

CMI® 健康調査表
K. Brodman　A. J. Erdmann　H. G. Wolff
金久 卓也　深町 建　野添 新一

P-Fスタディ®（成人・青年・児童）
S. Rosenzweig
住田 勝美　林 勝造　一谷 彊　秦 一士

SDS® うつ性自己評価尺度
W. W. K. Zung
福田 一彦　小林 重雄

STAI 状態・特性不安検査 (Form X)
C. D. Spielberger
水口 公信　下仲 順子　中里 克治

MAS・CMAS 顕在性不安尺度
J. A. Taylor　阿部 満洲　高石 昇
A. Castaneda　坂本 龍生

DSRS-C バールソン児童用抑うつ性尺度
P. Birleson
村田 豊久　神本 亜紀　森 陽二郎　竹田 祥子

SCAS スペンス児童用不安尺度
S. H. Spence
石川 信一

LSAS-J リーボヴィッツ社交不安尺度
M. R. Liebowitz
朝倉 聡

TAS-20 トロント・アレキシサイミア尺度
R. M. Bagby　J. D. A. Parker　G. J. Taylor
小牧 元　前田 基成

LOI レイトン強迫性検査
J. Cooper
福山 嘉綱　種田 真砂雄　高見堂 正彦

AQ 日本語版 自閉症スペクトラム指数
Simon Baron-Cohen　Sally Wheelwright
若林 明雄

神経心理学的検査・知能検査

新刊 **DAM グッドイナフ人物画知能検査**

【原　著】 F. L. Goodenough　【日本版作成】 小林 重雄　伊藤 健次

BGT ベンダー・ゲシュタルト・テスト
L. Bender　高橋 省己

コース立方体組み合わせテスト
S. C. Kohs　大脇 義一

BVRT ベントン視覚記銘検査
A. L. Benton　高橋 剛夫

大脇式知的障害児用知能検査
大脇 義一

KWCST 慶應版ウィスコンシンカード分類検査
鹿島 晴雄　加藤 元一郎

心理検査専門出版社　株式会社 三京房
TEL 075-561-0071 FAX 075-525-1244
https://sankyobo.co.jp

一般社団法人日本心理学諸学会連合

心理学検定

第13回

心理学の基礎知識を身につける。実力を試す。

2020年8月23日(日)（予定）

全国14会場同時開催

札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・金沢・京都・大阪・岡山・神戸・広島・徳島・福岡・沖縄

出題科目

A領域	B領域
[原理・研究法・歴史] [学習・認知・知覚] [発達・教育] [社会・感情・性格] [臨床・障害]	[神経・生理] [統計・測定・評価] [産業・組織] [健康・福祉] [犯罪・非行]

資格認定

特1級	1級	2級
A領域5科目・B領域5科目 全10科目の合格者(申請による)	A領域4科目を含む 合計6科目以上の合格者	A領域2科目を含む 合計3科目以上の合格者

POINT
- ◇ 級は合格科目の累積で認定されます。合格科目は5年間有効です。
- ◇ 日本心理学会「認定心理士」の資格保有者は、A領域3科目に合格すれば、「心理学検定1級」を取得できます。
- ◇ 資格は更新制ではなく、生涯有効です。

実施概要

受検資格

心理学に興味のある方なら誰でも受検できます。

受検料（全て税込み） ※1…20名以上 ※2…40名以上かつその大学を試験会場とする

	個人申込	一括申込 ※1	団体申込 ※2
3科目▶▶▶	¥6,480	¥5,400	¥4,860
6科目▶▶▶	¥8,640	¥7,560	¥7,020
8科目▶▶▶	¥10,800	¥9,720	¥9,180

試験時間

3科目▶▶▶ 60分
6科目▶▶▶120分
8科目▶▶▶160分

申込期間（予定）

2020年5月22日～6月24日
（郵送申込・Web申込）
申込書入りパンフレットは4月頃発行。ダウンロードも可。

パンフレットをご希望の方はお気軽に検定局までご連絡ください。

お問い合せ
一般社団法人日本心理学諸学会連合
心理学検定局
〒113-0033 東京都文京区本郷5-26-5-901
E-mail :info@jupaken.jp Fax :03-3830-0303

■心理学を極める人も。心理学を始める人も。

全10科目で幅広い心理学の基礎知識を測定する、学術団体が直接行っている信頼できる検定です。
心理学の扉を左右いてみませんか？
日本心理学諸学会連合〈日心連〉は、53の心理学関係の学会が加盟する団体で、日本における心理学ワールドの統合と発展を目指して、活動を続けています。



一問一答形式の問題集!

公式問題集&基本キーワードも発売中!

一般社団法人日本心理学諸学会連合
心理学検定

詳細はホームページで

公式HPはこちら↓今すぐ詳細を確認！
心理学検定 http://jupaken.jp/

Facebookで最新情報配信中

産業・組織心理学エッセンシャルズ【第4版】
外島 裕 監修・田中堅一郎 編
ストレス心理学など最新研究動向も盛り込んだ好評テキスト。2900円

公認心理師のための説明実践の心理学
山本博樹 編著
公認心理師は各分野・各領域でどのように説明するべきか。2000円

福祉心理学の世界
◎人の成長を辿って
中山哲志・稲谷ふみ枝・深谷昌志 編
ワークを駆使して学び、社会に発信できる力を育む心理学。2100円

心の専門家養成講座③
心理アセスメント
◎心理検査のミニマム・エッセンス
松本真理子・森田美弥子 編
71の心理検査を解説。3500円

スクールカウンセリングにおける投影描画アセスメント
加藤大樹・鈴木美樹江 著
思春期・青年期の心理的問題を現場でどう解釈するか。3000円

犯罪心理学
◎再犯防止とリスクアセスメントの科学
森 丈弓 著
矯正現場での経験を踏まえながら、くわしく解説。4600円

心理学概論
◎ヒューマン・サイエンスへの招待
松田幸弘 編著
公認心理師などの資格取得にも役立つ入門テキスト。2500円

パーソナリティ心理学入門
◎ストーリーとトピックで学ぶ心の個性
鈴木公啓・荒川 歩・太幡直也 他著
楽しく学べる入門書。2000円

新版
キャリアの心理学
◎キャリア支援への発達的アプローチ
渡辺三枝子 編著【第2版】
キャリア・カウンセリング理論を学ぶ基本テキスト。2000円

心の専門家養成講座⑦
学校心理臨床実践
窪田由紀・平石賢二 編
歴史や理論、今日の学校現場に即した実践を具体的に解説。3000円

コラージュ療法
◎材料からの再考
今村友木子・二村彩・加藤大樹・今枝美幸著
材料シート集の開発を中心に、事例など幅広く解説する。3200円

質的研究のための理論入門
◎ポスト実証主義の諸系譜
P・プラサド 著／箕浦康子 監訳
様々な理論的系譜を解説。3800円

ナカニシヤ出版
TEL 075-723-0111 〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095 http://www.nakanishiya.co.jp/ 〔税抜価格〕

心理学関係学術図書のご案内

価格は税別。

小学校・幼稚園教師の指導態度の研究
嶋野 重行著 5500円
小学校と幼稚園という環境において教師の受容的態度と要求的態度の観点から教師の指導態度を捉え，教師と子どもとの心理的影響や教育効果について考察した新著。

サポート資源が進路選択および就職活動に及ぼす影響
水野 雅之著 6000円
大学生はいかにして学校教育の総決算である進路選択と就職活動を乗り越えるのか。その問いに，本書ではサポート資源という観点からアプローチを試みる。

マイクロカウンセリングの理論と実践
福原眞知子・A.E.アイビイ・M.B.アイビイ著 4600円
マイクロカウンセリングは現場に役立つカウンセリングの基本モデルである。創始者アイビイと日本への導入者福原の，総力を結集したカウンセラー必携の決定版。

トラウマケアとPTSD予防のためのグループ表現セラピーと語りのちから
井上孝代 いとうたけひこ 福本敬子 エイタン・オレン編著 2500円
東日本大震災における被災者のトラウマケア/PTSD予防のための支援を行ってきたIsraAID及びJISPの活動を通して，グループ表現セラピーと語りのちからの有効性を示す。

勤労者のソーシャルサポートと精神的健康に関する研究
片受 靖著 6000円
勤労者のソーシャルサポートと精神的健康との関連について，サポートの送り手にも着目した調査を実施。勤労者の立場に配慮した支援体制の構築を目指した新著。

親密な関係間の性暴力の判断に関する心理学的研究
北風菜穂子著 6000円
性暴力の判断に影響を及ぼす要因を詳細に検討。性暴力の発生予防や被害者への早期の支援，二次被害の防止等，親密な関係間での性暴力予防のための基礎資料を得る。

シャイな教師の教職遂行を規定する認知的要因に関する研究
高柳 真人著 6500円
シャイな教師の困った経験をもたらす認知的要因を実証的に解明。その認知的要因と困った経験の関係を説明する妥当なモデルを作成し，支援策につながる知見を示す。

「風の電話」とグリーフケア
矢永由里子・佐々木格編著 1800円
「風の電話」を訪れた人々のメッセージを丁寧に拾い上げ，悲嘆のプロセスとグリーフケアについて多面的に検討。災害支援，遺族や看取りのケアに携わる援助者に必読の書。

エイズ相談利用促進に関わる規定要因の心理学的検討
飯田 敏晴著 6000円
HIV感染およびエイズ発症を「予防する」という視点に基づき，成人期初期の男女に焦点を当てて相談行動の促進とその規定要因について検討し，教育的介入を考察。

エンパワーメント評価モデルに基づく教員のバーンアウト予防プログラム
池田 満著 4200円
教員のメンタルヘルス問題を概観し、バーンアウト予防プロジェクトを実施。プログラム開発と評価の理論的検討から，実効性及び持続的な実践について示唆を得る。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
TEL 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757
風間書房
(URL) https://www.kazamashobo.co.jp
メールアドレス pub@kazamashobo.co.jp

有斐閣 出版案内

東京・神田・神保町2 TEL:03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/

表示価格は税別。
消費税込みの金額が定価です。

◎図書目録送呈◎

新刊

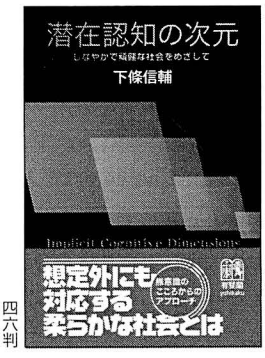
潜在認知の次元

下條信輔著

◉しなやかで頑健な社会をめざして

「想定外」に柔軟に対応できる社会とは？ ヒトの本性である潜在認知を長年研究した著者が、豊富な知見に基づき「心理リアリティ」「シェアドリアリティ」などの切り口で「逆応用科学」のアプローチを提案。普遍的な社会課題への示唆に富む渾身の書。

四六判 一八〇〇円



幸福（しあわせ）の構造

島井哲志著◉持続する幸福感と幸せな社会づくり

幸せを「感じる」とはどういう事か？ 人によって感じ方が異なるのはなぜか？ 個人の「時間軸」という切り口からみえた幸福感の構造とは？ 心理学研究の実証データを基に幸福感の諸側面を整理し、私たちは自分や周囲の人の幸福をどう実現できるのかまでを指し示す。

四六判 二三〇〇円



〔有斐閣ブックス〕

心理学から考えるヒューマンファクターズ

篠原一光・中村隆宏編◉安全で快適な新時代へ

安全で快適な科学技術や社会システムを構築するためには、それらを扱う人間の行動・特性の理解が欠かせない。ヒューマンファクターズに関する諸問題を、個人レベルから集団レベルまで包括的に、心理学的観点からとらえ直す。

二六〇〇円



スケープゴーティング

釘原直樹編

◉誰が、なぜ「やり玉」に挙げられるのか

大きな事故や災害があった際に、特定の個人や集団・組織、システム、国・政府、社会・文化が次々と「やり玉」に挙げられ、強い非難を受ける。そのメカニズムはいかなるものか、マスメディア報道はどのように影響するのかを、実証研究から包括的に解明する。

A5判 二六〇〇円



心理学概説

—心理学のエッセンスを学ぶ—

巌島行雄・横田正夫 編　B5判／320頁
ISBN 978-4-87448-036-6　本体価格 3,000 円＋税

本書は心理学の広範の領域をすべてカバーし、各専門領域に携わる研究者 78 名の執筆者が最新の知見を網羅して執筆。初学者や一般の人に理解し易いように各頁の左右のスペースに専門項目を抽出し心理学の学習に役立つようにした。それらの項目は将来専門書を読むために必要な専門用語であり、その英訳も付した。また各章末に興味・関心をもたれるトピックを用意し、引用・参考文献を多数収載した。心理学の応用領域（健康、環境、臨床、異常）の各章も丁寧に説明し、目撃証言の心理学研究の章や宇宙空間体験の心理学の章などは類書で触れられないものの章で興味深く解説している。

心理学の基礎英単語帳［新装版］

－心理学のための英語学習の手引－（付き）

羽生和紀 著　A5判／本体価格 695 円＋税
ISBN 978-4-87448-039-7

心理学を初めて学習する学生諸氏向けに、心理学の最も基本の専門用語約 1000 語の英語とその日本語を並列に載せた単語帳で、5 年前に同名の書を出版し好評をいただいてきましたが、このたび収載用語を見直して特に重要な用語を選び＊印を付けました。さらに表紙をもリニューアルし、ISBN も新しくして新装版として刊行しました。本書は 1000 語という限られた語数と初学者向けという目的から、最先端の知見にかかわる用語を選択するというよりも、一定の評価が定まり、その研究領域の専門家のみではなく、ある程度広く普及した用語を選んで収載した書で、いつでも手元に置いて活用する必携書。

新訂 ベーシック心理学

巌島行雄・羽生和紀 編　A5判／本体価格 2,400 円＋税
ISBN 978-4-87448-021-2

必修1000 心理学基本用語集

必修心理学用語編集グループ編　A5判／本体価格 500 円＋税
ISBN 978-4-87448-013-7

こころの発達と学習の心理

岡村一成・浮谷秀一 著　A5判／本体価格 1,781 円＋税
ISBN 978-4-87448-022-9

福祉のまちづくりと福祉テクノロジー

依田光正 著　A5判／本体価格 2,000 円＋税
ISBN 978-4-87448-038-0　C3051

啓明出版（株）

◆価格は【本体価格＋税】で表示しています。
ご注文は最寄りの書店、購買部または小社にお願いします。
営業部 〒182-0004 東京都調布市入間町 1-13-1

TEL.03-3307-2669
FAX.03-3307-2676

このはな心理臨床セミナーご案内

●このはな心理臨床講座

参加者が自分の臨床を省みつつ、臨床スタイルを作り上げ、臨床家としての一層の成長へと向かう土台作りをしていきます。中堅心理臨床家から若手の方、勉強中の方までを対象に、互いに学び合うことを目的として企画されています。

・1年次　講義26回(木)+ワークショップ8回（土・日）　　・3年次
・2年次　演習講読40回(日)+ワークショップ8回（日）　　・継続研修コース

●ワークショップ

【受講料】詳しくはホームページをご覧ください

発達障害を抱えた子供たちとの遊戯療法 intensive ワークショップ	安島智子	4月27.28日
高次脳機能障害を神経心理学的に理解する	中島恵子	6月9日
不登校～家族システム論の応用～	木下敏子	6月30日
MSSM	山中康裕	7月14日
ロールシャッハ法の基本と実践	小川俊樹	7月20.27日8月3日
事例で学ぶカウンセリング概論	井村　修	9月29日
臨床動作法の実際	鶴　光代	10月20日
Why mankind needs art? 人はなぜアートを必要とするのか？	アンナ＝マリア・ウィルヤネン 髙江洲義秀　安島智子	11月3日
心理アセスメントと心理的支援技法の選択	村瀬嘉代子	11月10日
初期の面接における感情変容	岩壁　茂	11月17日
セラピスト、対人援助職の「こころをたがやす」フォーカシング	伊藤研一	2020年1月19日
コラージュ療法	森谷寛之	2020年2月2日
脳損傷高齢者とニューロサイコアナリシス（神経精神分析）	秋本倫子	2020年2月16日

●講演会

メインテーマ：「Why　mankind　need　art？人はなぜアートを必要とするか？」

日時：2019年11月3日（日）10：00開演　　会場：日本橋浜町Fタワー

①ご挨拶　安島智子（このはな児童学研究所理事長）

講演テーマ：*The meaningful landscapes and the development of artistic process -case study of Finnish female artists Elin Danielson and Tove Jansson*

講　師：アンナ＝マリア・ウィルヤネン（美術史博士）フィンランド大使館フィンランドセンター所長

ディスカッサント：高江洲義秀（いずみ病院理事長）　　参加費：無料　（定員120名）

19世紀の女流画家が描いた絵のプロセスと、本人の人生の歩みについて、また、画家の変化もよく伝わる写真もご提示いただきます。幾人も画家の事例を通して芸術療法の本質につながるご研究をされていますが、このたびはおひとりに焦点を当て、またご講演の最初の部分では私共がアニメ作品でなじんでおります、ムーミンの原作者のフィンランドの冬の大地が描かれている絵を見せていただくことができます。その絵画からの得られるインスピレーションは、皆様どのようなこととなりましょうか？大いに期待されます。

②ワークショップ・体験アート　13：00～18：00

描画、コラージュ制作、体験ミソドラマ

講　師：高江洲義秀、安島智子　　参加費：5,000円　（定員50名）

お申込み・お問い合わせ・パンフレットのご請求はこちらへ　〒103-0007　東京都中央区日本橋浜町2-25-2 1F
このはな児童学研究所　TEL　03-3639-1790　FAX　03-3639-2968
URL　http://www.konohana.jp　メール　konohana@konohana.jp

経営幹部選抜、次期後継者育成をお考えの方に

私の道しるべ
MY MOTTO

MY MOTTO

―人間力を磨く経営幹部育成プログラム―

経営環境がより一層厳しさを増す中、あらゆる企業で、強いリーダーシップをもち、改革を推進するイノベーティブな資質を持った経営幹部(リーダー)が求められています。

リーダーとして組織を牽引するためには、知識・スキルだけではなく、リーダーとしての経営観・哲学をもち、それに基づいて行動する「人間力」が重要です。

自らに向き合い、リーダーとして「どうあるべきか」「何をなすべきか」を問う―。「MY MOTTO」は、多様な人を動かす真のリーダーになるためのプログラムです。



特徴

マンツーマン型

コンサルタントと１対１で
真のリーダーに必要な人間力を磨く

- 月1回の面談×8回の完全個別対応プログラムです。
- 本人プロフィール、360度診断から一人ひとりに最適なカリキュラムを設計します。
- 深い対話による質の高い内省を通して経営幹部としてあるべき、かつ、「私らしい」判断軸と行動習慣を確立します。

少人数ワークショップ型

異業種交流形式で、
将来を担う経営人材へと一皮むける

- 月１回のセッション× ５ヵ月間のプログラムです。
- コンサルタントのファシリテーションにもとづき、忌憚のない対話を中心に進行します(ラウンドテーブル形式、定員４名)。
- 日々のアクションプランの振り返りと前後の360度診断を通じて、確実に行動変容へと導きます。

受講者の声

詳細はこちら
https://www.jmam.co.jp/hrm/mymotto/

マンツーマン型を受講

異国・異文化において、相手の気持ちを理解し、リーダーシップを発揮するための支えになりました。判断の拠り所ができました。



自動車メーカー
中国現地法人総経理
A氏

マンツーマン型を受講

対話によって、自分が大切にしていきたいことを確認・整理して言語化できました。人生の長期ビジョンも描けるようになりました。



住宅設備機器メーカー
総務部部長
B氏

少人数ワークショップ型を受講

内省を重視したプログラムで、自分のモットーとすべきことを再認識できました。参加者相互の「気づき」が促されるワークショップでした。



不動産会社
人材開発部部長
C氏

少人数ワークショップ型を受講

自分自身と向き合い、仕事も家庭も日常のことすべてを見つめ返しました。自分がどう見られているかを意識するようになりました。



商社
代表取締役社長
D氏

お問い合わせ
株式会社日本能率協会マネジメントセンター　パーソナル・ラーニング事業本部
〒103-6009　東京都中央区日本橋2-7-1　東京日本橋タワー
TEL：03-6362-4340　URL：http://www.jmam.co.jp/

JMAM
JMA MANAGEMENT CENTER

発達ロボティクスハンドブック

ロボットで探る認知発達の仕組み

アンジェロ・カンジェロシ、
マシュー・シュレシンジャー 著
岡田浩之、谷口忠大 監訳
萩原良信、荒川直哉、長井隆行、尾形哲也、
稲邑哲也、岩橋直人、杉浦孔明、牧野武文 訳



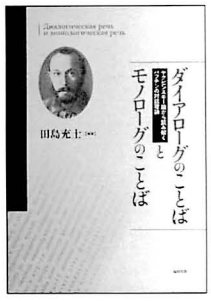
B5判／上製／416頁　定価（本体11,000円＋税）

ロボットを用いて人の認知発達過程をシミュレーションすることにより、発達心理学とロボット工学両面の発展を図る新しい学際分野「発達ロボティクス」の概要を紹介する。

ダイアローグのことばとモノローグのことば

ヤクビンスキー論から読み解くバフチンの対話理論

田島充士 編著



A5判／上製／290頁　定価（本体5,000円＋税）

「ダイアローグ（対話）」と「モノローグ（独話）」概念を軸に、バフチンの議論を実践的に読み解く。ヤクビンスキーの論文『ダイアローグのことばについて』邦訳を全文掲載。

腐女子の心理学2

彼女たちのジェンダー意識とフェミニズム

山岡重行 著

第2弾
好評発売中



A5判／上製／300頁　定価（本体3,500円＋税）

大好評『腐女子の心理学』の続編。前著より大規模な調査をもとに「腐女子」と呼ばれる女性たちの恋愛・結婚観を読み解き、ジェンダー意識とフェミニズムの分析に踏み込む。

これからの対人援助を考える くらしの中の心理臨床

⑥少年非行

野村俊明、青木紀久代、堀越 勝 監修
髙田 治、大塚 斉、野村俊明 編

新 刊
好評発売中



A5判／並製／192頁　定価（本体2,000円＋税）

少年の逸脱行動を彼らの内面のもがきとして捉え、地域から排除するのではなく地域で支える心理援助の必要性を、21の実践事例と臨床に即した理論編で示す。コラムも収録。

回想法と回想療法

おしゃべりを楽しむ心療回想法で認知症予防

日本回想療法学会 監修
小林幹児 著



B5判／並製／224頁　定価（本体2,600円＋税）

認知症予防として注目される回想療法の理論面から、認知症チェックリスト、パーミング、「回想録」の具体例、自治体・地域での展開までを詳細に解説・紹介した実践ガイド。

アピアランス〈外見〉問題介入への認知行動療法

段階的ケアの枠組みを用いた心理社会的介入マニュアル

アレックス・クラーク、アンドリュー・R・トンプソン、
エリザベス・ジェンキンソン、ニコラ・ラムゼイ、
ロブ・ニューウェル 著
原田輝一、真覚 健 訳



A5判／上製／452頁　定価（本体7,000円＋税）

先天的要因や疾患・外傷により外見に不安や困難を抱える人々のポジティブな適応を目指し、医学・心理学の両面から支援するための段階的ケアの方法を提示する介入マニュアル。

思春期を生きる

高校生、迷っていい、悩んでいい、不安でいい

小野善郎 著

新 刊
好評発売中



四六判／並製／224頁　定価（本体1,600円＋税）

思春期って何だろう？　迷い、悩み、不安のたえない思春期をどう乗り切る？　思春期精神科医療に長年携わってきた著者が中高生と親たちに贈る、大人への道を進むためのガイド。

自己調整学習の多様な展開

バリー・ジマーマンへのオマージュ

ヘファ・ベンベヌティ、
ティモシー・J・クリアリィ、
アナスタシア・キトサンタス 編
中谷素之 監訳



A5判／上製／600頁　定価（本体9,000円＋税）

自己調整学習研究のパイオニア、バリー・J・ジマーマンの理論について、教育、医療、メンタリングなどさまざまな領域における展開を紹介し、未来への可能性を検証する。

現代社会と応用心理学〈全7巻〉

日本応用心理学会 企画
A5判／並製　各巻定価（本体2,400円＋税）

好評発売中！

クローズアップ
①「学　校」　②「恋　愛」　③「健　康」　④「メンタルヘルス・安全」
⑤「メディア」　⑥「高齢社会」　⑦「犯　罪」

福村出版　〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-11 TEL 03-5812-9702 FAX 03-5812-9705 https://www.fukumura.co.jp